
モンスターハンター！

スローニン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モンスターハンター！

【Nコード】

N2176B

【作者名】

スローニン

【あらすじ】

モンスターハンターの世界に生きるハンター達の、ファンタジーっぽい話です。様々な人々がおくるハンターライフをお楽しみください。この小説は、戦闘描写が少ないです。それでも構わないと思っています。ただなら、読んでください。感想・評価をお待ちしています！

第1話

この世界では様々な生き物が生息している。 人もその一つである。 人の中にはその生き物を狩猟し、日々の糧にしている者達がいる。

人は彼らをハンターと呼んだ。 これは、そんなハンター達の物語である。

昼の日差しが暑い。

ここは密林である。 ここに一人の少年が、巨大なくちばしをもつ鳥のような竜と対峙していた。 竜はもはや瀕死の状態である。

「おらあつ！」ザグリユ！ 少年は手に握っていた巨大な剣を竜へめり込ませた。 それと同時に竜は悲鳴にも似た雄叫びをあげ、その場に崩れ落ちた。

少年は剣で竜をツンツンつついてみた。

反応がない。 どうやら死んだらしい。

竜の死を確認した少年は安堵の表情をみせ、腰にさげているナイフで素材を剥ぎ取り、街へ帰ろうと船へと向かった。

船に向かう途中、少年は一人のハンターを見つけた。 ハンターは倒れていた。 青い鱗をもつ鳥竜類、ランポスの群れにやられたらしく、ハンターはうつぶせに倒れていた。

少年は、ランポスの群れを追い払い、ハンターに近づくと、やはりツンツンとつついた。

「おい、生きてっか？」

返事はない。 少年はハンターの体を仰向けにひっくり返した。

「あれ？女の子じゃん」

そこには少女の姿があった。 年は少年と同じくらいだろうか？16〜18歳位に見える。 少年は少女の息があるのを確認し、ほっとくわけにもいかず、

「面倒くせえなあ・・・。」
と愚痴った。

少年は少女を船にのせ、船は暑い日差しの中、街へと向かって、ゆっくりと動きだした。

第2話

「ん・・・ふああゝあ」

少年は目を覚まし、床から身を起こした。そして、思いだしたように視線を横へと向ける。

視線の先には密林で倒れてい

た少女がベッドで眠っている。

「まだ寝てんのか・・・」

少年は呆れたようにため息を吐き、顔を洗うためその場を離れようと腰を浮かせた。すると後ろから

「うう・・・ん」

少女が目を覚ました。「よう、おはよーさん」

少年は笑いかける。

少女はなぜ自分がここにいるかわから

ないといったような表情をする。しばらく何か考えている様子だったが、ようやくその口を開く。

「あなた誰？」

少年はわざと胸を張り

「命の恩人だ」

と、わらっていった。

「え？どういうこと？」

少女は不思議そうにたずねた。

「覚えてないのか？」

少年が聞き返す

「密林に入り込んだとこまで覚えてるんだ

けど・・・」少女は困った表情をみせる。

「まあ、無理して思い出すようなことでもないし、いいんじゃないか？」

少年は気楽に言う。「それより、あんた名前は？」

「アル・アジフ。アルってよんで」

少年の問いにアルは答えた

「あなたは？」

今度はアルが質問する。「ゼロ」

ゼロは短い名前を告げた

「それってフルネーム？」

アルが聞くと

「おう」

ゼロはためらいもなく答える。アルは不思議な表情を見せる。無理もない。

今どき名前が二文字しかない者など、どこを探してもそうはいない。アルはゼロを不思議そうに眺めた。その視線に気づいたゼロは

「おかしいか？」

と言う。「う、ううん。ちがうの。ただ、珍しいなあ」って思っ

しばしの沈黙があり、ゼロは沈黙に耐えきれず口をひらいた。「アルはハンターになりたてか？」

「うん、ついこの前始めたばかり」

アルは少し恥ずかしがる。「若いのに大変だなあ」

「それを言うならあなたもでしょ？つというかあなた年いくつ？」

「17だけど」

「同い年じゃない！なにふけたセリフ言っるの」

アルは笑っている

「はあ、俺もそろそろおっさんかなあ」ゼロは少しへこむ

「ゼロはここに一人で暮らしてるの？」

「そうだけど？」

「あの、ご両親は？」

「いないよ。ずっと前に死んじゃった」

「そ、そう。」

アルは両親を失ったことさらつと告げられ、戸惑いを隠せなかった。

「その、聞いちゃまずかった？」

アルは不安そうに訪ねる。

「気にすんなって。もうずい分前のことだしな。」

「でも」

アルはまだ不安そうにしている。「そんな顔すんなよあ。俺がいじめたみたいじゃないか」

ゼロはあたふたする。「そういうアルは？」

「私はもう自立したの。いつまでも親に甘えたらいけないと思
つて。」

ゼロは関心の眼差しをアルに向けた。

「へえ、えらいんだなあ。アルはどこに住んでるんだ？ここらへん
じゃあないみたいだけど」「家は・・・なくなっちゃった！」

「・・・二人を沈黙がおそう 「聞き間違いだったらわりい
んだけど、今なくなっただって」

「そうだよ」「間違いであってほしかった・・・っかなんで？」

ゼロが疲れはてたように聞く「えっと、竜が襲ってきて壊れちゃっ
た」

アルは照れながら話す 「どこか行くあてはあるの
か？」

ゼロそう聞くとアルは少し考えて「ここ！」

「バカな！？」

ためらうことなく言うアルにゼロは驚愕する 「え、いいじゃ
ない」

「いいわけないだろ！俺の寢床もなくなるし部屋も狭くなる！」
「そんなの小さなことよ！気にしない気にしない。」

「大体さつき自分で甘えないとか言ってただろ！」「親にはね！そ
れとも何？こんなか弱い女の子を見殺しにするき！？」

アルはやたらと自信ありげである。「なんで俺の家でさりげな
くお前が優位になっただよ・・・」

しばらく討論は続いたが、アルに軍配があがり、
アルはゼロの家で暮らすことになった。ゼロははしゃぐアルを見つ
めて、頭の片隅で思った。

見捨てればよかった、と・・・

第3話

「おーい！飯できたぞ。」

朝から大声を出しているのはゼロだ。

ゼロが食事を作

っている理由は2つある。1つはゼロはネコ雇う余裕がないこと。

もう1つは、アルが居候することがきまつた日、

それぞれの家での仕事をじゃんけんで決め、今日はゼロが食事をつくる日だからである。ゼロはアルを起こし、2人は食事を取り始めた。

「ゼロって貧乏だったんだね」

飯をほおばりながらアルが言う。「しょうがねえだろ。我慢しろ」

「でも、ネコ雇ってないと今時あまりないよ」

「お前さあ・・・」

ゼロはため息をついて、引きつった笑顔をつくる

「大人しく我慢するか、つまみ出されて路頭にまようのどっちがいい？」

「酷い！まだ私を追い出す気なのね！」「そうじゃねえだろ。俺はここに住むなら我慢しろっていつてんの」

「ふふっ。はあい。我慢しまあす」

アルは何がおかしいのか、クスクス笑う「なんで俺はこんな変なの助けちまつたんだろ・・・あの日の自分の神経を疑うよ・・・」

ゼロはため息を吐いた「変なのってなによ！私変じゃないもん！」

「わかったわかった。さっさと飯食え。街に行くんだろ？」

そう、ゼロは街のはずれに住んでいるため、アルはまだこの街をみていない。という理由でゼロは無理やり案内役をやらされるハメになった。2人は食事を済ませ、街へ向かった

”ユニウス”

「へえ、ここがユニウスかぁ。思ってたより大きな街だね！」

「まあ、たまに観光客も来るぐらいだからな」

「そ〜なんだ〜」

アルは目をキラキラさせてはしゃいでいる。

2人は街を順

々に回りだした。しばらく歩いて、二人は鍛冶屋の前にきた。

「ちよつとここよっていいか？」

「いいけど。なんで？」

「ちよつとこの親方に頼まれてたものがあるんだ」

ゼロはそう言うとうすうと息を吸い込んだ

「おつ

ちや〜ん!!」

ゼロが大声で呼ぶと、奥の方からヒゲをはやした中年の男がでてきた「おお！ゼロじゃねえか。今日はどうした？」

「頼まれてたもの持ってきた。でもイヤンクツクのウロコなんて何に使うの？」「鍛冶場の飾りにつかうんだよ！最近味気ねえからなあ！がははは！」

親方は大声で笑う。

するとアルの存在に気づく「おお

！連れがいたのか！かわいい子だなあ！名前はなんて言うんだ？」

突然聞かれて少しアルはおろおろしたが、すぐに落ち着きを取りもどす。「アルって呼んでください」

「お前もスミにおけねえなあゼロ」

親方はニヤリと笑う

「何の事だよ？」

ゼロは首を傾げる「なに言ってるやがる。こんなかわいい彼女手に入れやがって」

「いえ、あの、そういうんじゃないんです」

割って入ったのはアル「隠すこたあねえって」

「か、隠してるとかじゃないんです」

「本当かゼロ？」

「当たり前だろ。勘弁してくれ」

「失礼ね！勘弁してほしいのはこっちよ！」アルはスパーン！とゼロの頭を叩く

「つてえな！なにしゃがる

！」

「うるさいうるさい！」

二人はギヤーギヤーとケン力を始めた

「まあまあ」

みかねて親方が止めに入る

「そのくらいにしときな。俺は仕事があるからもういくぞ。まあ、また近くを通つたらよつてくんな」「はいよ」。おっちゃんも仕事頑張れ」

親方は、おう！といって店の奥へと歩いていった

「あと行つてないのは集会所だな」

「集会所？」

アルは不思議そうにする「何だ？ハンターなのに集会所知らねーの？」

「悪かつたわね」

「すねるなよ。集会所つてのは簡単に言つとハンター

のたまり場だ」「ふうん？」

「基本的にそこで依頼を確認して狩りにいくんだよ」

「そーなんだ」。だつたら早くいこ」2人は集会所に向かって歩き始めた

歩き始めて少したつたとき、アルは異変に気付いた。街の人達のゼ口を見る目が異様に冷たいのである「ねえ。なんか街の人達の視線が冷たくない？」

「ああ、気にすんな。昔からだ」「何かしたの？」

「昔ちよつとあつてな」

「ふうん？」

アルは何となく腑に落ちない顔をする「そんな顔すんなよ。集会所ついたぞ」中に入ると多くのハンター達で賑わっていた

「おう！ゼロじゃねえか！」

1人の青年が話しかけてきた。

「なんだ。ジヨンか」

名前はジョンというらしい「なんだってなんだよ。つれねえな」

「それよりお前こそどうした？何か狩りにいくのか？」

「ああ、ちよつとランポスを狩りにな。お前もいっしょに・・・」
言いかけてアルに気づく

「お前俺に内緒で彼女つくつてたのか」

「彼女じゃねえよ。ただの居候だ」「見えすいた嘘つきやがつて。短い友情だったな」

「お前と友情を共有した覚えはないが一応いっておく。本当に彼女じゃねえ」「本当っすか？」

ジョンはアルに聞く。

「本当です！」

アルはむきになる

「そ、そうっすか・・・あ、名前きいても・・・」

「アルって呼んでください！」

「は、はあ・・・」

ジョンはアルに気おされてゼロのもとによる

「こ、こええな」

「全くだ」

「何かいった？」

ゼロ達の話が聞こえたらしい「あ、それより俺達今から狩りに行くんだよ！アルもどう？」

ジョンが慌てて話題を変える「どーせ帰ってもする事ないし行っちゃおうぜ」

とゼロがいった。

三人はカウンターで手続きを済ませ、船に乗り込んだ。船は密林に向かってゆつくりと動き始めた

第4話

今日も日差しが暑い。 ゼロ、アル、ジョンの三人は密林に来ていた。 「あつちゝなゝ。もうちよつと涼しくならねえもんかなあ」

とゼロが愚痴を言う。「我慢しろよ。しょうがねえだろ。温暖期なんだから」

この世界は繁殖期、温暖期、寒冷期にわかれていて、いまはその温暖期なのである「で？ランポスを何匹狩ればいいんだ？」

ゼロが面倒臭そうに聞く

「何匹つつつか・・・一匹」

「一匹！？なんだそりゃ！？」「いや、一匹は一匹でも、親玉をな」

「ドスランポスかよ！アルには厳しいんじゃないか？」

「ドスランポス？」ゼロとジョンの会話についていけなくなつたアルが不思議そうに聞く

「ああ、知らないのか。ランポスは分かるよな？」

ゼロが聞く「うん」

「ドスランポスつつつのはランポスの群れを束ねるリーダーみたいな奴だ。基本的に他より強かったり、リーダーだったりするやつはわかりやすいように名前の前に言葉をたすんだよ」「あ、それで”ドス”ランポスかあ」

「ドスランポスは洞窟付近で出没するらしい」

ジョンが説明する

「洞窟かあ。涼しそうだな。早く行こうぜ」ゼロはとにかく暑さを凌ぎたいらしい

「私大丈夫かなあ？」

アルは不安そうにしている。

「安心しろ。お前の武器は片手剣だから小回りがきく。危なくなつ

たら迷わず逃げろ」「でも・・・」

ゼロが落ちつかせようとするがアルはまだ不安そうにしている

「大丈夫だって。それにジョンの弓の腕は結構なもんだぞ。もっと信用してやれ」ちなみに全員の武器はゼロが大剣、アルが片手剣、ジョンが弓である　「ほら、さっさと行こうぜ」

ゼロがそういつて、三人は洞窟に向かった。洞窟の入り口にきたところでゼロが突然別行動をとりたいと言い出した　「どうしたんだよいきなり？」

ジョンがきく　「わりいな。ちょっと採取したいものあるから先にいつててくれ」そういつてゼロは1人で去っていった。

「えーと・・・どうしょ？」

アルがまたもや不安そうにする

「大丈夫。2人でなんとかなるつて」

ジョンがアルをなだめ、2人は洞窟へ入っていった。洞窟の中は思っていたより涼しく、すごしやすかったが、ランポスが巣を作っていたらしく、ランポスが大量にいた
「すごい量だね」

アルは冷や汗をかいている

「でも、ドスランポスがみあたらないな」

ジョンの言うとうり、ランポスが大量にいるのに関わらず、ドスランポスの姿はなかった

「とりあえずランポスを狩っておこう。沢山狩れば賞金も増えるし、後々邪魔になつてくるからな」

「わかった」

2人はランポスを狩り始めた。八匹ほど狩ったところで異変が起きた。ランポスが皆同じ方向に向かって吠え出したのだ。

「なにこれ？」

アルは不思議になり、ランポスがみている方向に目をやった。するとそこから、普通のランポスとは違った鳴き声が響いてきた。

「きたか！」

ジョンの顔つきが変わる。

そう、ドスランポスがやってきたのである。

「ドスランポスって、大きいね」

アルは啞然としている。普通のランポスより二割ほど体は大きく、鋭い爪をもち、赤いとさかのようなものが額についている。

「まだランポスが残ってるのに・・ゼロはまだか？」

ジョンは少しあせった。だが、ドスランポスはお構いなしに近付いてくる。

「アル、来るぞ！・・アル？」

アルは初めてみるドスランポスの姿に腰を抜かしていた。ドスランポスはそれを見逃さなかった！ドスランポスはアルめがけて一直線に突っ込んできた。アルはどうしていいかわからず、おどおどする。ドスランポスは走ってきた勢いを利用してジャンプしアルに襲いかかる

「きゃっ！」

アルは目を閉じた。が、その爪はアルには届かなかった。 ジョ
ンがジャンプした瞬間をねらい、矢を放ったのである

「大丈夫か！？」

ジョンが叫ぶ。

「ごめん。大丈夫」「よかった。きをつける！次が来るぞ！」

ドスランポスは体を起こし、ねらいをジョンにかえた。狙われないよう、不規則にジャンプしながら接近する「くっ・・！」

ジョンは避けようと試みたが、ドスランポスによって蹴り倒される。ドスランポスは勝利を確信したかのようにジョンに牙をむけようとする。その瞬間！

グシャ！

嫌な音と共にドスランポスは吹き飛んだ。ジョンは何が起こったのか理解出来ず、辺りに目を泳がせた。そしてジョンは、ドスランポスを吹き飛ばした原因を発見した。

「おせえじゃねえか。ゼロ」

そう、そこにはゼロが立っていた「遅すぎるぜ」

ジョンが言う

「わかってねえなあ。ヒーローは遅れて現れるもんだぜ」

「ばか言ってるじゃねえよ。手、かしてくれ」

ジョンがそう言うのと、ゼロはジョンの手を握り、引つ張り起こした。一方ドスランポスは、ゼロの不意打ちがきいたらしく、弱々しく体を持ち上げる。だがその目に、戦意喪失の文字なかった。むしろ逆である「まだやる気だぜ。ご苦労なことだ」

ゼロはそう言うのと、懷から何かを取り出し、ジョンに渡す「なんだよこれ？」

ジョンは首を傾げる。

「薬草だ。すりつぶして傷口に塗っとけ」

「まさかお前これ取りにいったのか？」

「ああ、ケガしたら大変だからな。念のためだったけど、役に立たな」「お前の方こそご苦労様だぜ」

ジョンはやや呆れていた。

「来るぞ。」

ゼロがそう言うのと、ドスランポスが向かってきた「ケガ人ねらってるのか？やらしいな！」

そういつてジョンは弓を引き、矢を放つ。ドスランポスに矢を避ける程の余力はなく、まともに直撃を受ける「ゼロ！トドメさせ！」
「わあかつてるよ！」

ゼロは剣を振りかざし、まっすぐに振り下ろす。メキメキグシャ！　ゼロの剣は巨大なため、その重量もハンパではない。肉を切り裂くと同時に、骨を砕く音が響きわたる。グエエエ！

ドスランポスは悲鳴をあげ、動かなくなった

「ふう、終わったな」

ジョンが安堵のため息をつく。「アル！大丈夫だったか？」

ゼロが声をかける

「う・うん」

アルは元氣なく返事をする。

「どうした？元氣ねえな」

ゼロがそう言うのとアルはその場に座りこんだ。

「私、怖くて何も出来なかった。なんか情けない」

「そんなことねえよ」

ジョンが慰める「ドスランポスに狙われたときもこわかったけど、一番こわかったのはドスランポスを殺すときだった。生き物を殺すことがこんなに怖いことだったなんてしらなかった」アルは落ち込んでいる「私、ハンター向いてないのかな？」

アルは悲しそうに問いかける「そんなことねえんじゃねえの？」
ゼロが口を開く

「生き物を殺すことが怖いっていうのはまちがったことじゃないと思うぞ。ハンター達は当たり前みたいにモンスターを狩るけど、俺はそっちの方が間違いだと思ってる。」

モンスターにだって命はあるし子供だっている。

もしかしたら今殺したこいつにも家族がいたのかもしれない。それを俺達が壊してしまうんだ。怖いのは当たり前だ。けどな、人間は壊さないと生きてはいけない。生きるために殺すわがままな生き物だ。大事なものは、壊すときに本当に大事な事が見極める事だ。その時、アルのその気持ちが凄く重要になってくる。だからその気持ちを忘れるな。」「うん・・・わかった・・・。一つきいていい？」

「なんだ？」

「なんでこのドスランポスは殺さないといけなかったの？」

アルの問いかけに、今度はジョンが口を開く「こいつは、必要以上に人間を狙うんだよ。人間の血の味を覚えてしまつて、ちかくを通るなら、たとえ小さな子供でも容赦なく襲う。いい加減被害がでかくなつてきたから俺達が動いたんだ」

「そう・・・なんだ」

三人の周りを沈黙が包む一番に口を開いたのはゼロだった
「ま、とにかく無事でよかったじゃねえか！腹もへつたり、帰ろう

ぜ」

「そうだな」

ジョンが頷く「それにしても・・・」

ジョンはニヤニヤしてゼロを見つめる

「なんだよ?」「真面目な顔して真面目な話するなんてキャラじやねえなっと思ってよ」

「うるせえな!ほっとけ!」ゼロは恥ずかしがっている。

「ふふ、なんだか楽しいね」

さっきまで落ち込んでいたアルが笑い出した。

「私、ハンターになっであなた達に知り合えてよかった」

「いきなり何言うんだよ?」

「まったくだ」

ゼロとジョンは照れていた。

「照れなくてもいいじゃない。まあいいわ。私もお腹すいし、帰ろ。」

『おう!』ジョンとゼロが同時に頷く。

船に

のりこみ、船は街へ向かって動き出す。この日、アルはハンターとして、少し成長した

第5話

三人が密林から街に帰り着いたとき、日はすっかり沈んでいた。

「ううゝ。はらへったあゝ」

ゼロは集会所の机に座りこんだ。「もう、すっかりしてよ」

とアルが言う。「もう無理だ。動けん。」「無理でも

動く！」

「鬼かおまえは！？ジョン、助けてくれ・・・」ゼロはジョンに助けを求める。

「今日は付き合わせて悪かったな。飯でもおごらせてくれ」

「マジで！？よっしゃあ！そうこなくちゃな！」ゼロは椅子から立ち上がり、はしゃぎ始めた。「動けないと言って動けるじゃない！」

「バカ！タダ飯食えるってなったら別だ！」「なによそれ！？意味わかんない」

「貧乏生活を長く続けてりゃあわかる日がくるさゝ。で、どこ行くだ？」

ゼロは目を光らせてジョンに聞く。「宿屋の近くに旨い店見つけたんだ。飯食ったら遅くなるから今日は宿屋に泊まっていけ」「ひよゝ。太っ腹ゝ。」

「言つとくが宿代まではださねえぞ」

「ケチ！」ゼロは少しすねる。

「ケチじゃねえ！お前らにも賞金出ただろうが！」

「あれは今後の生活費に残しとくんた！」

「お前の方がケチじゃねえか・・・」

ジョンは呆れている。「まあいいや。取りあえず早く行こうぜ。街中で餓死なんてしゃれにならん」

「わかったよ。こつちだ、ついてこい」

ジョンに連れられてゼロとアルは店に向かった。五分ほど

歩いて、古い店の前にたどり着く。

「ここかあ」

「なんか少し古いね・・・」

「まあ、古いけど味は保証するぜ」そう言っ、3人は中に入っ、いった。

注文を済ませ、料理が来るのを待っている。奥の席に座っていた女性が話しかけてきた。「ゼロじゃない！それにジョンも！久しぶりい！元気してた？」

ゼロとジョンはその女性を見て硬直した

「さ、さて？一体誰の事やら・・・」「ひ、人違いでは？」

ゼロがとぼけ、ジョンが便乗する。

「あら？そんなこと言っ、いいのかしら？」

女性はニヤリと笑う。「あなた達には貸しがいっぱいあるのよねえ。そろそろかえ・・・」

「いや！久しぶりだなあ。こんなところで会うなんて奇遇だなあ」女性が言いかけるところを皆まで言わせまいとゼロが割り込む。「あの・・・この人誰？」

アルが質問する。その声に女性が気付く

「あら

？後一人いたの？かわいいこね。どっちの連れ？」

女性がたずねるとジョンがゼロに視線を向ける。その視線を読み取って、女性は黙って冷や汗をかいている。ゼロを凝視する。耐えきれなくなったゼロが静かに手を挙げる。「ゼロの連れなのね・・・ひどいわ、私というものが有りながら・・・」

その瞬間、皆が驚きの表情を見せる

「まてまて！いつからそういう関係になった！違っだろ！お前等も信じてんじゃねえ！」

ゼロが必死に否定する

「じゃああの愛の告白は嘘だったのね！？」

「ふざけんな！この暴走守銭奴女！お前に愛の告白なんざする口なんかもってねえぞ！？んなことした瞬間即刻身投げだ！」

「そうだったのかゼロ・・・大変だな・・・」「ジョン！？お前は俺を裏切るのか！？頼むから見捨てないでくれ！」この後もしばらくこの騒ぎは続き、料理が運ばれてくるころ、ようやく収まった。

「は・・・これだからお前と関わりたくなかったんだよ・・・」ゼロは食事を疲れ果てたように口へと運ぶ。

「あら？その言い方はひどいんじゃない？」「ひどくねえ。お前の方がよっぽどひどいじゃねえか・・・」

「まあいいわ。で、あなた名前は？」

女性はアルに質問する。　「アル・アジフです。」

「アルちゃんね。私はミリア・マージョリー。長いからミリアって呼んでくれればいいわ」「はあ・・・」

「で、アルちゃん？」

「はい？」

「ゼロとはどこまでいったの？」

「ぶふ！」

この唐突な質問に、隣で吹き出したのはゼロである。　「えっ、いや・・・どこまでもなにも、そんな関係じゃないんで・・・」「ふうん？」

ミリアはニヤニヤ笑っている　「そういうミリアさんは
どういうご関係なんですか？」

今度はアルが質問する

「私？大した仲じゃないのよ。まあハンターやっとならばいろんな人と知り合うものよ」

「はあ・・・」

アルは腑に落ちない表情を見せる。

「いきなり変なこと言うな。むせただろうが」

そう言つとゼロは立ち上がった。

「どこいくんだ？」

ジョンが聞く

「便所」

そう言つてゼロはトイレに行つた「アルちゃん？」

「はい？」

ミリアは少し真剣な表情になる

「ゼロとこれからも関わりをもつていくなら相当の覚悟が必要よ」

「え？」アルは不思議そうにする

「おい……」

ジョンが止めようと口を開く

「いいじゃない。い

ずれ分かるときがくるんだから」

「今じゃなくてもいいだろう」「もう、しょうがないわね。でもね、アルちゃん。ゼロはあなたが思いもつかないような問題を抱えてる。ただ、人に心配させたくないから表にださないだけ。私達は理解してるけど、ゼロはとても敵が多いの。だからもしあなたが事実を知ったとき、ゼロのことは嫌わないでほしいの。」

「はい……わかりました……」

アルはわけが分からなかったが取りあえず頷いた。

「なにしんみりしてんだ？」

トイレから戻つたゼロが首を傾げる

「何でもないわ。さて、私はそろそろ帰るわ。」

ミリアが立ちあがる 「おう。そうしてくれ」

「何？その言い方？」

「何でもありません！さようなら！」

「まったく……いっとくけど貸したお金はちゃんとかえして貰うからねえ。バイバーイ」

そう言つてミリアは去つて行つた。「ふう。嵐がさつていったみたいな」

「全くだ」

ジョンがつぶやき、ゼロが頷く。

「飯も食つたし、俺もそろそろ帰るとするか。」

「おう。飯、奢ってくれてありがとよ。」

「気にすんな。宿屋の場所はわかるよな？」

「ああ、まかせろ」

「それじゃあな。お前等も疲れただろうから早く休めよ。」

そう言つてジヨンは店を出た。ジヨンを見送つた後、ゼロとアルも宿屋に向かった。宿屋についた2人は、部屋をとり、それぞれの部屋へ入つていった。

アルはすぐにベッドに横たわる。しかし、なかなか眠れないでいた。ミリアの言つたセリフが気になつていたのである。

「私じゃ思いもつかないような問題つて何だろ？敵が多いつてどういふ事かな？」

アルは気になつてしようがなかった。「ゼロに直接聞いてみようかな？」

アルはしばらく考えたが、やはり気になるのでゼロの部屋に向かった。部屋の前に立ちノックする。「ゼロ、起きてる？」

返事はない。もう寝たのだろうか？アルがそう思つてドアノブに手をやると・・・ガチャ・・・扉が開く

「鍵がかかつてない・・・」

アルは不思議に思つたが、恐る恐るへやの中を覗き込む。

「あれ？いない・・・」

へやの中にゼロの姿はなかった。アルはしばらく宿屋の中を探しまわつたが、ゼロの姿はなかった。

「どこにいったのかな？」

アルは辺りを見渡す。そして、屋根へと続くハシゴを見つけた「上かなあ？」

アルは疑いながらもハシゴを登る。屋根の上にでると、寝転がる人影が見えた。ゼロである。ゼロは空に浮かぶ月をみていた。

「こんなとこでなにしてんの？」

と、アルが声をかける。

突然声をかけられゼロは少し驚く。「なんだ、アルか。おどろかせんなよ。どうした？眠れないのか？」

「そう言つてゼロこそこんなとこにいるじゃん」「ああ、俺

は月を見てた」

「月？」

いわれてアルも空を見上げる。

「綺麗な満月だろ？」

「ほんとだ・・・」

空には冷たく、透き通った光を放つ満月が浮かんでいた。「満月を見てると・・・」

ゼロが口を開く。

「満月を見てると、色々と昔を思

い出すんだよ。」

「ふうん・・・」

アルは気の抜けた返事をしてゼロの横に腰掛ける。「ゼロは満月のよる、いつもこうして月を眺めてるの？」

アルが聞く

「まあ、割とみてる。」

「そう・・・」

しばらく2人は黙って月を眺めていた。隣で

ゼロがあくびをかいだ。

「ふああ・・・。そろそろ寝るとすっかな。」

そう言っでゼロはその場から立ちあがる。

「アルもそろ

そろ寝ろよ。じゃ、お休みい。」

ゼロはハシゴを降りて、自分の部屋へと戻っていった。

アルも眠くなつたので自室へと戻り、ベッドに横たわる。「あ、ゼロにミリアさんが言っでたこと聞くの忘れちゃつた。・・・まあいいか。」

そう言っでアルは目を閉じた。翌朝、下の階が騒がしくアルは目を覚ました。「どうしたんだろ？こんな朝から」

そう言っで、ベッドから身を起こし、部屋の外に出る。ちょうどゼロも目を覚まし、廊下でアルと鉢合わせになつた。

「よう、おはようーさん」

ゼロが声をかける。

「おはようー。なんか下が騒がしいね」

「何かあつたんじゃない？取りあえずいつてみるか」

「そうだね」

2人は階段を降りていく。階段を降りると、そこには人だかりが出来ていた。「何かあったんですか？」

アルが声をかけたたん、周囲の目がゼロへと集中した「な、何？」アルは動揺する。すると人だかりの中から声があがる。「

お前がここの子供をさらったんだろ！見境なく人間を襲いやがつて！この化け物！」

アルはそのセリフの意味が分からなかった。

「何言つて

るんですか！ゼロはそんなことするような人じゃありません！それに化け物ってなんなんですか！？」アルの声を聞いて、さつきと同じ声があがる。「なんだ？お前一緒にいるくせにそんなこともしらねえのか？」

「何のことよ！？」

アルはますます混乱する。「本当に何も知らねーみたいだな。

なら教えてやるよ！そいつは大量の人間を一晚のうちに殺した殺人鬼なんだよ！」

「え・・・？」

その声の主が放った驚愕のセリフにアルは驚きを隠せない。アルはゼロを見るが、ゼロは否定する様子をみせない。「そいつはなあ、生まれたときから竜人族とも違う人間とも違う能力を持ってたんだよ。だから古龍観測所の地下で実験台として檻に入れられてたんだよ。だけど数年が経ったある満月の夜、そいつは自力で牢をこじ開け、恨みを晴らすために、研究施設にいた人間を一人のこらず殺したんだ！そんなこと人間はおるか竜人族にも出来やしねえ。わかるか？そいつは人間でもなけりゃ竜人族でもない。ただの化け物なんだよ！」

「そ・・・そんな・・・」

アルは愕然とする。街の人達の視線が冷たかった理由はこれである。街の人は、ゼロを化け物として扱い、関わりを持たないようにしていた。ミリアが言っていた、深刻な問題もこのことである。

「そいつの名前がゼロなんて言う短い名前であることを変だと思わなかったか？」

いわれてアルははっとする。確かにアルは、ゼロの名前を聞いたとき、少なからず疑いを持った。

「そいつの名前はなあ、研究施設でつけられてたナンバーだ！実験ナンバー”00（ゼロ）”なんだよ！」

そう、ゼロの名前が短い理由はこれだった。アルは事の重大さをとらえきれずにいた。その目に涙を浮かべ、その場から走り去ってしまった。「さあ、化け物！子供をどうした！？」

街の人達がゼロに詰め寄る。ゼロは固く閉ざしていた口をひらいた。「おい、化け物である俺にこんなことしてただですむと思ってるのか？」

しゃべり始めたゼロの目に、いつもの優しさはなかった。

「なんならここにいるやつらを今すぐミンチにしてやるぞ・・・」

「この人数をどうにかできてると思ってるのか！？」

人だかりの中から声があがる。

「お前らが何人で群れようと、ゴミはゴミだ。俺には関係ねえ。なんなら見せしめに一人殺してみるか？」ゼロのセリフに街の人達はおされる。

「大体、俺が子供をさらったっていう証拠はあんのか？あ？」

街の人達は黙り込む。「どうなんだって聞いてんだよ！！うんとかすんとか言いいやがれ！！」

街の人達は何も言えないでいた。すると後ろから自衛団（警察のよくなもの）の声がする。　「お宅の子供を保護している。

至急、引き取りに来い。」

そいつって自衛団は去っていった「どうやら犯人は俺じゃなかったみたいだなあ？」

ゼロは人だかりの前へ歩を進める。

「邪魔な

んだよ！道あける！」

ゼロがそう言うのと人々は道をあける。「けっ！しけた連中だぜ・・・

「

ゼロはそういつて店を後にした。

の姿が見えなくなるまで立ちすくんでいた。

街の人達はゼロ

第6話

アルは街を歩いていて。がつくりと首を落とし、肩をすくめている。一度、問題のあった宿屋に戻ってみたが、すでに人だかりはなくなっており、ゼロの姿も見あたらなかった。アルは、あの場から逃げ去った自分が後ろめたく感じ、ゼロの家に向かうことも出来ずに、途方にくれていた。と、そこへ。

「あら？アルちゃんじゃない！どうしたの？暗い顔して」
声をかけてきたのはミリアだった。ジョンも一緒である。

「あ、ミリアさん・・・ジョンも・・・」

アルは、一瞬顔を上げるが、すぐに視線を下におとす。アルの様子を見て、ジョンとミリアは何があったのか悟った。

「・・・まあ、立ち話も何だから、飯でも食いに行こうぜ」

「そうね。行きましよう、アルちゃん。」

アルは無言でジョンとミリアについていった。3人は人気のない店に入って、適当に注文をとる。

「・・・で、アルちゃん。ゼロのことをどこまで知っちゃったの？」

突然の質問に、アルは驚いたが質問に答える。「その・・・ゼロが生まれた時のことと、ゼロが普通の人間とは違うことと、名前の理由と・・・」

アルはそこまで言って口ごもる。

「それと？」

ミリアが聞く。「・・・ゼロが牢を抜け出して恨みを晴らすために沢山の人を殺したこと・・・」

そこまで言ったとき。ドン！と物凄い音がした。音の方を見るとジョンが拳を握り締め、机を殴り、立ち上がっていた。「あいつらそんなこと言っただけだったのか・・・許せねえっ・・・！」
ジョンは怒りを露わにしている

「落ち着きなさい。あんたが熱くなってもしょうがないでしょ。」

「うるせえ！ミリアは何とも思わないのかよ!?」「思わないわけではないでしょ!・・・でも、私達が今熱くなって行動したら、ゼロは今以上に立場が悪くなってしまいわ。それに、ゼロは自分のことに私達を巻き込みたくないと思ってるはずよ。それなのに、私達が行動してゼロが喜ぶと思う?」「・・・くそっ!」

ジヨンは悔しそうに椅子に座る。

「ごめんなさい、アルちゃん。見苦しいところをみせたわね」

「いえ・・・」

「アルちゃんはゼロが、人を殺したって聞いたとき、何を思った?」「・・・私は、ゼロがそんなことするはずないって思いました。いえ、言い聞かせてました。なのにゼロは否定しようとしなくて・・・なにがなんだか分からなくなって・・・その場から立ち去ってしまいました・・・」「そう・・・。ゼロをおいて1人で逃げちゃったわけね。」

アルは何も言わず、黙って頷く。

「アルちゃん・・・。あなたはゼロにとって凄く残酷なことをしたわ」「え・・・?」

「あなたは、街の人達とある意味同じことをしたのよ。・・・その場から逃げることで、現実から目を背け、ゼロを置き去りに・・・つまり孤立に追いやってしまったの。」「あ・・・」

アルは何も言えずに下を向く。

「アルちゃん。あなたは始め、ゼロが人を殺したって聞いたとき、そんなことないと思ったのよね?今ではどう思ってる?」「・・・今は、そんなことは、あつて欲しくないって思ってます。」

「そう・・・。でも、残念だけど、ゼロが人を殺したのは事実よ」

「そんな・・・」「でも、あなたが聞いたのは少し違うわ。ゼロは恨みを晴らすなんて小さな理由で人を殺めたりしない。」「え・・・?」

アルが少し不思議な顔を見ると、ジヨンが

口を開いた。

「昨日、ドスランポスを狩りにいったときゼロがいったセリフ覚えてるか？」いわれて、アルは思い出す。

「そう、あいつは人々が忌み嫌うモンスターを殺すときにも心を傷めてる。多分、自分に当てはめて考えてしまっただろうな。だからあいつは生き物を殺すとき、大事かどうか見極めてるんだ。ただ単に、嫌われたから殺されたって言うんじゃない。あまりにも酷すぎるだろ？」

「じゃあ、ゼロは何で人を殺したの？」

この質問に、今度はミリアが答える。

「生きるためよ。」

「生きる・・・ため？」アルは、ゼロのセリフを再び思い出す。そしてあることに気付く。そう、ゼロは”生きるために殺す・・・”と言っていた。「親の愛情もしらず、望むことすら知らなかったゼロが、生まれて初めて望んだこと、それが“生きたい”ってことだったの。・・・酷い話よね。」

「そういえば・・・ゼロの両親はゼロが檻に入れられるのを黙って見てたんですか？」

「ゼロの両親は、ゼロを研究するチームの中心人物だったの。」

「・・・！」

アルは驚きのあまり、言葉を失った。

「ゼロの両親は、ゼロを研究対象としてしかみてなかった。そして、満月の夜・・・ゼロに殺された」「1つ・・・聞いてもいいですか？」

アルが口を開く。

「満月の夜、何があっただんですか？何故、ゼロは人を殺さなきゃいけなかったんですか？」

ミリアは少しためらったが、静かに口を開く

「満月の夜・・・ゼロは研究所で危険分子として、処分・・・つまり殺されることになったの。両親の提案でね・・・。それを知ったゼロは、生きたい一心で檻をこじ開け、逃げだそうとしたの。でも、研究員

達はゼロを処分しようと、それぞれが武器を持ってゼロに襲いかかった。「ゼロも最初は手を出さなかった。どんなに斬られても逃げ回ったの。」

アルが黙って聞いている横でジョンが口を開いた

「アルは知らないだろうけど、ゼロの体にはその時の無数の傷跡が残ってるんだ」ミリアはジョンが話終わるのを確認して話を続ける「そして、ゼロは追い詰められた。大勢の人間に囲まれて、ついにゼロは反撃することを選んだの。あとはもう、アルちゃんの知ってるとうり、ゼロは一晚のうちに沢山の人間を殺したの。」アルは愕然としていた。

「でもね、アルちゃん。ゼロは、いろんな傷みを抱えているけど、本当の優しさを知っているわ」

「本当の優しさ？」「そう。ゼロがアルちゃんにこのことを隠してたのはアルちゃんのためだと思うの。」

「私のため？」

アルは首を傾げる。

「アルちゃんはゼロ

の所に居候しているんでしょう？ゼロは多分、自分のことを知ったあなたが、家に帰りづらくなることが分かってたんじゃないかしらだから、あなたが安心して“ただいま”って帰ってこれる所を作りたかったんだと思う。たとえ自分のことを隠してたことについて、あなたがゼロに失望したとしてもね」「・・・」

アルは黙っている。

「あまり関係のない話なんだけどよ・・・」

ジョンが突然口を開く

「俺は一回、ゼロに名前ぐ

らいなら変えてもいいんじゃないか？って昔言った事がある。そしてたらあいつは“この名前と傷跡は自分が罪を犯した事への罰だ。だからこのままでいい”って断りやがった。あいつは、生きて人々に忌み嫌われながらも、人々にモンスターによる恐怖を少しでもなくすことを償いとしている。せめてアルだけでもゼロを許してやってくれ」アルは無言で下を向いている。

「私達もゼロにあいに行くわ。だからゼロの家につきよに帰るわよ、アルちゃん。」

「はい」アルは吹っ切れたような表情を見せた。
3人は店を出て、ゼロの家へと向かった。

3人がゼロの家についた時、日は西の空に、赤く浮かんでいた。アルが家の中に入ると、ゼロが晩飯を作っていた。ゼロはアルの姿をみて少し驚いた。

「アル……」
驚いたな。もう帰ってこないと思ってたからな。」「ゼロ……ごめん……」

「何でお前が謝るんだよ。謝るのは俺のほうじゃねえか。その……俺の正体を隠してて悪かった。」

「いいの。ゼロが何者だろうと、私達の中で、ゼロはゼロなんだから……」「そうか、ありがとな……って、私たち？」

ゼロは首を傾げる。

「よう！旨そうなもん作ってるじゃねえか！」

「本当。ちゃんと私の分はあるんでしょうね？」「ミリア！？
ジョン！？なんでここにいるんだ！？」

「アルちゃんと今まで話してたのよ。アルちゃんだけ仲間はずれは可哀想でしょ？」「アルに……話したのか？」

「まあね……」

「いいじゃねえか。アルも分かってくれたし。俺らはこれから仲間ってことだ。」

ゼロはそのセリフをきいてとても嬉しそうだった。「腹もへったし！今日はゼロの家で食ってくか！」

ジョンがそう言っただけは準備を始めた。
「お前らは……あつたけえな……」

とゼロは小さくこぼす。「ん？何か言ったか？」

「何でもねえよ。早く準備しちまおうぜ。」

準備を済ませ、食事をとった。ゼロ達はその日、次の朝日のぼるまでずっと騒いでいた。

第7話

宿屋の子供が失踪して、問題が起こったあの日から、そろそろ一週間が経とうとしていた。

アルも状況を理解して、やっと落ち着き始めた。「ゼロ」。朝ご飯できたよ。早く起きて」

今日はアルが食事当番である。

「んうん・・・後三時間位寝かせて・・・」「何バカなこと言ってるの！ほら、起きなさい！ご飯冷めちゃうじゃない」

そう言つて、アルはソファーに寝ていたゼロを蹴り落とした。ゼロは顔をモロに床にぶつけたため、思いのほかダメージを受けた。

「・・・鬼」

ゼロは鼻さすりながらアルをうらめしそうに睨んだ。「何かいった？」

「何でもありません・・・」

「じゃあさつさと起きる！」ゼロは渋々その場から立ち上り、アルが料理を運んでくるまで椅子に座っていた。アルはその手に、スクランブルエッグとパンの入った皿を運んでくる。「今日の朝飯はスクランブルエッグか」

それを聞いて、アルは少しむつとする。

「え？俺何か変なこといったか？」

「それ・・・」

アルはスクランブルエッグを指差す。「玉子焼きなんだけど」

「玉子焼き！？これがか！？」

スクランブルエッグに見えた物体の正体は玉子焼きだった。「ひっくり返すのに失敗してグチャグチャになっちゃっただけよ」

「アルさん・・・それを世間一般じゃスクランブルエッグって言うんだぜ・・・」

「何よ？文句あるなら別に食べなくてもいいのよ？」アルは皿を自分の方にもつていこうとする。 「わー！食べます！食べさせていただきます！」「分かればよし」

アルは皿をゼロの方に戻す。 ゼロは恐る恐る玉子焼き？を口に運ぶ。

「お？旨いじゃん」

「でしょ？」

「こりゃ意外だな」

「意外・・・？」

「いや…何でもない。」「早く食べないと約束に遅れちゃうよ」

「約束？」

ゼロは首を傾げる。

「ジョンが話があるって言ってたじゃない」

いわれてゼロは思い出す

「あゝ。なんかそんなこと言ってたなあ。オマケに装備つけて来いとかなんとか・・・」

「何かあったのかな？」「さあな。でも、あいつは情報が速いからな。何かあったんだろ」

「じゃあ早く行かないとね」

「ああ」2人は食事を済ませ、街へ向かった。

街につくと、集会所の前でジョンが待っていた。

「よう。話ってなんだよ？」

ゼロが声をかける。 「まあ、取りあえず中に入ろうぜ。話はそれからだ」

そう言つて、3人は集会所の中に入っていった。中に入った3人は席を取り、座る。

「後でミリアも来ることになってる。」

「ミリアもかよ！？なんか大掛かりじゃねえか？」「何かあったの？」

「それがな・・・」

ジョンは少し真剣な表情になる。

「ここ最近、街の近くで、人やらモンスターの変死体がでている。」

「変死体？」

アルが聞く

「ああ。死体の腕や足やらが、明らかに食いちぎられたようになくなってるんだ。それで、調べたところ、嫌な名前がでてきやがった」「なんだよ？」

今度はゼロが聞く。

「・・・リオレウスだ」

『！！』これを聞いたゼロとアルは同時に驚く。リオレウスとは空の王と呼ばれる飛竜である。その口からは灼熱の火炎弾を放ち、その牙はあらゆるものを咬みちぎる。ハンターを生業とするものなら必ず耳にする名前である。一流のハンターでも敬遠してしまうほどの相手である。

「まじかよ・・・」

「ああ。残念ながらマジだ。けど、ここまで被害が出たらほんとく訳にもいかねえだろ」3人を重い雰囲気包む。思いついたようにゼロが口を開く

「・・・取りあえず、アルの武器を何とかしねえとな」

「え？私の？」

アルは首を傾げる「ああ。今回の相手はお前が剣を持って前線で戦うには危険過ぎる。かといって弓を引くのは無理だろうから、親方に頼んでボウガンを作ってもらう」「ああ、それがいい。」

ゼロの意見にジョンが頷く。

「よし、ちよつと行つて来る。ミリアが来たら伝えといてくれ。」

「ああ。わかった」

「行くぞ、アル」

「う・・・うん」

ゼロとアルは集会所をでて、鍛冶屋に向かった。鍛冶屋に着いて親方に事情を話すと、親方は快く承知してくれた。親方は昔ハンター

だったため、同時、自分が使用していた上等なボウガンを譲ってくれるという。「ありがとうございます。」

「いいってことよ。こいつもアルちゃんに使われて幸せだろうよ。」
「おっちゃん、本当にただでいいのか？」

「ったり前よ！お前は俺の息子みたいなもんだからな！遠慮せずに持つていけ！」
「あんがとよ！おっちゃん！」

「おう！お前達も気をつけていけよ！」

「おう！」

ゼロとアルは鍛冶屋を後にした。集会所に向かう途中、アルが口を開く。
「親方とゼロは

どんな関係なの？」

「おっちゃんは、俺が逃げだした時、1人路地裏で暮らしてた俺を育ててくれたんだ」

「へえ。そうだったんだあ」「おっちゃんがいなかったら今の俺はなかったかもしれないなあ。」

「ふうん」

「って和んでる場合じゃねえぞ。後はボ

ウガンの玉を買わねえとな」

「はあい」2人が買い物済ませ、集会所に戻ると、ミリアが到着していた。
「遅いわよ。」

「しょうがねえだろ。こっちは準備OKだ。そっちはどうだ？」
「バリバリOKよ！」

ミリアは張り切っている

「ミリアさんって・・・ハンマー使ってますか？」

「ええ。最初はまともに振れなかったけど、長く使ってるうちに慣れちゃったわ」

ミリアはハンマーをなでながら話す

「すごいですねえ」

アルは関心の眼差しをミリアに向ける。

「お

い、アル。ミリアには逆らうな。この剛腕に殴られたら死ぬぞ」

「そこ！余計なことじゃない！」

ミリアはゼロの頭をグーで殴る。

「本当の事じゃねえかよ」

「うるさい。早く行くわよ」

4人は船に乗り込み、リオレウスが住むと報告があつた森岳へと向かった。4人が森岳に着いたとき、太陽は真上にきていた。4人は現地で昼食を済ませ、ベースキャンプを後にする。「ふう。昼飯うまかつたな。な、ジョン」

「ああ。即席だったけどいけたな」

と、ゼロとジョンが話していると、ミリアが口を開く。「あんたたち。談笑もいいけど、油断してあんたたちがリオレウスの昼飯にならないように気をつけなさい。」

「げえ。エグいこと言うなよ。」

とゼロが言う「しかも、何気にリアリティがあるな・・・」

「流石に笑えねえ冗談だな・・・」

などと話していると、分かれ道の前にでる。「ここで二手に分かれようぜ。ここはバランスよく、俺とアルが右に行くから、ジョンとミリアは左に行ってくれ。」

「ハイよ。」

「さつきも言っただけど、気をつけなさいよ。アルちゃん、ゼロをよろしくね。」「はい、任せてください」

「じゃ、頼んだわよ」

そう言つて、ジョンとミリアは左の道、ゼロとアルは右の道へと分かれた。分かれて少し経ったとき、ゼロがあるものを発見する。

「血だ・・・」

そう言つて、ゼロは血に振れてみる。

「まだ乾いてない・・・近くにいる・・・」

すると空から、グオオオ！！　　　　　と鳴き声が聞こえた。2人に戦慄が走る。　「・・・アル、さっき説明したボウガンの使い方はもう大丈夫か？」

「うん・・・でも、何で？」

アルが聞くと、ゼロは冷や汗をかきながら答えた。

「・・・どうやら見つかったらしい」

ゼロがそう言った瞬間、後ろから羽をばたつかせ、何かが降りてくる音がする。そう・・・リオレウスが来たのである。ズシン！と重量感たつぷりの音と共に降りてきた巨体はドスランポスどころの話ではない。　体長は20mほどはあるのかというほどの巨体である。リオレウスはゼロとアルの姿を確認すると、グオオオ！！と、

雄叫びをあげ、臨戦態勢をとる。　「アル！！来るぞ！！」

ゼロがそう叫んだ瞬間、リオレウスは猛スピードで突進してくる。

「散れ！！」

ゼロは叫んで右へ、アルは左へジャンプする。

「アル、下がれ！」

「わかった！！援護は任せて！！」

「わかった！任せたぜ！！」ゼロはリオレウス目掛けて突っ込む。リオレウスは向かってくるゼロに噛みつきこうと頭を上から下に持ってくる。が・・・ボン！！・・・爆発音にもた音と共に、リオレウスの頭が跳ね上がる。　アルが撃ったボウガンの玉が直撃したのである。アルの狙撃力は相当のものだった。

「やるじゃねえか！！」

ゼロはそう言つて、リオレウスの直下まで駆け抜ける。「う・・・らあ！！」

走ってきた勢いを利用し、物凄い速さで剣をふる。　　　　　　ザキン

！！・・・ゼロの剣は、確かにリオレウスへダメージを与えたが、まだまだ倒れる気配はない。リオレウスは頭を降つてゼロを上へと吹き飛ばす。

「うお・・・つとお」

ゼロは空中で体をひねり、着地する。

「ゼロ！！大丈夫か！？」

後ろから、雄叫びを聞いて、ジョン達が駆けつけた。 「おせえよ！」

「ヒーローは遅れて現れるもんだからな！」

「それ、俺のセリフだぜ！」

「もう忘れちゃった・・・な！！」

ジョンは弓を引き絞り、束ねた矢を放つ。 ザシュシュ！！・・・

矢は、リオレウスの口もとに刺さる。だが、背中に向かっていった矢は、弾かれてしまった。リオレウスの背甲は、予想以上に堅かった。

「ジョン！！背中は大めだ！！顔面か、足を狙え！！」「了解だ！！」「私の存在を忘れてない！？」

とリオレウスの後ろからミリアの声がする。ミリアはハンマーを思い切り振り、リオレウスの足を殴りつける。グウウウ！！・・・ハンマーが効いたらしく、リオレウスはたまらず空へ飛び上がる。

が、逃げる気配はない。辺りを猛スピードで飛び回っている。

「くそっ・・・どこからきやがる・・・」

4人は辺りを警戒する。

ゴオオオ・・・音が近付いてくる。

「アル！！横だ！！」

ゼロが叫ぶ。アルは自分の右上から特攻してくるリオレウスを確認する。しかし、体が恐怖で動かなかった。 リオレウスが目前まで迫ってきたその瞬間 「よけるバカ！！」

アルはゼロに突き飛ばされる。その直後！

ドゴン！！・・・ゼロはまともに直撃を受け、物凄い勢いで吹き飛ばぶ。 バコオン！！・・・ゼロは岩に叩きつけられ、ズ

ルズルと落ちる。『ゼロ！！』全員が叫ぶが返事はない。ゼロは打ちどころが悪く、気を失ってしまった。リオレウスはさらに舞い上がり、再び辺りを飛び回る。全員が絶望感にさいなまれる。辺りに

は、
リオレウスが羽ばたく音だけが響きわたっていた・・・

第8話

辺りは羽をばたつかせる音に包まれている。

リオレウスが、

刃向かう敵を排除しようと空を飛び回っているのだ。その奥では、
ゼロがうつ伏せに倒れている。

「ちくしょう・・・どうす

りゃあいい？」

ジョンが冷や汗をかきながら言う。「・・・私が

囹になる・・・」

口を開いたのはアルだった。

「アルちゃん！？正気で言ってるの!？」

ミリアは驚く。

「はい...正気です。」「お前が囹になって、どうするんだ？」

「私に考えがあるの・・・」

「わかった。聞かせてくれ。」

「ジョン!？あんた自分で何言ってるかわかってんの?」「ああ・

・だが、他にどうすることもできない。話を聞いてみるだけの価値
はあるだろう」

「だけど!!普通の人間より頑丈なゼロが一撃で気絶
したのよ!!アルちゃんがまともにつけたら・・・」「ミリアは口ご
もる。

「ええ、死ぬかもしれません・・・」

「なぜそこまで分かってるのにそんなことをするの?」

「私は・・・狩りに来ればみんなの足を引っ張って
ばかりです。だから、こういう時ぐらい・・・いえ、こういう時
だからこそみんなの役にたきたいんです!」「・・・わかったわよ
で、アルちゃんの考えて?」

「それはですね・・・まず私が囹になって、リオレウスを呼び寄せ
ます。攻撃が直線的なので、頑張れば回避できだと思います。それ
で、突っ込んできた所をジョンの弓で迎撃。体制を崩したところを
ミリアさんのハンマーで叩いてください」「単純だな...」

「ええ…でも、何もしないよりはずっと効果てき

ね。」

「もちろん…成功すればの話ですけどね」

アルは不安そうにする。

「成功するさ…させてみせる…」

「そうね。じゃあ早速開始するわよ。準備はいい？アルちゃん」「はい…！」

アルは頷き、1人見晴らしのいい場所へでる。ジョンとミアは岩陰に待機する。…ゴオオオ！…音が近付いてくる。

リオレウスは先ほどと同じように、アルに特攻する。アルはギリギリまで引き寄せ、横へと緊急回避する。…ふおおん！…アルの横をリオレウスが通過する。アルが回避したのを確認して、ジョンがすかさず矢を放つ。ザシュ！！…矢の一本がリオレウスの眼球を直撃する。 グオオオ！！…リオレウスはひるむ。 「てやああ！！」

ミアはハンマーを振りかぶり、リオレウスの頭目掛けて振り下ろした。

グウウウ！…リオレウスは少しふらつく。 「もう一押し！！」

そう言つて、アルはボウガンの玉をリロードし、狙いを定めた。が、リオレウスは尻尾を振ってアルを突き飛ばす。

「きゃあ！」

アルは少し吹き飛ばされ、体を起こそうとする。しかし、そこにはリオレウスがすでに駆けつけていて、アルを食いちぎろうと構えていた。

「…っ！」

アルは死を覚悟した。次の瞬間！ ザシュン！…グウウオオ！！…悲鳴をあげたのはリオレウスだった。 アルは何が起ったのか理解できず、とりあえず体を起こす。すると、そこには切断されたリオレウスの尻尾が無惨に転がっていた。リオレウスの尻

尾を切断したのは・・・

「ゼロ・・・」

そう、リオレウスの尻尾を切断したのは、意識を取り戻したゼロであつた。

「よう。大丈夫か？…すまねえ。どうやら俺はしばらく居眠りしてしまつたみたいだな。」

「ゼロ！よかった、無事だつたの・・・」

言いかけてアルは言葉をなくす。

「ゼロ・・・頭から血が・・・」

ゼロは頭部から流血していた。それも大量に。

「これか？気にすんな。岩に頭をぶつけた時に切つただけだ。」
「気にすんなくて・・・凄いやつだよ！？」

「だから大丈夫だつて！！今お前が気にしないといけないのはあいつだ。」

ゼロはそう言つて、リオレウスを指差す。リオレウスは頭を殴られたため、足下がふらつき、ともに立ち上がれないでいた。

「アル・・・お前に1つ言つとく」

「何？」「敵に攻撃を受ける瞬間に目を閉じるな。お前は死を覚悟するんだろうけど、それじゃ遅すぎだ。狩猟に出る前に覚悟は決めておけ。俺らはモンスターの命を奪いに来てる。だったら逆もありだ。奴らは命をかけて向かってくる。なのにお前が命をかけないで勝てるわけがないだろ？わかつたな。自分が死んでしまつかもしれない時こそ、目を見開け。最後の最後まで諦めるんじゃないぞ。死中に活路を見いだせ。」

「・・・わかつた」

アルは頷く。

「よし！突つ込むぜミリアー！！」

「了解よ！！」「ゼロ！！奴の左目はさつき潰した！左側から死角に入り込め！！」

「流石だな！！ジョン！！」

言葉と同時にゼロとミリアは走りだす。その姿を確認したりオレウスはなんとか立ち上がるうとするが、それは許されなかった。

ジョンとアルの攻撃がリオレウスを強襲する。「ミリアー！！お前は頭を叩け！！俺は腹部を狙う！！」

「わかったわ！！」

ゼロとミリアは二手に分かれる。

「アル！！俺達も狙いを変えるぞ！！俺はミリアと頭を狙う。アルはゼロと腹部を狙ってくれ！！」

「了解！！」ジョンとアルも立ち位置をかえ、狙いを変更する。グオオオ！！・・・リオレウスは悲痛な叫びをあげる。だが、一向にやられる気配を見せない。

「ちつ・・・ちが

あかねえ・・・」

ゼロは攻撃する手を止め辺りを見渡す。そして何かに気付くと、

「わりい！！ちよつと戦闘から外れる！！」

と言って、岩山の方に駆け出していった。ゼロ以外の3人は、何をするのか予想もつかなかったが、ゼロを信用し、攻撃の手を休めなかった。しかし、リオレウスは立ち上がり、頭と短くなってしまった尻尾で3人を振り払う。そして、足を引きずり、逃げだそうとした。

「逃がすか！！」

ジョンはすぐさま立ち上がり、リオレウスへ向かっていく。

「どいてろ！！ジョン！！」

頭上からゼロの声がする。ゼロは岩山の上に登っていた。ジョンはいわれた通り、後退する。

「行くぜ！！」

ゼロはそう言うと、タン！と、その場から飛ぶ。落下地点にはリオレウスの頭がある。

「うおおらあ！！」

ゼロは剣を、真上から一直線に振り下ろす！

ザグシャア！！メキメキ！！・・・ゼロの一撃はともにリオレウスの頭を捉えた。グギユオオオ！！・・・リオレウスは最期の雄

叫びをあげ、2、3歩後ずさりし、ズシン！とその場に倒れた。「・いよっしゃああ！！やったぞ！！！」

ゼロは歓喜のガッツポーズを見せる。

「・・・やったぞ！！よくやったゼロ！！！」

ジョンが続く。

「全く・・・一時はどうなる

ことかと・・・」「まあいいじゃねえかミリア！！こうしてみんな生きてんだからよ！！！」

「な！？・・・大体あんた途中でやられたやったじゃない

！！！」

「もう忘れる。あはははは！！！」

ゼロはジョンと肩を組んではしゃぐ。すると、奥でほうけているアルに気付く。

「おい！！アル！！なにしけた顔してんだ！？お前もはしゃげよ！！！」

「うん！！！」

ゼロにいわれてアルもはしゃぎ始める。「あ！！アルちゃんまで！！・・・よし。こうなったら私もはしゃぐわよ！！！」

ミリアも参加する。

4人はしばらくはしゃいだ後、日がす

っかり沈みかけていることに気付き、その日はベースキャンプに泊まることにした。4人はベースキャンプで夕食を取る。

「いやあ！！戦いの後の飯はうまいなあ！！食も進むぜ！！！」

ゼロは大喜びである。

「あんたの大飯喰らいはいつものことでしょ・・・」「ミリアは呆れている。」「まあいいじゃねえか。今日ぐらい許してやれ。」「

「しょうがないわね・・・」「ミリアはアルがまたほうけていることに気付く。

「アルちゃん。さつきからどうしたの？」

「あ！いえ！その・・・自分がこんな大仕事を本当にやったのかなあって、実感わかなくて・・・」「なに言ってるの！今日はアルちゃんがいたから勝てたようなものよ！！！」

「そ、そんなことないですよ・・・」

アルが照れている横でゼロが立ち上がる。

「ゼロ、どうした？」

「ちよつとな・・・」

「便所か？」

「・・・ジョン・・・お前もうちよつとデリカシーをもて・・・じやあちよつと行ってくる」

そう言つて、ゼロは茂みの奥に消えた。3人はしばらく談笑を続けた。するとすぐ後ろの茂みが、ガサガサ！と音をたてる。

「なんだ？」

ジョンは茂みをかき分け、音の正体を探す。そして、驚くべきものをみる。

「・・・ゼロ？・・・おい、ゼロ！！」

なんと、そこにはゼロが倒れていた。そして、額にまいた包帯から血が滴っている。そう、ゼロはリオウスにやられた傷から大量の出血をしていた。しかし、周りに心配をかけないよう、わざと元気に振る舞っていたのである。

「ゼロ！！しつかりしろ！！」

ジョンが呼びかけるが返事はない。

「アル！ミリア！

街に戻るぞ！ゼロは俺が運ぶ！お前らは出航の準備だ！急いでくれ！」

「わかったわ！」そう言つて、アルとミリアは出航の準備をする。

ゼロの荷物を積もうと、アルはゼロの大剣にてを伸ばした。しかし、剣は微動だにしない。

「う・・・動かない」それをみたミリアが駆け寄る。

「アルちゃん、あなたじゃこの剣を持てないわ。ハンマー使ってる私でさえようやく持ち上げることができると感じだから。アルちゃんはこの荷物を船に積んで」ミリアは小さな包みを手渡す。

「はい、分かりました。」

そうして、荷物をすべて積み、ゼロはジョンに抱えられて船に乘せられた。船は大急ぎで街にむかつていった

第9話

目を覚ますと、そこは集会所の医務室のベッドの上だった。

「俺・・・なんでここに・・・？」

ゼロは不思議に思いながら体を起こす。

すると、医務室の扉が開く。「ゼロ！目が覚めたのね！」

入ってきたのはアルだった。

「よう。俺、なんでここにいるんだ？」

ゼロがたずねる。

「ゼロが倒れて、それを見つけたジョンがここまで運んでくれたんだよ。」「そうか・・・。ジョンとミリアは？」

「ジョンとミリアさんはもう少しで来ると思うよ。今昼ご飯食べに行ってるから。」「そうか・・・。俺、何日位寝てた？」

ゼロは時間の感覚が鈍っていた。「3日だよ。」

アルが答える。

「・・・心配かけてすまなかったな・・・。」「そんなことない・・・。っていうか、私のほうこそごめんね・・・私のせいで大怪我させて・・・。」

アルは暗くなる。そこへジョンとミリアが入ってくる。

「おー！目が覚めたのかゼロ」

「全く・・・あんた心配かけすぎよ？」「悪かったよ」

「本当よ。あんたの剣、普通の剣よりかなり重くしてあるから持つのがやっとだったのよ。」

「だから悪かったって！」「ゼロって普通より剣を重くしてるの？」

アルは首を傾げる。

「ああ。普通の剣じゃ軽すぎるし、かといってハンマー使う気分にならないから親方に頼んで重くしてもらってた」「ふうん」

「だから、多分俺の剣は他の奴には使えないと思うぜ」

「そおなんだ」

「でも、お前の剣・・・」

隣でジョンが口を開く「お前の剣、大分古くなってたぞ。所々小さなヒビも入ってたしな」

「そうか？」

ゼロはそう言つて、自分の横にねかせてあつた剣を持ち上げる。

「ゼロ・・・片手で・・・」

アルは驚く「あゝ、本当だ。随分ボロボロだ。大分無茶したからなあゝ。」

ゼロの剣は限界を伝えていた。　「リオレウス倒して賞金も入った事だし、この際新しい剣でもつくつたらどうだ？」「そゝだなあゝ。親方に頼んでみるか。」

そう言つてゼロはベッドから体を起こす。

「あんた体は大丈夫なの？」

ミリアが心配するように聞く。「ん？もうなんともないぞ？」

ゼロはケロッツとしている。

「立ち直りの早い奴ね。医者に危ないって言われたとき本気で焦ったのがバカみたいだわ・・・」「そんなに危なかったのか？俺」

「危ないに決まつてるでしょ！あんなに血を流したのに輸血出来ないんだから」

そう、ゼロは人間ではないため、血液の型が人間とは根本的に違う。そのため、輸血を受けられなかったのだ。

「ふうん・・・まあ助かったからよしだ！」

そう言つてゼロは立ち上がり、医務室を後にした。

――鍛冶屋――「おっちゃん。新しい剣作れるか？なるべく強力なやつ。」

ゼロがたずねる

「強力な奴か？うん・・・俺の所で作れるやつで強いっていやあ、ブラッシュデームぐらいか？」

ブラッシュデームとは、大剣の中でもかなり高位に値する剣である。「ブラッシュデームが作れるのかよ！？それでいいつつかそれが

いい！！是非作ってくれ」

「まあ、作ってやつてもいいが・・・高いぞ？」

「いくらかかる？」「90000Zだ」

Zとはこの世界のお金である。 「そんなにかよ！？俺50

000Zしかもってねえや」

「それなら、お前の剣・・・なんて言ったかな？」

「これか？さあ？昔遺跡で拾ったもんだからな。確か・・・封龍
剣・滅一門だったかな？」「おう、それぞれ。それを強化したらか
なりのものができるんじゃないか？金も30000Z位でしてやる
ぞ」「マジで！？じゃあそれでよろしく！」

「わかった。普通よりかなり重くするんだよね？」

「おう、色も黒くしてくれよ」

ここでは、サービスとして武器が仕上がったときの色を決めさ
せてくれる。「何で黒くするの？」

隣でアルが質問する。 「刃先が血で曇っても分かりにくい
からさ。血で曇ると見た目が悪いだろ？」

「なるほど」

アルは納得する。1時間ほどたった頃、黒光りする巨大な剣が出来
上がった。

「おおー！」

ゼロは感心して剣を手取る。剣はゼロと、不思議な一体感をも
しだす。ゼロは刃先に指をなぞらせ、切れ味を試す。ゼロの指先は、
何の抵抗もなく切れた。

「こりやすげえや・・・この手に吸いつく感じ・・・ブラッシュデ
イムなんかよりずっと凄いいんじゃないか？」

「おう！俺の自信作だ！！まさかここまで凄い物ができるとは思わ
なかったぞ！」

親方は胸を張っている。

「ありがとよおっちゃん！」

「おう！お前もこれから頑張れよ！」「おう」

ゼロは返答し、アルと共に集会所に戻った。――集会所――

「お、戻ったか。」

ジョンとミリアは、昼食の乗った机に座っていた。「なんだよ。もう飯は食ったんじゃないのか？」

「バカねえ。これはあんたのぶんよ。お腹空いてるでしょ？」

「そういや、さっきから腹ペコだぜ。」

そう言っただけでゼロは席に着く。「いったきまゝす！」

ゼロは食事を頬張り始めた。

「ゼロ。剣はできたのか？」

ジョンが聞く。

「おう。凄いやつが出来た。」「みせてみるよ。」

「見るより刃先を指で撫でてみる。」

言われてジョンは刃先を撫でる。

「うお！指がきれた。すげー切れ味だな。」

「だろ？」「これが30000Zは安いな。」

ジョンは感心する。「それでも、俺の経済力からするとかなり痛い出費だけだなあ・・・」「まあいいじゃないか。そう気をおとすな。」

ジョンは落ち込むゼロを慰める。

「さて、飯も食ったし、久しぶりの我が家に帰るとするか。飯、ありがとよ」

「ああ、ちよつとしけた回復祝いだっただけだな」「まあ、俺にとつてタダ飯よりありがたいものはないからな」

ゼロは言いながら帰り支度を済ませる。

「じゃ、またな。アル、帰ろうぜ」

「うん」

アルは頷き、2人は家に帰っていった。

第10話

ゼロが新しい剣を手に入れてから、一週間が経過した。

「あんた、もうなんともないの?」

街で遭遇したミリアが心配そうに聞く。「ああ。ちよつと前までは立ちくらみがしてたけどな。もう今は完全回復だ。」

「そう。ならよかったわ。」

ミリアは安心する。「今日はジョンが見当たらねーな」

「ジョンは・・・あれよ」

「ああ。あれか・・・」

「あれってなあに?」

ミリアとゼロがあれあれ言うのについていけなくなったアルが首を傾げる。

「アルは知らなかったっけ?」

「なにを?」

アルは不思議そうにする。「じゃあ、今いろんな商業の中心にいるエリック家は知ってるか?」

「知ってる。確か凄いお金持ちなんだよね?」

「そうだ。で、ジョンはエリック家のお坊っちゃんなんだな、これが」

「そうなの!?初めて知った・・・」

アルは驚いている「ジョンはお坊っちゃんって言われるのが嫌いらしいからな。名乗るときも、ジョンとしかいわなかっただろ?」

「あ、そう言えば・・・」そう、ジョンはアルに名乗るとき、“ジョン”としか言っていない。ジョンの本名は、ジョン・エリックだった。「でも、それとジョンがいないことがどう関係してるの?」

アルの質問に対し、今度はミリアが答える。

「お金持ちのお家騒動と言えば後継ぎ問題しかないでしょう?」

ミリアは謎の決めつけ発言をする。

「あ、なるほど。」

と、アルは納得する。

「こらこら！金持ちのお家騒動のすべてが後継ぎ問題じゃねえぞ！
ゼロがツツコミをいれる。」

「で、ジョンは家を継ぎたくないらしいわ。」

「え？何ですか？」

「ジョンは小さいときからお金持ちだったから、お金欲しさに
近寄る人たちがいっぱいいたの。それで、金持ちが嫌いになったら
しいわ。」

「へえ……」

「でも、親としてはどうしても継いでほしいと思ってるのよ。ジョ
ンは一人っ子だから。」 「ふうん。難しいですねえ。」
会話の途中でゼロが口を開く。

「ミリアとアルで迎えに行つてやれよ。そろそろ助けてやらねえと
あそこの親しつこいからなあ。」

「ゼロは行かないの？」

アルが聞く。「俺は昔の事もあって、あの家立ち入り禁止だからな。」

「そおなんだ……」

「じゃあ、行つてみる？アルちゃん。」

「え？でも、ゼロは……？」

アルはゼロに視線を向ける。

「俺は門の前でまつとくから、気にしないで行つてこい。」

そう言つて、3人はエリック邸に向かった。

——エリック邸——

「……大きいね……」

アルは圧倒されていた。無理もない。そこには、城と間違えそうな
くらいの豪邸があった。 その門は、嚴重に鍵がされており、オ
マケにガードマンまでいた。 「俺はこくら辺で待つとく

からよ。お前ら行つてこい。」

ゼロは早くいくよう促す。ミリアは、ガードマンの所まで駆け寄り、一言二言何かを言つと、ガードマンが鍵を取り出し、門を開けた。「じゃあちよつと行つてくるわ。なるだけ早くもどつてくるわね。」ミリアはそう言つて、アルと共に、屋敷に入つていった。中に入ると、豪華なシャンデリア、どこまでも続く長い廊下、

数え切れないほどの部屋が・・・つまりは大豪邸がアルとミリアをまちうけていた。「ジョンって本当にお金持ちだったんだ・・・」

アルはさらに圧倒される。すると、奥の部屋からジョンがでてきた。「おゝ。よく来たな」

「ジョン・・・何？その格好」

アルは吹き出しそうになる。ジョンは貴族のような格好をしていた。「うるせえな！俺だつていやなんだ！」

ジョンは恥ずかしがる。「おお、ジョン。ご友人か？」

奥から白いヒゲをはやした男がでてきた。

「ああ。」

と、ジョンは返答する。

「これはこれは・・・どうも、ジョンの父親のマルシア・エリックです」

でてきた男はマルシア・エリック・・・ジョンの父親だった。

「いえ、こちらこそいつもお世話になってます」

と、アルが言う。

「とんでもございません。・・・と

ころで、息子のジョンに何の御用ですか？」この質問に、今度はミリアが口を開く。

「大した用じゃないんです。お宅のジョンさんを少しばかりお借りしたいと思ひまして。」

「そうでしたか。どうぞ連れて行つてやってください。

」そう言つて、今度はジョンの方を向く。

「ジョン、街での用事がすんだらまたここに帰つてきなさい。まだ話は終わつておらぬからな。」

「わかつたよ・・・」

ジョンは疲れている。
かけないようにな。」

「よし。じゃあ皆さんに迷惑を

そう言つて、マルシアは自室に戻っていった。

「ちよつと待つてくれ。支度してくるからよ。」

ジョンも自室に戻る。しばらくたって、ジョンがいつもの格好で部屋から出てきた。

「待たせたな。じゃ、行こうぜ。」

3人は屋敷を後にした。

「――エリック低前――」

門からでると、ゼロが道端に座つて待つていた。

「ゼロ、待たせたな。」

ジョンが声をかける。「いや、別にきにしねえよ。

それより、お前も大変だなあ。」「まあな。でも、ミリア達が出て助かつたぜ。もし来てなかつたらまだまだ後継げ！地獄にいたぜ」

「そりゃ、大変だな」

ゼロは笑っている。

「全く・・・他人事だと思いやがつて・・・」ジョンはあきれている。

「まあいい。そろそろ昼だから飯でも食いに行こうぜ。」

「もちろんおごりだよな？」

「しょうがねえなあ・・・この前リオレウス倒した時の賞金がまだ残つてるからおごつてやるよ。」「そう言つて、3人は宿屋の近くの店に向かった。店に着き、適当に席につく。

「はあ・・・」

ため息をついたのはジョンである。

「どうしたの？」

とアルが聞く。

「いや・・・親父はいつになったら諦めてくれるのだろうか・・・」

「継いじまえばいいじゃねえか。そしたら俺みたいに金にこまらねえぞ？」

「一時は継ぐことも真剣に考えたが・・・やっぱ、ハンター生活を止めたくないんだよ・・・」「ふうん・・・なら、わかってもらえるまで粘るしかねえな」「まあ・・・そうなんだけだよ・・・」
ジヨンはますます落ち込む。

「ま、考えてたっけしょうがないでしょ？今はあんたに出来ることをしなさい。」

励ましたのはミリアである。こういう時、女は意外に頼もしいものである。「ま、取りあえず頑張ってみるか！」

ジヨンは元気を取り戻し、昼食をもりもり食べ始める。

三人は昼食を済ませ、しばらく街をうろついたあと、各々の家へと帰っていった。

第11話

ジョンは自宅の前にたどり着き、家の中に入ってしまった。

「親父！いま帰ったぞ！」

ジョンが声をあげると、奥からジョンの父、マルシアがでてきた。

「おお！帰ってきたか。今日は何をしてたんだ？」

「別に・・・街をぶらぶらしてただけだ。」

ジョンは面倒くさそうに答える。

「そうか。もうすぐ夕食が出来るから、それまで待っていなさい。」

「はいよ。」

ジョンは返事をして、自分の部屋にはいる。

ジョンは部屋に入ると、疲れきった様子でベッドに倒れ込む。

「はあ・・・親父をどうやって説得しようか・・・」

ジョンはしばらく考えていたが、なかなか考えが浮かばなかった。

ジョンは考え疲れて、うとうとし始めた。

コンコン。

ドアを誰かがノックする。

「誰だ？」

ジョンは目を覚まし、体を起こす。

「ジョン様、お食事の用意ができました。」

ドアをノックしたのは使用人だった。

「わかった。すぐいく。」

ジョンはそう言うのと、ベッドから立ち上がり、部屋からでる。

部屋からでると、使用人が待っていた。

「ご主人様はすでに食事の席に着かれております。ジョン様も早く連れて来るようにと言われております。」

「わかったよ。全く、せっかちなな。」

ジョンは使用人に連れられて、食事へ向かった。部屋に入ると、長い机の先にマルシアが座っていた。

「おお、ジョン。やっと来たか。」

マルシアはジョンに早く座るよう促す。ジョンはそれに従って席につく。

食事の途中でマルシアが口を開く。

「ところでジョン。例の話だが・・・」

「何度も言ってるけど、俺は家を継ぐ気はないぞ。」

「なぜだ？暮らしもずっと豊かになるのだぞ？」

「俺は裕福になりたいなんて思ってたねえよ。」

「お前のためを思ってた言ってるんだぞ。」

「俺のためを思ってるんならほつといてくれ・・・」

お互い考えを変えようとせず、この話し合いがひとまずの終わりを迎えたのは夜中になってからだ。ジョンは食卓を後にし、自室へと入っていった。

「ふうっ・・・」

どさつと、ジョンはベッドに倒れ込む。

「はぁ・・・この地獄はいつまで続くことやら・・・」

ジョンがため息をもらし、途方にくれていると、カッン・カッン、と窓に石が当たる音がする。

「だれだ？こんな時間に・・・？」

ジョンは面倒くさそうに窓を開け、下を見下ろす。ガッン！！

「ぶほっ！」

ジョンの顔面に飛んできた石が直撃する。

「・・・つてえな！誰だ一体！？」

ジョンは再び下を見下ろす。そこには、ジョンの顔目掛けて石を投げようと構えているゼロがいた。

「待て待て！窓は開けたんだから石はもういらんだろ！そこにおきなさい！」

言われてゼロはしぶしぶ石をおく。

「何で悔しそうなんだよ・・・。っていうか何の用だ！？」

ゼロは何かを催促するような仕草をする。「あいつ何やって・・・」

言いかけてジョンは、はつとする。そして、自室にあるタンスの一番下を開けた。

そこには、古いロープが入っていて、ジョンはそれを手に取ると窓から投げた。ゼロはそれを確認すると、ロープをよじ登り、ジョンの部屋に侵入する。

「ふう・・・お前気付くのおせえよ。」

ゼロが笑って言う。

「悪かったよ。で？何の用だ？」

ジョンがきく。

「別に・・・ただ何となくな・・・」

ゼロは座りこみ、ジョンの部屋を見渡す。

「懐かしいな・・・。何年ぶりだ？こうしてお前の部屋に侵入すんの。」

「大体7年くらいじゃねえか？それより、お前よく覚えてたな。」

ジョンは感心している。

「そりゃあ忘れねえよ。ガキの頃、お前のガードマンに追っかけ回されたりしたんだからな。」

「ははっ・・・そんなこともあったな。」

ジョンは笑っている。

「笑いごとじゃねえよ。結局あの後朝まで追っかけられたんだぜ。」

「ああ・・・俺も親父にこつてりしばられたよ。あんなのとはつきあうなー！って大変だったんだぜ？」

ジョンは話ながら、腑に落ちない表情を見せる。

「ん？そういえば・・・ゼロがいきなり俺ん家に侵入した理由はなんだ？」

「別に・・・豪邸の窓から、金持ちのくせにしけた面してる奴が見えたから喝をいれたくなっただけだ」

「悪かったな。しけた面だよ。」ジョンは少しムツとする。

「すねんなよ・・・ところで、親父さんとの話し合いはどんな調子だ？」

「相変わらずだ。どっちも考えを譲ろうとしねえからちがあかない・・・ゼロ、お前何かいい考えねえか？」

ジョンがゼロにたずねる。

「さあな・・・俺は親父なんかいいえし、俺の考えなんか参考にならないぞ」

「いいからお前の考えを言ってみろよ」

「そうだなあ・・・親父の考えなんか無視して家出する。」

「それだと絶対に使用人やらガードマンに連れ戻されちまうじゃないか。」

「じゃあおとなしく親父の後を継ぐ。金持ちになれるんならそれもあるくねえしな。」

「お前に聞いた俺がバカだった・・・」

「その通りだ。だからいったら参考にならないってよ。俺の考えはあくまで俺の考えだ。お前の考えじゃない。こういうことは他人に頼らずに、お前自身で考えて答えを見つけなきゃいけないんだよ。どれだけ俺に聞いたって答えなんかでてこねえよ。」

「・・・すまない。」

「別に謝ることじゃねえよ。俺は俺の考えを言っただけだ。」

「ああ、ありがとよ。参考にはならなかったけど、道標にはなった。」

「そうか。ならよかった。・・・さて、俺はそろそろ帰るとすっかな。」

そう言つてゼロは立ち上がる。

「じゃ、またな。また暇になったら遊びにきてやるよ。」

ゼロは窓から飛び降り、やがて姿が見えなくなった。

「俺の考えか・・・」

ジョンはつぶやき、ベッドに横たわる。

――朝――

ジョンは、使用人がドアをノックする音で目を覚ました。昨夜、ベッドに横たわった後、ジョンはすぐに寝てしまったらしい。

ジヨンはベッドから体を起こし、部屋の外に出る。

部屋の外では使用人が待つており、朝食ができた伝えて、ジヨンを食卓へと連れていった。

扉を開けると、やはりマルシアはすでに席についていた。

「遅かったではない料理が冷めてしまうぞ。」

「悪かったな。先に食つときやよかつたじゃねえか。」

言いながらジヨンは席につく。

「まだお前との話も、ちゃんと終わってないからな。」

「もう何度も言ってるが、俺は家を継ぐきはない。もう決めたんだ。誰が何を言っても考えはかえないぜ。」

「・・・なら、親子の縁を切ると言っても変わらんのか？」

「ああ、変わらない。」

「・・・」

しばし沈黙。

「・・・分かった。かった。お前がそこまでの覚悟ならもう何も言うまい。・・・ただ、お前の家はここだ。たまには顔を出しに来なさい。」

「ああ、そうさせて貰うよ。」

「では、朝食にしようか。もうすっかり冷めてしまったがな。」

「ああ。」

2人は朝食を終え、ジヨンは自室に戻って家を出る準備をする。

「持ってきたのはこれだけか・・・」

ジヨンは荷物を持ち、部屋をでた。ジヨンはガードマンに門を開けるよう言い聞かせて、家を出る。そして、意外なものを目にする。

「ゼロ・・・」

そこにはゼロが立っていた。

「よう。遅かつたじゃねえか。」

「なっ・・・何でここに!？」

ジヨンは動揺している。

「何でってそりゃあ・・・昨日あんだだけ喝いれてやったのにけりつ

けて来なきや男じゃねえだろ？」

「男じゃねえってお前・・・こんな朝早くにご苦労なこった。って
いうか家をでたの何時だよ？」「は？家？帰ってねえよ。昨日はこ
こに野宿した。」

「野宿う！？馬鹿かお前は！？」

ジヨンは驚きを隠せない。

「お前俺が出てこなかったらどうするつもりだったんだよ！？」

「出てこなかったらあって・・・出てきたじゃねえか。」

「まあ、そうだけだよ・・・。」

「ならそれでいいじゃねえか。」

「ってお前アルは？」

「ああ、アルには家をあけるって言うてある。」

「そうか。ならよかった。」「何だよ、俺が黙って家をあけると思
ってんのかよ？」

「まるつきりそうみえるな。」

「お前もう少し齒に絹をきせるよ・・・」

ゼロはあきれている。

「・・・まあいいや。今から集会所に行くぞ。」

「は？何で？」

「アルとミリアが厨房を借りてご馳走作って待ってんだよ」

「アルとミリアが？」

「まだわかんねえか？お前の出発式だよ！」

「まったくのお見通しかよ・・・分かった、行こうぜ」

ジヨンはあきれた様子で、ゼロはルンルン気分で集会所に向かった。

第12話

ジョンとゼロは集会所に向かって歩いていった。

「なあ、ゼロ」

ジョンが口を開く。

「ん？何だ？」

「料理を作ってるのはアルとミリアなんだよな？」

「それがどうした？」

「いや、それは本当に食えるのかなあと思ってよ」

「・・・俺は、ミリア達の料理は旨いって必死に自分に言い聞かせてここまで来た・・・」

「必死にかよ！？嘘でも旨いと言ってくれ！」

「食ったことねえんだから分かる訳ねえだろ！俺達に出来るのは、自分に言い聞かせることぐらいだ！」

「マジかよ・・・。出来ることが少ねえなあ、おい。」

ゼロとジョンはトボトボ歩く。

少し歩いて、ジョンは異変に気付く。

「なんか・・・街が静か過ぎねえか？」

そう、いつもならば商業で賑わっている時間にも関わらず、街には人の影がなかった。

「なんだ？お前知らないのかよ？」

「何をだよ？」

ジョンが聞き返す。

「昨日の夜に警報がでて、みんな家の中に避難したんだぜ。」

「警報・・・？」

ジョンは首を傾げる。

「ああ。何かが襲ってくるとか来ないとか。確か・・・クシャ・・・何とか言ってたような。」

それを聞いて、ジョンの顔が青ざめる。

「まさか・・・クシャルダオラか・・・？」

「あゝ、そんな感じだったな。」

「嘘だろ・・・。」

「ヤバいのか？」

「ヤバいなんてもんじゃねえぞ！！お前何も知らんのか！？」

「知らん」

ゼロのそっけない返事にジヨンは呆れる。

「はあ・・・クシャルダオラって言うのは・・・古龍の名前だ」

「古龍！？マジかよ！？」

「ああ、残念ながら大マジだ。古龍って言うぐらいだから、目撃例が少なく詳細はわからん。だが情報によると、そいつが来ると風を操り周辺の天気を一変するらしい。そして、甲殻は漆黒の鋼に包まれていることから鋼龍とも言われているらしい・・・」

「そりゃあヤバいな・・・」

「ああ・・・ヤバすぎる・・・」

ゼロとジヨンは暗い雰囲気をもとって街を歩く。すると。

「お兄ちゃん！！」

後ろから声がする。

ゼロとジヨンは同時に声がする方に顔を向ける。

「あ！マリーにリリスじゃねえか！」

声を上げたのはゼロであった。

そこには、12歳位の女の子が2人並んでいた。

「ゼロ兄ちゃん！何してるの？」

ゼロのまわりをぐるぐるまわってはしゃぐ活発な子がマリーで、ゼロの足にぴったりくつき、何も言わずに、白いウサギのぬいぐるみをもって微笑んでいるおとなしい子がリリスである。

「俺のことより、お前らちゃんと家の中にいないとダメだろ？危ないぞ。」

「ゼロ・・・その子達は？」

ジヨンは質問する。

「ああ、言つてなかつたつけ？この子達は昔、両親を亡くしてな。道端に2人で暮らしてたのを俺が拾つたんだ。」

しばらくは俺の家で面倒みてただけで、俺もハンターの仕事があったから、家を空けることが多くなつてな。寂しい思いをさせるといけないから、レイイズ教会に預かつてもらつて、俺はちよくちよく遊びに行つてたんだ。」

「なるほど。前々から不信教者のお前が教会にやたらと寄付するからおかしいとは思つていたが・・・こういうことか。」

「まあ、そゆこと。」

「お兄ちゃん・・・今からどこに行くの・・・？」

リリスが聞く。

「ああ、兄ちゃんは今から集会所に行つてくる。」

「ええ。遊ぼーよ。」

「今は遊んでやれないんだよ。また今度な。」

「じゃあ指きりしよ！」

マリーは小指をピコピコしている。

『ゆーびきーりげーんまんうそついたら針千本のーます！』

ゼロはマリーと指きりを済ませ立ち上がろうとしたが、リリスが服を引っ張つていたため、立ち上がることができなかった。

ゼロがリリスを見ると、リリスも黙って小指を突き出していた。

「リリスも指きりするか？」

ゼロが聞くと、リリスは黙ってコクリと頷く。

ゼロはリリスとの指きりも済ませ、マリーとリリスは教会へと帰つて行つた。

「ふう・・・あいつらも大きくなつたなあ。」

「なかなか面倒見がいいなあ・・・お兄ちゃんは・・・ぷぷっ！」

「うるせえ。わらうな。」

ボクッ！

「ぐば！」

ゼロのグーパンチがジョンの顔面にめり込む。

「なっ・・・殴ることねえだろ!？」

「悪いな。手を握りしめて腕を伸ばしたらそこにお前の顔面があっただけだ。」

「・・・ったく・・・。それにしても、リリースは随分大人しい子だな。」

「いや、あれでもよく喋るようになったよ。前までは親を亡くしたショックで口もきけなかったし、俺と教会のシスターとマリー以外の人間には近付きもしなかったからな。」

「へえ・・・大変だったんだなあ・・・。」

「・・・つて感傷に浸ってる場合じゃねえぞ。俺らも覚悟を決めねえと・・・。」

「・・・行くか・・・。」

「・・・ああ・・・。」

2人は集会所に向かって歩き出した。

――集会所――

2人が集会所の扉を空けると、いつも賑わっているはずの集会所は静まり返っていた。

「あ! ジョンだ! おつかえり〜。」

厨房からアルが出てくる。

「よう。ただいま。」

「もう料理はできてるよ〜」

「くっ・・・いよいよか!」

「何かいった・・・?」

「いや、何も・・・アルさん、包丁をこちらに向けしないで頂けますでしょうか?」

アルは不適な笑みを浮かべ、包丁をもとに戻す。

「2人共、あまりの美味しさに腰抜かさないように覚悟しときなさいよ・・・。」

アルはフッフ・・・と笑う。

「覚悟ならすませてきたよ・・・。」

ゼロは落胆したように言う。

「またしても空耳かなあ？」

アルは指をぼきぼきならす。

「ア・・・アルさん、どうしてそんなに指をぼきぼき鳴らしているの？」

「いや、少々落胆の声が聞こえたような気がするね・・・」

「そりゃあ空耳ですよ。」

「ならいいけどね・・・」

またしてもアルはフッフ・・・と笑っている。

「あら？ゼロとジョンじゃない。来たんなら来たって言いなさいよ。」

奥からミリアが顔を出す。

「いまそっちに料理持っていくから待ってなさい。あ、アルちゃん手伝って。」

「はい」

アルはパタパタと厨房に戻る。

ゼロとジョンは適当に座る。

「はい、ご馳走あがりい」

アルはニコニコして料理を運んできた。

「おおー！」

ゼロとジョンは同時に声をあげる。

運ばれてきた料理はゼロ達の想像よりはるかによく出来ていた。

「ほら、早く食べないと冷めちゃうよ！」

アルにせかされ、ゼロとジョンは料理を口に運ぶ。

「ん！んまい！」

「旨いな。うちのコックより旨いぞ。」

ゼロとジョンは料理をガツガツ食べる。

すると奥からミリアがやってきた。

「その料理、実は・・・」

「うわああー！言わないでくれえ！」

「ジョン・・・まだ何も言ってないわよ。・・・だからその料理・・・」

「えっ！・・・ちよっ・・・マジでえっ！？」

「2人してうるさい！！」

「ドスっ！バキっ！」

「ぎゃあ！」

「がふ！」

ミリアの怒りの鉄拳がゼロとジョンの顔面を潰す。

「まったく・・・人の話は最後まで聞く！」

「いや、聞いちまったらそれと同時に俺の人生の幕を閉じることになりそうだったから・・・」

「ゼロ・・・あんたいい度胸ねえ。私をからかうなんて百年はやいわよ」

「ミリアさん！目がすわってますって！怒りを鎮めたまえ」

「はあ・・・まあいいわ。で、この料理・・・実はほとんどアルちゃんを作ったのよ。」

「マジで！？よく作れたなあ。」

「アルちゃんは私がちよつと教えただけですぐに作っちゃったわよ。」

「へえ。すごいな。」

「ところで・・・、今日は他のハンターは誰も来てないのか？」
ジョンが質問する。

「他のハンターは古龍が来たからってみんな来ないわよ。腰抜けばかりなんだから・・・」

「そうか。」

「なあ、ミリア。その古龍がいまどこにいるのか分かってるのか？」
「密林にいるらしいわ。やっぱりいくの？ゼロ。」

「当たり前だろ。一応様子だけでも見ておかないとな。」

「そう言っと思った。・・・クエストの手続きならもうすませてるわ。」

「本当か！？気がきくなあ！」

ゼロはそう言っていると、あっという間に料理をたいらげた。

「ふう〜。アル、料理旨かったぜ！」

「本当？よかったあ。」

アルは安堵の表情を見せる。

「よし・・・いっちょ行つてきますか！」

ゼロがそう言っていると、4人はそれぞれの武器を手にし、船に乗り込む。
船は4人をのせ、密林に向かって動きだした。

第13話

4人が密林に到着した頃、日は落ちて夜になっていた。

密林は異様な静けさに包まれていた。

「・・・なんか・・・やけに静かだな」

「そうね...それに、普段はうじゃうじゃいるランポスが見当たらない」

ジョンとミリアが見事になにもない密林を見て驚く中、ゼロだけが腑におちない顔をしていた。

「ゼロ・・・どうしたの？」

アルが尋ねる。

「・・・様子がおかしいぞ・・・」

「そりゃ古龍がいるからだろ？」

「違う・・・生き物の気配すら感じない。」

「なおのこと古龍のせいだろ。モンスターが姿をけしたせいだ。」

「・・・」

ゼロは黙り込む。

「とりあえず古龍を見つけに行くわよ。話はそれから。」

「そうだな。なら手分けして・・・って言いたいところだが、ここは固まって動いた方が得策だろう。」

「そうね。」

アルとミリアが頷く。

4人は密林の奥へと歩きだした。

しばらく歩いていたら、ゼロは一向に口をひらかずに、何かを探るように辺りを見回していた。

「どうしたゼロ？さっきからおちつかねえな。何してるんだ？」

「見て分らん奴には言っても分かん。」

「そんなこと言わずに教えるよ」

「気配を探してる。」

「気配？」

「・・・お前が言うように、古龍のせいで密林が静かなのは分かってる。だが妙だ。いくら何でも静かすぎる。」

「静かすぎる・・・？」

「ああ。まるで・・・ここには生物が一匹もないみてえだ。」

「気のせいだろ。いきなり密林から生き物がなくなったから動揺してるだけじゃないか？」

「だと良いけどな・・・」

「ゼロ・・・そんなに気になるの？」

アルが問いかける。

「いや、気になるって言うか・・・なんかこう・・・胸騒ぎがすんだよ。」

「ゼロ、アルちゃんを怯えさせるような事いったら駄目じゃない。」

「そんなつもりで言ったんじゃないよ・・・アルももう心配すんな。俺はただ落ちつかねえだけだ。」

「気分悪いなら早めに言ってね？」

「分かった分かった。」

4人はさらに奥へと進んでいった。

しかし、奥に進めば進ほど、ゼロの言った言葉が現実味を帯びてくる。

他の生き物は当然ながら、どれだけ探してもクシャルダオラは見つからなかった。

「いねえなあ・・・さっきゼロが言ったことは本当だったのか？」

「それはどうか分からないけど・・・これだけ探していないって言うのはおかしいわね・・・」「ゼロ・・・やっぱり気配は感じないの？」

「ああ、全くな。」

「なんだよ。使えないな。」

「こらこら！俺を探知機か何かと一緒にすんな！」

話している途中、ゼロがあるものに気付く。

「隠れる！」

3人を引つ張り、岩陰に隠れる。

「どうしたんだよゼロ!?」

「・・・あれ・・・」

ゼロが指差す方向に見たこともない姿の龍が寝そべっていた。

その姿に全員が息をのむ。

「・・・あれがクシャルダオラか？」

「こうして見ると、ますます古龍って感じね・・・」

アルは言葉もなく、ただ呆然としている。そんな中、やはりゼロは妙な顔をしていた。

「どうしたゼロ？まさかまだ妙だとか言うのか？」

「・・・ああ、様子がおかしい・・・。」

「そんなこと言っただけで実際にいるじゃねえか。」

「それはそうだけだよ。・・・けど、あれは・・・いるんだけどいねえんだ。」

「何わけのわからねえこといってんだ？」

「・・・ちよつと様子を見てくる。お前らはそこにいろ。」

「っておいゼロ！」

ゼロはジョンの呼びかけを無視してスタスタ歩いて行く。そして、ゼロは龍のもとへとたどり着く。

「・・・やっぱりな・・・」

そう言うときゼロは、3人にこっちに来いと合図する。

「・・・なんだよ・・・これ・・・？」

3人は言葉をなくしていた。

「・・・抜け殻・・・？」

そう。今まで龍と思っていた物の正体は龍の抜け殻だった。

赤く錆びたその抜け殻は、本体の体の大きさと、甲殻が金属であることを物語っている。

「じゃあさっきゼロが言っただことは・・・」

「ああ。多分クシャルダオラはここにはいない。恐らく別の・・・」

ゼロは言いかけてハッとする。

「おい！走れ！船に戻るぞ！」

「どうしたんだよ急に！？」

3人は疑問に思いながらもゼロについて行く。

船までたどり着き、4人は急いで船に乗り込み、船は出航する。

「ゼロ！いきなりどうしたんだよ！？」

ジョンが聞くと、ゼロは真剣な表情をする。

「・・・街が危ない。」

この一言で3人に戦慄が走る。

「ま・・・まさか？」

「そのまさかだ。現実とは言えないが、可能性は十分過ぎる・・・」

「くそっ！なんてこった！」

ジョンは拳を握りしめ悔しがる。

「ミリア！もつとスピードは出ないのか？」

「これで目一杯よ！今日は風が少ないからあまりスピードは出ないわ！」

「くそっ！頼む！間に合ってくれ・・・」

焦る4人をあざ笑うように、風は一向に強くならなかった。

「・・・ユニウス・・・」

4人がやつとの思いで街に着いたときには、街は無惨な姿になっていた。

「間に合わなかった・・・」

アルは呆然とする。

「くそっ！」

ゼロは走り出した。

「ちよつとゼロ！どこにいくのよ！？」

「バカやろう！生存者の救出に決まってるんだろ！お前らも早く行け！」

言われて3人はバラバラに行動して救出活動に向かった。

ゼロは走りまわっている内に、鍛冶屋の前にきていた。

「おっちゃん！大丈夫か！？おっちゃん！！」

ゼロが叫んでいると、瓦礫の下から親方が出てきた。

「ゼ・・・ゼロ・・・」

親方は足を引きずって歩いてくる。

「おっちゃん！よかった無事で・・・」

「俺は無事だ・・・だが、街の南ブロックは・・・ひどいらしい・・・」

「南ブロック・・・」

「言われてゼロはぞっとする。南ブロックには、マリー達のいるレイズ教会があるのだ。」

「おっちゃん、一人で大丈夫か!？」

「ああ、大丈夫だ・・・。いつてきな。」

「すまん！」

ゼロは教会に向かって走り出した。

「くそっ！マリー、リリス・・・無事でいてくれ！」

ゼロは息をするのを忘れてしまいそうな勢いで走った。

ゼロが南ブロックにたどり着くと、レイズ教会が跡形もなく崩れているのが見えた。

最悪の事態がゼロの頭をよぎる。ゼロが教会の近くに走りよると、教会の前にリリスが座り込んでいた。

腕に抱かれた白いうさぎの人形は血に染まり、真っ赤になっていた。

「リリス！大丈夫か!？」

ゼロが呼びかけると、リリスはゼロのもとへと走りよる。

リリスはその小さい体を震わせていた。

「怖かったか？兄ちゃんがついててやるからもう大丈夫だ。それより・・・マリーはどうした？」

ゼロが尋ねると、リリスは黙って指を指す。

リリスが指を差した方をみると、マリーが血まみれで倒れていた。

「マリー・・・!」

ゼロはマリーのもとに駆け寄り、マリーの体を抱き上げる。

「マリー、しっかりしろっ・・・！」

ゼロが必死に呼びかけるとマリーはゆっくりと目を開く。

「あ・・・ゼロ兄ちゃん・・・どうしたの？そんなにあわてて・・・」

「

「マリー！よかった、気がついたか。」

マリーはゼロの腕の中から顔をだし、周りを見渡す。

「そっだ・・・わたし・・・瓦礫の下敷きになって・・・。」

マリーは全てを思いだし、悲しそうな瞳でゼロをみる。

「ゼロ兄ちゃん・・・わたし・・・死んじゃうのかな...？」

ゼロは胸を抉られるような思いがした。

リリスには大した怪我はない。切り傷が目立つくらいだ。

だが、マリーはすでに手遅れだった。大量に出血していて、病院に行こうと思っても、クシャルダオラの襲撃により病院はすべて破壊されていた。

「ばっ・・・ばかだな！死ぬわけないだろ！」

ゼロは不安にさせないように、必死にごまかす。「・・・ゼロ兄ちゃん・・・わたし、海に行きたい。」

「海？」

「うん...今まで海に行ったことなかったから・・・」

「わかった。兄ちゃんが連れてってやる。」

ゼロはそう言うと、マリーを抱えて、海岸へと向かった。海岸につくと、穏やかな海の上に朝日がのぼっていた。

「マリー、着いたぞ。」

ゼロはマリーを抱えたまま、砂浜に腰掛ける。

「朝日・・・キレイだね...」

マリーは、すでに言葉を口にすることもままならないほど衰弱していた。「ああ、きれいだな・・・リリス、いつまで突っ立ってるんだ？隣に座れよ。」

後ろで黙って立っているリリスに座るように促す。リリスはゼロの隣に座る。

「・・・きれい・・・」

一言もらして、朝日を見つめる。
すると、マリーが口を開く。

「・・・わたしね・・・お父さんとお母さんが死んじゃってから、ずっと寂しかったけど、ゼロ兄ちゃんに拾われてからは、すつごく幸せだったよ。」「いきなり何言うんだよ？」

ゼロが尋ねるが、マリーは無視して話を続ける。「・・・わたしが悲しいときはいつもそばにいてくれたし、わたしが風邪をひいたときは寝ないで看病してくれた。・・・ゼロ兄ちゃんにイタズラされたりとか、逆にイタズラもいっぱいしたけど、それが全部楽しかった。ゼロ兄ちゃんのイタズラ好きな所とか、優しい所が大好きだったよ。本当のお兄ちゃんみたいだった。」

「バカやろう。初めから俺はお前の兄ちゃんだ。血はつながってないけど、心はつながってただろ？」

「うん・・・。あのね・・・今までありがとう・・・お兄・・・ちゃん・・・」それが、マリーの最期の言葉だった。

マリーは、ゆっくりと、眠るように目を閉じた。「マリー？おい、起きろよ。・・・頼むから目を開けてくれよ・・・。昨日指きりしたばかりじゃねえか・・・。」

ゼロの声はかすれていた。その目は、今まで決して見せることのなかった涙でいっぱいだった。リリスはゼロの横で泣きじゃくっている。

「・・・今度遊ぶんだろ？こんな所で寝たら風邪ひくぞ？・・・マリー・・・」

ゼロは冷たくなったマリーの体を、ぎゅっと抱きしめる。

「マリー・・・俺は兄ちゃんらしかったか？少しでもお前を幸せにすることができたか？・・・今まで・・・あまりかまってやれなくてごめんな・・・。そして・・・こんな馬鹿でしょうがない俺のそばにいてくれて・・・ありがとな・・・。」マリーは、2人に見守られ、朝日がのぼるなか、永遠の眠りについた。

その顔には、安らかな笑みを浮かべていた・・・。

第14話

ゼロとリリスは海に見える丘の上で穴を掘っていた。
マリーの墓である。

「こんなもんか・・・」

ゼロは穴を掘るてをとめた。

その穴の中にマリーの体をそつと寝かせる。

「・・・おやすみ・・・」

ゼロは一言口にして、マリーの体に土をかぶせた。

「・・・お兄ちゃん。お花・・・」

リリスは摘んできた花をゼロに手渡す。

「ありがとな。・・・でも、この花はお前が添えてやれ。そのほうがマリーもよろこぶぞ。」

そう言つてゼロは、リリスに花を返した。

「・・・」

リリスは無言でマリーの墓標の下に花を添える。

「・・・さて、街に戻るぞ。街の人達の手伝いをしなきゃな。」

「・・・うん・・・」

リリスは頷き、ゼロとリリスは街へと向かった。

街に戻ると、生き残った人々が食材を持ち寄り、その食材で作った料理を配っていた。

「ゼロ！こつちこつち！」

声のする方を見ると、アルとミリアが瓦礫に腰掛けていた。

「あれ？ゼロ、その子は？」

アルはリリスを指差して首を傾げる。

「ああ。お前にはまだ言つてなかったな。この子は昔俺が拾った子だ。ミリアは知ってるよな？」

「前に何度か会ったことあるわ。・・・今日はマリーちゃんと一緒にじゃないの？」

「・・・」

ゼロは黙り込む。

ミリアはゼロの様子を見て全てを悟った。

「・・・ごめんなさい。嫌なこと聞いちゃったわね・・・」

「・・・いや、もう大丈夫だ。・・・それよりお前らはどうだった？家族は無事だったか？」

「ええ。両親とも無事だったわ。ジョンの方も無事だったみたい。」

「そうか。よかった・・・。」

ゼロは安堵の表情をみせる。

「・・・さ、暗い話しはここまでにして、ご飯食べましょ。いまリスちゃん分も貰ってくるわ。」

そう言ってミリアは、配給所まで駆けていった。

「リリース、ほら。」

ゼロは配られたご飯をリリースに手渡す。

「・・・お兄ちゃんは？」

「兄ちゃん後で食うよ。お前腹減ってるだろ？」

「・・・」

リリースは黙って頷く。

「素直でよろしい。」

ゼロは笑ってリリースの頭をなでた。

「・・・いただきます・・・」

リリースはご飯を食べ始める。

「ゼロ、本当に食べないの？」

アルが聞く。

「だから俺はミリアが持ってきた分を食べるって。お前もへんな気いつかわねえで早く食べろ。」

「分かった」

そう言っで、アルもご飯を食べ始めた。

・・・

しばらくして、ゼロ達の周りがざわつき始める。

「・・・まあただりいことになりそうだ・・・」
と、ゼロはため息をつく。

すると。

ヒュッ！と、石がゼロ目掛けて飛んできた。

ゼロは無言で石をキャッチし、石が飛んできた方に目を向ける。
そこには人だかりが出来ていた。

「何だよ。俺に何か用か？別に悪いことした覚えはねえぞ。」

ゼロがそう言くと、人だかりの中から声があがる。

「うるせえ！街をこんなにしやがって！」

「おいおい。寝ぼけてんのか？街を壊したのは俺じゃねえだろ。」

「あの満月の夜のようにお前が災いを運んできたんだ！この疫病神が！」

この一言でざわつきは一層激しさを増す。

ゼロは反論する気配を見せずに、ただ街の人達をみつめていた。

「お前が災いを運んできたせいで俺ん家はメチャクチャだ！どうしてくれる！それに、その小さい奴！」

街の人達はリリースを指差す。

今まで無反応だったゼロがピクリと反応する。

「お前も呪われているんだろう！？だからお前のいた教会は・・・」
メキッ！

その人物は、全てを口にする事ができなかった。

「・・・くだらねえこと言ってんのはこの口か？」

「うぐ・・・う・・・」

ゼロにあごを鷲掴みにされ、その男は言葉を発することが出来ない。
「・・・このまま殺すか？」

“殺す”・・・

このありふれた言葉は男に、まるで生まれて初めて聞いた言葉のように突き刺さる。

「不幸を何でも人のせいにするんじゃないよ。・・・確かに俺は大量の人間を殺した。だからお前らが俺のことをなんと罵ろうと、そ

れはお前らの勝手だ。だが、リリスは関係ねえだろ。この子に何の罪がある？何の恨みがある？リリスだって被害者なんだ。てめえ一人が不幸みてえな言い方してんじゃねえよ。」

ゼロは男を人ごみの中に放り投げる。

「・・・いつまでも見てんじゃねえ！さっさと失せやがれゲスども！」

ゼロが叫ぶと、人々はおびえたようにその場を立ち去った。

「・・・ごめんなリリス。兄ちゃんのせいで嫌な思いさせちまって・・・」

「・・・そんなことない・・・大丈夫・・・」

リリスは首を横に振る。

「そうか・・・ありがとな。」

ゼロはリリスの頭をそつと撫でる。

すると、ミリアが配給所からもどってきた。

「お待たせ」。はい、リリスちゃんの分・・・つてすでに食べてるじゃない。」

「あ、俺の分を先に食わせたからそれ俺にくれ。」

「・・・三回まわってワンといいなさい。」

ミリアは悪戯な笑みを浮かべる。

「ひどい！いくらなんでもそりやねえだろ・・・。俺もっ腹ペコなんだよ・・・。早くくれよ・・・。」

ゼロは恨めしそうな目でミリアを見つめる。

「しょうがないわねえ。ありがたくいただきますい。」

「はいはい。」

ゼロはミリアからご飯を取り上げ、瓦礫に腰掛ける。

「いただきます。」

ゼロはガツガツと食べ始めた。

「全く・・・行儀悪いんだから・・・それより、さっき人が集まっていたみたいだけど何かあったの？」

「別に何もねえよ。なあアル？」

「え・・・あ、うん」

「ふうん・・・？・・・ま、ならいいわ。さっき配給所の帰りにいつもの宿をとっておいたから、今日はそこに泊まるといいわ。って言ってももう朝なんだけどね。」

「えっ？宿代はらってくれたのか？」

「ええ。アルちゃんのとリリスちゃんの分だけね。あんたは貸しよ。」

「男女差別だ！」

「うるさいわね！そう言うことは借りたお金をちゃんと返してからいいなさい。」

「・・・鬼」

ゼロは聞こえないようにぼそりと呟く。

「なんですって・・・？」

聞こえてた。

「いや、何でもありません・・・」

「よろしい。じゃ、私はもう帰るわ。3人もすっかり疲れをぬいておきなさいよ。」

そう言っミリアは去って行った。

「・・・今寝たら生活のリズムが逆転しちゃうね」

「ハンターやつてりゃそんなこともある。とりあえず宿屋に行こうぜ。俺眠い。」

ゼロ達は宿屋に向かった。

宿屋にたどり着き、ゼロ達はそれぞれの部屋に入った。

リリスはまだアルに慣れていないため、ゼロと同室に入る。

「あゝ、つかれた！」

ゼロはベッドに倒れ込む。

「・・・」

リリスは無言で、ゼロの横にちょこんと座る。

その表情は暗く、どこか悲しそうである。

「どうした？そんなに暗い顔して。」

「・・・マリーちゃんが・・・死んじゃった・・・」

口を開くと同時に、涙が溢れ出す。

「・・・ずっとそのことを考えてたのか？」

「・・・こんなに早く死んじゃうなんて・・・マリーちゃん、悔しいだろうなって考えたら・・・悲しくなる・・・」

「そうか。・・・リリスは優しい子だな。」

「・・・お兄ちゃんは悲しくないの？」

リリスが寂しそうにたずねる。

「・・・兄ちゃんだって悲しいさ。大事な妹をなくしたんだから・・・でもな、兄ちゃんやリリスがずっと悲しんでたら、マリーはもっと悲しくなると思うぞ。・・・確かにマリーを亡くしたことは悲しいけど、だからっていつまでも悲しんでちゃ駄目だ。マリーの分まで精一杯生きることが、マリーのためにもなると思うぞ。」

「・・・」

リリスは何も言わず、難しそうな表情でゼロを見つめる。

「・・・まだリリスにはむずかしいか。でも、いつか分かる時があるから安心しろ。」

ゼロはリリスの頭をクシャクシャと撫でる。

「ほら、もう寝ろ。大分つかれてるだろ？」

ゼロがそう言うのと、リリスはゼロのベッドに潜り込んできた。

「こらこら。ベッドはもう一個あるだろ。お前のベッドはあっち。」

「・・・1人・・・やだ・・・」

「・・・何だ？恐いのか？」

「・・・」

リリスはコックリ頷く。無理もない。さつき襲われたばかりだ。不安になって当然である。

「・・・しょうがねえなあ・・・分かったよ。兄ちゃんがついてやるから・・・」

ゼロはそう言って、リリスの頭をそつと撫でる。

そのうち、リリスはウトウトし始める。

「おやすみ・・・」

そう言っていると、リリスはすうっと目をとじた。

「・・・」

ゼロは無言でリリスの寝顔を見つめる。

「・・・知らない間に大きくなるもんだなあ・・・」

ゼロは感心したようにリリスの顔をまじまじと見つめる。

「・・・いつか、俺のそばにいるってだけでつらい思いさせちまうかもなあ。・・・ごめんな・・・。」

ゼロはベッドから体を起こし、何かを書いた・・・――

――リリスが目を覚ますとゼロの姿はなかった。

「お兄ちゃん・・・？」

リリスはゼロがいないことに気付き、部屋の中をきよきよと見渡す。すると、机の上の手紙に気付いた。

「・・・」

リリスは何も言わず手紙を開く。

「・・・!!」

リリスは手紙の内容を見て驚く。

あわてて隣部屋にいるアルを起こしに行く。

ドンドン！

リリスは乱暴にドアをノックする。

ガチャ。

「どちらさま・・・ってリリスちゃん。どうしたの？」

「・・・!!」

リリスはあわてた様子で手紙を見せる。

「ん？なにになに？リリスへ・・・」

“リリスへ

勝手にいなくなっごめんな。この手紙を見たら、アル達にも見せてやってくれ。

実は、街の連中の救助をしてる時、嫌なことを聞いちまってよ。情報によると、クシャルダオラは俺達と入れ違いでまた密林に戻ったらしい。確かな情報じゃないが行ってくるわ。

黙っていなくなったことについては謝る。けど、お前らを危険にさらしたくなかった。ハンターやつてる奴のセリフじゃねえけど、さすがに今回ばかりはやばすぎる。もし帰って来たら、責めはその時聞いてやる。

それじゃあ、行ってきます・・・”

「こ・・・これって!?!」

アルは驚愕する。

「と・・・取りあえずみんなに知らせなきゃ! リリスちゃんもついてくる!?!」

「・・・うん」

「よし、じゃあいそご!」

アルとリリスは急いで街に飛び出した。

しばらく街の中を走り回って、ジョンとミリアを発見する。

2人は夕食を済ませ、帰ろうというところだった。

「ジョン! ミリアさん!」

「ん?なんだ、アル? そんなにあわてて。」

「これ見て!?!」

アルは2人に手紙を見せる。

「な・・・なにこれ!?!」

「・・・あの馬鹿!?!」

「ど・・・どうしよう!?!」

「とにかく集会所に行くぞ。まだ船が残ってるかも知れん。」

4人は集会所に向かった。

集会所にたどり着くと、4人は駆け込んだ。

「おい! あまりの船あるか!?!」

ジョンは受付の女性に尋ねる。

「そ、それが・・・古龍の襲来により大半が破損してしまって、船

が残ってはいたのですが、ゼロ様が出立される時に全て破壊してしまいました・・・」

「くそっ！」

「他に何か方法はないの？」

「・・・悔しいが、この街に船着き場はここしかない。俺達に出来ることはまつことだけだ。」

「・・・お兄ちゃん・・・」

リリスは心配そうな表情を浮かべる。

その場にいた全員が、それぞれ何も出来ないことに苛立ちを感じていた。・・・

――ゼロが密林にたどり着いたとき、日はすっかり沈んでいた。密林には、以前と同じように生き物の姿はなかった。

しかし、台風のように強い風雨が容赦なく降り続いている。

「・・・ち、やっぱり居やがるか・・・」

ゼロは面倒臭そうに歩き出した。しばらく奥に進むと、ゼロは異変に気付く。

「・・・ここら辺だけ風の流れがめっちゃくちやだ・・・近い・・・！」

ゼロが視線を奥に向けると、“それ”はいた。

どんな飛竜とも異なる姿、漆黒の鋼の鎧を纏う巨体、風を起こし嵐を呼ぶ力。

そう、クシャルダオラである。

「出やがったな・・・！」

クシャルダオラはゼロを確認すると、より一層強い風を巻き起こし、臨戦態勢に入る。

「へっ・・・慌てんじゃねえよ。むしろはらわた煮えくり返ってんのは俺なんだよ・・・」

ゼロはスラリと剣を構える。

「・・・てめえだけはゆるさねえ！！！」

ゼロは言葉と同時に地面を蹴り、走り出した。

ギョオオオ！！

クシャルダオラはゼロに向けて風の玉を撃ち出した。

「な！？」

ゼロはいきなりの攻撃に面食らった。

「ちいっ！」

ゼロは風の玉を回避するため、走る方向を急激に変える。

ブゴオオオウ！

風の玉はゼロの真横を通過する。

「ぐ！」

ゼロは直撃は避けたが、風圧によって吹き飛ばされる。

「くそっ！」

なんとか着地したゼロは再びクシャルダオラに突撃する。

すると、クシャルダオラはまたしても風の玉を撃ち出す態勢に入る。

「二度もくらうかよ！」

ゼロは撃たれる前に旋回し、クシャルダオラまで一気に接近する。

「よし、もう少し！・・・って、うおあ！」

ゼロはギリギリまで近付いたが、クシャルダオラの纏う風にまたしても吹き飛ばされた。

「・・・ちくしょう！近付くことすら出来ねえ。・・・だが、あいっだって生き物だ。何か突破口があるはずだ。・・・よく観察しろ、俺。」

クシャルダオラの攻撃をよけながら、ゼロはあることに気付く。

「あいつ、頭のまわりに風があまりない。クビが長い分、カバーしきれてないのか？・・・いずれにせよチャンス！」

ゼロはまたもやクシャルダオラに突撃する。

「三度目の正直だ！くらいやがれ！！」

ゼロは思いきり剣を振り下ろす。

バキィーン！

ゼロの剣がクシャルダオラの頭部を直撃する。

しかし、大したダメージは与えられなかった。

「くっ！硬え！」

攻撃したはずのゼロの手が痺れていた。

ギョオオオ！！

クシャルダオラは頭部を攻撃された事に激怒する。

ブアッ！ヴァサツヴァサツ。

クシャルダオラは飛び上がり、空中からの攻撃を仕掛けてきた。

「ち！これじゃ手が出せねえ・・・」

ゼロが言いかけると、クシャルダオラは今までと違って、空気を体に溜め始めた。

「なんだ？なにがくる？」

ゼロはなにがくるか分からずに身構える。

ギョオオオオ！！

クシャルダオラは風を吐き出した。

風の玉ではなく、風そのものを。

ヒュオオオオ！！

「ぐあっ！」

ゼロは物凄い勢いで飛ばされ、木に叩きつけられた。

「がはっ！」

ゼロは気を失い、その場に崩れ落ちる。

クシャルダオラは勝利を確信したように、ゆっくりとゼロに近付いていった・・・

第15話

辺りは激しい風と雨に包まれている。

その中で、蠢く巨大な龍、クシャルダオラは気絶したゼロにとどめをさそうと忍び寄る。

一步、また一步ゆつくりと、しかし確実にその距離を縮めていく。

そして、ついにゼロの前にたどり着く。

「・・・」

ゼロの意識は不思議な空間をさまよっていた。

そこは何もない空間。

光もなければ影もない。

完全なる無の空間だった。

そこに、どこからともなく声がする。

“・・・汝は、傷つき、苦しみながらなぜ戦いをやめぬ？”

「・・・守りたい・・・」

“守る？”

「・・・幼いころ、俺は命を略奪することで生き長らえた。今も何かを傷つけ、奪うことで今の俺がここにいる・・・」

俺は自分の力が憎かった。力をもっていることが怖かった、苦しかった・・・。

けど、それ以上に憎かった。何かを傷つけ、壊すことしか出来なかったこの力が、憎くてたまらなかった・・・。

けど、それは間違いだった。

力は、力を使う俺次第で、守ることも、壊すこともできる。

俺はこの力で守れるものがあると気付いた。

そして、生まれて初めて守りたいものもできたとき、俺は守ると決めた。

なのに、俺は守ると決めたのに・・・大切なものを守れなかった・・・。

「ただ俺は、まだ守り続けたい。まだ守たいものがある。」

“ 名声も、賞賛も得られないのか？ ”

「・・・俺のこの手は、剣（きりぎりす）を持つことしか出来ない。それに、たくさん

さんの血で汚れちまってる。

・・・だが、それでいい。

名声？賞賛？そんなものいらねえよ。
こんな俺でも、守れるものがあるなら・・・たとえそれが、この命と引き換えになったとしても、悔いはない・・・」

”・・・そこまでの覚悟か・・・”

「ああ・・・」

” ならば目覚めよ。今ここにおつては守れるものも守れぬ。今一度言う。目覚めよ・・・！ ”・・・

・・・――

・・・ドクン・・・

ゼロの体に衝撃が走る。その時、クシャルダオラは、ゼロにとどめをさそうと、その牙をむき出しにし、ゼロに向かって走らせた。

・・・しかし、その牙がゼロを捉えることはなかった。

クシャルダオラの牙はむなしく空を切る。

ゼロは、紙一重でクシャルダオラの牙をかわした。

「・・・」

ゼロは無言で立ち尽くす。

クシャルダオラはゼロの姿を確認すると、猛スピードでゼロに向かって突進する。

しかし、ゼロは逃げようとはせず、ゆらりと剣を構える。

クシャルダオラは敵意をむき出しにしてその牙をゼロに向ける。

ザキーン！！

・・・グオオオオッ！

悲鳴をあげたのはクシャルダオラであった。

ゼロは向かって来たクシャルダオラの額に剣をめり込ませ、力で退けた。

すると、クシャルダオラを纏っていた風が消えた。
どうやら角が折れると、風を上手く制御出来なくなるらしい。
ギョオオオ！！

クシャルダオラは怒りに満ちた声をあげると、ゼロに向かって風の
玉を吐き出した。

ゼロは避けようとはせず、剣を自分の前にかざす。
ドスンと、ゼロを風の玉が直撃する。

それと同時に、その衝撃で周りの土が舞い上がる。
クシャルダオラは砂煙を凝視する。

すると、ジャリ・・・と足音が聞こえる。

ゼロは無傷のまま、砂煙の中から出てきた。

「・・・」

ゼロは無言でクシャルダオラと正対する。

・・・グルルウ・・・

クシャルダオラは怯えていた。

恐らく、生まれて初めてであろう恐怖という感情に戸惑っていた。

それを見たゼロは、先ほどとは逆に、ゆっくりとクシャルダオラを
追い詰める。

クシャルダオラは一步後退し、その場から逃げようと翼を広げた。

しかし、ゼロはそれを見逃さない。

ゼロは目にも止まらぬスピードで距離を詰めた。

ズバン！と、派手な音をたててクシャルダオラの片翼を斬りつける。

その一撃で、クシャルダオラの翼は使いものにならなくなった。

グウウウ・・・

クシャルダオラは悲痛な声をあげ、ゼロを睨みつける。

「・・・はっ・・・ははっ・・・あははははっ！！」

ゼロは笑い出した。

何がおかしいのかわからない。

けれど、笑わずにはいられない。

ゼロは笑ったまま、クシャルダオラを斬りつける。

・・・それは、惨劇の始まりだった。

ゼロはただひたすらに斬り・突き・叩き・抉った。

クシャルダオラは逃げることはおるか、わずかな抵抗すら許されない。

何の抵抗も出来ない相手を徹底的に壊すという、凄まじく、恐ろしい暴力。

ゼロは何のためらいもなく、その暴力の全てをクシャルダオラにぶつけた。

この惨劇は二時間にわたり続いた。

――二時間後、クシャルダオラはすでに虫の息だ。

もはや鳴くことすら出来ない。

ゼロは、クシャルダオラの返り血を頭から浴びて、その顔は心底楽しそうな笑みを浮かべている。

ゼロはクシャルダオラに歩み寄る。

剣を持ちかえ、構えた。

「・・・死ね・・・」

ザク・・・

ゼロはクシャルダオラの頭に剣を突き立てる。

・・・

クシャルダオラは、悲鳴をあげることなく絶命した。

「・・・はは・・・ひやははははっ！！」

ゼロは、ひたすらに笑う。

が、突然苦しみだした。

「ぐ・・・が・・・」

頭を抱え、膝をつく。

しばらくそうしていたが、ゼロは正気を取り戻した。

「俺は・・・一体どうしちゃったんだ・・・？」

ズキリと、ゼロの頭を頭痛が襲う。

「ぐっ・・・。くそっ・・・頭が・・・。」

ゼロは剣を引き抜き、クシャルダオラの前に腰を下ろす。

「・・・わりいな。俺は少し正気を無くしてたみたいだ。ただ、お前を殺すことしか考えられなくなってた。・・・俺にこんなこと言う資格はないが・・・お前の死は無駄にはしない・・・」

ゼロはそう言っ立ち上がり、クシャルダオラの素材をはぎ取り始めた。

その顔は、先ほどの狂気したものとはまったく違っていた。いつもの表情である。

ゼロは、爪や角など、使えそうなものは無駄なく剥ぎ取った。

ひとしきり剥ぎ終えると、ゼロはクシャルダオラに向かって手を合わせた。

「・・・じゃあな・・・」

ゼロはそう言っ、その場を後にする。

ゼロは船着き場にたどり着き、船にのる。

「・・・そういえば・・・あの声はなんだったんだ・・・？」

そんな事を考えつつ、ゼロは密林を後にし、街へと戻って行った・・・

第16話

ゼロが街に戻ると、ジョンとアルとミリア、リリスが待っていた。
・・・いや、待ちかまえていた。

「ゼロ~~~~!!」

ジョンはこっちに走って来る。

「あ、ジョン。ただい・・・」

ゼロは全てを口にする事はできなかった。

ジョンは走ってきた勢いで、ゼロに見事な跳び蹴りをお見舞いする。
「ごふう!？」

ジョンの放った跳び蹴りは見事にゼロをとらえ、ゼロはゴロゴロと地面を転がる。

「・・・」

ゼロとジョンは無言で立ち上がり、服についた砂を払う。

3秒間のインターバル。せーの・・・

「何しやがる!？」

「心配かけやがって!」

2人はまったくの同時に声をあげる。

「まったく・・・、見損なっただぜ!俺らに黙って行っちゃうなんてよ!」

ジョンは怒っている。

他の3人も同じである。

「えっ・・・と、そのお・・・すまん」

「すまんじゃねえだろ!いったいどれだけ心配したと思ってんだ!」
ジョンは本気で怒っている。

「・・・」

ゼロは無言で縮こまる。

「ゼロ・・・今回のことは流石の私も許せないんだからね!」
アルは珍しく、プンプンと怒っている。

「・・・」

ミリアに至っては、無言でゼロを睨みつけている。

リリスは怒ると言うより、心配そうにゼロを見つめている。

「全く・・・まあいい。お前が無事に帰って来たからこのぐらいに
しといてやる。・・・ただし！次こんな真似したらただじゃおかね
えからな！」

「へーい。肝に命じておきまあす。」

「で・・・クシャルダオラはどうなったの？」

ミリアが聞く。

「ああ。なんか討伐したみたいだ。」

ゼロは他人事のように答える。

「したみたいだって・・・どういう事？」

「よくわかんねえんだ。なんか・・・俺が俺じゃなくなる感じがし
て、気付いたら殺してた・・・」

ピクリと、アルが少し反応する。

「本当によくわかんないわね・・・あんた頭おかしくなったんじゃない？」

「・・・ミリアさん・・・あなたの言葉は心にささります・・・」

「あらそう？ならこれに懲りて二度とこんな事しないことね」

「あう・・・わかりました・・・」

ゼロは少し落ち込んで、船から大きな袋を取り出した。

袋を動かすと、ガチャガチャと音がする

「なんだそれ？」

ジョンが首を傾げる。

「これか？これはクシャルダオラから剥ぎ取った素材だ。今からこ
れもっておっちゃんのとこに行ってくる」

「おっちゃんのとこって、鍛冶屋か？」

「おう。こいつを加工してもらおうと思ってよ。」

「なら俺らも付き合うぜ。」

「ん？そうか？ならちやっちゃんで行こうぜ。・・・よっと・・・」

ゼロは右手で荷物、左手でリリスを抱えて歩きだす。
それにミリアとジョンはついて行く。

「おい、アル。ぼーっとしてるとおいてくぞ。」

ゼロが振りかえると、アルは無感情な冷たい目でゼロを見つめていた。

「どうした？アル・・・？」

ゼロが声をかけると、アルの目はいつもの目に戻る。

「あ・・・ごめん。ぼーっとしてた。」

そう言つて、ゼロのもとに歩み寄る

「・・・」

ゼロは腑に落ちない表情でアルを見つめる。

「ん？私の顔に何かついてる？」

「・・・いや。別に何でもない・・・」

ゼロはそう言つて鍛冶屋に向かった。

「――」

「おーい！おつちゃーん！」

ゼロは鍛冶屋に着くと、いつものように大声で親方を呼ぶ。

「おう！どうした？」

親方は、足に包帯を巻いた姿で出てくる。

「おつちゃん。怪我大丈夫か？」

「馬鹿やろう！こんなのへでもねえよ。・・・ゼロ、そんなこと言いにきたんじゃねえんだろ？」

「ばれたか。」

ゼロは抱えていた袋を親方に差し出す。

「・・・これは？」

「クシャルダオラの素材だ。これで防具作ってくれねえか？」

そう言つてゼロは袋を開ける。

「こ・・・こいつあ・・・」

その袋の中には、肉体から離れてなお、変わらぬ威厳を放つクシャルダオラの素材が入っていた。

「・・・分かった。これで作れんこともない。・・・いや、おそらく最高のものが作れるだろう。だが・・・」
「だが？」

「・・・俺あこんな大層なものを扱うのは初めてだ。どんな物になるかは出来上がるまで俺にも分からん・・・。それでいいなら作ってやるが？」

「もちろん。むしろ俺はおっちゃんを信じてるから頼んだんだぜ。よろしく頼む。」

「分かった。仕上がりは明日の朝になるが、それでいいか？」

「了解。じゃあ明日また取りにくる。」

ゼロは、それじゃ！と手を振って、鍛冶屋を後にした。

――

「ゼロ、お前これからどうするつもりだ？」

街を歩きながらジョンが口を開く。

「ん？まあ、取りあえず家に帰るよ。そんで寝る」

「馬鹿！お前の話じゃねえよ！」

ジョンはゼロの頭をポカンと殴る。

「つてえな。なんなんだ一体？」

「リリスはどうするんだってきいてるんだよ！」

「さあ？」

「さあ？つてお前・・・」

「それは俺が決める事じゃない。リリス自身が決める事だ。」

ゼロはそう言つて、さっきから肩車しているリリスに目を向ける。

「リリスはこれからどうしたい？」

「・・・」

リリスは考えこむ。

「いつとくけど俺達の意見なんか気にしないでいいぞ。純粹にお前がどうしたいのか、どうするべきか決めてくれ。」

「・・・お兄ちゃんの家に行く・・・」

「そっか。・・・そのかわり、兄ちゃんが出るときは留守

番するんだぞ。」

「・・・分かった」

「ちよつとまって！」

ジョンはまたゼロの頭をポカンと殴る。

「いつて！一体なんだってんだおめえは！？」

「今のは勢いだ。つてそんなことより、お前この前、リリスを教会に預けたのは仕事でかまってやれないからつて自分で言つてたじゃねえか。それなのにお前の家に住まわせていいのかよ？」

「そりゃあ、あまりかまってやれないかもしれないけど、出来るだけ家にいる時間を長くするよ。それにリリスだつてもう赤ん坊じゃねえし、それに・・・」

そこまで言つて口ごもる。

「それに？」

「・・・その・・・あんなことがあつたばかりじゃねえか。なのにまたどつかに一人預けるなんてひどいことできるかよ。」

「・・・まあ、その通りだけどよ。」

「それに、リリスが自分で決めたことだからな。俺らがとかく言うことじゃねえよ。」

「分かった。そこまで考えてるんならもう何もいわねえよ。」

「つて勝手に決まつてしまつたけど、アルもそれで構わねえか？」

ゼロは2・3歩後ろを歩いていたアルにふり返る。

アルは何か考えている様子で、ゼロの呼びかけに反応しない。

「おい。聞こえてますかあ？」

「え？あ、うん。・・・で、何？」

「で、何？じゃねえよ。リリスがうちに来るつて話。」

「あ、私は構わないよ。もともと私の家じゃないし」

「・・・」

ゼロはアルの顔をじつと見つめる。

「な、何？」

「いや、さっきから様子がおかしいなつて思つてよ。」

「そう？私はいつも通りだよ？」

「・・・どつか悪いならすぐ言えよ？何か悩んでるんなら相談くらい乗るぞ？」

「だ、大丈夫だって！そんなに心配しないで。」

「ふゝん。ならいいけど。」

ぺしぺし。

「ん？」

ゼロはリリースに頭を叩かれて、リリースを見上げる。

「ん？どうした？」

「・・・前・・・」

「ん？」

ゼロが前を見た瞬間、ドンと通行人と肩がぶつかる。

「何しやがんだこら？」

ぶつかった相手はやたらと柄の悪そうな人である。

「どうしたんすか？」

後ろから仲間らしき人達がぞろぞろでてくる。

「こいつがいきなりぶつかってきてよ。こりゃあ肩がいつちまってるなあ。」

「こらテメエ！兄貴の肩がいかれちまったってよ！どうすんだこらあ！」

「カルシウムとつとけ」

ゼロはさらつと言いついて流してスタスタ歩いていく。

「待てやこら。とことんコケにしてくれるじゃねえか。俺らがだれだか知らんのかい？ああ？」

「・・・」

ゼロはしばらく考えていたが、いきなり顔を上げてニコニコしだした。

「おゝ！久しぶりゝ！いやゝ大きくなったなあ！で、名前なんだっけ？」

「じゃかしいわ！いつとくけど初対面や初対面！」

「じゃあお前らはなんなんだよ？」

ゼロは少しむっとする。

「金貸し屋のバートグループの者や」

「知らん。じゃあな。」

ゼロはまたスタスタ歩去ろうとする。

「まて！本気で知らんのか！？」

「だからしらねえっていつてるだろ！もう用はねえんだからさっさと帰らせろ！」

「んだとテメエ！」

リーダー的な男がゼロに詰め寄る。

「お？」

男はゼロのすぐ後ろにいたミリアに気付いた。

「あ・・・あんたは！？」

男はいきなり慌てだす。

「お・・・おい！ずかるぞ！」

リーダーがそう言つて、男達はその場から逃げ出してしまった。

「かわいい奴等だな」

ゼロは逃げて行く男達を指差して、笑いながらミリアを見る。

「知らないわよ。あんな奴ら。」

ミリアは呆れている。

「昔、今と似たような状況に遭遇したことあったなあ。」

ゼロはニヤニヤしている。

「いやあ、かわいい後輩だなあ！」

「あんた・・・その口縛つてやるからじっとしなさい！」

「うは！怖え怖え！アル、逃げるぞ！」

「え？・・・きゃっ！」

ゼロはアルの手を引いて走りだした。

「まちなさ〜い！」

「待てねえよ！また明日なあ〜！お前らも気をつけて帰れよ〜！」

「こらあ〜！」

ゼロ達は怒るミリアを背に、街から出ていった。

――

ゼロ達が家にたどり着いたとき、日は沈みかけていた。

「うおー！久々の我が家！相変わらずの汚さだ！」

「本当・・・久しぶりに帰ってみると散らかってるねえ」

「とりあえず腹が減ったなあ。アル、なんか作ってくれよ。」

「しょうがないわね。作って来るけど、文句言わないでよ？」

「大丈夫。お前の料理の上手さはこの前証明されたから。」

「じゃあちよつと待っててね」

アルはフフッと笑って台所へ消えていった。

「さて・・・」

ゼロはリリスに目を向ける。

「・・・？」

リリスは何？といったげな目でゼロを見つめる。

「お前が人と接するのが苦手なのはよく知ってる。だからすぐには言わないけど、ここで暮らすならアルとは仲良くしてくれよ？」

「・・・分かった・・・」

リリスはこっくり頷く。

「よし。いい子だ」

ゼロはリリスの頭を撫でる。

「・・・けど・・・」

「ん？どうした？」

「・・・やっぱり何でもない・・・」

「？」

ゼロは腑におちない表情をする。

そこへ

「ご飯できたよ」

アルが料理を運んできた。

「お！早いな。」

「簡単なものだからね。っていつかこの家食材がないから簡単なものしかつくれないよ。」

「それを言わんでくれ。貧乏だからしょうがないだろ。」

「ま、ここまで来ればレアものよね。」

「レアとか言うなあ。」

「はいはい。ご飯冷めちゃうから早く食べよ。」

「いったきまあす。」

3人は夕食をすませ、就寝した。

リリスはベッド、アルがソファー、ゼロは床に寝ている。

ゼロはなかなか眠れないでいた。

クシャルダオラを殺した時の感覚が頭に染み着いて、眠りの妨げになっていた。

「……くそっ！眠れねえ。……あの感覚のせいで……あの感覚……」

“殺せ……ころせコロセ殺せころせコロセ殺せ殺せころせコロセころせコロセ殺せころせコロセ殺せ……”

「~~~~~っ!!」

ゼロはたまらず床から飛び起きる。

「はあ、はあ。……くそっ！」

「ゼロ？どうかした？」

アルがソファーから身を起こす。

「いや、何でもない……」

「顔色わるいよ？汗もかいてるし。」

「いや、本当に何でもねえんだ。起こして悪かった。寝てくれ。」

「……自分じゃない人の声が聞こえたりした？」

「なっ!？」

ゼロが驚いてアルをみると、アルは無感情な瞳でゼロを見ついていた。

「冗談だよ。お休み。」

アルは嘲笑うように言って、また横になった。

「……」

ゼロは何か考えて、横になった。

――

「う……ん」

ゼロは、ずっとまどろんでいたが、はっと目を覚ます。
まだ、夜は明けていない。

「……アルがいねえな……」

アルが寝ていたソファ―にアルがない事に気づき、まわりをキョロキョロ見渡す。

が、アルの姿は見当たらない。

「……便所にでも行ったな……」

そう言つて、ゼロはまた横になる。
ガサッ。

「ん？何だこの紙？」

ゼロの枕元に、一枚の手紙がおいてあった。

「んぐと……」

「話があるの。目が覚めたら近くの森にきて。」

「話ってなんだ？……面倒くせえな。」

ゼロが立ち上がろうとすると頭の中で声がした。

“ 剣をもて ”

「！？……なんだ？」

“ 剣をもて ”

「？……剣をもて？なぜ？」

“ 剣をもて ”

「分かったよ……持てばいいんだろ、持てば。」

ゼロはしぶしぶ剣を背中にさげ、近くの森に向かった。

森に入り、ゼロはなかなかアルを見つけれないでいた。

「どこにいるんだ？」

ゼロはさらに奥に進んだ。

しばらく進むと、人影が目に入った。

「やっと見つけた。おい！」

アルに歩みよると、アルの姿がはつきりと見えてきた。

手には、見たこともない剣を持って、体中に鎧を纏っていた。それはどう見ても、戦闘体制だった。

「アル、そんな格好でなにしてんだ？」

ゼロが聞くと、アルはゼロに剣を向けて、無感情な瞳で

「・・・あなたを殺す」

と言った・・・

第17話（前書き）

今回はちょっと長いです。
（^| ^ ;）辛抱強く読んでやってくだ
さい。

第17話

夜の暗い森の中、アルとゼロは対峙していた。

ゼロはアルの言った一言がよく理解出来ずにいた。

「えゝゝゝ。っと、アルさん？今のシャレの笑いどころ教えてくれますか？」

「あら？今のシャレでも何でもないよ。」

アルは冷たい目でゼロを睨みつける。

「言葉の通り、あなたを殺す」

アルの目は嘘をついていない。

「ゝゝゝ。お前が本気なのは分かった。けど理由が分からん理由？」

アルはクスリ、と笑いをもらす。

「当然でしょう？私はあなたを殺すためにあなたに近付いたんだから。」

「ゝゝゝ。どういうことだ？」

「ゝゝゝ。今から17年前、とある土地でとある危険分子がこの世に産み落とされた。」

アルは昔を思い出すような遠い目をして語り始めた。

「それは、生まれると同時に檻に入れられ、研究対象として扱われた。ゝゝゝ。そして、研究が進につれてその危険性が明らかになったの。ゝゝゝ。そしてある日、事故は起こった。研究対象が檻を脱走し、沢山の研究員を殺した。自分の両親も一緒にゝゝゝ。」

それは、どう聞いてもゼロのことだった。

「ゝゝゝ。その危険分子はね、脳のブレーキが外れると、とんでもないことになるってことが研究の結果分かったの。推測だけど、おそらくとてつもない破壊衝動にかられるはずゝゝゝ。心当たり、あるでしょ？」

「ゝゝゝ。」

ない、とは言えない。

ゼロはクシャルダオラを倒したとき、確かに破壊衝動にかられていた。

「それが発狂したとき、人間を襲う前に殺すために私はここに来た。・・・ここからは少し恨み言を言ってもいいかな？・・・人間は、それが発狂したときの対処法を考えた。それは、同じ年頃の子供に殺人術を教えて、刺激しないようにそばで観測させ、発狂したら殺す、っていう簡単な対処法をね・・・」

この状況からいって、その子供とはアルのことだろう。

「その子はね・・・年齢が同じと言うだけで選ばれて、今までの長い年月、一時も休ませてもらえず殺人術を教えこまれたの。感情は邪魔になるって教えられて、他人と接触することなんてなかった」
アルは淡々と語る

「まわりで楽しそうに遊んでいる子供を、ただ羨ましそうに見つめることしかできなかった。・・・でね、その子は思ったの。何で自分だけつらい思いをしなくちゃいけないんだ？って」

「・・・」

ゼロは黙って耳傾ける。

「それで、その子は簡単なことに気付いたの。」

言って、アルは剣を構える。

「あなたを殺せば自由になるってね・・・！」

「・・・質の悪い冗談やめてくれよ。」

「勝手に否定して、ずっと惚けてても構わないよ。私の仕事が楽になるだけだから。」

アルはあざ笑うような声で言った。

「・・・つまり、最初からお前は俺を殺すために俺に近付いたってことか？」

「・・・」

「密林で倒れてたのも俺に近付くためだったのか？」

「・・・」

返事はない。

アルは、どこに剣を突き立てればすぐに仕留められるのか、それだけが関心事のようにゼロを見つめている。

「・・・なんだよ、それ。それじゃあ今まで泣いたり笑ったりしてたの全部・・・！」

ゼロはその先を口にする事ができなかった。

そうしてしまえば、その瞬間にすべての出来事がうそになってしまいそう。

「・・・は・・・は・・・は」

ゼロは自分でもよく分からないような、悲しい笑い声を出していた。

アルは、もう語る言葉はないというような表情で、ゼロに向かって駆け出した。

「くそ・・・！」

考える暇はない。

ゼロは前に向かって走りだした。

背を向ければ、背後から心臓を一突きにされる気がしたから。

「・・・！」

アルは予想外なゼロの動きに戸惑いながらも、剣をふる。

剣は、ゼロの顔面スレスレの所を通過する。

ゼロはそのまま走り去ろうとしたが、できなかった。

アルは、すぐに体をゼロに向けて、ゼロの足を斬りつける。

「ぐあ・・・！」

ゼロはそのまま、数メートル転がる。

アルはチツ！と舌打ちしてゼロを睨む。

「痛いでしょう？傷は大した事はないわ。でもこれは、あなたの都合かすっただけでも激痛を伴うの。あなたにだけ有効な毒が付着してあるもの。厳密に言えばあなたの血に有効ないわば、アンチゼロ武器ってとこかな」

アルは、少し呆れた素振りを見せる。

「剣、抜かないの？そのためにもつてきたんでしょ？」

アルはつまらなそうに言う。

「そんなこと出来る訳ねえだろ・・・！」

「あなた馬鹿？」

アルは冷たい瞳でゼロを見つめる。

そのまま、ゼロに駆け寄り、喉もとへ剣を走らせる。

「・・・っ！」

ザクツと音をたてて、剣はゼロに突き刺さる。

「が・・・あ・・・」

ゼロは剣が刺さる瞬間に身をかわし、剣はゼロの右肩に刺さった。

ドクドクと、ゼロの右肩から鮮血が溢れだす。

「・・・その出血でもショック死しないなんて。やっぱり人間とは違うつてことかな」

アルは剣を引き抜く。

「あぐっ・・・」

痛がるゼロをよそに、アルはまた剣を構える。

次こそ外すまいと、慎重に狙いをつける。

「・・・発狂はしないの？」

突然、アルそんなことを聞いてきた。

そのとたん、ゼロの頭に声が響いた。

“ 剣をとれ ” と、何度も響く。

「だか・・・ら、できねえっ・・・て言ってるだろ・・・」

そうしてしまえば、確実に取り返しのつかないことをするとゼロは理解していた。

ゾワリと空気が燃えるような殺気が立ち込める。

「・・・つきあってられないわ。いいからもう死んで・・・」

アルは剣を握る手に力を込める。

ドス！

「きゃっ！」

ゼロはアルを蹴り飛ばし、森の中へ逃げ出した。

「逃げてどうするの？」

後ろからアルの声がする。

「あなたには戦うか殺されるかの道しかない。けど、戦わないなら死ぬしか無いでしょう?」

アルはゆっくりゼロを追いかける。

「・・・」

ゼロは何も考えずにただ走る。

が、それもすぐ限界が来た。

出血のせいでもう手足が動かない。

ゼロは、そこにあつた木に背中をあずけ、座りこんだ。

「お・・・月・・・」

見上げれば、そこには綺麗な月が浮かんでいた。

「はっ・・・気づかなかつたな。今夜は月が綺麗だ・・・」

ゼロは無理やりに笑顔を作った。

「・・・あゝあ。馬鹿馬鹿しい。」

ゼロは、なにかもが馬鹿げて思った。

アルの涙や笑顔にだまされてた自分や、信じきっていたアルは存在自体が嘘みたいだったことや、短かつたけど、今までの思い出や・

・

「・・・ちく、しょう」

悔しくて地面を引っ掻く。

騙されていた。

「・・・それなのに」

確かに騙されていた。

「それでも、俺はアルを憎めない・・・!」

ゼロは、そばに落ちていた石を弾く。

「憎めるはずねえじゃねえか。あいつにとって嘘でも、俺は楽しかったんだから・・・。それだけは、何があつたって本当じゃねえか。」

そう、まだ出会って間もないが、ゼロは笑ってそばにいる人がいるだけで幸せだった。

ジャリっという足音が聞こえてくる。

アルがやってくる。

“殺せ”

頭の中でそんな声が聞こえた。

“死にたくないなら殺せ”

「うるせえ・・・！」

ガツンと、頭が割れそうな勢いで、ゼロは頭を木に叩きつけた。

――剣、抜かないの？

アルはそんなことを言っていた。

ゼロは背中 of 剣をゆっくりと抜く。

「・・・できるかよ・・・」

ゼロは剣を放り投げた。

剣は、ドスンと重い音をたてて、地面に刺さる。

「アルには剣を向けない。・・・絶対に、向けない。」

剣を放り投げたのは、もっていると死ぬより嫌なことをしてしまい
そうだったからだ。

「・・・」

無言でアルがやってきた。

感情の無い瞳も、不吉な凶器も、さっきとまったく変わっていない。

アルは、座りこんだゼロの前で止まった。

アルはなぜかすぐにトドメをさそうとしんない。

ただ、ゼロをぼんやり眺めていた。

「・・・一つ、聞くけど。」

剣の切っ先がゼロの胸に向けられる。

「どうして剣を抜かなかったの？どうしてただの一度も私と戦おう
としなかったの？」

「・・・どうしたもこうしたも、そんなこと考えられなかっただけ
だ。アルにそんな酷いことできないだろ？」

「酷いって・・・あなた本当に馬鹿？私はあなたを殺すのよ？私は
あなたの知ってるアルじゃない。すべて嘘だったって、あれだけ言

ってまだ分からないの・・・！？」

アルの声には苛立ちがある。

すごく怒ったような声。

冷静な顔をして、手足が震えるくらいに怒っていた。

「・・・分かつてる。ずっと俺を騙してきた。俺の知ってるアルなんて言う人間は、初めからいなかったって、分かつてる。」

「分かつてるならどうして・・・！」

「いいんだ。お前が嘘でも俺には関係ない。お前と過ごした時間は、お前にとってはどうでもいい無駄な時間だったかもしれないけど、俺にとっては大切だった。・・・だからいいんだ。たとえお前にとって嘘でも、俺がそれに救われてたのは本当だ。今お前を憎めば、それさえもなくなっちゃう。お前にとってそれが嘘だったなら、せめてあとの半分、半分の俺ぐらいは最後までそれを本当のものにしてもいいだろう？」

「・・・そんなことのために命を投げ出すと言うの？あなたの望みはその程度のもののなの？」

「・・・ははっ。やっぱ小せえかな？」

「・・・私、色んな人間を見てきたけど、あなたみたいな馬鹿な人は初めてみた。」

アルは剣の切っ先をゼロの心臓の位置にあてた。

「・・・」

しばしの沈黙。

何故か、アルはトドメをさそうとしない。

アルは虚ろな瞳でゼロを見つめる。

それはよく見ると、感情が無いのではなく、自分をだませないから感情を殺しているような瞳だった。

「・・・殺さねえのか？」

「・・・私も鬼じゃないわ。最後に言い残したことはない？ここで聞いてあげる。」

「・・・言い残したことはねえんだけど、一つ聞いてもいいか？」

「ええ、手短にね」

「・・・すぐに済む。ただ、どうしてもそんなに泣きそうな顔してるのかな？って思ってたよ。」

「な！？私は泣いてなんか、いない」

断言するアルの顔は冷酷そのものだった。

「？本当だ・・・でも、なんとなく、泣きそうな顔に、見えるぞ。」

「それはあなたの勘違いよ。私にある感情は、自由になりたいってことだけなんだから。それ以外の感情なんてない」

感情の無い目をしたまま、アルはそう言った。

ゼロは、なんとなくそれが嘘だとわかってしまった。

「・・・ひでえな。最後の最後まで、俺に嘘をつくのか・・・」

「・・・」

返事はない。

アルは凍りついたように動かない。

「・・・それを言うならあなただって嘘ついてる。ここで殺されることが望みなんて思ってた無いでしょう。」

「・・・そんなの当たり前だろ。・・・本音を言えば生きていたいけど、俺のせいでお前が苦しんでいるなら、俺の命なんてやすいものだ。・・・お前達とバカな話して、笑ったり泣いたりする時間が、夢みたいに楽しかった。・・・それが俺の望みなんだと思う。もう叶わねえけど、俺は・・・ずっとあの生活が続いて欲しかった。」

「まで分からないの？あれはただの芝居だったって言ったのに。」

「ああ・・・それでも、本当に楽しかった」

「な、んて・・・愚か・・・」

剣の切っ先が胸に食い込む。

あと一歩前にでれば、ゼロの心臓を貫けるだろう。

しかし、最後の一步がなかなか始まらない。

アルは剣を構えたまま、ゼロを凝視する。

ぎり・・・と、アルは唇を噛む。

「・・・ああ、そうか。俺に見られてちゃやりづらいよな。」

そういつて、ゼロは目を閉じる。

「・・・・・・・・っ」

息を呑む音がする。

「どうして・・・・・・・・どうして、そんな・・・」

ゼロの胸に突きつけられた剣が震えている。

「どうして・・・・・・・・どうして私を恨まないでいられるの・・・？」

アルの声は剣と一緒に震えている。

「私はあなたを殺そうとしてるのよ・・・・・・・・！？今まで騙して、裏切つて、こうして残酷に追い詰めてるのに、何でそんなに穏やかな顔してるの！？」

ジャリ・・・・と、切っ先はそのまま、アルはゼロに向かって踏み込んだ。

「答えて・・・・・・・・私はあなたを殺すの。あなたの意志なんて関係なく、ただ一方的に殺そうとしてるのよ・・・・・・・・！！・・・ならせめて、あなたは私を憎まないと報われないじゃない・・・・・・・・！」

火がついたような激しきで、アルは問い詰める。

「それとも、あなたは本当に馬鹿なの・・・・・・・・！？私はあなたを化物として処理するの！なのになんで・・・」

「・・・・・・・・だつて、それはお前のせいじゃねえだろ」

「・・・・・・・・っ！」

ズッ・・・・と、剣の切っ先がゼロ胸に食い込む。

そのまま、皮膚を引き裂き、つうつと血がたれる。

「っ・・・・・・・・あ、ぐ・・・・・・・・う」

傷自体はそう深くはないが、ゼロには激痛を与えていた。

「ぐあ・・・・・・・・あ、あ」

ゼロは痛みあまり、手がガクガクと痙攣する。

「痛いでしょう。本来なら楽に死なせてあげられるのに、こうしてわざわざあなたを苦しめてるの・・・今まであなたに付き合わされた分、こうでもしないと割があわないから」

アルはたどたどしい声でそう言うと、いつそう深く剣を食い込ませ

た。

「ぐ．．．！あああ．．．！」

「ほら、私が憎いでしょ、ゼロ？だから．．．早く恨んで．．．！私に裏切られたって、信用しなければよかったって言うて！．．．そうじゃないと、あなたを殺せないじゃない．．．！」

アルは震える声で、そんなことを言った。

「．．．そ、れは、むちゃ、な注文、だ。やっぱ、り、お、前を恨め、ない」

ゼロは途切れ途切れに言葉を口にする。

「や．．．やめて．．．！どうして最後までそんなことを言うの．．．！悪いのは私で、被害者はあなたなのに．．．！」

「．．．被害、者なの、は、アルもおな、じだろ。お前は悪、くねえ、よ。それより、ごめん、な。こ、んな役、目をお前に押し、付けちまって．．．」

「やめ．．．て．．．」

小さく呟いて、剣の切っ先が離れる。

「だめ．．．私はあなたを見逃すなんてできない．．．！」

ぎり．．．と歯をcanで、ピタリとゼロの心臓をねらう。

「．．．．．」

アルは息を呑む。

ゼロは、目を閉じていても、アルの剣を握る手に力が込められていく気配がわかった。

「ありがとな。たとえ嘘でも、お前がそばにいてくれてよかった．．

．」

ゼロは、最後に一番伝えなかった言葉を遺した。

ドン．．．と剣は刺さった。

「う．．．う．．．」

声が聞こえる。

「うあ．．．あ、ああ、あ」

ポロポロと、子供が泣くような声が聞こえる。

トスツ・・・と軽い音。

それは木に刺さっていた剣が地面に落ちる音だった。

ひつく、ひつくと、苦しそうな声がする。

ゼロはそれに気付いて、ゆっくりと目を開けた。

そこには、いつものアルがいた。

アルの手には何もない。

ゼロの心臓を貫ぬくはずだった剣は、ゼロのわき腹をすり抜けていた。

「う・・・うあ、ああっ・・・」

アルはただ泣いていた。

何が悲しいのか、血を吐き出すような苦しさで泣いていた。

「・・・アル？」

ゼロが声をかける。

「・・・ずる、い・・・ゼロ、は・・・ずるい・・・」

ひつく、と喉をしやくり上げて、子供のようにアルは声をあげる。

「・・・あんな・・・あんな事言うなんて・・・ずるい、よ・・・」

アルは一向に泣き止まない。

「できない・・・最後にありがとう、なんて・・・そんな幸せな人を死なせるなんて、ヤダ・・・」

アルは両手で両目を覆って、ただボロボロと泣き崩れる。

「・・・いや、あの・・・そんなに泣かれると・・・困る・・・

その、どうしていいか解らん。」

「うつ・・・うつ、うわああああん・・・！」

言葉が悪かったのか、アルはいつそう大きな声で泣き始めた。

「ちょ・・・あの・・・その」

あたふたするゼロに、ドン、と衝撃がはしる。

アルがゼロの胸に顔をうずめて泣き出した。

「・・・ごめん、なさい・・・」

ごめんなさいと、何度も何度も、そんな言葉を繰り返す。

「・・・謝らなくてもいいって・・・泣きたいだけ泣けばいい・・・

「ゼロは満足に動く左手で、アルの頭を撫でる。」

「森に入ってから、一時間位たったか・・・やっとアルを見つけた・・・。今ここにいるのはいつものアルだ・・・。」

そう言つて、ゼロはアルに笑いかける。

「あ・・・。」

アルは張り詰めた何かが切れたような声ん出して、ようやく泣きやんだ。

「・・・アルの体あつたけえな。」

「・・・違う。あつたかいのはゼロの体だよ。私はイヤになるくらい、冷たい人間よ。こんなに優しいひとに、こんなに酷いことをしてしまった・・・。」

「・・・もういいつて。俺はまだ生きてるんだから、それでいい。」
アルはゼロの服をぎゅつと握る。

「・・・やっぱりだめだよ、そんなの・・・。」

不意に、泣きそうな声でアルは言った。

「私は、悪いことしちゃったから・・・簡単に許されちゃいけない人間なの・・・。」

「許されちゃいけないってどうして？そりやお前は今までいろいろあつただろうけど、それはお前のせいじゃねえだろ。」

「・・・でも、悪いことをしてきたのは私の手だよ、ゼロ。」

「・・・やっぱ違う。悪いのは・・・俺だ・・・俺がいるばかりにお前にそんなつらい思いをさせちゃまつてる。・・・すべてを狂わせたのは俺なんだ。アルが許されちゃいけない理由なんてない。」

「でも、許されていい理由もないじゃない・・・。」
言つて、クスリと、自分自身を蔑むようにわらつた。

「・・・わかつてる。私にはそんな資格なんてないつて、わかつてるつもりだった。私は、酷いことを沢山してきたから。・・・なのはどうして・・・。私は幸せになっちゃいけないのに・・・だから今までずっと考えなかったのに、夢みることさえなかったのに。な

のに・・・なのに・・・どうして・・・」

だん・・・とアルの手がゼロの胸を叩く。

「今になって、こんな夢を・・・。・・・あんまりにも楽しかったの。こんなのは嘘だ、私は楽しい生活の芝居をしてるだけなんだってわかっていたのに、それでもいいなって思えるくらい・・・嘘でもなくしたくないって思えるくらい楽しかった・・・まるで、夢の中にいるみたいで、1日でも長く続いて欲しかった」

「・・・何だ、ひとにとやかく言っておいて結局お前の望みも俺と変わらねえじゃねえか」

ゼロはクスツと笑う。

「・・・でも、そんなわがままは許されない。こんな夢をみて、ゼロも殺せない私は消えるしかない。私はもう、ここにいていい理由なんてない。」

痛みに耐えるような悲しい顔をして、アルはそう言った。

「さよなら・・・。ありがとうって言ってくれて、本当に嬉しかった。」

アルはゼロの体からそつと離れた。

「まで・・・どこ行きやがる・・・！」

「え・・・きゃ！」

ゼロは離れかけたアルの体をもう一度引き寄せる。

「いいか・・・お前がさつきから言ってるのは夢なんかじゃない。」「ゼロはどこか怒った口調で語る。

「お前は、普通の人が当たり前と考えるようなことを、尊い夢のように言ってた。それを続けたいなら続けりゃいいじゃねえか。お前が言ってることは決して夢なんかじゃねえ。」

「そんなの・・・できっこない・・・」

「なんで？本当にあったことじゃねえか。アルさえ望めば戻ってくる生活だろ？そんな簡単なこと、夢みたいだったって諦めないでくれ。」

「・・・無理よ・・・ゼロをこんなに傷つけて・・・いまさら戻る

ことなんて、できない」

「ああ、そのことなら大丈夫。俺も気にしてないからお前も気にしなくていいの。」

ゼロは明るく、「冗談のように言う。」

「・・・」

アルは黙っている。

「それに、今日のアルかつこよかったぜ？ドジなお前もみてて飽きないけど、しっかりしたお前も見れてラッキーだった。」

「・・・」

アルは黙っている。

「アル、今日のお前イメージ違ったぜ？なんかキリッとして、年上みたいだった。」

「・・・」

やつぱりアルは黙っている。

「・・・はあ。なんか返事してくれよう。言葉のキャッチボールしようぜえ。それとももう俺なんかとは話したくねえか？」

アルは、ゼロの胸に額をコツンとぶつけ

「・・・ばか」

なんてことを言った。

「いきなり何言いやがりますかあなたは？」

「ゼロはやつぱりバカだよ。私はゼロが思ってるような人間じゃないよ。なのになんでこんなに優しくするの？」

「なんでって・・・なんとなく、アルには泣いてほしくないだけだ。」

アルには笑ってほしいだけだ・・・

「・・・けど、私にはゼロに優しくしてもらう資格なんてない・・・」

「

「それを言うなら俺だって同じだ。でも、そんなこと関係なくそばにいてくれたのはお前だろ？」

「・・・でも・・・」

「まあ、ぶっちゃけちゃうと、お前の罪なんて俺はしらねえし、興

味もねえ。・・・俺がお前に優しくするのは俺がそうしたいからだ。厄介な奴につかまっただって観念してくれ。もし迷惑でも、俺はお前のそばにいてやるから覚悟しろ。」

「・・・私にそんな約束してもいいの？」

アルの声は、さっきまでの弱々しさは消えていた。

「・・・んゝ、最後の方は勢いだから聞き流してくれ。」

「だめ。時間切れでえす」

「なんの時間だよ・・・？」

「ふふ、とりあえず傷の治療しなきゃね。」

そう言っただけアルは一番深い肩の傷口をみる。

「あ、やっぱり流石だね。もう傷口が塞がっちゃってる。・・・これならなにか巻いとけばいいかな？」

そう言っただけアルはポケットからリボンを取り出して、傷口に巻き始めた。

「・・・言っとくけどこれ大事なんだから後で返してよ？」

「わかったよ・・・。つか他の物はねえのか？」

「ありません・・・と、これでよし。」

ゼロの肩にリボンを巻き終えたアルは、すっと立ち上がる。

「ゼロ、一人で立てる？」

「ん？・・・ああ、なんとかかな・・・」

言っただけ、よろよろと立ち上がる。

「さ、帰ろうぜ。なんか眠くなってきた。」

「うん。私も疲れちゃった。早く帰ろう！」

そう言っただけ、ゼロとアルは森を抜けて、帰宅した・・・

第18話

「ふう、なんか本気で疲れちゃった・・・」

ゼロは帰ってくるなりそんなことを口にした。

「・・・ごめんね、私のせいで・・・」

「はいストップ!」

ゼロはアルの言葉をさえぎる。

「そのことは言うな。・・・忘れろって言っても忘れられないとは思う。けど、もうお互い気にするのはやめようぜ。」

ゼロは優しく微笑む。

「・・・わかった。」

「わかればよし。俺はもう寝るぜ。」

「あ、そうだ。今日変な人達に絡まれたとき、ミリアさんがどうとか言ってたけど・・・あれ何?」

「ああ、あれはな・・・」

言いかけてゼロは少し考え込む。

「・・・やっぱこの話はよそう。明日自分でミリアに聞け。」

「え?わざわざ何で?」

「そのほうがおもしろい。」

笑って言うゼロにアルは呆れる。

「はぁ・・・そんなことばかりしてるからミリアさんが怒るんだよ・・・」

「いいのいいの。んじゃ、お休みいゝ。」

「はぁ・・・お休みなさい」

アルはしょうがないといったげな表情で横になった。

- - -

翌朝ゼロが目を覚ますと、アルとリリスが何やら話し合っていた。

「リリスちゃん話って何?」

「・・・」

リリスは問いかけるアルに、黙ってどこか敵意のこもった視線をアルにむける。

「・・・あなたも・・・」

リリスは視線はそのまま口を開く。

「ん？何？」

「あなたも・・・街の人達と同じなの・・・？」

「ちよっ？リリス・・・」

「いいの！ゼロは黙ってて・・・」

何を言おうとしているのかわかったゼロが止めようとするが、アルに言葉を遮られる。

「・・・リリスちゃん。それはどういう事かな？」

「・・・お兄ちゃんが怪我してるの・・・あなたがしたんでしょ・・・？」

「・・・ええ、そうよ。」

アルはできるだけ平然とこたえる。

「・・・・・・」

リリスは急に黙りこんで、目に涙をうかべる。

「・・・もう・・・お兄ちゃんをいじめないで・・・」

リリスは涙目で、まっすぐにアルを見つめる。

・・・それは人と接するのが苦手なリリスにとって、もてる限りの勇気を振り絞ってた言葉だった。

リリスは、アルがたまにみせる無感情な目をみて、幼いながらにアルの正体に感じていた。

「・・・なんで・・・なんでお兄ちゃんをいじめの・・・？・・・お兄ちゃんは何にも悪いことしてないのに・・・」

リリスの顔は涙でくしゃくしゃである。

「・・・ごめんね、リリスちゃん・・・」

そう言っで、アルはリリスの体を抱きしめる。

「・・・確かに、私は今まで街の人達と一緒にだった。昨日ゼロをこんなふうにしたのも私。だから、リリスちゃんには恨まれて当然だ

と思う。・・・でもね・・・私は昨日から変わるって決めたの。ゼロが何者でも関係ない。私は私に正直になるって決めた。・・・だから、許してとは言わないけど、それだけはわかって欲しい。」

そう言っ、リリスの体をいっそう強く抱きしめる。

「・・・わかった・・・許す・・・」

「そう。ありがとう・・・」

アルはリリスから離れて、黙って様子を見ていたゼロに目をむける。
「ごめん！なんか暗いムードになっちゃったね。今朝ご飯作って来るからまってて・・・」

アルはパタパタと台所へとかけていった。

「・・・」

リリスは黙って涙を拭っている。

ゼロはリリスの頭の上に、ぽん・・・と手をおいた。

「・・・頑張ったな・・・あと俺からも言っとく。ありがとう・・・」

「

そう言っ、リリスの涙を指で拭ってやる。

「・・・ほら、いつまでも泣くな。元気だしていこーぜ？」

ゼロがそう言っ、コクンと黙って頷いた。

3人は朝食をすませ、街へと向かった。

「- - -」

街の入り口に着くと、ジョンとミリアが待っていた。

「よう、遅いぜ」

「本当よ、全く・・・私を待たせるなんて百年はやいわ」

「つつーかお前らが早すぎるんだよ。」

「早くないわよ。あんたが時間にルーズすぎるだけ。」

「・・・まあいいや。」

「どんな物が出来てるか楽しみだな。」

「ああ。・・・んじゃ、さっさとおっちゃんのとこ行こっぜ。」

そう言っ、ゼロ達は鍛冶屋に向かった。

「- - -」

鍛冶屋に着くと、親方はにこにこして待っていた。

「がははは！遅かったなゼロ！」

「みんなして二言目にはそれかよ・・・で？そんなににこにこして
るってことはいい物ができたってことだよな？」

「ん？まあ見て驚け・・・」

そう言っただけで親方は奥から漆黒に輝く鎧を持ってきた。

「へえ・・・これはまた・・・」

言っただけでゼロは、鎧を指で弾く。

キーン・・・と響く音で鎧の質の良さが分かる。

「なかなか・・・いや、かなりすげえな。ちよつと着てみてもいい
？」

「おう！サイズは間違いなくぴったりなはずだ。お前の防具はつく
りなれてるからな！」

「さすがおつちゃん。」

言っただけでゼロは体に鎧をつけていく。

やがて、すべてをつけおえた。

「ん、なかなかいい感じ。腕も足も動きやすいし、胴体もスマート
な感じで動きやすい。・・・けど・・・」

言っただけでゼロは兜を外す。

「これは邪魔だな。まわりがよく見えん。」

「そう言うと思ったぜ。兜かしてみな。」

親方はゼロの手から兜を取り上げる。

「ここをこうして・・・こうすれば・・・」

親方がカチャカチャいじると、兜がどんどんバラバラになる。

「ほら、こんなもんだろ。」

親方が差し出したのは、必要最低限の所だけカバーされたアクセサ
リのような物だった。

「おお！これなら視界のじゃまにならないぜ！やるなあ、おつちや
ん！」

「おう！一生に一度の機会だからな！腕によりをかけてつくらせて

貰ったぜ。この世に一つだけの鎧だから大事にしるよ。」

「分かってるよ。・・・で、金の方はいくら位だ？」

「金はいい！いい仕事させてもらった礼だ！」

「本当か！？いやあ、おっちゃん太っ腹！」

「おう！また何かいい素材があつたら持つて来いよ！」

「了解。やつぱおっちゃんは頼りになるな」

「ま、実際頑張ってるのはお前らハンターだ。このぐらいはせにやあバチがあたるってもんだ！」

「・・・ちよつといいつすか？」

後ろからジョンが顔をだす。

「この弓の張りを強くしてもらえないっすか？どこ行ってもこれ以上は無理だつていわれるんだけど・・・」

「かしてみな」

ジョンは背中にさげていた弓を手渡す。

「へえ・・・お前さんこんな強弓を引いてたのかい。大したものだ・・・。だが、この位だったらすぐに強くできるぞ。ちよつと待つてろ。」

親方はなれた手つきで弓をいじりだす。

「なあ、ジョン」

親方が作業してる横でゼロが口を開く。

「なんだよ？」

「いや、今日は狩りにいく予定もねえのに何で弓だけ装備してきたのかなって思つてよ」

「いや、お前が鎧をつくるんなら俺もついでに弓を強くしてもらおうと思つてよ。・・・どこ行つてもだめだったんだが、やつぱ親方は腕がいいな。」

「まあ、ここら辺でおっちゃんにかなう鍛冶屋はいねえだろ。」

「これでよし・・・と」

親方は、出来上がった弓をもって立ち上がる。

「ほら、出来上がりだ」

ジョンは弓を受け取る。

「引いてみな？」

ジョンはいわれた通りにする。

ギツ・・・と音をたてて弓を引いた。

「・・・いい感じだ・・・どうもありがとうございます。」

「おう！それもタダで構わねえよ！大したことしてねえしな！」

親方はがはと笑う。

「本当ですか？いやあ、助かります。」

「よかったじゃねえか。じゃあ飯食いに行こうぜ。腹へっちゃまった。」

「

「わかったよ。」

「んじゃ、また来るよ」

「おう！いつでも来い！」

ゼロ達は親方と別れて、昼食を食べに行った。

「- - -」

適当に注文をとり、料理が来るのをまっている時にアルが思いだしたかのように口を開く。

「そういえば・・・ゼロとミリアさんってどういう関係なんですか？」

「・・・なんで私に聞くの？」

ミリアはぴくぴく眉をつりあげて聞く。

「えっ、いやっ、あの・・・ゼロが直接聞けって言っから。」

「ゼロ口々？」

ミリアがゆっくりゼロに視線を向けると、ゼロはニヤリと笑う。

「いいじゃねえか。聞かせてやれ。お前の武勇伝をよ・・・」

それを聞いたジョンが隣でぶっ、とふきだす。

「ははっ・・・確かにあれは武勇伝だな。」

「ジョン！あんたまで何言ってるの！？」

「ほら、リリースも聞きたそうだぞ」

ジョンはリリースを指差す。

リリスは興味深くミリアを見つめる。

「はぁ・・・分かったわよ・・・あれは確か二年前の事ね・・・」
ミリアは、昔を思い出しながら話し始めた・・・

第19話（前書き）

今回から、ゼロとミリアの過去編に入ります。

第19話

その日は太陽の日差しが照りつける、暑い日。

ゼロは目的もなく、ブラブラだるそうに街を歩いていた。

「あぢいゝゝゝ。ったく、やってらんねえよゝゝゝ。」

数分歩くと、柄の悪そうな集団がゼロの前にあらわれた。

「お前ゼロだな？ちよつと面貸せや」

言つて、裏路地を指差す。

「おゝおゝゝゝ。この暑い中、血気盛んな奴らだゝゝゝ。」

この頃のゼロは、しょつちゆう喧嘩を売られ、する事もないのでいちいち喧嘩を買っていた。

裏路地に入っていくと、鉄の棒などを持った連中がたむろっていた。

「おい、連れてきたぜ」

一人の男がそう言つと、全員の視線がゼロに集中する。

別の男がゼロに歩みよる。

「お前がゼロかゝゝ。ガキのクセにいきがってるって有名だぜお前」

「そりやめでたい。俺も有名人になったもんだなあ。」

「あ？ゝゝ。お前なめてんのか？」

「なめてんのはお前らだろ。この程度の人数で俺をどうこうできると思つてんのか？」

ゼロのこの一言で、集団に一気に火がついた。

『ぶつ殺すぞゝゝ！』

男達は一気にゼロに襲いかかる。

ゝゝ。が、ゼロにとっては取るに足らない相手だった。

おまけにゼロは、この時すでにハンターの仕事を始めていた。

一人一人が強いわけではない。

かと言つて、野生の獣のように集団で戦うことに慣れているわけでもない。

一人一人確実に倒していけばどうということはない相手だった。

・・・5分後、予想通りゼロはなににもなかったかのように無傷で裏路地から出てくる。

「あゝ・・・なんかよけいにあつくなっちまった・・・さっさと帰る・・・」

ゼロはまたダラダラと歩きだす。

しかし、ゼロはすんなり家に帰ることは出来なかった。

何故なら、今度は柄の悪そうな女の集団につかまったからである。

「あんたがゼロね」

集団の中から、長い金髪のリーダー的な女がでてきた。

ミリアである。

・・・この時、ゼロ15歳、ミリア17歳。

最初の出会いである。

「・・・人違いです」

「そんなわけないわ。だつてあんた・・・」

「有名なもの・・・とか言いたいんだろ？」

ゼロは、はあ・・・とため息をついて肩をおとす。

「あら？話しがわかるじゃない。・・・なら、なんで呼び止められたか分かるでしょ？」

「ナンパか？」

ゼロがそう言つと、ミリアは一瞬だけ目を点にして、あは・・・と笑いだした。

「・・・まあ、それでもいいわね。みてくれもなかなかよ、あなた」「そりやどうも」

「けど、残念ながらナンパじゃないわ。・・・分かる？あなたに喧嘩うつてるの。」

ミリアはそう言つと、鉄の棒を取り出した。

「あんた達！分かつてると思うけど、これはタイマンだからね！絶対手えだすんじゃないよ！」

後ろにいた集団にそう言つて、ゼロに向かって走りだした。

・・・これは正しい選択だった。

この頃ミリアはまだハンターではない。

やはり集団で戦うことには慣れていないのである。

相手が実力者である場合、連携のとれない集団は意味をなさない。また、ミリアはハンターではなかったが、なかなか強かった。

集団になればまわりはただの足手まといに過ぎなかった。

ミリアは重そうな棒を、素早く振り回してゼロに襲いかかる。

「へえ・・・この街にもまだこんな強えやつがいたのか・・・」

ゼロはひらひら攻撃をよけながら感心している。

「よけてばかりいないで少しは攻撃したらどうなの!？」

ミリアがそう言うのと、ゼロは困った表情を見せる。

「そうしたいのはやまやまなんだが・・・女に手をあげるのはちょっとなあ・・・」

この一言でミリアはキレる。

「な!？女だからって甘くみないで!！」

「いや、甘くみてるわけじゃねえよ。実際大したもんだと感心してる。けど、そこは男として譲れんものがあるしなあ・・・」

「今時そんな時代錯誤ははやらないわよ!」

「まったくだ・・・困ったもんだなあ・・・」

ゼロは一人冷静にそんなことを口にする。

「あ! いいこと思いついた!」

言って、ゼロはミリアと距離をとる。

「今から5分だ・・・5分間お前の攻撃に当たらなかつたら俺の勝ち。一発でも当たればお前の勝ちだ。」

この一言にミリアはピクピクと眉をつりあげる。

ワナワナと、手まで震えだした。

「あなた、私がだれだか知らないらしいわね・・・」

「知らん」

「本当に知らないの!？」

「悪いがさっぱり。・・・どっかで会ったっけ?」

「初対面よ!・・・私はミリア・マーシヨリー。この街じゃあ敵無

しっていわれてるわ・・・」

「・・・やっぱ知らんわ。なあ、もう帰っていいか？」

「駄目よ。あと5分間、私の攻撃をよけるんでしょ？いつとくけど、手加減なんかしないわよ！」

言葉と同時にミリアは再びゼロに襲いかかる。

・・・が、ゼロには一向に当たる気配はない。

「くそ！なんで当たらないのよ！」

ミリアが悔しそうな声をあげる。

「なんでって・・・俺がよけてるからだろ」

ゼロは、ふん・・・と鼻で笑う。

「生意気・・・！絶対当ててやるんだから！」

「ま、頑張れ」

・・・結局、ゼロには一発も当たらず、ゼロはスタスタ帰っていった。

ミリアはその場に膝をつき、信じられないという表情をみせる。

「姉さん！」

まわりの集団がミリアに駆け寄る。

「・・・あんた達、今日はもう解散よ・・・」

「でも・・・！このままほっといいていいんですか！？」

「ごちゃごちゃうるさいわね・・・私が解散って言ったら解散よ。」

「わ、分かりました・・・」

集団は解散し、ミリアだけがその場に残された。

「こんな屈辱は始めてよ・・・。ゼロ、覚えてなさい。」

そう言って、ミリアも帰宅した。

- - -

「ただいま・・・」

ミリアが帰宅すると、ミリアの両親が入り口で待ち構えていた。

「ミリア・・・！あなた今日は何をしたの？まさかまた喧嘩してたんじゃない？」

「うるさいなあ・・・母さんには関係ないわ。」

「ミリア！母さんに向かってその口のききかたはなんだ！」

「なによ！父さんにも関係ないわ！」

「母さんはあなたを心配して・・・」

「もういいからほっといて！」

ミリアは母親の腕を振りほどいて、自室に駆け込んだ。

「なによ・・・どっちも本当の親じゃないくせに・・・」

そう、ミリアはこの両親の本当の子ではない。

小さいころに親にすてられたミリアは、この夫妻に養子として迎えられるのである。

「・・・明日こそゼロを倒してやるんだから・・・！」

ミリアはそう決意して、眠りについた。

- - -

翌朝ミリアは一人で街をうろついていた。

ゼロを見つけるためである。

しかし、なかなかゼロを見つけられずに昼になってしまふ。

ミリアは搜索を一時断念し、格安の食堂へ向かった。

店に入るなり、ミリアは目を丸くして驚いた。

視線の先にはゼロがいた。

何やら注文が決められずに悩んでいる様子である。

ミリアはゼロの座っている席の反対側に腰掛けた。

「あんた・・・こんなところでなにやってんの？」

「ん？・・・って昨日の！？」

ゼロは椅子から、ガタツ・・・と腰を浮かせて驚く。

「やつべ・・・。厄介なやつに見つかっちゃったよ・・・」

「厄介って何よ？」

ミリアは目を細めてゼロを睨む。

「いや、なんでもないっす・・・」

「ったく・・・あんたさつきからなんか悩んでるみたいけど、メニユーくらいさっさと決められないの？」

「いや、今買い物帰りでさ、俺貧乏だから持ち金がもうすくねえん

だよ。んで、俺でも注文できそうな物ねえかなあつて探してんだけどなかなか見つかんなくてよ・・・」

真剣に悩むゼロを見て、ミリアはゼロに抱いていた復讐心が消えてしまった。

「はぁ・・・あんたそんなに貧乏なの？」

「ああ。常にギリギリだぜ」

「親は・・・いないんだったわね」

「・・・ああ。つつか何で知ってた？」

「そりゃあ、悪い意味でこの街であんたのこと知らない奴はいないわよ。」

「ふ〜ん・・・ま、いちいち説明しなくていいから楽でいいけどな」

「・・・あんた本当に前向きねえ・・・」

ミリアは感心する。

「ん？そうか？・・・つかそんなことより今は昼飯の問題だ・・・」

「いいわ・・・足りない分は私がだしてあげる。」

「本当か!？」

「いつとくけど貸しよ」

「なんだよ、ケチ・・・」

ゼロはいじける。

「あつそ。ならここで一生悩んでなさい。」

「うわぁ！ミリアさん最高っす！いよ！太っ腹！」

「・・・あんた本当に馬鹿ね」

ミリアはふふっ・・・と笑う。

「馬鹿で結構！」

ゼロはウェイトレスをよんで、注文を済ませる。

運ばれてきた料理をガツガツ食べる。

「行儀の悪いやつね・・・」

ミリアは呆れる。

「気にすんな。俺はいそがしいんだ。」

ゼロはそう言つて、あつという間に料理をたいらげ、バタバタと帰

る支度をする。

「なにをそんなに慌ててるのよ？」

「早く帰らねえと妹たちがやかましいんだよ」

「あんな妹いたの!？」

ミリアは驚きを隠せない。

「いるいる。かわいい奴らだぜ！」

ゼロはじゃあな!・・・と言って、走って家に帰って行った・・・

第20話（前書き）

今回も過去編です。

第20話

「ただいまあゝ」

ゼロが声をあげると、パタパタと2人の女の子が奥から出てきた。

「ゼロ兄ちゃん覚悟〜!」

2人の女の子はゼロに飛びかかる。

「ちよっ! まで・・・うわあ!」

ボタンと倒れる。

「つゝ・・・何なんだよ・・・」

倒れるゼロの上で2人の女の子はハイタッチなどしていたりする。

「やったあ! 作戦成功だよりリスちゃん!」

「・・・」

リスは嬉しそうな笑みを浮かべる。

「こらこら! 変な作戦を企てるなマリー!」

「えゝ? リスちゃんも一緒に考えたんだよ」

「・・・ほとんどマリーの提案で、リスは頷いてただけだろ?」

ピク・・・と、マリーは笑顔のままかたまる。

「な・・・なかなかスルドイね・・・」

「いつもの事だろ・・・」

ハア・・・と、ため息をついてリスとマリーをつかまえる。

「・・・2人共?」

「な・・・なに? ゼロ兄ちゃん」

「いたずらする奴に与えられる厳しい罰を知ってるか・・・?」

ゼロはニヤリと笑う。

「わ・・・わかんないよあゝ」

マリーは目を泳がせる。

「ふっふっふ・・・必殺、くすぐりの刑だあ! 覚悟しろ〜!」

ゼロは2人をしきりにくすぐる。

『きやははははは!』

耐えきれずに笑い転げる。

大人しいリリースも声をあげて笑う。

「ほらほら！合い言葉を言わないと止まんねえぞ〜！」

『ご・・・ごめ・・・あははは』

「ん〜？よく聞こえませんかよ〜」

『あは・・・は・・・ごめんなさい！』

「よしよし、許してやろう」

ぱっ・・・と2人からてをはなす。

「はあ〜・・・ゼロ兄ちゃんやりすぎだよ・・・」

「だったら次からは何か対策をたてるんだな。」

はっはっは・・・と笑ってゼロは部屋の奥に入っていく。

「む〜・・・ゼロ兄ちゃんは手強いなあ〜」

マリーが悩んでいると、リリースがマリーの服を引っ張る。

「ん？なに、リリースちゃん？」

「・・・今度は、逆にお兄ちゃんを・・・」

「ああ！なるほど！」

マリーは、ポン・・・と手をうつ。

「2人でいけばゼロ兄ちゃんでも・・・」

「しっかり聞こえてるぞ」

ゼロはひよっこり顔をだす。

「あう・・・」

「ほら、馬鹿なことしてねえで早くこっち来い。」

「はあい・・・」

2人はとぼとぼゼロのもとへ行く。

ゼロはニコニコして待っていた。

「なにしてんだ？はやくこっち来いよ」

「なにになに〜？」

「お土産だ！」

そう言って、ゼロはピンクのリボンとうさぎのぬいぐるみを取り出した。

「前から欲しいって言ってただろ？」

「うん！このリボンほしたったの！」

マリーはリボンを頭につける。

「似合う？」

「ああ。よく似合ってるぞ」

「えへへ。今度海につけていくんだあ」

「まだいつ行くかも決まってるんだぞ？」

「でも連れて行ってくれるんでしょ？」

「まあ、兄ちゃんに暇があればな」

「だからその時つけていくの！」

マリーは嬉しそうにはしゃぐ。

「・・・ま、いつか。んで、これはリリスに」

言つて、ぬいぐるみをリリスに手渡す。

「・・・ありがとう・・・」

リリスはニツコリ微笑む。

「兄ちゃんの残り少ない金で買ったんだから、2人共大事にしるよ？」

「はあい！」

「・・・うん」

「よし！・・・んじゃ、晩飯の支度でもするかな！」

「私もお手伝いする」

「・・・お手伝いする・・・」

「じゃあ2人には野菜を洗ってもらおうか。」

ゼロは荷物の中から野菜を取り出して、リリスとマリーに手渡す。

「ちゃんと洗えるかあ？」

「ちゃんと洗えるもん。ね、リリスちゃん」

「・・・うん」

マリーとリリスはジャバジャバと野菜を洗いだした。

「じゃあ洗い終わったら兄ちゃんに渡してくれ。」

「はい、これ終わったよ」

「はいよ」

「・・・これ・・・」

「了解」

こんな調子で料理を作り、3人は貧しいながらも楽しい夕食の時間を過ごした。

「・・・ご飯美味しかったか？」

「・・・うん」

「美味しかったよ！」

「そりゃよかった。・・・そろそろ寝るぞ」

「えゝ？まだ眠くないよぉゝ」

「駄目。どうせベッドに入ってからもなかなかないだろ？」

「ぶゝ・・・わかった・・・」

「じゃ、さっさと寝よう。兄ちゃんは今もう眠い。」

「ゼロ兄ちゃんは今ねすぎだよぉ」

「いいのいいの」

ゼロはベッドに寝転がった。

同じベッドにリリスとマリーが潜り込む。

「じゃ、お休みゝ」

言って、ゼロは目を閉じたが、やはりマリーとリリスは小さな声でいつまでも話しており、眠りについたのはベッドに入ってから一時間たつてからだった。

――――

翌朝。

誰かが頬を叩く。

でもまだ眠い。

・・・今度は冷たいものが顔にあたる。

でも起きたくない。

・・・誰か叫んでる

「・・・ちゃん・・・兄ちゃん・・・起きろゝゝ！」

ドスン！

「ぐはっ！」

ゼロはたまらず目を覚ます。

そこにはゼロの上にダイブしてきたマリーの姿があった。

隣では、リリスが濡れたタオルでゼロの頬をぺしぺし叩いている。

「ん・・・2人共おはよう・・・」

「お兄ちゃん起きるの遅いよ」

マリーは、ぷく、と頬を膨らませる。

「・・・お前ら朝から本当に元気だなあ・・・」

「元気だよー！」

「・・・お兄ちゃんも起きて・・・」

「・・・仕方ない、起きるか。」

言って、ベッドから体を起こした。

「- - -」

「兄ちゃんは今も出かけるから、留守番よろしくな」

朝食を取りながらゼロはそんなことを言った。

「えー？ゼロ兄ちゃん今日も出かけるの？」

「買い物はまだ残ってるんだよ・・・そんな顔すんな」

ゼロはマリーの頭を撫でる。

「わかったあ・・・」

「ん。それじゃあちよつと行ってくる。」

ゼロは朝食をすませ、街に向かった。

「- - -」

ゼロが街をうろついていると、人だかりが目にはいる。

「ん？なんだありゃ？」

ゼロは遠くから観察する。

そこには、ミリアとミリアのとりまき集団が対立しているのが見えた。

「ミリアさあん。グループ抜けるってどういことですかあ？」

「どうもこうもないわ・・・ただあんた達とつるむのに疲れただけよ。」

「そんな理由で抜けれると思ってんですかあ？」

「ごちゃごちゃうるさいわね・・・喧嘩ならいくらでもかってやるから、来るならさっさと来なさい。」

『上等だあゝ!!』

集団が一気に襲いかかる。

もはや女とは思えないほどの気合いである。

ミリアもひるまず前にでた。

ミリアは鉄の棒をもって、次々に敵を倒していく。

「おゝ。ミリアつえゝなゝ」

ゼロはひたすらのん気に傍観している。

ミリアは、敵無しと言われているのはだてではなく、バタバタと敵をなぎ倒す。

・・・が、ミリアはゼロほどの実力者ではない。

限界はすぐに来た。

後ろから殴られ、形勢逆転である。

今度はミリアがボコボコにされる。

ゼロは、

「あゝあ。・・・ちよつとやりすぎだなあゝ」

などと、のん気なことを口にして、傍観者の立場ですつとその様子を眺める。

そうしてる間に、ミリアは抵抗出来なくなってしまった。

しかし、ミリアを攻撃する手は止まらない。

「・・・流石にとめねえとまずいか・・・」

ゼロは集団のもとへ駆けだした。

集団の一番後ろにいた奴が投げ飛ばされ、そのまま建物に引っかかる。

それに気付いた集団は一斉にゼロの方に視線を集中する。

「あ！あんたゼロ!？」

「・・・ゼロ・・・?」

ミリアは弱々しく顔を上げる。

「あ・・・あんた・・・何しに・・・来たのよ・・・」

「ん？たまたま通っただけだ。・・・ま、見捨てるのもなんだし・・・助けようかなあ？つてよ」

「・・・お人好しね・・・」

「自分でも困ってる。」などと話していると、しびれを切らした集団がゼロの肩に手をかける。

「ちよつと・・・ラブコメはそこまでに・・・つて、え？」

ボタン、とその場に倒れる。

「お前ら今日はこれで退け」

「な！？」

ゼロが言ったことよりも、自分が倒れていることがいまいち理解できないような表情をする。

「こ・・・のやろっ・・・」

言つて、悔しそつに立ち上がる。

「あんた・・・調子にのるのもいい加減にしなよ」

「いい加減にするのはテメエらだろ。もう勝負はついたんだからお前らがここに残る意味はねえだろ。」

「これははじめなんだよ！あんたは関係ないんだからすつこんでな
！」

「・・・あれを言うしかないか・・・」

ゼロは、はあく・・・とため息をついて肩をおとす。

そして次の瞬間、驚くべき言葉を口にする。

「関係ならある・・・俺の女に手えだしてんじゃねえよ」

『・・・え？』

・・・

その場にいた、ミリアも含める全員が目点を点にする。

「クソ！何度もいわせん！俺の女に手えだすなつていつてんの！」

「・・・はっ！・・・あははは！」

集団の1人が笑い出す。

「なら尚更このまま終われないねえ」

「・・・あんまり俺をなめんなよ・・・！」

ドン・・・と、壁に押しつけ、女の顔目掛けてパンチする。

「きゃ!?!」

バコ・・・と、女の横の壁に拳がめり込む。

「今の聞いたか？」

「は？なにを？」

「だから今のお前の悲鳴だよ。・・・この程度でそんなひ弱な悲鳴をあげるなんてな・・・。いいか？その悲鳴がお前の限界だ。その程度のチンピラ風情が俺をなめんじゃねえよ。」

言って、邪魔そうに女をどける。

ゼロは下に倒れ込んでいるミリアをおぶってその場を去ろうとする。

「な!?!ちよつと・・・おろしなさいよ!恥ずかしいじゃない。」

ミリアはゼロの髪を引っ張る。

「いててて・・・!怪我人は大人しくしとけ!」

そのまま去ろうとしたが、集団が行くてを阻む。

「なんだよお前ら？」

「このまま見過ごす訳にはいかないんでねえ」

「うるせえよ。お前らみたいな雑魚に拒否権はねえ。黙って道開けな。」

「なめんじやないよ!」

1人、飛び出してゼロに襲いかかる。

「本当にわかってねえみたいだな・・・」

女の攻撃をよけて、顔面を鷲掴みにする。

「ああああ!」

メリメリと嫌な音がする。

「はなしやがれ・・・」

「動くんじゃねえよ!」

別の女が動く前に、ゼロはその動きを制限する。

「動くとこいつの頭蓋が砕けるぜ・・・」

「そんなこと・・・」

「できねえと思うか？・・・なら賭ようぜ。お前がここまで来るのが先か、俺がこいつの頭を握りつぶすのが先か・・・」

言って、メリ・・・と、さらに力を込める。

「ああああ！」

女は苦しそうにもがく。

「！分かった！分かったからそいつをはなして！」

ゼロは、その女を嘲笑って、集団の中に投げる。

「ほら、道開けやがれ！」

集団は、後退りして道を開ける。

「最初からそうしやがれ・・・」

ゼロはミリアをおぶったまま、スタスタ歩き出す。

「ああ、それから・・・」

ゼロはくるりと振り返る。

「そいつ、今は派手に痛がつてるけど別に何ともねえから安心しろ」

そう言い残して、ゼロはその場から立ち去った・・・

第21話（前書き）

今回まで過去編です。次回からはもとに戻ります。

第21話

ゼロはミリアをおぶったまま街をうろつく。

「そう言えばあんた・・・」

ミリアが口を開く。

「ん？どうした？」

「さっきのアレ・・・本気で言ってたの？」

「さっきのアレ？」

「いや・・・その・・・」

「ごによごによと言葉をにごす。」

「なんだ？よく聞こえねえぞ」

「だ・・・だから！・・・私があんたの女とかどうか・・・」

「勘弁してください」

「な！？勘弁してほしいのはこっちよ！私がいつあんたの女になったって言うのよ！？」

スパーン！と、ゼロの頭を殴る。

「つてえ・・・ああでもいわねえとあいつら消えてくれねえだろ！俺だつて言いたくなかつたんだ！」

「全員倒せばいいじゃない。あんたなら出来るでしょ？」

「いや出来るとか出来ねえとかじゃなくて・・・可能な限り平和的に解決してえじゃん？」

「あら？その割には結構むちゃくちゃやってたわよ？」

「・・・まあ、状況によりけりだな」

「状況によりけりねえ・・・どうでもいいけど、あんた派手に建物に穴開けてたけど、弁償する金あるの？」

「う・・・そこはなんとかする」

「なんとかってどうやって？」

「んゝ、そうだなあゝ」

ゼロは考える素振りを見せる。

「あ！そうだ！」

ぱっ・・・と、顔を上げる。

「知らん顔しよう」

「だと思っただわこのバカ！」

またゼロの頭をパコンと殴る。

「いつてえ・・・暴力反対」

ゼロは手を上げて講義する。

「はあ・・・もういいわ・・・なんか意識が遠くなってきた・・・」

「おいコラ！まてまて！お前ん家はどこだ！？」

「家には・・・帰れない・・・」

ミリアはそれだけ言い残して気を失った。

「ええ・・・俺にどうしろつつうんだよ・・・」

タラタラと冷や汗を流す。

「・・・宿とろうと思っても金がねえし・・・はあ・・・困ったお

嬢様だぜ・・・」

ゼロはトボトボ歩いて行った。

――

「ん・・・ここは・・・？」

目を覚ますと見知らぬ場所に寝ていた。

「・・・ここどこ？」

ミリアはキョロキョロ周りを見渡す。

すると、小さな女の子と目があつた。

「・・・」

女の子は何も言わず、部屋の奥へ駆け出す。

すると、部屋の奥から見知った男が出てくる。

「・・・ゼロ？」

出てきた男はゼロだった。

ここはゼロの家。

先ほどミリアと目があつたのはリリスである。

「よう。目が覚めたみたいだな。」

「ここ、あんたの家？」

「そうだけど・・・何で？」

「いや・・・なんとなく・・・」

言つてもう一度周りを見渡す。

「汚いとこだなと思つて」

「お前つまみだすぞ？」

ゼロはピクピク眉を吊り上げる。

「あら？本当の事を言っただけよ？」

「・・・もういい。そんだけ喋ればもう大丈夫だな。」

「そうみたいね」

「じゃあ、そろそろ聞かせて貰おうか」

何を？と、ミリアは首を傾げる。

「お前が家に帰れない理由だよ。何があつたのか話してみ？」

「・・・しょうがないわねえ・・・」

はあ・・・と、ため息をついてミリアは話し始めた。

――

ミリアは朝目を覚ますと、いつものように広場に向かうため家をでようとする。

「ミリア！どこにいくの！？」

ミリアの親が出てくる。

「別に・・・母さんには関係ないわ・・・」

「またケンカするつもり！？」

「だつたらなんなのよ？」

「だめよ！今日は家からでたらだめ！」

母親の言葉にミリアは苛立ちを覚える。

「馬鹿なこと言わないで！なんの権利があつてそんなこと言つもの！？」

「権利ならあります！私はあなたの母親よ！娘を心配するのは当たり前でしょう！」

「母親？」

ミリアはクツ・・・と笑う。

「血もつながってないのに勝手なこと言わないで！私が問題を起こせば母さん達が噂される！それが心配なだけでしよう！？母さん達は結局偽善者なのよ！」

パシン！

「・・・！」

いきなり頬をぶたれ、ミリアは驚く。

「・・・なによ！母さんなんかしらない！」

ボタンと、ミリアは勢いよく家を飛び出した。

――

「つてことがあったの・・・」

「なんだ・・・単なる親子喧嘩か・・・つか一方的にお前が悪いじゃん」

ゼロは呆れている。

「私だって反省してるわよ・・・ちょっと言い過ぎたかなって・・・」

「

「・・・いい母親じゃねえか。何が不満でお前グレちまったんだよ？」

「不満っていうか・・・血がつながってないって知ったとき、何か裏切られたような気持ちになって・・・」

「で？なんでいきなりグループ抜けようと思ったんだ？」

「それは、なんとなくあいつらがうざったくなっただけ。あんな奴らと連んでも強くなれないって、あんたに負けておもった。」

「俺一つ気になることがあるんだけどよ・・・」

「何？」

ミリアは首を傾げる。

「・・・血が繋がってるとか繋がってねえとかって、そんなに大事ななことか？」

「大事に決まってるでしょ！」

「じゃあ聞くが、血の繋がってる親に虐待されて生活すのと、そ

うでない親に愛情そいでもらって生活すのとどっちが幸せなんだ？」

「な！？それは・・・」

ミリアは黙り込む。

「・・・つまりはそういう事だろ？血が繋がってりや幸せとは限らない。俺なんか殺されかけた。けどお前の親は今まで愛情そいでくれてただろ？お前は今まで一度も親の愛情を感じたことはねえのか？」

「そんなことはないけど・・・」

「だろ？なら血のつながりなんて大したことじゃねえだろ。・・・

おい！マリー！リリス！」

ゼロが大声で呼ぶと、マリーとリリスがとてとて走ってきて、ゼロの膝の上に座る。

「なあに？ゼロ兄ちゃん。お話終わった？」

「ん？残念ながらもうちょっと話はかかるな」

え・・・と、ぶーたれるマリーの頭をゼロはなでる。

「昨日話しただろ？妹がいるって。俺はこいつらと血は繋がってない。でも俺は本当の妹だと思ってる。俺にとって、たった一つの大事件な家族だ。お前らはどう思ってる？」

「ん・・・難しいことは分かんないけど、ゼロ兄ちゃんは私の本当のお兄ちゃんだよ！」

「そうか。リリスは？」

「・・・マリーちゃんと同じ・・・」

な？と、笑顔でミリアに向き直る。

「かわいい奴らだろ？・・・こういうことだよ。血なんて関係ない。大事なのは心だ」

「こころ・・・？」

「そ、心だ。俺は血の繋がりなんかより、心の繋がりのほうがよっぽど大事だと思うぞ」

「心の繋がり・・・」

「・・・まあ、お前の家庭にとにかく口だす気はねえが、とりあえず一回親と話し合ってみるよ。今日はとりあえず泊めてやるから、明日は家に帰れ。」

「分かったわ・・・あんたの言うとおりかも知れないわね・・・」
じ・・・と、ミリアはゼロの顔を見つめる。

「な、なんだよ？」

「あんた頭悪いくせにそういう所はしっかりしてんのね。」

「ほっとけ！」

ゼロは少しすねる。

「ね〜ね〜」

ひょこつと、マリーが顔をだす。

「ゼロ兄ちゃんとお姉さんはどういう関係なの？」

ミリアは少し考えてから

「ん〜？恋人同士ところね。」

なんて言葉を口にした。

「何だつて！！？」

ゼロは驚きを隠せない。

「え〜！本当！？ゼロ兄ちゃん！？」

「んなわけないだろ！何で俺がお前と恋人同士なんだ！」

「あら？さつき私に愛の告白をしてくれたじゃない？」

ミリアは悪戯な笑みを浮かべる

「ば！？あれは芝居だったの！誤解を招くような言い方はやめろ！」

「こくはく〜！？」

マリーはゼロの膝の上でキャーキャー騒いでいる。

「復唱しないでくれ〜！考えるだけでおぞましい！」

「おぞましいですってえ！？」

ばっ！と、ミリアはベッドから立ち上がる。

「うわ！ちょ！タンマタンマ！お前怪我人だろ！？大人しく寝とけ！」

「うるさい！覚悟しなさいよ！」

「だからまてつて！」

ゼロは、マリーとリリスを膝の上からどかし、ドタバタと逃げ回る。
「待て〜！」

ミリアもドタバタ追いかける。

「だあ〜！勘弁してくれえ〜！」

「うるさい！問答無用・・・って・・・ん？」

ミリアは壁に立てかけてあるゼロの剣に気付く。

「何？この馬鹿でかい剣？」

「これか？俺が使ってる剣だぞ。俺ハンターだから」

「あんたハンターなんだ・・・」

「まあ、あまり狩猟には行かないけどな」

「へえ〜・・・ちよつと持ってみてもいい？」

「いいけど・・・落つこととして怪我するなよ」

大丈夫よ・・・といって剣に手をのばす。

が、剣を持ち上げることは出来なかった。

「ちよ！何この重さ!？」

ぐらりと剣が傾く。

「うわ！あぶねえぞ！」

慌ててゼロは剣を手にとる。

「あつぶねえなあ・・・気をつけろよ。お前の骨くらいならばき折れちまうぞ・・・」

言つて、剣を持ち上げる。

「あ・・・あんた片手で・・・」

「ん？そんなに驚くことか？・・・お前らの得意な台詞だろ？・・・

俺は人間じゃねえんだからさ・・・」

ほいほいと、剣を右に左に軽々しく振り回す。

「・・・どうりで・・・私なんかかなわなかったはずね・・・」

ゼロを感心して見つめながらそんなことを言った。

「・・・私もやってみようかしら？・・・ハンター」

「え？お前がか？」

面食らった表情でゼロが聞く。

「なによ？悪い？」

「いや・・・悪くはねえけどよ・・・何でいきなり？」

「別にいきなりじゃないわよ・・・前から少し考えてたわ・・・強くなりたいたからハンターやってみようかなって思っただけよ」

「まあ、なんでもいいけど・・・半端な覚悟でやるなら最初から止めとけよ。」

「分かってるわよ。・・・氣にくわないけどこれからいろいろお世話になるかもしれないから・・・そのときは宜しくね、ゼロ」

「おう。俺にできることなら協力してやるよ。」

「すっ・・・と、ゼロは手を差し出す。」

「・・・何？この手。」

「いや、握手だよ。握手は万国共通だろ？」

「・・・んじゃ、これから宜しく」

言って、ミリアはゼロの手を握り返す。

こうして、ミリアはハンターを目指すことになった・・・

――

「って言うわけよ。・・・これでいい？アルちゃん。」

「はい。その後、ご両親とは・・・」

「仲直りしたわ・・・ゼロの言うとおり、血の繋がりなんて大したことなかったわ」

「ゼロもいいこと言うんだねえ」

うんうん、とアルは感心する。

「この話のすごい所はこの後にあるんだぜ。」

ゼロが口を開く。

「ちよっと！それはもう言わなくていいでしょ！」

「いや！是非言いたいね！・・・実はこの後な、ミリアはあのグルーブに復讐して、全員半殺しにしたんだぜ。な、ジョン。」

「ああ。もうこの世のものとは思えない形相だったな。」

ジョンは笑っている。

「そんで、街のチンピラ共にある決まりができちゃったんだよ」
「ある決まり？」

アルは首を傾げる。

「ああ。“鬼のミリア”には手を出すなってな！」

アハハ・・・と、ゼロは笑う。

「ゼロ、あんた・・・」

ミリアの周りの空気がピリピリと張り詰める。

もう、明らかに怒っている。

「ミ・・・ミリアさん・・・空気が痛いっすよ・・・！」

「もう我慢の限界よ・・・いつぞやの借りをいまここで返してやるわ・・・！」

ガタツ！と立ち上がり、ゼロに襲いかかる。

「またこのパターンかよ！？もういい加減にしてくれえ〜！」

他人の迷惑を考えず、店の中をドタバタ走り回る2人。

いつまでたっても進化のない2人であった・・・。

第22話

「だ〜！つかれたあ〜」

ゼロは、帰ってくるなりソファーに倒れ込んだ。

「あれだけ暴れれば当たり前よ・・・全く・・・」

アルは呆れている。

その横で、ゼロは大口を開けてあくびをする。

「ねみ・・・俺、もうねるわ・・・」

「あれ？晩御飯は？」

「ん〜・・・今日はいいや・・・とにかく眠い・・・」

「そう・・・」

アルは少し残念そうな表情を見せる。

「まあいいか・・・お休みなさい・・・」

「ん・・・お休み・・・」

言って、ゼロは眠りについた。

――

・・・誰かが動く気配がする。

時間的には、恐らく夜中だろう。

「ん・・・う・・・」

ゼロはまどろんでいた。

誰かが足下に立って、何か言っている気がする。

ゼロは耳を傾けた。

「・・・さよなら・・・ゼロ・・・」

・・・さよなら？

こんな夜中に？

何故？誰だ？

ゼロは、混乱した頭を抱えて起きあがった。

足下には誰もいない。

「夢・・・か・・・」

ふう・・・と、ため息をついて、もう一度横になる。
と、ここでゼロは異変に気付いた。

「・・・あれ？・・・アルがいねえな・・・」
アルがいらない。

さっきの夢が頭をよぎる。

ゼロは、家中を探したが、アルは見つからなかった。

「・・・まさか・・・あれは夢じゃなくて・・・」

“さよなら”

何気ないこの言葉の意味。

ゼロは、その意味を理解して、現実を叩きつけられる。

理由はよくわからないが、アルはいない。

そして、“さよなら”と言う言葉。

その言葉には、どこか決意のようなものが感じられた。

「・・・何なんだ一体？・・・落ち着け・・・落ち着いて考える・・・」

すう・・・と、深呼吸をする。

「・・・アルの装備品は置いてある。つまり、狩りには出てないよな。とすると・・・街か？」

ゼロは家の外にでる。

すると、沢山の足跡が街に向かってのびていた。

「やっぱり街か・・・けど、何でこんなに足跡があるんだ？4、5

人じゃあこうはならねえぞ・・・。急いだ方がいいか・・・」

部屋に戻り、ベッドに寝ていたリリスを起こす。

「・・・なに？・・・」

リリスは眠そうな顔で体を起こす。

「すまない、リリス。兄ちゃんはずっと街まで行かなきゃいけなくなつた。ちよつと留守番してくれるか？」

「え？・・・うん・・・」

コックリ頷く。

「すまない。出来るだけ早くもどるから。・・・じゃ、ちよつと行

つてくるな。」

そう言つて、家を飛び出した。

――

走る。

さつきから妙な胸騒ぎがする。

体が、とにかく急げと命令する。

「はっ、はっ、はっ・・・」

ゼロは、一度も立ち止まらずに走った。

しかし、アルに追いつかない。

足跡からして、走った様子はない。

恐らく、随分前にここを通つたのだろう。

・・・結局、アルには追いつけないまま、街にたどり着いた。

街の通路は石が敷き詰められているため、足跡を辿ることは出来ない。

「・・・ここからは聞き込みか・・・て言つても、この街で頼れる奴は・・・ミリアとジョンくらいか・・・確かジョンは今日、豪邸の方に戻つてゐるっていったな・・・」

ジョンは普段、格安の貸家をとつて、そこに暮らしている。

家の金を使つのを嫌つての事らしい。

ふう・・・と、息を整えて、ゼロは夜中の街の中を走り出した。

――

ゼロは、まずミリアの家に向かった。

位置的にミリアの家の方が近いのが理由だ。

ゼロがミリアの部屋の窓を見ると、明かりは消えていた。

「・・・まあ、当然と言えば当然か・・・とりあえず・・・」

ヒュッ・・・と、足下にあつた石を投げる。

カッ

「・・・」

反応なし。

カッ

「・・・」

2 発目にも反応はない。

「3 度目の正直・・・よっ・・・と」
カッン

・・・ガタン

「誰？こんな夜中に？」

ミリアが窓から顔を出した。

「俺だ。」

「・・・あんた、こんな夜中に随分気合いの入ったイタズラね・・・」

「いや、違うんだって。」

「じゃあ何？事と次第によつては殺すわよ。」

ミリアは、早く寝かせろといったげな目でゼロを睨む。

「ダメもとで聞くけど・・・さっきここをアルが通らなかったか？」

「アルちゃん？」

ミリアは首を傾げる。

「知らないわよ。っていうか、その頃多分寝てたわ」

「そうか・・・起こして悪かった。じゃあな。」

「ちよつと待ちなさいよ！」

走り去ろうとしたゼロを止める。

「私も手伝うわ。そこで待つてなさい。」

言つて、バタバタと支度をし始める。

2 分ほど経つて、ミリアが玄関から出てきた。

「お待たせ。・・・で、一体何があつたの？」

「走りながら話す。行くぞ！」

「あ！ちよつと・・・もう・・・」

はあ・・・と、ため息をついて、ミリアは急に走り出したゼロの後を追いかけた。

――――

「んで？何があつたの？」

ジョンの家に向かう途中、ゼロに追いついたミリアが口を開いた。

「・・・俺にもよく分からねんだ・・・」

ゼロは少し目をふせる。

「・・・夢の中で、足下で誰かが俺に“さよなら”って言って・・・目え覚ましたらアルがいなかったんだ。・・・んで、家の前に大量の足跡があつた・・・」

「・・・それが街に続いてたからここまで来た、ってこと？」

「ああ・・・」

「よく分からないわね・・・わざわざゼロの家に行く人間なんてこの街にいたかしら？しかもアルちゃんがいなくて事は、アルちゃんを迎えに・・・？何故かしら？」

「・・・分かんねえ・・・！」

ゼロは、ギリ・・・と、唇を噛む。

「・・・あんた、何か心当たりあるのね？」

「・・・」

ゼロは何も言わない。

「・・・まあいいわ・・・ジョンの前でゆっくり聞かせてもらうから・・・」

「・・・」

ゼロは黙ったまま走った。

そして、ジョンの家にとどり着き、塀をよじ登って侵入する。

ジョンの部屋を見ると、明かりがついていた。

「まだ起きてるみたいね。」

「ああ・・・助かった。」

言って、お約束通り足下の石をひろつ。

「これでカツンと・・・」

ヒュッ・・・

がシャン！

『・・・あ・・・』

・・・

しばし沈黙。

「・・・やつちまったよ・・・」

「少しは加減しなさいよ！このバカ！」

頭を抱えて座りこむゼロの頭に、ミリアは、スパン！・・・と、ツッコミを入れる。

少し経って、割れた窓を開けてジョンが顔を出す。

ジョンはゼロとミリアの顔を見て、深いため息をはく。

「・・・これほど大して嬉しくも何ともない予想的中が他にあるだろうか・・・で？何の用だ？」

「ジョン、この辺をアルが通らなかったか？」

「アル・・・？じゃあ、さっきのあれはやっぱり・・・」

「何か知ってるのか！？」

「・・・」

ジョンは黙って何か考える。

すると、シュルシュルとロープがおりてきた。

「登って来い。話がある。」

そう言って、部屋の中に姿を消した。

ゼロとミリアは言われた通り、ロープを登ってジョンの部屋に侵入した。

・・・ジョンの部屋に入ると、ジョンは険しい顔をして、考え込んでいた。

「よう・・・」

ゼロがためらいがちに声をかける。

「・・・アルがどうしたって？」

「ああ・・・いきなりいなくなっちゃった・・・家の前に大量の足跡があつて、それが街まで続いてたからここまで来た。」

「そうか・・・」

「お前なにか知ってるのか？知ってるなら教えてくれ・・・！」

「・・・さつき、アルに似た奴が俺の家の前を通ったよ・・・」

「本当か！？で、どっちに行った！？」

「話は最後まで聞け・・・」

ジヨンは真剣な顔をする。

「・・・アルに似た奴は確かに家の前を通った・・・ただし、一人じゃない。他にも沢山の人がいた。」

「それは・・・」

「ああ。多分、お前の家の前の足跡の主だろう・・・」

「そうか・・・で、だれと一緒にだったんだ・・・？」

ゼロがそう聞くと、ジヨンの表情はますます険しくなった。

「おい、ジヨン・・・？」

「・・・アルと一緒にいたのは・・・自衛団だ・・・」

『自衛団・・・！』

「ああ・・・しかも、どうみても連行されていた・・・」

「アルちゃんが・・・連行・・・？」

「・・・まさかとは思ったが・・・ここまで話がかみ合つと、疑いようがない。疑わしいのはその理由だ・・・。ゼロ、お前何か知ってるんじゃないか？」

「・・・そうね。そろそろ聞かせてもらおうかしら・・・」

「・・・」

ゼロは黙り込む。

「・・・ゼロ・・・事情が分らないと、俺らも手助けできない。自衛団が絡んでたんじゃ、尚更だ。・・・何があつたのか話してくれ・・・」

「・・・分かったよ・・・ただし、1つ頼みがある・・・」

「何だ？」

「・・・この話を聞いても、アルの事を嫌わないでほしい。この通りだ、頼む・・・！」

言つて、ゼロは深々と頭を下げる。

「・・・頭あげるよ、らしくないぞ・・・」

「・・・」

ゼロはゆっくりと頭を上げる。

「・・・それに、嫌うかどうかは、話を聞いてからじゃないとな。」

「・・・分かった・・・」

ゼロは少しためらって、ゆっくりと口を開く。

そして話し始めた。

アルがどういう人間で、何の目的でゼロに近付いたのか。

そして、ゼロを殺そうとした夜の事を・・・

第23話

ここはジヨンの部屋。

ゼロは全てを話して、3人を重い空気が包んでいた。

「まさかな・・・」

「アルちゃんにそんな過去があつたなんて・・・」

「・・・」

ゼロは何も言わない。

「だが・・・それと、アルが連れていかれた事になんの関係があるんだ？」

「・・・俺も確証は無いんだ・・・けどあの夜、あいつは、俺を殺せないなら消えるしかないって言うてた・・・自分はここにいていい理由がないと・・・急がないと、どんな処分が下されるかわからねえ・・・」

ゼロは少し目を伏せる。

「・・・それで心配だから助けにいくって訳？」

「ああ・・・」

「・・・お前はそれでいいのか？」

「え・・・？」

予想外な質問に、ゼロは驚いた。

「アルはお前を殺すためにお前に近付いたんだろ？・・・なら、またお前を殺そうとするかもしれない。・・・お前はそれでも助けに行くのか？」

「ああ・・・！」

ゼロは顔をあげて、考えるまでもない、といった様子で、ゼロは頷いた。

「あいつも・・・アルも被害者なんだ・・・。」

ゼロは唇を噛む。

「アルも・・・俺っていう存在が生み出した、数多くの被害者の1

人なんだ・・・！・・・本気で俺を殺そうとすれば、そのチャンスはいくらでもあったはずだ・・・なのに・・・！」

「ダン！と、悔しそうに壁を叩く。
「なのにあいつは、結局俺を殺さなかった・・・！今の生活が夢のようだと言って、涙まで流して・・・！」

ギリ・・・と、周りに聞こえるくらいに歯がきしむ。

「・・・あいつは・・・普通を普通と考えられないほどの生活をしてきたんだと思う・・・その普通を、何よりも、誰よりも望んでいたのはあいつなんだ・・・なら俺は、俺が存在する責任として、せめてあいつの普通を守ってやりたい・・・」

言って、ゼロは窓まで歩きだす。

「・・・夜中にすまなかった・・・お前らまで巻き込むつもりはない・・・じゃあな。」

ゼロは窓から身を乗り出す。

「まてよ」

後ろから声をかけられ、振り向かず、何だ？・・・と、こたえる。

「お前・・・また1人で抱え込む気か？」

「・・・」

ゼロは何も言わない。

「・・・また1人で行く気かって聞いてるんだ。・・・俺はそんなの許さねえなから。」

「・・・」

「・・・そうね。それに、アルちゃんのピンチなら、私達も動かない訳にはいかないわ。・・・まさかここまできて付いてくるな、なんて言わないわよね？ゼロ」

「・・・」

「そういう事だ。何もかも1人で抱えるな・・・少しは俺達も頼れよな・・・」

ポン・・・と、ゼロの肩を叩く。

「・・・へっ・・・お前ら・・・遅れんなよ！」

『おう!』

そして、ゼロ達は自衛団の本拠地へと向かった。

――

自衛団本拠地前にたどり着いたゼロ達は、入り口で足止めを余儀なくされていた。

「・・・あの見張りの量はなんなんだ?おい・・・」

口にして、がつくりと肩を落とす。

無理もない。

普段、この入り口には2人ほどしか見張りはいない。

しかし、今日は何かを警戒するように、見張りは2人に加えて、3人が辺りをうろつくと巡回している。

ゼロ達は茂みに隠れていたが、見つかるのは時間の問題である。

「どうする?このまま隠れてたら、見つかって追い返されるのがおちよ」

ひそひそと、小声で話す。

「よし・・・ゼロ、お前行け」

「なんでだよ・・・!?!」

「いいから行けつつの・・・!」

ドン!と、ゼロの背中を押す。

ガサガサ

『あ・・・』

茂みから追い出されたゼロを見て、見張り一同、目を点にする。

「ゼ・・・ゼロが来たぞ!」

見張りの1人が声をあげる。

すると、辺りを巡回していた見張りも一斉に戻ってくる

「何をしに来た貴様!?!」

「え・・・え」と・・・トイレを探してた・・・って、駄目?」

「当たり前だ!そんな理由で・・・」

ボク!

ドサ・・・

『な！？』

これにはゼロも驚いた。

話していた男がいきなり崩れ落ちたのである。

その後ろにはミリアがいた。

「おのれ……！」

別の見張りがミリアに近付く。

ボク！

ドサ……

『え！？』

全く同じパターンで倒れる。

やったのは言うまでもなくジョンド。

「お前ら！？……クソ！捕らえろ！逃がすな！」

一斉に襲いかかる見張り達。

「ゼロ！時間はあまりかけられない！ノルマは1人だ！」

「……結局これかよ……」

言って、乱闘が始まった。

相手は鎧をフル装備である。

ゼロ達は、唯一隙がある顔面を確実に捉え、あっという間に倒した。しかし、さつき気絶させたはずの見張りが笛を取り出して、ピーー！と、吹いた。

「あ！このやる！」

バコ！と、ゼロは蹴りを入れる。

その一撃で、完全に気絶した。

「ち！もうコソコソしてられない！突っ込むぞ！」

「そういう分かりやすいのを待ってたぜ！」

言って、3人は中に突入した。

――――

ゼロ達は道に迷っていた。

施設の中は迷路のように入り組んでいて、どこに行けばいいかわからずに走っていた。

「ちょっとジョン！いつになったらアルちゃんの所にたどり着くよ！？」

「俺に聞いたって分かるか！俺だってこんな所初めてだ！」

「ゴチャゴチャ言うな！立ち止まってる時間がねえんだから進むしかねえだろ！」

「あんたにそんな事言われなくても分かってるわよ！」

などと、軽い口喧嘩をしていると、前から人影が見えてきた。

「いたぞ！侵入者だ！」

そう叫んで、人影はこちらに向かって走りだした。

「またかよ・・・」

「ホント・・・ここに入ってからもう5回目よ？」

ぶつぶつ言いながらも、ゼロ達は目の前の敵を蹴散らす。

全員が気絶したのを確認し、再び走りだそうとしたその時

「侵入者だ！逃がすな！追い詰める！」

その声に、ゼロ達は後ろに振り向く。

・・・そこには、大量の自衛団が駆けつけていた。

「ちい！時間がないってのに・・・」

「まて」

向かって行こうとしたゼロを、ジョンが止める。

「お前は先に行け・・・ここはミリアと俺で食い止める。」

「な！？」

ゼロは驚きを隠せない。

「何言ってるんだよ！俺も一緒に・・・」

「時間が無いんだろう！？だったら早く行け！・・・ここで逃げても、後で挟み撃ちに合うだけだ。だからお前は先に行け。」

「だったら俺が残る！だからお前らが先に行け！」

「・・・」

目を伏せて、はぁ・・・と、ジョンはため息をはく。

「・・・お前、さっき自分で言ったじゃねえか。・・・アルの普通を守りたいってよ・・・それに、アルは被害者でお前がその責任を

とるんだろ？・・・なら、お前が助けに行かないでどうするんだよ・
・・・」

「・・・」

何も言い返せない。

「・・・ゼロ、さつさと行きなさい・・・それとも、私達のこと心配してるの？・・・だったら余計なお世話よ・・・私を誰だと思ってるの？伊達に鬼のミリアって呼ばれてないわ・・・分かったらさつさと行きなさい」

「・・・分かったよ・・・死ぬなよ2人共！」

「お前もな！」

そう言つて、ゼロは走り出した。

「・・・行つたか・・・」

「ホント・・・世話の焼けるやつね・・・」

「ミリア・・・」

ジョンは視線を自衛団に向ける。

「ええ・・・分かつてるわ」

ジョンとミリアは、まっすぐに敵を見つめる。
覚悟は決まった。

「よっしゃあ！行くぜ！」

言つて、ジョンとミリアは向かつて行つた。

――――

ジョン達と別れて、結構時間が経つた。

けど、未だにアルの所にたどり着けない。

ゼロは、焦りながらも、慎重にアルを探していた。

そんなゼロの前に、巨大な扉が姿をあらわす。

「ここか・・・？」

見たところ、扉は複数の人数で開けるようになってる。

しかし、ここまで来て、泣き言は言つてられない。

ゼロは扉に手をあて

「んっ・・・おおおお・・・！」

力任せに扉をこじ開けた。

ギギイ・・・と、重い音をたてて扉が開く。

・・・ゼロは、そこにあつた光景に絶望した。

「誰だ!？」

誰かが叫んでいる。

けど、それも遠くて聞こえない。

・・・そこには、貼り付けにされたアルと1人の男が立っていた。そして、アルの体に、あつてはならないものが目に入った。

・・・一本、アルの胸元から何か出ている。

いや・・・“刺さっている”

よく見れば、それは矢だった。

男の手には弓が握られている。

・・・間に合わなかった。

そう思いながらも、ゼロは駆けだしていた。

「アル!!」

急いでアルを解放し、抱きかかえる。

「アル!しっかりしろ!アル!」

ゼロが必死に呼びかける。

すると、アルはゆっくりと目を開いた。

「・・・あれ?・・・幻かな?・・・ゼロが、見える・・・」

アルはたどたどしい声でそう言った。

「幻なんかじゃない!俺はちゃんとここにいるぞ!」

「・・・ゼロ・・・?」

確かめるように、アルの手がゼロの顔に触れてくる。

ゼロは、その手をぎゅっと握り返す。

「あ・・・ゼロ・・・幻じゃなかった・・・」

ふふ・・・と、弱々しく笑顔を作る。

「来て・・・くれたんだ・・・私・・・なんかのために・・・」

「ああ・・・!当たり前だろ・・・!」

「ふふ・・・やっぱり優しいね・・・ゼロ・・・」

・・・消えそうなその笑顔を見ていて、自然と涙がこぼれた。

「・・・ゼロ？・・・泣いてるの・・・？」

「馬鹿やろう・・・！お前が泣かせたんだよ・・・！」

「そう、なんだ・・・でも、泣かないで・・・ゼロには、笑ってて、欲しいな・・・」

声がだんだんと弱くなる。

「・・・ゼロは優しいすぎるよ・・・でも、私、そんなゼロのことが・・・好きだよ・・・」

「分かった・・・！分かったから・・・！続きは帰ってから聞くから・・・だから、一緒に帰ろうぜ・・・！」

アルは、アハハ・・・と、小さく笑う。

「それは多分無理かな・・・。」

アルの手から力が抜けていく。

「アル・・・？アル！？」

「・・・もし、生まれ変われるなら・・・もし、次があるなら・・・次は、普通の女の子として、ゼロに出会いたいなあ・・・」

「アル・・・！」

「・・・今まで、ありがとう、ゼロ。・・・少しの間、だったけど、あなたと出会えて、よかった・・・。あなたを、殺さなくて、よか・・・た・・・」

・・・ガクンと、アルの体から力が抜ける。

「アル・・・？・・・お前だけいっぱい話すなよ・・・俺の話も聞けよ・・・なあ・・・」

・・・反応はない。

「・・・アルウーーーー！！！」

・・・ゼロは、アルの体を抱きしめる。

「・・・俺はまた・・・！また大切なものを守れなかった・・・！守ると誓ったのに・・・守れなかった・・・！」

・・・ゼロはゆっくりと、アルの体を寝かせる。

「なんだ？お前、そのガラクタを助けにきたのか？」

後ろから声がする。

その言動、憎くてたまらない。

ゼロは、ゆっくりと後ろを振り向く。

「全く・・・こんな男1人殺せんとは・・・とんだ役立たずだったな。・・・愚かな奴だ」

フン・・・と、男は鼻で笑う。

「・・・何故だ・・・？」

「何だ？よく聞こえんぞ？」

「何故アルを殺した！？」

ゼロは、怒りをぶつけるように叫ぶ。

「何故？だと・・・？」

クツ・・・と、男は笑いをこらえる。

「そいつにはお前を殺すように命じた！そのために私がそいつを鍛えてきた！なのにそいつは、くだらない情に流され、結果としてお前を殺せなかった！だから殺したのだよ！使えない道具はゴミではないからな！」

「テメエ・・・一体何様のつもりだあゝゝ！？」

カチツ・・・と、頭の中で何かが外れた。

もう十分だ。

これ以上あいつのコトバを聞くヒツヨウはない。

あいつの力オ、声、シグサ、全てがニクイ。

反吐がでそうだ。

ゼロは、臨戦態勢をとる。

「ほう・・・やる気か？この人数相手に・・・」

気が付けば、周りには大量のニンゲンがそこにいた。

カンケイない。エモノが増えるだけだ。

「・・・ウオオオオオオオオオ！！！」

ゼロは吠えた。

獣のような咆喉。

そして、最も近くにいた1人の男に飛びかかり、頭を鷲掴みにする。

「が！？ぐあ！」

男は何が起こったのか分からずに、苦しみだした。
ミシミシと音がする。

「ぐっ……ぐわあ！」

ブチブチと、ゼロは男の頭をもぎ取った。

鮮血が飛び散り、ゼロは頭から赤色に染まる。

男の体は、ビクビク震えながら、その場に倒れた。

ゼロはもぎ取った頭を邪魔そうに捨てる。

「このバケモノが……！」

もう1人の男が、剣を片手に突っ込んで来る。

ゼロは、その男の剣を避け、男の腕を掴む。

その腕を、普通では曲がらない方向へ折り曲げる。

「うわ……うわあああ！」

ウルサイ……

……次の瞬間、男の叫び声はなくなった。

ゼロが、その男の頭を握り潰したからである。

そして、何も言わなくなった体から、ブチブチと腕を引きちぎる。

その後、一斉に襲いかかった男達は、ゼロによって悲惨な最期をとげた。

ある者は、顔を潰され、また、ある者は、胸を貫かれ、そして、またある者は、壁に叩きつけられて、そのまま押しつぶされた。

……10分後、そこにはすでに、人と呼ばれていた者の姿はなかった。

むせかえる血の匂い。

辺りには、どうみても出来の悪いスパゲティのような物体が、ミートソースと一緒にぶちまけられていた。

誰一人、何一つ原型を留めているものはなかった。

ゼロとアルを除いて……

「アル……」

ゼロは、アルの下へ歩み寄る。

ドクン・・・

「!？」

わずかに聞こえたこの音に、ゼロは驚く。
自分のものとは別の音。

「まさか!？」

ゼロはアルの胸に耳を当てる。

・・・ドクン・・・ドクン・・・

動いている。

つまり生きている。

よく見ると、矢は、僅かに心臓から外れていた。

つまり、アルはあの時気絶しただけである。

だが、このままだと命が危ないのも事実。

「待ってるよ、アル!・・・必ず助けてやるからな・・・!」

そう言つて、ゼロはアルをおぶる。

そして、出口に向かって、全力で走り出した・・・

第24話

・・・私は一体、誰なんだろう？

幼いころから、人を殺す事だけを教えられた私。

何一つ、自由を許されなかった私。

・・・きつと、私が死んでも、誰も悲しまない。

私を含めて・・・

・・・死んだら終わり。

先がないだけ。

たった、それだけ・・・

・・・なのに、何でだろう？

何故、あなたは泣いてるの？

何故、そんなに悲しい顔をしているの？

いつも他人に拒絶され、いつも1人だけ傷付いて・・・

なのに、いつも誰かのために戦ってるあなた。

優しい瞳の裏にある悲しみを、決して表にだすことはない。

その体は、もうぼろぼろなのに、それでも戦いをやめようとしない。

その翼は、傷付いているのに、それでも羽ばたくことを諦めない。

あなたは、いつも1人で傷付いてる。

だけど、あなたは独りじゃない。

私も、あなたに出会って、独りではなくなった。

・・・ああ、忘れていた。

私は、あなたに出会ってようやく、私を見つけられたのだった。

もし、また私が私を見失ったとしても、きつとあなたは“お前は
前だ”って言って、優しく笑ってくれるだろう

・・・誰かが私の手を握っている。

そろそろ、目覚めよう・・・

――

「・・・・・・・・」

・・・目を覚ますと、最初に天井が視界に広がった。
アルは、ゆっくりと顔を横に向ける。

そこには、ゼロの姿があった。

頭だけベッドにのせて、スースーと、寝息をたてている。

その手は、しっかりとアルの手を握っていた。

「あれ？・・・私・・・生きて、る・・・？」

不思議に思っ、辺りを見渡す。

・・・ここは、どうやら病院らしい。

「ん・・・」

息苦しさを覚えて、自分の胸に手をあてる。

そして、自分の胸が包帯でぐるぐる巻きにされていることに気付いた。

「むぐ・・・」

変な声を出して、ゼロが起きる。

「あ・・・アル・・・おはよう・・・」

なんて、間の抜けたことを口にする。

「お・・・おはよう・・・あの・・・まさか、寝ぼけてる？」

「寝ぼけてねえよ・・・俺はいつも通り・・・」

言いかけて、はっとする。

「アル！よかった！目が覚めたんだな！」

「おかげさまでね」

「いや、よかった！・・・で、一体いつ起きたんだ？」

「今さっき・・・ゼロ、それより・・・」

アルは恥ずかしそうに顔を伏せる。

「なに？」

「そろそろ、手を・・・」

「え？」

す・・・と、視線を下に落とす。

「うお！」

ゼロは、慌てて握りっぱなしだった手をはなす。

「あ、いや、その・・・わざとじゃないぞ・・・」

「あ・・・うん・・・」

ゼロは、アルが気を失う前に言ったセリフを思い出して、顔が赤くなる。

気まずい雰囲気か2人を包む。

「あらあら・・・アツアツねえ、お2人さん。」

扉が開いて、ミリアとジョンが入ってきた。

「バ・・・バカなこと言うなよ！」

「あら？顔が真っ赤よ？熱でもあるのかしら？」

「お前・・・ろくな死に方しないぞ・・・」

ミリアは楽しそうにゼロをからかう。

「青い春と書いて青春。昔の人はうまいことをいったものだな。」

「ジョン・・・いきなり年寄り臭い発言は止める。」

「あゝあ・・・このアツアツの空気は、お姉さんにはキツイわ。」

パタパタと、わざとらしく手で顔を仰ぐ。

「年取った証拠だろ？オバサン」

「オバ・・・オバサン！？」

ぴし！と、ミリアが固まる。

「あゝ、なんか疲れた。俺はもう帰るぞ・・・」

ふらふらと、ゼロは病室から出ていった。

「こらゝ！逃げるなゼロ！戻ってこい！」

「落ち着けミリア。ここ・・・一応病院だぞ？」

うゝ・・・と、唸るミリアをジョンがなだめる。

「あの・・・ジョン？」

「何だ？アル」

「なんかゼロ、物凄く疲れてたみたいだけど・・・」

「ああ、それは仕方ないだろ。一週間もお前に付きつきりだったんだから。」

「一週間！？私、そんなに寝てたの！？」

「ああ。死んだみたいに眠るもんだから、もう起きてこないんじゃないかと心配したぜ・・・」

「あ、うん・・・その、ありがとう」

「礼なら俺達じゃなくてゼロにしろよ。俺達は何もしてないしな」

「うん。わかつ・・・」

た、と言おうとしたとき突然、街中に低い笛の音が響き渡った。

「な！？・・・まさか！？」

ボタン！と、勢いよく病室の扉が開く。

「おい！警報だ！古竜がきたらしいぞ！」

扉を開いたのはゼロだった。

急いで戻ってきたのだろう。

ハアハアと、肩で息をする。

「ああ！どこに現れたのか分かるか！？」

「よく分からん！ただ、ここに戻る途中で、他のハンター達が雪山がどうか言ってたぞ！」

「雪山か・・・この街からはまだ離れてるな・・・」

「くそ！・・・なんでこう次から次へと・・・！古竜ってのはそんなにヒヨヒヨ出てくるもんなのか？」

「それはないだろう・・・明らかに異常事態だ・・・」

「で・・・どうする気なの、ゼロ？」

「決まってるじゃねえかミリア！・・・雪山に直行だ！」

「だと思っただわ・・・」

はあ・・・と、ため息をはく。

「よし！俺は一回戻って自分の装備を持ってくる！その間にジョンとミリアは集会所で手続きを済ませといてくれ！」

「ゼロ、私は？」

アルがたずねる。

「お前はまだ寝とけ。・・・安心しろ。古竜は絶対追い返してやるから」

「うん・・・わかった。・・・無理、しないでね。」

「ああ。・・・じゃ、後で集会所に集合な！」

言って、ゼロは走り去った。

――

30分後、3人はフル装備で集会所に集まった。

「よう。準備は整ったか？」

「私は大丈夫。手続きも完璧よ。それにしても・・・」
ぐるっと、辺りを見渡す。

しかし、見渡したところで、ここにはゼロ達しかない。

「本当にこの街のハンターは腰抜けばかりね・・・」

「いつか潰れちまいそうだなあ、この街・・・。まあ、それはさておき・・・ジョン、何か情報はつかめたか？」

「ああ。場所は雪山で間違いない・・・だが・・・」
ジョンは顔をしかめる。

「どうした？」

「・・・出現した古竜だけだな・・・聞いたことない名前だった・・・」

「何だよ？」

「キリンって名前らしいぞ。・・・しかも、出現率が圧倒的に低いから、どんな奴なのか検討もつかん。」

「きりん・・・？本当に聞いたことない名前ね・・・」

「・・・だが、古竜って呼ばれてる以上、気を抜くわけにはいかな
いだろう」

「ああ、そうだな・・・」

3人を重い空気が包む。

「・・・ま！ここで悩んでも仕方ないだろ！とりあえず、雪山に
行ってみようぜ。」

「それもそうね。・・・そうと決まれば、早速行動に移るわよ。」

3人は、船に乗り込む。

「・・・忘れ物とかないな？」

ゼロが聞くと、2人は無言で頷く。

「・・・んじゃ、雪山で古竜狩りとしゃれこみますか！」
そう言って、ゼロは船を出す。
船は、雪山に向けて、ゆっくりと動き出した・・・

第25話

「寒い・・・暑いのも嫌いだけど、寒いのはもつと嫌いだ・・・」

ここは雪山。

ゼロは、到着した途端に凍えだした。

「文句いうな・・・ほら、これ飲め」

言って、ジヨンはホットドリンクを差し出す。

「おお！ありがたい！」

ジヨンの手からホットドリンクを取り上げて、グビグビと飲み干す。

「ぷはあ・・・ふつかあゝっ！」

「あんた緊張感が無さ過ぎよ！少しは緊張しなさいよ！」

「分かってるって。お前こそ、緊張し過ぎるなよ」

「余計なお世話よ」

ふん！と、ミリアは鼻を鳴らし、わざとらしく胸を張る。

「・・・そうみたいだな。んじゃ、行きますか」

そう言って、ゼロ達は雪山に登りだした。

――

3人はしばらく雪山を登っていたが、これといった異常は見当たらなかった。

天候は、雪がちらついてはいるが、これはいつものことである。

モンスターも、数は減ってはいるが、それなりの数のモンスターはうろついている。

「うゝん・・・ものの見事に異常なしだな・・・」

「そうねえ・・・本当にいるのかしら？・・・ゼロ、何か分かる？」

ミリアがゼロに顔を向けると、ゼロは真剣な顔をしていた。

「ああ・・・ここで間違い無さそうだ・・・この辺りに来てから、圧倒的な存在感を感じる・・・」

言って、冷や汗が流れる。

「と、いうことは・・・」

「ああ・・・近いな・・・。」

「どこらへんにいるか分からないの？」

「それは分からないが・・・見つけるのは簡単だと思う・・・多分、あっちだ・・・。」

そう言つて、山頂へ続く一本道を指差す。

「根拠は？」

「よく見る・・・他のモンスターはあそこに近付かない・・・正直俺も、近寄りたくない・・・。」

「でも、行くしかない・・・だろ？」

「ああ、そうだな・・・。」

そうして、慎重に進んでいくと、それはいた。

青く、冷たい光を放つ体は馬に角が生えたような姿で、それほど大きくはない。

しかし、光輝くその姿は、どこか神のようなものを連想させる。

「あ・・・あれが・・・キリン、か・・・？」

ジヨンは驚きを隠せない。

「確かに・・・こうして対峙すると凄い存在感ね・・・。」

「・・・。」

「あ・・・おい、ゼロ！」

ゼロは無言でキリンに歩み寄る。

ゼロに気付いて、キリンがゆっくりと振り向く。

“ほう・・・力の波を辿ってみれば・・・珍しいものに出会ったな”

「な！？お前しゃべれるのか！？」

ゼロは驚く。

“・・・いや、これは言語ではない。私の意志を、お前の脳が都合よく受け取っているにすぎない”

「まじか・・・古竜つてのはそんな芸等もできるのかよ・・・。」

”できる者は限られている。例えば、先日汝に倒された鋼の子は、まだ若い故にこうした技を持ち合わせていなかった”

「お前・・・何故それを知っている！？」

「おい、ゼロ？」

唐突に、後ろからジョンが声をかける。

「何だ、ジョン？」

「いや・・・お前・・・さっきから誰としゃべってるんだ？」

「え・・・？」

ゼロは驚いて、キリンの方を向き直る。

“・・・その者達には聞こえまい。人間の脳に、それ程の潜在能力はない・・・故に、我が声が聞こえる汝は人間ではない、ということだ”

「お前・・・俺が何なのか知ってるのか！？」

ゼロは、思わず熱くなる。

“・・・知っている・・・と、言うより覚えているというほうが正しいか・・・”

「何・・・？」

“言った通りだ。我は一度、汝に会った事がある。・・・汝はまだ赤子だった故、覚えてはおらぬだろうがな・・・”

「いつたい、いつ・・・？」

“・・・あれは・・・随分昔の事だ・・・気の遠くなる程昔の話・・・まだ我が生を受けて100年しか経っていないとき・・・今から500年前の話だ・・・”

キリンは、昔を思い出すように語りだす。

“汝は、生まれ落ちた時から異常な力を有していた。・・・まわりの者は、汝を目にした瞬間に、汝の強さを確信したという。・・・^{いにしえ}古の血を色濃く受け継いだ者として、汝は崇められた。そして、我

は汝の祝詞の儀を、神の代行者として執り行った”

「ちよつとまで」

話の途中で、ゼロが割り込む。

「お前・・・いや、お前等にとって、人間や、それに準ずる何かは敵じゃ無いのか？」

ゼロが聞く。

“確かに人間や、人間が竜人族と呼称している者達とは敵対していた。しかし、汝等是我々を敵として捉えず、また我々も汝等とは友好的であった。汝等は戦闘種族でありながら、むやみな破壊はしなかった。我々は、汝等のそういう所を、ある意味で敬愛していた。”

「戦闘種族・・・？」

ゼロは首を傾げる。

“・・・生物はみな、それぞれに適した能力を身に付け、そして進化する。

人間は、その種をより多く残そうとしたため、繁殖能力が高い。

竜人族とは、物事に対する追求、研究などをより自分のものにするために、人間に比べると遥かに長命である・・・”

「・・・じゃあ、俺は何なんだ？」

“・・・汝等は、人間や竜人族と似通ってはいるが、種として全く別の系統から進化したものだ。汝等は、もともとがヒトではない。汝等は、太古の昔・・・我々が存在するより昔に、竜がより強い力を求めて進化した姿だ”

「竜が・・・進化したもの・・・？」

“そう・・・我々は汝等の事を、ドラゴノイドと呼称した”

「ドラゴ・・・ノイド・・・」

初めて聞く名に、ゼロは戸惑う。

“・・・寿命は、人間とさほど変わりはない。たかだか50年程長命なだけだ。・・・だが、戦闘能力は計り知れない。人間はもちろん、並みの竜でさえその比ではない。中には、その姿を変貌させる者もいたと言う。定かではないが、竜の血を色濃く受け継いだ汝ならあるいは・・・”

「なるほどな・・・それで色々なことに納得がいく。」

“これ以上の事が知りたいならば、古の塔に赴くがよい。”

「古の塔・・・？」

“その昔、神々が地上と天界を行き来するために建てた、天空に向かってそびえ立つ巨塔だ。そこに汝等の全てが記されているはずだ”

「ちよつとまで。」

立ち去ろうとしたキリンを呼び止める。

「最後に、2つ質問がある」

“・・・何だ？”

「・・・俺とお前が出会ったのは500年前だろ？・・・なら、なんで俺は今ここにいるんだ？」

“・・・それも、古の塔に記されているだろう”

「そうか。・・・じゃあ2つ目。・・・お前、これからどうするんだ？街を襲うって言うなら・・・」

スラリ・・・と、ゼロは剣をかまえる。

“安心しろ。我は確認するために立ち寄っただけだ・・・。襲うことも考えたが、汝がいるなら話は別だ・・・。ドラゴノイドと敵対したところで、百害あって一利無しだ・・・”

「それを聞いて安心したぜ・・・」

ゼロは剣をしまう。

“しかし、解せんな・・・何故、汝が人間などの味方をするのだ？”

「守りたいものがあるからだ。」

迷わずに、まっすぐな目で答える

“そうか・・・では・・・さらばだ・・・”

そう言つて、キリンは駆け出して行った。

ゼロは、見えなくなるまで、その姿を見届けていた・・・

第26話（前書き）

なんか最近、小説がどんどんモンハンから離れてしまってるような気がします・・・（^| ^;）

第26話

ゼロ達は、雪山から街に戻り、集会所で話し合っていた。

集会所は、古竜が去ったと知らせて間もなく、いつもの活気を取り戻していた。

「ゼロ、さっき何があったのか、そろそろ話してくれ・・・」
「・・・」

ゼロは何も言わない。

顔を伏せて、何か考え込んでいる。

「ゼロ、黙ってたらなにも分からないわよ。」

「・・・すまねえ。・・・俺もいまいち理解できてないんだ・・・」
「だから、一体何があったんだ？」

ジョンが聞くと、ゼロは渋々口を開く。

「・・・信じられないことなんだけどな・・・キリンが喋ったんだよ・・・」
「・・・」

・・・沈黙。

冷たい視線がゼロに向けられる。

「お前ら・・・」

はぁ・・・と、ため息をはく。

「信じてないだろ？」

『もちろん』

絶妙なタイミングで2人は頷いた。

「はぁ・・・もういい・・・」

ゼロは呆れて席を立つ。

「あゝ、分かった。分かったからとりあえず待て」
「ふん・・・」

ジョンがなだめて、ゼロは拗ねた様子で椅子に座る。

「・・・で、飯にお前の言うとおりにキリンが喋ったとして、何で

お前にしか聞こえなかったんだ？」

「さあね・・・正確には、俺の脳がキリンの意志を読み取ったらしい。んで、人間の脳にはそれだけの能力はないって言ってたぞ」

「ふうん・・・じゃあ、キリンはお前が何なのか知ってたのか？」
そう聞いた途端に、ゼロは表情を曇らせた。

「そこが一番の謎なんだよ・・・」

ゼロは顔をしかめる。

「俺は・・・赤ん坊の頃、一度あいつに会ったことがあるらしい」

「赤ん坊？」

ミリアが首を傾げる。

「嫌な話をするけど、あんたは産まれてすぐ檻に入れられたのよ？
そんな暇は無いと思うけど・・・」

「そのことなんだけだよ・・・俺の本当の親は、俺を檻に入れた奴らとは違うんだと思う・・・」

「だが記録には、お前は産まれてすぐ檻に入れたって書かれてるぞ」
「それがそもそも間違ってるんだ・・・」

そう、そんなはずはない・・・

「・・・どういうことだ？」

次第に、ジョンとミリアも表情が真剣になってくる。

「その前に、1つ知りたいことがある」

「何だ？」

「・・・俺を檻に入れた奴らは普通だったか？」

「？」

質問の意味が分からず、ジョンとミリアは顔を見合わせて、不思議そうな顔をする。

「・・・質問のしかたが悪かった。・・・率直に聞くと、そいつらは人間だったか？」

「ああ、人間だった・・・あ！」

ジョンは、何かに気づき、はっとする。

「な？おかしいだろ？」そう、おかしいんだ。

「なんでこんな事に気付かなかったんだ……。情報ばかり見ていて、現実をみていなかったか……。」

2人が納得する横で、ミリアが頭に？を浮かべている。

「まだ分かんねえのか？」

「ええ、さっぱり。」

「だから、俺を研究してた奴らは人間だろ？でも、俺は人間じゃない。……つまり、俺は人間から産まれるはずはないんだ。」

子供でも分かる事だ。

「……でも、記録にはミュータント……。突然変異って書かれてたわ……。本当にその通りだとしたら？」

「それはないだろ……。それに、キリンは他にも面白いことを言ってるやがった。」

ミリアとジョンは、何を？と、首を傾げる。

これを話していいのだろうか？

そう思ったが、思い切って口にする。

「これは極めつけに話がぶつとんでるぜ……。俺があいつに出会ったのは、500年前らしい……。」

『ご……ごひやくねん！？』

ガタン！

「おわあ！」

ジョンとミリアは目を見開いて立ち上がった。

ゼロは、驚いて身を後ろに引く。

「お……。落ち着けて。」

ジョンは、ガシッと、ゼロの胸ぐらを掴む

「落ち着いていられるか！500年だぞ！？いくら何でも限度があるだろう！」

「そうよ！5世紀よ5世紀！あんた実は500才！？」

「問題はそこじゃねえだろ！俺だって信じられねえよ！……。でも」
『でも？』

ゼロは、少し目をふせる。

「あいつが・・・キリンが、嘘を言ってるようには思えないんだ・・・」

「・・・何故か、キリンの言ったことを、冗談だと笑い飛ばせない自分がいいた。」

「あ・・・うん、まあ・・・お前がそう言っなら・・・」

ジヨンは、ゆつくりとゼロから手を話す。

「あ・・・苦しかった」

「すまん。つい、熱くなった・・・」

ジヨンとミリアは椅子に座る。

「で・・・結局お前は何者なんだ？」

「・・・あいつらは、俺のことをドラゴノイドって呼んでるらしい・・・」

「ドラゴノイド・・・」

ジヨンは顔をしかめる。意外な反応である。

「なんだ？知ってんのか？」

「詳しくは知らん。・・・この前、アルを救出に向かった日・・・

俺は屋敷に戻ってただろ？」

言われて、その日の事を思い出す。

「あゝ、調べるものがあるとかないとか・・・」

「ああ、そうだ。・・・あの時、俺はお前が何者なのかを調べてた。

・・・変な意味じゃなくて、純粹にお前の力になりたかったからだ」

「そんな事、お前が気にする必要ねえのに・・・苦労かけてすまねえな」

「それこそ気にするな・・・でだ、その時、人間の突然変異の症例とか、医学書なんかを手当たり次第に読んでいたんだが、これといつて参考になるものはなかった」

「それで？」

「・・・それらしい情報を得られなかったから、気まぐれに違うジャンルのものを探してみたんだ」

「違うジャンル？なんだよ、それ？」

「・・・考古学だ・・・」

「考古学・・・？」

「そう・・・いろいろな土地にまつわる伝承や、歴史上の出来事、古代の遺跡なんかの事を調べてた・・・そしてHERETICっていうタイトルの本を見つけたんだ・・・」

「HERETIC・・・異端者、か」

「・・・その本に、ドラゴノイドについてほんの少しだけ書かれてた。・・・どこで生活していたか、どんな種族だったのか、そして何故滅んだのか・・・それだけだ」

「まさか、生活の場所は・・・」

「そのまさか・・・古の塔と書かれてた」

「じゃあキリンが言ってた事は・・・」

「恐らく、正しいな・・・」

何だろう。

知りたい事のはずなのに、聞いたことに凄く後悔する。自分は人間だと、心の奥底で眠っていた小さな希望が、今一気に吹き飛ばされてしまった気がした。

「・・・」

2人は沈黙する。

「ちよつと、2人共？」

その沈黙を破ったのはミリアである。

「何2人で納得してるのよ。私は置いてけぼり？」

むゝ・・・と、眉間にシワを寄せ

「私にも納得できるように説明しなさい」

と、ゼロに詰め寄る。

「分かった分かった・・・で、何から知りたい？」「まず、どんな種族だったのか教えて」

「・・・戦闘種族だ・・・ジョンの読んだ本にはなんて書いてあった？」

「同じく戦闘種族と書かれてた。・・・見境のないバーサーカーだ

とさ・・・」

「そうなの、ゼロ？」

「さあね・・・キリンは、無闇な破壊はしないって言ってたぞ。それで、古竜達と仲良しこよしやってたらしい・・・あゝ、でも・・・」

「ゼロは何かを思い出し、少し残念そうな顔をする。

「俺だけは本当にバーサーカーなのかも・・・」

口にして、自分が自分で無くなるような感覚を思い出す。

目の前は真っ赤に染まり、喉がカラカラと渴きだす。

そして、目の前で生命活動しているものがあればすべて停止・・・つまり、殺すことしか考えられなくなる。

体中の全細胞が、一秒でも早く敵を殺せと命令する。

「・・・ま、俺は人間から見ても、ドラゴノイドから見ても、変わり者には違いねえだろ・・・」
少し、呆れ気味に言う。

「それと、俺の祖先・・・つまり、ドラゴノイドの祖先ってのは猿じゃなくて竜らしい・・・竜が力を求めて進化した姿・・・だったかな？」

「なる程・・・もしかしたら、同じ生き物同士、その竜の血のおかげでキリンと交信出来たんじゃない？」

ミリアの発言に、ゼロとジョンは、なる程・・・と、頷く。

「それは一理あるかもしれん。なかなかいい仮説だ」

「なんだよ、今日はやけに冴えてるじゃねえか」

「今日も、の間違いじゃなくて？」

ミリアがそう言うのと、ゼロは少々投げやりに、はいはい・・・と、こたえた。

「なんかムカつくわね・・・まあいいわ。で、何故滅んだの？」

「それは俺も知らねえんだ・・・ジョン、本にはなんて？」

「本には、伝染病で滅んだっていう説が一番有力だと書かれてた」
「伝染病か・・・」

うん．．と、ゼロは考え込む。

「どうした、ゼロ？」

「．．．」

．．．何か違う。

もっと、大変な事があつたような気がする。

でも、思い出せない

．．．何かひつかかる。

「おい、ゼロ」

呼びかけられて、我に返る。

「すまねえ．．．で、なんだ？」

「なんだじゃねえよ．．．」

はあ．．と、ジョンはため息をはく。

「これからどうするんだ？．．．やっぱり、行くのか？」

「．．．ああ、行くしかないだろ」

言って、顔を伏せる。

「なんだ？何か言いたいことがあるのか？」

ジョンが聞くと、ゼロはゆっくりと顔をあげる。

「．．．すまねえ．．．今回は俺１人で行かせてくれ」

「．．．何だと？お前、また１人で抱え込む気か？」

ジョンは顔をしかめる。

「．．．お前らが怒るのは分かる。俺は、お前らにそのくらい大事に思われてるのも、分かつてる。それは、正直ありがたい。本心から感謝する．．．だけど、これは俺の問題なんだ．．．向こうには、何があるか分からない．．．ただ、何となく嫌な予感がする．．．だから、お前達を巻き込みたくない．．．頼む．．．」
ぐっと、腕に力が入る。

ジョンとミリアは、しばらく黙ってゼロを見つめていた。

「．．．分かったわよ。あんたには負けるわ．．．」

沈黙を破ったのは、またもやミリアだった。

「すまねえ．．．」

「もういいわよ・・・今に始まったことじゃないしね・・・」
ふう・・・と、ミリアは呆れている。

「俺もミリアと同意見だ・・・ただし、1つ条件がある」

「何だ？」

「・・・何があっても、必ず帰ってこい。そのままどっかに行っちゃうって言うのは無しだ」

・・・その言葉に救われた。

自分にはまだ、帰る場所がある。

待っていてくれる人がいる。

たったそれだけのことなのに、これほど嬉しいことはない。

「ああ、もちろん・・・！」

ゼロは、力強く頷く。

「・・・そうと決まれば、さっさと行ってこい・・・アルには俺から言つといてやる」

「すまねえな。よろしく頼む」

言つて、ゼロは船着き場入口まで歩いて行く。

入口に近付いたとき、ゼロはいきなり振り返った。

「どうした？」

「・・・俺、知り合つたのがお前達で本当によかつた！・・・俺みたいな奴の事を、平等に見てくれて、

本気で心配してくれる・・・なんか・・・いろいろありがとな！」

心からの言葉。

今、一番伝えたい気持ち。

ゼロは、自分の心を正直に口にした。

「・・・って、これでお別れみたいになっちゃったな。・・・でも、

俺は必ず、お前達の所帰ってくるからな！」

「当然よ！帰ってこなかつたらこっちからぶっ飛ばしにいくからね！」

「その通りだ！その時は覚悟しとけよ！」

ゼロは、ハハハ・・・と笑つて、それじゃあ行ってくる！と、言っ

て、去っていった。

そして、船に乗り込み、自分の過去を求めて、古の塔へと向かって行った・・・

第27話

「ここが・・・古の塔・・・」

古の塔に到着したゼロは、その光景を目の当たりにしてあっけにとられていた。

・・・冷たく澄み切った空気が辺りを包んでいる。

そこに流れる滝や川など、何でもないはずのものが、どこか神聖さを感じさせる。

辺りに生えている植物や、川を泳いでいる魚は見たことのないものばかり。

見たところ、かなり原始的な生き物であることは分かる。

・・・まるで、この空間だけ時間が流れていないようだ。

・・・なのに、見たことも聞いたこともない場所であるはずなのに、何故か懐かしさを感じずにはいられない。

「・・・」

すう・・・と、新鮮な空気を肺に流し込む。

空気が冷たいおかげか、それで頭が冴え渡り、余計な考えが消えていく。

「よし・・・いくか・・・」

そう言つて、ゼロが塔に入ろうと歩き出す。

・・・その時である。

“やはり来たか・・・”

「っ！！」

突然の事に、ゼロは驚く。

直に頭に流れ込んでくる声ならぬ声。

分からない訳がない。

「でてこいよ・・・麒麟」

ゼロが名を呼ぶと、崩れた柱の影から麒麟が出てくる。

「やつぱりかよ・・・で、何の用だ？」

“用、という程の事ではない。．．．ただ、汝がどうするのか氣になつてな．．．確認するだけのつもりであつたが、やはり氣になつてな．．．”

言つて、ゼロのもとに駆け寄つて来る。

“ついて来るがいい．．．ここからは我が案内人となろう”

「え？」

キリンの放つた一言に、ゼロは困惑する。

何故、古竜であるこいつが自分の味方をするのだろうか？

何か罫があるのだろうか？

でも、そんなセコい真似をする奴じゃない。

じゃあ何で．．．？

頭の中は混乱する一方である。

ゼロは、思い切つてたずねる。

「．．．お前、古竜だろ？俺の味方なんかしてもいいのか？」

ゼロがたずると、キリンはくるとゼロを向き直る。

“我は神の代行者．．．我は神の変わりに、汝を見極めねばならぬ。汝が、この時代にふさわしいかどうか．．．いかなる者にも我が行動を咎めることはできない．．．”

それを聞いて、ゼロは首を傾げる。

「なあ．．．お前の言う神つてのはどんな奴なんだ？」

“それは教えられぬ．．．たとえ汝の脳が我が声を聞けたとしても、この概念を理解させることは不可能だ．．．”

「そうか．．．だが、1つだけ言っておくことがある」

“なんだ？”

「たとえその神とやらが俺の存在を認めなかったとしても、消えてやるつもりはさらさらねえからな」

そう言い放つたゼロを見てキリンは、フ．．．と、小さく笑う。

“．．．そうだ。それでいい。たとえ神がお前を否定しようとも、お前は確かに実在する．．．そこに、神などという不確かな存在が介入する余地など全くない”

それを聞いて、今度はゼロが笑いをこぼす。

「お前・・・神の代行者とか言ってる割にはひどい言いようだな。一体どっちの味方なんだよ、お前は？」

“さてな・・・両方の味方か、あるいはどちらの味方でもないのかもしれないん・・・”

「・・・古竜つてのも、案外適当なんだな」

“ああ・・・そうかもしれないな”

ゼロとキリンは揃って苦笑する。

「なんか・・・俺はお前を誤解してたみたいだな・・・ドラゴノイドがお前らと仲良くしてたのも、なんとなく分かる気がする」

“そうか・・・だが、我も人間とやらを誤解していたらしいな・・・人間は愚かしき生き物ではあるが・・・中にはまともな者もいるよ。うだ・・・汝を見ていて気がついた・・・”

「そうだな・・・不思議な生き物だ・・・」

ゼロがそう言うと、キリンはふと何かを思い出すような様子を見せる。

“汝の名を、まだ聞いていなかったな・・・汝は今、なんと名乗っている？”

「ゼロ・・・」

“ゼロ、か・・・いい名だ・・・”

キリンは、少し嬉しそうにそう言った。

“ゼロとは00、すなわち無・・・だが、そこには無限の可能性が眠る・・・全てのものは虚無より生まれる・・・”

そして、キリンは塔の入り口に顔を向ける。

“・・・さあ、無駄口はここまでだ・・・中に入るぞ”

「・・・分かったよ・・・案内、頼むぜ」

キリンは無言で頷き、塔の中に入って行く。

その後ろに、ゼロはついていった。

――

・・・中に入って、30分ほど過ぎた。

壁には、よく分からない文字や、絵が描かれていて、その上からツタの原種と思われる植物が覆い被さっている。

・・・やはり塔の中も、どこか懐かしさと神聖さを感じさせた。

・・・ただ、なにか嫌な感じもした。

昔、ここで何かあった気がする。

・・・けど、思い出せない。

そう思いながらも、麒麟の後に続いて巨大な階段を登って行く。

「なあ・・・」

唐突に、ゼロが口を開いた。

「・・・1つ気になったんだけどよ・・・お前、何で雪山まで来たんだ？何かを辿ってきたと言ってたけど・・・」

「・・・自分では気付いていないのか？」

「え・・・？どういう事だ？」

麒麟の一言に、ゼロは首を傾げる。

「・・・私からは上手く伝えられぬ・・・どうしても知りたいのなら、賢者に会いに行くことだな・・・」

「賢者・・・？一体誰・・・」

「着いたぞ・・・頂上だ・・・」

ゼロの言葉を遮って、麒麟は建物の外に出る。

ゼロも、それに続いて外に出た。

・・・そこには、広大な空が広がっていた。

頂上は円の形をしていて、壁や柱などは無く、中央にある大きな剣が土台に突き立てられているだけだった。

闇色の半透明なその剣は、何かの結晶のような物で精製されていた。

「この剣は何だ・・・？」

”生と死を司る剣・・・我々の概念で、闇とは虚無・・・全ての生命は、虚無より生まれ、また虚無へと帰る。・・・その剣は、神々が天地創造の際にイタズラに生み出した物だと言われている・・・”

「で・・・俺にどうしろと？」

”その剣はドラゴノイドの中で、秘宝として扱われた・・・その剣

を握り、剣の記憶に触れることができれば、汝の求めるものを得ることができよう・・・”

「・・・」

ゼロは、少しためらいながら剣を握った。

・・・

何も起こらない

「あれ？・・・何も起こらないぞ・・・どうなって・・・」

途端、ゼロの目の前に光が広がる。

「な・・・んだ、これ・・・！」

何かはじけたような光。

眩しすぎて目を開けていられない。

「く・・・！」

ゼロは耐えきれずに目を閉じた。

・・・しばらくして、ガヤガヤと、話し声が聞こえてきた。

何か騒ぎでもあったのか、慌ただしい感じである。

それに気付いたゼロは、ゆっくりと目を開いた。

・・・目の前には、人だかりができていた。

「ここは・・・？」

キヨロキヨロと辺りを見渡す。

・・・ここは、塔の入り口だった。

頂上にいたはずが、一瞬にして入り口に戻って来ていた。

「なんなんだ、一体・・・？」

ゼロは首を傾げる。

すると、向こうから小さな子供が走ってきた。

ゼロに気がつかないのか、そのまま直進してくる。

「ちよっ・・・お前・・・」

ゼロが避けようとしたその時、子供がつまずき、こけそつになる。

「危ない！」

思わず手を差し伸べる。

・・・しかし何の意味もなかった。

子供は、ゼロの手をすり抜け、そのままベシヤリところんでしまったのである。

「な！・・・え・・・？」

何が起こったのか分からず、ゼロはオロオロする。

「いたたた・・・」

ムクリと、子供が起き上がる。

「あ・・・大丈夫か？」

ゼロが声をかけるが、全く聞こえていない。

そのまま走り出し、今度は体ごとゼロをすり抜けてしまった。

「え？・・・は？」

訳が分からず、そんな情けない声しかでない。

「・・・おいおい・・・もしかして・・・」

スウ・・・と、目一杯空気を吸う。

「おゝい！誰かあゝ！」

まさかと思い大声で叫ぶが、そのまさかであった。

・・・ここにいる人々に、ゼロの声は聞こえていない。

それどころか、触れることさえできない。

・・・つまり、この人々にとって、ゼロは存在しない者なのである。

「まじかよ・・・訳わかんねえ・・・まあ、便利っていったら便利か・・・」

混乱する頭を抱えて、人ごみの中へと入っていく。

誰とぶつかる訳でもなく、スルスルと前に進む。

すると、その中に見知った姿があった。

・・・キリンが、何かの周りをクルクルまわっている。

キリンがまわるその中央・・・そこに、1人の赤ん坊がいた。

・・・ゼロは、直感的にそれが自分だと理解した。

「と、言うことは・・・」

ゼロはキョロキョロと辺りを見渡す。

・・・ここは、確かに塔の入り口だった。

しかし、少し様子が違う。

初め、キリンが隠れていた場所の柱は、まだ崩れていない。

・・・所々が、さつき見たときより新しくなっていた。

「ここは昔か・・・多分、500年前・・・それより・・・」

視線をキリンに戻す。

「キリンの奴、何やってんだ？」

ゼロが不思議がっている内に、キリンはその動きを止めた。

「ありがとうございます、キリン様」

声と共に、1組の若い夫婦が人ごみの中から出てくる。

「これでこの子も無事に成長出来ます。・・・祝詞の儀、お疲れ様でした」

祝詞の儀・・・聞き覚えがある・・・

「ああ・・・雪山でキリンが言ってたな・・・てことは、あの赤ん坊はやっぱり俺か・・・そして、あれが俺の親、か・・・」

ゼロは何か考え込む。

“・・・この子の名は何という？”

キリンの声ではっとする。

・・・自分の本当の名前。

考えたことは無かったが、興味がないと言えば嘘になる。

ゼロは、会話を耳を傾ける。

「・・・この子の名前ですか・・・この子には、タナトスの名を授けました・・・」

「タナトス？」

ゼロは首を傾げる。

聞いたことのない単語・・・何のことだろう・・・

ゼロがそう思った次の瞬間、遠くから悲鳴が聞こえてきた。それと共に、大量の人間が押しかけてくる。

「飛竜だあゝ！！飛竜が襲ってきたぞゝ！！」

「おちつけゝ！」

ゼロの父親らしき人物が声をあげる。

様子からして、この民族の族長らしい。

「飛竜の1匹や2匹、我らの敵では無いはずだ！」

「1、2匹じゃありません！・・・数は分かりませんが、想像を絶する数です！・・・地面の色が見えません！」

「なに！？地面の色が！？」

「それだけじゃない！・・・その後方にあいつが、ーーーーがいます！」

「何！？ーーーーだと！？」

人々は、しきりにその名前を叫んでいたが、その言葉だけ切り取ったように、それが声になることはなかった。

「な、何が起こってるんだ？」

動揺するゼロをよそに、人々は慌ただしく戦闘の準備をする。

「キリン！あんたははやく逃げてくれ！」

ゼロの父親が、キリンに逃げるように勧告する。

「しかし・・・！」

「これ以上の干渉は神への反逆となるだろう。・・・そうなってしまったら、我々の面目がたたん！」

“・・・すまぬ・・・”

言って、キリンは去っていった。

「・・・よし！男共は武器を手にし、命のかぎり戦え！女子供は塔の中へ逃げ込め！」

ゼロの父親が指示をだし、人々はそれに従う。

「あんた！」

・・・そこに、ゼロの母親が駆け寄ってくる。

「何をしている！？早く行かんか！」

「でも・・・！」

渋る母の肩に、父がそつと手をそえる。

「いいか？・・・お前はその子を・・・タナトスを守らねばならん。

・・・その子は我々の希望なのだ・・・分かったのなら早く逃げろ・・・」

「・・・分かりました・・・」

・・・母親は、ゼロを抱えて塔の中へ逃げ込んだ。
それを見送った父親は、何も言わずに敵に向かっていった。

――

塔の中は、女性と子供で埋め尽くされていた。

皆無言で、恐怖と戦っている。

そこに、血まみれの男が駆け込んできた。

かなり慌てた様子である。

「は・・・早く逃げる！・・・この戦・・・我々の、負け、だ・・・」

悔しそうに言い残し、その場に倒れ込んだ。

途端、塔の中はパニックに陥る。

泣き叫ぶ子供や、半狂乱で騒ぐ女性達。

・・・そんな中、ゼロの母親だけは落ち着いていた。

上を目指して、ただひたすらに階段をのぼる。

・・・そして、小さな部屋にたどり着く。

そこにある小さな石の箱。

そこに、ゼロを寝かせた。

「ごめんね・・・お母さんは、もうあなたといられないわ・・・」

言って、悔しそうに唇を噛む。

「何一つ・・・何一つとして、母親らしい事をしてあげられなかった・・・本当に、ごめんね・・・」

・・・母親は、涙を流して謝罪の言葉を口にする。

その時、下から悲鳴と雄叫びが聞こえてきた。

・・・恐らく、飛竜が攻め込んで来たのだろう。

「もう、時間がないわ・・・許してとは言わないけど、謝らせて・・・」

・タナトス・・・こんな母親で、本当にごめんね・・・」

そう言って、箱に蓋をした。

そして、何か呪文のような言葉を小声で紡ぎだす。

・・・呪文を唱え終えて立ち上がり、そのまま下へと降りていった。

しまった・・・

――

そこで、意識がもどった。

気が付けば、ここは塔の頂上。

いつの間にか、現実に戻ってきていた。

まだ頭が混乱している。

“戻ったか？ゼロよ・・・”

その声で我に返る。

振り向くと、キリンが横に立っていた。

「お・・・俺・・・どうなったんだ・・・？」

“汝は、剣の記憶に触れたのだ・・・その剣は、一部始終を記憶していたからな・・・”

「教えてくれ！あの時、なにがあっただん！？あれからどうなったんだ！？」

“答えてやりたいが・・・どうやらその時間はないようだ・・・”
言って、キリンは上を見上げる。

ゼロも、それにならって上を見上げた。

・・・そこには、異形の竜がゼロ達を見下ろす姿があっただ・・・

第28話（前書き）

話がモンハンから見事に脱線してしまいました。（^| ^・^）感想・
評価をお待ちします。

第28話

バサバサと、上空で羽ばたくそれは、ゼロ達を怒りの形相で睨みつけていた。

「な．．．何だ？」

慌てるゼロをよそに、それは悠然と降りてきた。

ズシッと、重い音をたてて着地すると、ギロリとゼロを睨む。

“貴様．．．ここがどこだか分かっているのか？”

頭に流れ込んでくるキリンとは別の声。

キリンでないならば、今日の前にいる異形の竜から発せられたに他ならない。

．．．獅子のようなその姿は赤く、体には、その怒りを形にしたかのような熱気を纏っている。

“ここは、我が領域．．．それを侵す者は何人たりとも許さん！”

ゴオウ！と、凄まじい音をたて、体に纏う熱気がより激しく舞い上がる。

「く．．．！何者だデメエ！」

“．．．我は燃え盛る炎の皇帝．．．テオ・テスカトルなり．．．！”

言って、有無を言わずゼロに飛びかかる。

「ちい．．．！」

思わず剣を引き抜き、体の前に掲げる。

．．．．．

攻撃がこない。

不思議に思ったゼロは、顔をあげる。

．．．そこには、あっけにとられているテオ・テスカトルの姿があった。

驚いた様子で、ゼロを睨んでいる。

“ば、馬鹿な．．．何故、貴様がその剣を扱える．．．？まさか．．

”

“そのまさかだ、皇帝よ……”

キリンが割って入る。

“汝が危惧した通り……この者は、古の竜の末裔……ドラゴノイドだ”

“そんな馬鹿なことが……ならば、近頃頻繁に感じていた力の波はこやつが……?”

テオ・テスカトルは、さらに驚く。

……と、言うより、若干怯えていた。

“……だが、それが何だと言うのだ!”

恐れを振り払うように叫んで、再びゼロを睨む。

“たとえドラゴノイドと言えど、我が領域を侵したからには万死に値する!”

そして、出入り口まで飛び、そこで身構える。

“もはや退路はない! 我と戦え! ドラゴノイドよ!”

臨戦態勢をとるテオ・テスカトルを前に、ゼロは不思議そうな顔をする。

「なあ……別に無理して戦う事はないんじゃないか?」

そう言い放ったゼロをみて、テオ・テスカトルはさらに怒る。

“貴様……! 我を愚弄するつもりか!? ……貴様が何を言おうと、我が領域を侵した時点で貴様は私の敵なのだ!”

ゼロりと、今度はキリンを睨む。

“代行者よ……よもや邪魔立てするつもりではあるまいな?”

“する訳が無かるう……これ以上の干渉は、我には許されていない……ここまでくれば、我はただの傍観者にすぎん……”

「あ! てめっ、キリン! 1人だけ卑怯だぞ!」

スタスタと、安全区域に非難するキリンにやじをとばすが、キリンは無視して歩き去る。

“貴様の相手は我だ!!!”

見ると、テオ・テスカトルが怒り心頭で大気を焦がしている。

“ もう一度言う・・・我と戦え、竜の子よ！”

「・・・分かったよ・・・」

ゼロは背中に提げていた剣を投げ捨て、闇色の剣を手にとる。

“ 行くぞ！”

叫ぶと同時に、テオ・テスカトルは地面を蹴る。

ガギン！と、硬い物同士がぶつかる音。

ゼロが構えた剣に、テオ・テスカトルが噛みつく。

「ぐう・・・！」

そのまま、力比べに発展する。

“ ぐ、うゝ・・・”

「う・・・ぐ・・・」

ギリギリと、牙と剣がこすれ合う音が辺りを支配する。

・・・力は、五分五分。

どちらも、一步も譲らない。

・・・が、ジリジリと嫌な音が流れだす。

テオ・テスカトルの熱気で、ゼロの肌が焼け出した。

ついに、ゼロの肌に火がついた。

「！？・・・ぐああっ！」

耐えきれず、後ろに跳ねる。

“ 馬鹿めが！”

待ってましたと言わんばかりに、ゼロが空中から着地する寸前を狙って炎を吐き出す。

「ぐわあああ！？」

“ ハハハハ！そのまま焼け死ぬがいい！”

テオ・テスカトルが勝利を確信した。

・・・次の瞬間、炎が盛り上がってテオ・テスカトルに向かってきた。

“ なに！？”

炎はそのまま直進し、目前で弾けた。

「うおおおらああ！」

そして、炎の中からゼロが飛び出す。

「だりやあああ！」

ガキイイ・ン・ン・ン

“・・・ぐおおおお！！？”

ゼロの一撃は、テオ・テスカトルの角を粉碎する。

それと同時に、体に纏っていた炎が消滅した。

「やつぱり、クシャルダオラと弱点は一緒だったな！」

“ぐおおおお！！！”

テオ・テスカトルは、悶えながらも前足を高速でゼロに突き出す。

「なに！？」

ゼロは驚きながらも、本能的に身を後ろに引く。

・・・しかし、完全には避けきれなかった。

テオ・テスカトルの爪が、ゼロの脇腹をわずかにえぐる。

「・・・つつ！」

そのまま後ろに跳んで、脇腹を抑えながら膝を突く。

「くそ・・・！」

瞬時にテオ・テスカトルに視線を戻す。

・・・テオ・テスカトルは、苦しそうに息を荒げて、ゼロを睨みつけていた。

“やはり・・・貴様らドラゴノイドの戦闘能力は底無しか・・・！！”

・・・おのれ・・・おのれ、おのれおのれおのれええええ！！”

炎の根源は断つたはずなのに、ゾワリと、大気が燃えるような憎悪が湧き上がる。

「な・・・？これ・・・は？」

ヤバい！

・・・何が来るかは分からない。

でもヤバい！

第六感が、体中の全細胞が、あれはヤバいと警告する。

「ち！！・・・動け、動けえ！」

重くなつた足に喝を入れる。

“無駄だ・・・そこで無力に爆ぜる（はぜる）がいい！”

・・・テオ・テスカトルは、カチンと、牙をかち合わせる。
そして、文字通り爆ぜた。

爆発音と共に、地面の欠片が吹き飛ぶ。

“・・・ハハハハ！欠片も遺らんか！”

テオ・テスカトルは、声高らかに笑う。

・・・風が吹き、砂煙がはれていく。

その、少し向こう。

そこに、1つの人影が浮かび上がる。

・・・言うまでもなくゼロである。

「へへ・・・まさに間一髪ってところか？」

テオ・テスカトルは、信じられないといった表情でゼロを見つめる。

“ば・・・ばかな！？・・・あれを避けただ！？”

「ギリギリだったけどな・・・」

“こ・・・こしやくな・・・！”

怒りのボルテージがグングン上がっていく。

“貴様だけは・・・貴様だけはあ！”

もはや怒りで我を忘れている。

“消える・・・消える！”

何度も何度も、牙をかち合わせた。

そのたびに、ゼロの足下が爆ぜる。

「うわ！ちょ、待て！」

ゼロは避けるのに必死である。

「・・・このままじゃ、拉致があかねえ・・・」

一体どうすれば・・・？

ゼロは一瞬そう考えた。

たった一瞬。

しかし、テオ・テスカトルはその一瞬を見逃さなかった。

“そこだああ！”

「！？」

ゼロの動きが鈍くなったところに、爆発が襲った。

「ぐはっ！」

・・・そのまま飛ばされ、無残に地面を転がる。

「・・・が・・・あ」

かろうじて直撃は避けたものの、体は限界を伝えている。

・・・けれど、まだ立ち上がろうとする。

「・・・まだ、負けられねえんだよ・・・！・・・帰るって約束したんだよ・・・！それなのに、こんな所で・・・！」

もがくゼロの体がフワリと宙に浮く。

「え・・・！？」

顔を横に向けると、そこにはテオ・テスカトルの姿があった。

「テメエ・・・何を・・・！？」

ゼロをくわえ上げたテオ・テスカトルは、勢いをつけてゼロを地面に叩きつける。

「ぐあああああ！！」

ボキボキと、あばらの骨が折れる音がする。

「が・・・がは・・・」

苦しい・・・

呼吸が、上手く出来ない。

・・・ならば、殺すか？

「！？」

頭の中に、自分とは別の声が響く。

「だ・・・まれ！お前、は、引つ込んで、ろ・・・」

何故？

お前こそ引つ込めばいい。

目の前のそいつは敵だ・・・なら、殺すのが道理だろ？

「な、んで、敵とか、簡単に、決めるんだよ・・・？意志が、通じるなら、分かり合える、かも、しれねえだろ・・・？」

貴様は甘すぎる。

その甘さのせいで、貴様はこの程度の敵にここまでやられるのだ・・・

・
「だま、れ・・・」

さあ、体を明け渡せ・・・

俺がそいつを殺してやるよ・・・

「だ・・・だめ、だ・・・意識が・・・」

殺す・・・

「意識が・・・」

殺す・・・

「意識が・・・反転・・・」

殺す・・・

・・・反転する・・・

「殺す・・・」

・・・

テオ・テスカトルは、トドメをさそうともう一度ふりかぶる。

そして、無抵抗のゼロを地面に向かって急降下させる。

・・・次の瞬間、地面に倒れ伏していたのは、テオ・テスカトルだった。

叩きつけられる瞬間、テオ・テスカトルの牙から逃れたゼロは、勢いを利用してテオ・テスカトルの顔面を地面に叩きつけた。それを見て、キリンがピクリと反応する。

“目覚めたか・・・タナトス・・・！”
「・・・」

ゼロは無言で、落ちている剣を拾う。
すると、刀身が黒から赤へ変色する。

・・・いや、もっと根源的な色。

赤というより紅。

血を連想させる、混ざりのない紅色。

“あの刀身の色・・・やはり、タナトスはゼロと共にあるということか・・・”

“ぐううう・・・”

意識を取り戻したテオ・テスカトルに、ゼロは無言で近寄る。

“き……貴様あ……！”

立ち上がり、ゼロに食らいつこうと飛びかかる。

……しかし、その牙がゼロを捕らえることはなかった。

牙がゼロに到達する寸前に、ゼロが全ての牙を粉碎してしまった。
グオオオ！と、悲痛の雄叫びをあげるテオ・テスカトルに近付き、
剣を振るう。

……ズルズルと、肉がズレる音がする。

そして、ボタリ……と、音と共にテオ・テスカトルの両の翼が落ちた。

“……！！！”

もはや言葉にならないほどの苦痛と驚きがテオ・テスカトルを襲う。

「………」

あくまで無言で、今度はテオ・テスカトルのたてがみを片手で鷲掴みにし、ズルズルと引きずる。

……そして、塔の端まで引きずって、ニヤア……と、心底楽しそうな笑みを浮かべ

「……死ぬ……」

……たった一言口にして、塔の頂上からテオ・テスカトルを投げ捨てた……。

翼をもがれたテオ・テスカトルは、落下に抵抗する術はない。

そしてこの高さ。

間違いなく、死ぬだろう……

しかもそれに加え、先程自分で投げ捨てた剣……今まで使用していた剣を、落下するテオ・テスカトルに投げつけた……

「……終わりか……くだらん。皇帝と言えど、この程度か……」

「

途端に、ゼロは頭を抱える。

「ち！……うるさい奴だ……いいだろう。返してやるよ……」
……言って、がくりと膝をつく。

ゼロの手に握られた剣は、紅から黒に戻る。

“ 終わったか・・・ ”

キリンが駆け寄ってくる。

「・・・教えろ、キリン・・・俺は一体なんなんだ？この剣はなんだ？・・・ここに来たくらいじゃ、肝心な事が何も分からねえよ・・・ここで分かったのは、ここで何があったのかって位だ・・・」

“ そのようだな・・・ ”

「 そのようだなんてお前・・・ 」

“ 賢者に会いに行け・・・ ”

賢者・・・

さっきもそんな事を言っていた。

“ これが最後の手段だ・・・賢者に会いに行って分からなければ、他に方法はない ”

「 だ、から・・・その賢者・・・てのは、一体・・・誰・・・ 」

力無く呟き、ゼロは気絶してしまった・・・

第29話

痛い・・・

体中傷だらけ、おまけに火傷だらけだ。・・・

あばら骨も、何本かイカレてる。

しかも、肺を傷付けたみたいだ。

息をする度に胸に激痛がはしる。

“・・・ならば、殺すか？”

“・・・だからお前はだれなんだ？

何でいちいち出しゃばるんだよ、お前は？

“あまりにも見ていられないからさ・・・ちんたら殺るんじゃないやねえよ。・・・俺なら、もっとサクサク殺れる。もっと上手くバラしてみせる”

そんな事・・・！

・・・駄目だ・・・

意識が薄れていく・・・

“ほら・・・お前の体を明け渡せ”

させない

お前の存在は、モノの命を軽くしすぎる。

“それはお前も同じだろ？・・・と、言うより、お前は俺以上だろ・

・・・もう一度言う、俺に体を明け渡せ・・・”

そんな事はさせない。

・・・させたくないのに、意識はどんどん薄れていく。

・・・代わりに、自分とは別の人格が浮上する。

自分を侵食していくのがわかる。

虫が這い上がって来るような感覚・・・

最悪だ・・・気分が悪い

・・・駄目だ・・・意識が・・・！

――――

「……っ!!」

たまらず、はね起きる。

「……夢……」

ゼー、ゼー……

耳障りな音が聞こえる。

「何の……音……」

口を開いて、ようやくその音が自分から発せられたもだと気が付いた。

体は、大量の汗でぐっしり濡れている。

……とりあえず、呼吸を整えよう。

ゼロは、2回深呼吸をして、火照った体を落ち着かせる。

窓から流れ込んでくる風が気持ちいい……

「……ここはどこだ？」

落ち着いたところで、ゼロは辺りを見渡す。

……ここは、集会所にある医務室。

それに気付いたゼロは、はぁ……とため息をついた。

「ホント……ここにはよく世話になるな……」

言って、立ち上がるうする。

……ズキン……

「いつ!……てて……」

突如、激痛がゼロを襲った。

「……そう言えば傷めてたんだ……」

痛んだ箇所をさすりながらあることに気付く。

「……俺……何でここにいるんだ……?」

ゼロは首を傾げる。

そこへ……

「目が覚めたみたいだな」

ジョンがやってきた。

「よう、ジョン」

「よう、じゃないこの馬鹿!」

ゴツンと、ゼロの頭を小突いた。

「いってゝ．．．怪我人になんてことしやる！」
ズキン．．．

「あててて．．．。くそ．．．大声だすとイテエ．．．」

「自業自得だ。ざまみろ」

．．．ジョンの言葉にはどこか棘がある。

「もしかして．．．怒ってる？」

「もしかしなくとも怒ってるわ！」

ゴツンと、もう一発。

「いってゝ．．．そんなにボコボコ殴るなよ！」

「やかましい！さんざん心配かけやがって！」

「なんだよ！約束通りちゃんと帰ってきたじゃねえか！」

「これのどこが“ちゃんと”だ！．．．こんなズタボロで帰って来やがって！」

「むう．．．」

口負けて、ゼロは口を尖らせる。

「ったく．．．ん？」

ジョンは、部屋に置かれていた剣を見て目を丸くする。

「ば．．．ばかな．．．なんで、これがここに．．．？」

ジョンはあからさまに驚く。

「．．．その剣のこと知ってるのか？」

「知ってるって言うか、ついさっき．．．」

ジョンは少し顔を伏せる。

「さっき？」

「．．．いや、後で話す．．．」

そう言つて、ジョンは顔をあげた。

「それより．．．お前は何かわかったのか？一体何があつた？」

そう聞かれて、ゼロは少し顔を伏せる。

「．．．何もって訳じゃないんだが．．．大事なことは分からなかった．．．ただ、俺が昔の人間つてのは間違いない．．．」

「そうか・・・それで？」

「・・・テオ・テスカトルと戦って、なんとか倒して今に至るってわけ」

「お、お前・・・テオ・テスカトルと戦ったのか・・・？」

「ジヨンは驚愕する。」

「ん？知ってんのか？」

「知ってるも何も、今現在知られてる古竜の中でも1・2を争う程の強さだってハンター達の間で騒がれてるぞ」

「そうなのか？知らなかった」

「知らなかったってお前・・・」

「ジヨンは呆れている。」

「・・・なあ、俺も1つ聞きたいことがあるんだけどよ・・・」

「何だ？と、ジヨンは首を傾げる。」

「俺、どうやってここまで戻って来たんだ？」

「ああ、そのことか・・・お前、本当に覚えてないのか？」

「？」

「何でそんなことを聞くのだろう。」

「ゼロは首を傾げる。」

「いや、覚えてないならそれでもかまわないんだ・・・」

「何があつたんだよ？」

「・・・実はな・・・さつき、キリンがお前を背中に乗つけて来たんだよ」

「え？キリンが・・・？」

「ああ・・・最初見たときは、正直驚いた。・・・お前がやられちまったのかなって思ったけど、お前は生きてたし、どう考えてもお前を助けたとしか考えられなかった」

「キリンが・・・俺を・・・？」

「ゼロは考え込む。」

「何か覚えてないのか？心当たりとか」

「悪いがそれもサッパリだ・・・」

何故キリンが自分を助けたのだろう？

・・・それに、これはキリンにとって過干渉なのではないか？
ゼロが考えていると、アルとミリアがやって来た。

「あ、ゼロ。目が覚めたんだ」

「ああ・・・おかげさまでな」

「本当よ・・・こんなボロボロで帰って来るなんて・・・」

「それはさつき聞きました・・・そんなことより・・・」

ゼロはアルに視線を向ける。

「アル、もう体は大丈夫なのか？」

「うん！それこそ、おかげさまでね」

口にして、ニコツと笑った。

「そつか・・・よかった」

ゼロは安堵の表情を見せる。

「アルちゃんよりあんたよ、あ・ん・た！」

ミリアはズイツと、ゼロに詰め寄る。

「人にさんざん心配かけといて、帰って来たと思ったらこの有り様よ？・・・おまけにわけわかんない物がここにあるし・・・」

ミリアは部屋に置かれてある剣を見る。

「なんなの、あの剣？」

「・・・いや、剣じゃね？」

「それは分かってるわよ！」

スパン！と、ミリアもゼロの頭を叩く。

「って・・・お前ら・・・もっとうっ、怪我人をいたわろうって
気はねえのかよ？」

「自分勝手に出て行って勝手に怪我して来た奴にいたわる価値なんてないわ！・・・って、そうじゃなくて、あの剣はどういった代物なのかって聞いてんの！」

「俺もよく知らん」

「よく知らんって・・・」

ミリアは呆れて頭を抱える。

「よく知らんって事は、少しは知ってるんだな？」

ジョンは、ニヤリと笑った。

「知ってる事を話してもらおうか」

「いや、それは構わねえんだけど・・・」

「構わないけど・・・何だ？」

ゼロは、チラリと剣を見る。

「何であの剣にそこまでこだわるんだ？普通どうでもいいことだろ？」

そう言ったゼロを見て、ジョンは顔をしかめる。

「ああ・・・普通ならどうでもいいことだ。・・・普通ならな・・・」

「・・・どういうことだよ？」

「・・・あの剣には、誰もさわれなかったの」

アルが口を開く。

「・・・今日、海の方で騒ぎがあったの。気になったからそっちに行って見ると、砂浜にこの剣が打ち上げられてた・・・」

「え？それは俺が持ってたんじゃないのか？」

違うよと、アルは首を横に振る。

「・・・とりあえず邪魔だからって、漁師の人がどかそうしたら、剣に触れる前にふきとばされちゃったの・・・私達には・・・多分、漁師の人の目にも何も見えなかった・・・目には見えない何かに弾かれた・・・」

「俺とミリア、そしてアルも試してみたが、結果は同じだった・・・それでみんな諦めたとき、今度は集会所の方が騒がしくなって何かと思えば、お前がキリンに運ばれてきたっていうじゃねえか・・・それで俺達は剣をほったらかしでここまで来たんだが・・・何故かこの剣はここにあった・・・って訳だ・・・」

「他の誰かが運んで来たとか？」

「それはない・・・俺達は誰よりも早くここに来た・・・だから誰かが持つて来るにしても、俺達より早く来ることは不可能だ・・・」

「じゃあ何でここにあるんだよ？」

「だから俺達もそれを知りたいんだよ。．．．お前も知らないってことは．．．この剣が自らここに来たとか．．．」

「まっさか。大体、なんで俺の所に来るんだよ？」

「．．．お前はこの剣を握れるんじゃないのか？」

「え？．．．あ、ああ。」

「ジョンは、やはりな．．．と言って、ますます真剣な表情になる。

「．．．とにかく、お前とこの剣には何らかの繋がりがあるのは間違いないさそうだな．．．」

「うん．．．と、ジョンは考え込む。

「まあいい．．．さっきの質問に戻ろう．．．お前はこの剣について何を知ってるんだ？」

「知ってる、って訳じゃねえんだ．．．ただ、何か不思議な物だっ
てことは分かる．．．」

「不思議？」

「ジョンは首を傾げる。

「ああ．．．この剣は塔の頂上に突き刺さってた．．．そしてこの
剣を握ったら、俺は過去の出来事を垣間見たんだ．．．そこには赤
ん坊の俺がいて、タナトスって呼ばれてた．．．」

「タナトス？と、ジョン達は顔を見合わせた。

「聞いたことないな．．．キリンは何か言わなかったのか？」

「．．．その単語の意味はわからなかったけど、俺は剣の記憶とや
らに触れたらしい．．．それとこの剣は、神様が天地創造の時にイ
タズラにつくったとも言ってたな．．．」

「．．．」

沈黙。

4人共あまりの話しの大きさに、言葉を失っていた。

「あ、それと．．．」

「ゼロが何かを思い出し、口を開く。

「この剣を俺が使ってるのを見て、テオ・テスカトルが相当驚いて

たな・・・なんで貴様がその剣を使えるんだ？つてよ・・・」

「・・・どうやら、古竜達はこの剣がなんなのか、明確に知ってるらしいな・・・それに、テオ・テスカトルがそんな風に驚いたってことは恐らく・・・」

「ああ・・・この剣は俺にしか扱えない・・・」

『・・・』

本日2度目の沈黙。

・・・その沈黙を破ったのは、集会所のロビーから聞こえた悲鳴だった・・・

――

「何事だ!？」

ゼロ達は、悲鳴の原因を確かめるべく、医務室を飛び出して、集会所のロビーまで来ていた。

そこに集まっていたハンター達はパニックに陥っていた。

ゼロは、その中の1人の男を捕まえる。

「教える!何があった!？」

問い詰めると、その男は出口を指差して

「キ、キリンが・・・キリンが来た・・・」

ガクガク震えながらそう言った。

「キリンが!？」

「おい、ゼロ!」

「分かってる!確かめに行くぞ!」

言つて、ゼロ達は外に出る。

・・・そこには、確かにキリンがいた。

人を襲っている様子はなく、ただ何かを待っているように見えた。そして、ゼロに気付いたキリンは、ゼロに駆け寄って来る。

“ やつと気が付いたみたいだな・・・ ”

「お前・・・俺を運んでくれたみたいだな・・・ありがとよ」

キリンは、フツ・・・と小さく笑う。

「でも・・・お前にとってこれは過干渉じゃねえのか?」

“ 確かにな・・・我ながら不思議でならない・・・過干渉とわかりながら、何故汝を助けたのか・・・”

「ゼロ・・・？誰と話してるの？」

突然、アルが口を開いた。

「あ・・・そうか。アルはまだ知らなかったな・・・俺、古竜と話せるんだよ」

「・・・はい？」

アルは目を白黒させる。

「ま、細かいことは気にすんな。キリンは結構いい奴なんだぜ」
アハハと、ゼロは笑う。

「ところで・・・何でお前はここにいるんだ？」

” 汝に、賢者の居場所を伝えようと思つてな”
それを聞いて、はつとする。

忘れていたが、今一番気になることだ。 “ここより西に向かえ・・・そこに、もはや人が立ち入らなくなった、岩山が立ち並ぶ荒野がある。”

「・・・そこにいるんだな？・・・賢者とやらが」

“その通りだ・・・”

言つて、キリンは背を向ける。

“用はそれだけだ・・・さらば”

「あ、おい！」

呼び止める声を無視して、キリンは走り去ってしまった。

「行っちゃったね」

横から、アルがひょっこり前に出てくる。

「それで、キリンは何て言つてたの？」

「・・・西に向かえとさ・・・そこに賢者つてのがいるらしい」

「よし、西だな」

後ろから、ジョンの声が聞こえてきた。

「よしってお前・・・まさかついて来る気じゃ・・・？」

「もちろんついて行く」

「だ・・・駄目だって！前にも言ったじゃねえか！それに、何があるか分からねえんだぞ！」

「いや。もうお前の言い分は聞かないぞ。・・・それに、何があるか分からないなら、尚更１人では行かせられないな。・・・またボロボロで帰って来られても困る」

「じゃあ私も・・・」

「お前は駄目だ、アル」

名乗り出ようとしたアルをゼロは止める。

「何で？体ならもう平気だよ？」

「いや、そうじゃないんだ。」

「じゃあどうということよ？」

プと、アルは子供のように頬を膨らませる。

「ほら・・・リリスをこれ以上ほっとくわけにはいかないだろ？」

「あ・・・そつか」

「な？・・・お前が入院してる時も、ちよつとしかかまってやれなかったし・・・」

「・・・分かった・・・」

アルは渋々引き下がる。

「しょうがないわね・・・私に残るわ」

と、ミリアが口を開く。

「本当はついて行きたいけど・・・アルちゃん１人じゃ大変でしよう・・・まだ街のことをよく知らないみたいだし・・・」

「はい・・・スミマセン・・・」

「別に謝ることじゃないわよ。それに・・・この２人なら、別に私は必要ないでしょ・・・剣神のゼロに、達人のジョン・・・大層な通り名ね・・・」

「また昔の話をするなあ、お前も・・・」

ゼロが呆れる横で、アルが首を傾げる。

「何の話ですか、ミリアさん？」

「ちよつと昔の話しよ・・・今度教えてあげるわ」

「そうですか・・・」

アルは少し残念そうにうつむく。

「さて・・・そろそろ行くか？」

ゼロが聞くと、ジョンは無言で頷く。

「じゃ、行ってくるぜ」

言って、ゼロとジョンは歩き出した。

「ちょっと！？あんた達食料とか準備しないの！？」

ゼロ達は振り向かず、『現地調達』

と言って、パタパタと手を振り、2人並んで歩いていった・・・

第30話

「うつへ」。見事に岩ばかりだなあ・・・」

ゼロ達は、岩山が立ち並ぶ荒野を歩いていて、

日は暮れかけて、景色はオレンジ色に染められている。

巨大な岩山に辺りを囲まれていて、植物は極端に少ない。

人どころか、生物の気配すら希薄である。

「・・・そろそろ頃合いじゃねえか？」

ゼロは足を止めて、顔だけをジョンの方に向ける。

ジョンは無言で頷く。

「・・・確かに、時間的にそろそろ厳しいな・・・」

言って、ジョンも足を止めた。

「・・・今日はここに野宿だな」

「ああ・・・見たところ、植物が少なえから、必死にならねえと日没までに獲物を見つけられなそうだな」

「そうだな・・・こんな所に生き物がいればいいんだが・・・」

ジョンは辺りを見渡す。

「・・・もの見事に植物が少ない。

それは、それを糧にする草食動物が少ないことを意味する。

さしあたって、草食動物を糧とする肉食動物も少ないと言ったことだ。そしてこの険しい地形。

・・・獲物の発見は困難を極めそうだな・・・

「とりあえず・・・」

ゼロが口を開く。

「とりあえず、しらみつぶしに探そうぜ。・・・こんな所で日が暮れちまったら、本当にお手上げだ」

「ああ、そうだな」

ジョンは頷き、2人は手分けして探し始めた。

――

「・・・本当になにもいねえな・・・」

獲物を探し始めて、30分が過ぎようとしていた。

辺りは、みるみるうちに暗くなってくる。

「おいおい・・・晩飯抜きだけは本気で勘弁だぜ・・・」

ゼロはぶつぶつ独り言を呟いて、たらりと冷や汗を流す。

無理もない。

獲物を捕まえるどころか、未だにその姿さえ目にする事ができないでいた。

日は、本格的に沈み始める。

「・・・こりや駄目か？」

ゼロが諦めかけたその時

「お！・・・獲物発見・・・」

ゼロの視線の先。

約10メートル前方に、1匹のケルビが姿を現した。

「よし、あいつを・・・」モソモソ・・・

「ん？」

ケルビの足元で何か動いた。

「なんだありや？」

ジーーーーーーーーと、目を凝らす。

・・・よく見ると、それはケルビの子供だった。

まだ乳離れできていないようだ。

「・・・やめとくか・・・」

言って、ゼロはその場を離れる。

今、あの母親ケルビを殺してしまえば、植物が少ないこの状況で子供ケルビが生き延びられる可能性は皆無だろう。

「子供まで死なす訳にはいかねえしな・・・つくづく甘いなあ、俺・・・」

ハア・・・と、ため息をつき、ポリポリ頭をかきながら別の獲物を探し始める。

そこへ、ぴいーと、指笛の音が鳴り響く。

これは2人にとって、どちらかが獲物を確保したことを意味する。
「お・・・ジョンが何か捕まえたか・・・弓つてのは便利なもんだ
なあ・・・」

うんうん・・・と、ひとりで納得しつつ、ジョンと別れた場所まで
戻っていった。

――

ジョンと別れた場所に戻ってくると、ジョンは一足先に戻ってきて
いた。

手には、1匹のケルビが握られている。

「よう、お疲れさん」

ゼロが声をかける。

「お疲れ・・・って、お前、獲物は捕れなかったのか？珍しいな」

「あゝ、いや・・・一応見つけたんだけどな・・・子連れだったか
ら逃がした・・・」

ゼロがそう言うと、ジョンは小さく笑いをこぼす。

「まあ、大体そんなところだろうと思った・・・お前、ハンターやつ
てくるせに大甘な所があるからな・・・」

「だってかわいそうだろ？・・・問題起こしてるならまだしも、た
だ生活してるだけなんだからよ・・・」

「ああ、そうだな」

口ではそう言いながら、クツクツ・・・とジョンは笑う。
それを見て、ゼロは少し拗ねる。

「何がおかしいんだよ？」

「いやいや・・・気にするな・・・」

ジョンはやつとの思いで笑いをこらえている。

「・・・ほら、拗ねてないで晩飯作るぞ」

「あ、そうそう」

ゼロは何かを思い出し、ポケットの中をゴソゴソ探る。

「ほら、これ・・・」

差し出された手には、色々な草が握られていた。

「そこら辺に生えてた野草だ・・・獲物無しじゃ悪いから、適当に食えるやつ採ってきた」

「そ、そうか・・・あ、ありがとよ・・・クククッ」
「いよいよ腹を抱えだした。」

「さつきから何がおかしいんだよ、お前は？」

「あゝ・・・いやいや、大したことじゃない・・・。ほら、さつさと準備しちまうぞ」

「なゝんか氣にくわねえなあ・・・」

ゼロは口を尖らせながら、ジヨンは腹を抱えながら、焚き火の準備を進めていった。

――

・・・パチパチと、焚き火の音が辺りに響き渡る。
それ以外の音は無い。

ゼロ達は食事を終え、何も言わずに揺らめく炎を見つめていた。

「・・・なあ、ジヨン・・・」

突然、ゼロが口を開く。

「お前さつき、何であんなに笑ってたんだよ？そろそろ教えてくれないいだろ？」

「ああ、あれか・・・」

言って、空を見上げる。

ゼロも、ジヨンにならって空を見上げる。

・・・岩山のせいで空が狭い。

その隙間から、大量の星が見てとれた。

・・・岩山は星の光に照らされて、青く輝いている。

・・・これはこれで、なかなか幻想的な景色だった。

「・・・ゼロ・・・こうしてると、昔を思い出さないか？」

「昔い？昔って言われても・・・あ」

思い出して、ポカンと口を開ける。

「・・・やっと思いついたか？」

ジヨンはゼロに向き直り、また笑い出す。

「あゝ．．．そうかそうか．．．だから笑ってたのか．．．」
ゼロは上を見上げたままため息をついた。

「ああ．．．お前は変わんないなと思つてな．．．」

「全く．．．俺のまわりには、よくよく昔話好きがそろつたもんだな．．．」

もう一度ため息をついて、ゴロンとその場に寝転がる。

「もう寝る．．．お休み．．．」

言つて、ゼロは目を閉じる。

ジョンも寝転がり、そのまま目を閉じた。

――

．．．体が揺れる。

地震でもあつたのか？

「おい．．．おきろ．．．」

起きろ？

やなこつた．．．まだ眠い。

あと半日は寝たい．．．

「．．．起きんかいこのボケゝ！！」

「うおあ！？」

ガバツ！と、ゼロは飛び起きる。

「．．．うおゝ．．．耳がキンキンしやがる．．．」

「そりゃ生きてる証拠だ。ありがたく思うんだな」

「．．．もつと優しく起こせよなあ．．．」

ぶつぶつ呟いて、まだ覚めきらない頭を抱えて立ち上がる。

「こんな地べたでよく熟睡出来るな、お前．．．」

ジョンは呆れた様子でゼロを見る。

「そりゃ、最近家じゃあベッドに寝れることの方がまれだからな．．

・床と地面はそんなにかわらん」

「そうかよ．．．」

ため息をついて、ジョンは頭を抱える。

「．．．とにかく、先を急ぐぞ」

ジョンがそう言うと、ゼロは無言で頷く。
そして、スタスタと歩きだした。

・・・

歩き始めて、2時間程たった。

辺りは、いつしか濃霧に包まれていた。

「おい、あれ・・・」

ゼロが前方を指差す。

その先に、大きな岩山があった。

「なんだよ・・・岩山じゃねえか・・・期待させやがって・・・」
ガツクリと、ジョンは肩を落とす。

「馬鹿！よく見る！」

ゼロが岩山に駆け寄る。

ジョンも、それについて行く。

・・・岩山に近づいて、それが他とは違っていることに気付いた。
古ぼけたような赤色をしている。

「これだけ赤いな・・・」

「それだけじゃねえ・・・見る・・・」

言って、ゼロは上を指差す。

・・・そこには、岩山から巨大な棘がのびていた。

「めっちゃ尖ってね？」

「ああ・・・めっちゃ尖ってる・・・」

「なんなんだこれ？」

ゼロは恐る恐る手をあてた。

・・・ゴゴゴゴゴ・・・

ゼロが手を触れた途端、音と共に地面が揺れだした。

「うお！？・・・なんだなんだ！？」

「ゼロ！お前なにしゃがった！？」

「馬鹿いえ！俺がどうこうしたとかのレベルじゃねえだろ、これは
！」

慌てるゼロ達をよそに、ダンゴ虫が開くように岩山が動き始める。

そして、岩山から長い首がひよろつと伸びてきた。

「コイツ・・・竜・・・なのか？」

ゼロ達は目を丸くする。

ついに、その岩山は竜へと姿を変えた。

超規格外サイズ。

それを前にすると、ゼロ達は蟻のように見える。

「デ・・・デケエ・・・」

ゼロとジョンは、揃ってアホ面をする。

そんなゼロ達を、巨大な瞳が見つめる。

そして

“我を起こしたのはお主らか・・・？”

と、声ならぬ声を発した・・・

第31話 外伝 (前書き)

今回は外伝です。ゼロとジヨンの幼い頃の話、楽しんで頂けたら幸いです。

第31話 外伝

ゼロと別行動をとり始めて、そろそろ30分が経った。
獲物が見つからない。

「・・・本当に何もいないな・・・」

ガツクリと、ジョンは肩を落とす。

ガサツ・・・

「ん？今の音・・・」

ジョンは岩の陰に身を隠す。

そして、音の方へ視線を向けた。

「・・・やっと見つけたぜ・・・」

ジョンは弓を引き絞る。

その矢の先。

そこには一匹のケルビがいた。

少し大きめのケルビが、食べ物を探しながら辺りをキョロキョロと警戒している。

「お前に恨みはない・・・許せよ・・・！」

言葉と同時に、引き絞られた矢を解き放った。

ヒュウ！と、風を切る音になる。

ケルビは、その音に気付いて逃げようとしたが、すでに手遅れ。
身を翻す間もなく、首に矢が突き刺さった。

鳴き声もあげず、トサリと、軽い音と共に倒れる。

「よし・・・」

ケルビが倒れるのを確認したジョンは、岩陰から身乗り出す。
そして、足を掴んで持ち上げた。

「・・・2人分はあるかな？」

ケルビの大きさを確認したジョンは指をくわえ、ピイイ！と、指
笛をならす。

「・・・これでゼロも気付いただろ・・・俺も戻るとするか・・・」

言って、ジヨンはゼロと別れた所まで戻って行った。

――

戻って来ると、そこに人影はなかった。

ゼロはまだ戻っていない。

「何やってんだ？・・・まあ、待つか・・・」

ふう・・・と、ため息をついて、体の力を抜く。

程なく、ゼロがテクテク歩いてきた。

・・・手ぶらで。

「よう、お疲れさん」

ゼロが声をかける。

ジヨンは、少し首を傾げて

「お疲れ・・・って、お前、獲物は捕れなかったのか？珍しいな」

まさかコイツ・・・

そう思いながら尋ねると、ゼロは気まずそうに目をそらし、ポリポリと頭をかく。

「あゝ、いや・・・一応見つけたんだけどな・・・子連れだったから逃がした・・・」

ああ、予想通りだ・・・

昔から変わってないな、コイツは・・・

そう思ったら、少し笑えた。

「まあ、大体そんなところだろうと思った・・・お前、ハンターやってるくせに大甘な所があるからな・・・」

「だってかわいそうだろ？・・・問題起こしてるならまだしも、ただ生活してるだけなんだからよ・・・」

「ああ、そうだな」

・・・真剣に言うゼロを見て、余計におかしくなってくる。

「何がおかしいんだよ？」

少し拗ねた様子でゼロが聞く。

「いやいや・・・気にするな・・・」

これで野草とか出してきたら爆笑ものだな・・・

そう思いながら、ジヨンはゼロに晩飯を作るよう促す
すると

「あ、そうそう」

おい・・・まさか・・・

「そこら辺に生えてた野草だ・・・獲物無しじゃ悪いから、適当に
食べるやつ採ってきた」

きやがった・・・この馬鹿やろう・・・

「そ、そうか・・・あ、ありがとよ・・・クククッ」

耐えきれず、ジヨンは笑いをこぼす。

・・・ゼロは、いろいろ成長してはいるけど、心はいつも変わらない。
い。

真剣な顔で、ガキの頃と同じことを言う。

そんなゼロを見てみると、どこか安心感が持てた。

あれは、いつだっただろう・・・と、ジヨンは昔を思い出す。

・・・

・・・

・

それは、今から7年前の話。

暑い日差しの中を、1人の子供が歩いていった。

ボロボロで、ブカブカな服を引きずりながら

「あついよ・・・腹がへったよ・・・」

肩を落とし、力なくダラダラと歩く。

そんな子供の目の前に、大きな屋敷が現れた。

「いいなあ、お金持ちは・・・着たい服着て、食べたい物食べて・・・

。。毎日贅沢してるんだらうなあ・・・うらやましい・・・」

子供は、じゅっと、うらやましそうに屋敷を眺めていた。

すると、2階の窓に人影が見えた。

「だれだろ？」

子供は目をこらす。

・・・そこには、子供と同一年位の子供がいた。

なにか満足のいかな顔をして、うつむいている。

「あいつ・・・金持ちのくせにつまらなそうな顔しやがって・・・ゆるさん！」

そう言つて、子供は塀を超えて屋敷に侵入する。

そして、足下にあつた石を、2階の窓に向かって思いっきり投げつけた。

ガシャアン！と、勢いよくガラスが割れる。

「何！？だれかいるの！？」

中から、お金持ちの子供が顔をだす。

そして、窓の外にいる子供に気が付いた。

・・・下にいる子供がゼロ、お金持ちの子供がジョン。

共に10歳、初めての出会いである。

「・・・君、だれ？」

「やい、金持ち！」

質問に答えず、ゼロは大声で叫ぶ。

「お前、人がこんだけ大変なのに、何で金持ちのお前がそんなつまらない顔してるんだよ！？いつペン降りてこい！」

ゼロは、腕をぐるぐる回して、むちゃくちゃなことを言う。

「そんな、むちゃくちゃだよ・・・それに僕、今は屋敷の外に出られないんだ」

「なら、俺がそこまでいつてやる！待つてろ！」

そう叫んで、壁にしがみついた。

そして、壁の僅かな凹凸を頼りに壁をよじ登る。

「んぎぎ、ぎ・・・」

後少して窓に手が届きそうになった、その時ズルッ！

「へ？・・・わあああ！」

ベシヤリと、地面に叩きつけられる。

「ちくしょ・・・もう一回・・・」

そう言つて、ゼロは上を見上げる。

それと同時に、シュルシュルとロープが降りてきた。

「それに掴まって」

そう言われて、ジョンに視線を向けると、ジョンが心配そうな表情でゼロを見つめていた。

「これに掴まればいいのかあ？」

「うん、僕が引つ張り上げるから」

ゼロはロープを握って壁をよじ登り、それをジョンが引つ張り上げた。

・・・

・・・

・

「ふいゝ、疲れたゝ・・・」

登り終えたゼロは、疲れた様子でため息をつく。

「ところでさ・・・」

ためらいがちに、ジョンが口を開く。

「・・・君、何をしに来たの？」

ジョンが聞くと、ゼロは思い出したように

「あ、そうだ！お前がつまらなそうな顔してたからわざわざ来たんだよ！お前、なんでつまらなそうな顔するんだよ！？」

「だって・・・」

ジョンは少し顔を伏せる。

「・・・だってつまらないんだもん。・・・友達もないし、僕に話しかけてくる人はみんな僕じゃなくて、お金しかみてない・・・」

「なんだ、そんなことかよ」

「そんな事って・・・」

「うるさい！俺なんか、友達もお金ももってないんだ！」

うゝ、とうねって、ゼロはくると回れ右。

「帰る！」

一言そう言って、窓から身を乗り出す。

「待って！」

ジョンがゼロを止める。

「・・・だったら、僕と友達になろうよ」

少し嬉しそうに言ったジョンに対し、ゼロは疑わしい目でジョンを見つめた。

「お前・・・名前は？」

「ジョン。ジョン・エリックだよ。・・・君は？」

ジョンが尋ねると、ゼロは即答せずに、まじまじとジョンの顔を見つめた。

そして、ようやく口を開く。

「・・・ゼロ・・・」

そう言つて、恐る恐るジョンに視線を向ける。

・・・そこには、告げられた名前に驚愕するジョンの姿があった。

「ゼロ・・・って、あの・・・？」

今にも泣き出しそうな顔でゼロを見つめる。

・・・その時

「何を騒いでいるの？」

ガチャリと、控えめに扉が開いた。

そして、1人の若い女性が中に入ってくる。

・・・優しい顔をしたこの女性は、ジョンの母親、ルーシュ・エリックである

「お母さん！」

ジョンは、入ってきたルーシュの後ろに隠れる。

「あらあら、どうしたの、ジョン？」

おっとりとした口調でジョンに尋ねる。

「お母さん、ゼロが・・・ゼロがいるよ」

言つて、ゼロを指差す。

「ゼロ・・・？」

ゆっくりと、指差す方向に目を向ける。

そして、ようやくゼロに気づいて、驚いた様子もなくゼロを見つめる。

「怖いよ、お母さん・・・早く追い出してよ・・・」

ルーシュの後ろで怯えるジョンを見て、ゼロはため息をついた。

「・・・やっぱりお前も同じかよ・・・」

悲しそうに、顔を伏せる。

「そうやって、みんな俺から離れていくんだ・・・」

もういい、と言って、ゼロは後ろを向く。

「ちよつと待って、ゼロちゃん」

今度は、ルーシュがゼロを止めた。

ゼロは振り向かずに、何？、と言う。

「お洋服がボロボロよ？・・・新しいお洋服を用意してあげるから少し待って」

そう言って、ゼロに歩み寄る。

「近付くな！」

振り向かずに、ゼロが叫んだ。

「お前だつて俺が怖いんだろ！？気持ち悪いんだろ！？・・・それなのに優しくするなよ！」

ぎゅつと、悔しそうに拳を握る。

「・・・そんなゼロを、後ろからルーシュが優しく抱きしめた。

「怖くなんてないわ。気持ち悪くもない」

「・・・そんなの嘘だ

嘘じゃないなら偽善だ・・・

「・・・なんだよ・・・俺のこと知らないわけじゃないだろ！？」

「いいえ、何も知らないわ」

「な！？」

ゼロは、思わず驚く。

「・・・この街で自分のことを知らない人間はいない。

なのにコイツは知らないと言う。

ゼロが理解できずに戸惑っていると、ルーシュが優しく語りかける。

「私とゼロちゃんはまだ出会って間もないわ。それなのに、あなたの何が解ると言うの・・・何も解らないわ・・・何も解らないまま、

あなたのことを怖がったり、気持ち悪がったり出来ない・・・」

「・・・嘘に決まってる・・・そんな、こと・・・」

そう言つて、ゼロの体が小刻みに震える。

それを見たルーシュは

「ゼロちゃん、こつちを向いて・・・」

「・・・」

言われてた通りに、ゼロくるりと振り返つた。

・・・ゼロの顔は、涙で濡れていた。

ポロポロと涙を流し、その涙が頬をつたう。

そんなゼロを見て、ルーシュは微笑んだ。

「見て、ゼロちゃん・・・あなたは、こんなにも綺麗な涙を流してる。こんなに綺麗な涙を流すあなたの、どこが気持ち悪いと言うの？・・・綺麗な涙は、心も綺麗じゃないと流れない。・・・あなたの心はとても綺麗よ・・・だから、もう悲しまないで・・・」

・・・なんでこんなことを言うんだろう？

なんで、俺なんかに笑いかけてくれるんだろう？

なんで、この人といるとこんなにも温かいんだろう？

なんで？

なんで？

・・・ゼロは、わけも分からずに、ただ泣いた。

そんなゼロを、ルーシュは何も言わずに抱きしめた。

「ゼロちゃん・・・あなたのことが、少しだけ解った気がする・・・

あなたは、人と接するのが不器用なだけの男の子。あなたは、人の優しさに慣れていないだけ・・・だからこういう時、どうしていいか分からなくなる・・・」

・・・まさにその通りだった。

何故、こんなにも温かいのか。

何故、こんなにも安らぐのか。

・・・生まれて始めての優しさ・・・

ゼロにはまだ、それが何なのか分からなかった。

「でもね、ゼロちゃん・・・」

ルーシュが口を開く。

「あなたは、人より辛い思いをした分、人の優しさに敏感なはず。・
・そして、辛い思いをした分、人に優しくなれるわ・・・」

そう言われて、余計に涙が溢れてきた。

気が付けば、自分からルーシュに抱きついていてた。

・・ルーシュは、自分の腕の中でひたすらに泣くゼロを見て、心がいたんだ。

こんなに小さい子が、こんなに苦しんでいる。

この子をここまで追い詰めたのは、間違いなく大人達である。

こんなに苦しんでいる子供に、僅かな愛情すら注いでやれない大人達の不甲斐なさが情けなかった。

「・・・ジョン、よく見て・・・」

口を開いて、顔だけをジョンに向ける。

「・・・この子とあなた、特別に違う所がある？この子は、追い出さないといけないくらい怖い？」

そう聞かれて、ジョンは首を横に振る。

「そう、その通りよ・・・この子は、私達と何も変わらない・・・特別な力を持っていたとしても、それは1つの大事な個性よ・・・その個性を、踏みにじるようなことをしてはいけない・・・何が言いたいのか、分かるわね・・・？」

今度は、首を縦に振る。

「そう・・・いい子ね・・・なら、あなたが今しなければならいことも、分かるわね？」

ジョンは頷いて、ゼロに歩み寄る。

そして、ゆっくりと口を開いた。

「・・・ごめんなさい・・・」

ゼロに向かって、素直に謝罪の言葉を口にする。

「・・・もういい・・・許す・・・」

そう口にして、ゼロは顔を上げた。

「・・・いいお友達ができたわね、ジョン」

ルーシュは微笑んで、ゼロとジョンの頭を撫でる。

「さてさて・・・2人が仲直りした所で、お着替えと食事にしましょう。・・・今日はお父さんがいなくてよかったわ・・・あの人がいれば、何を言われるか分からないもの」

嬉しそうにそう言つて、ジョンの部屋を後にする。

ゼロとジョンも、それに続いて、部屋を後にした・・・

第32話 その2 (前書き)

えゝ・ゝ・なんとなく書き始めた外伝なんです、なんとなくあと少し続いてしまいそうですf^_^;読んで頂ければ嬉しい限りです

第32話 その2

ゼロは、ジョンの屋敷の広さに圧倒されていた。

今、目の前を歩いているルーシュを見失えば、確実に迷子になる。そんなことを考えながら、階段を降りていく。

しばらく廊下を歩いていたが、急にルーシュが立ち止まった。

「うわぁ！」

ポスンと、ゼロはルーシュの背中にぶつかる。

「いきなりどうたの、おばちゃん？」

ゼロが尋ねると、ルーシュはニコニコしながら振り返った。

「ここよ、ここ」

そう言つて、扉を指差す。

「ここに、今は着なくなつたお洋服がいっぱいあるわ。つて言つても、まだ新しいやつも沢山あるから安心して」

ルーシュはニコニコ顔のまま、扉を開いた。

・・・そこには、部屋いっぱい服がぶら下がっていた。

見渡す限り、服、服、服・・・

洋服でできた迷路のようだった。

「ちよつと待つてね。今お洋服選んでくるから！」

ルーシュは、軽いステップで迷路の中に飛び込んで行った。

取り残されたゼロとジョンは、何も言わずにただ立ち尽くす。

・・・

しばしの沈黙。

気まずい空気が2人の間に流れる。

その空気に耐えきれなくなつのか、唐突にゼロが口を開いた。

「あのさ・・・1つ、聞きたいことがあるんだけど・・・」

「なに、ゼロ君？」

ジョンがくるりと振り返る。

「いや、“君”はいらないけど・・・お前、さっき屋敷から出ちゃ

いけないって言ってたけど・・・何で？」

ゼロが聞くと、ジョンは少し悲しそうにルーシュに目を向ける。

「・・・お母さん、病気なんだ・・・原因不明の・・・」

言われて、ゼロは首を傾げる。

「病気？あんなに元気なのに？」

「今日はたまたま調子がいいだけ・・・悪いときは、ベッドから起き上がることも出来なくなる・・・」

「ふうん・・・」

ゼロも、ルーシュに視線を向けた。

「それでね、お父さんがいないときは、僕が看病するって決めたの・・・使用人の人もいるんだけど、なんとなく心配だから・・・」

「ジョンって、いい奴なんだな・・・」

「そんなことないよ・・・ただ、当たり前のことをしてるだけ・・・」

ジョンは、少し嬉しそうに目を細める。

そうしているうちに、ルーシュが洋服をもってやってきた。

「はい、これ。暑くない物を探したんだけど・・・これしか無かったわ・・・」

そう言つて、半袖のシャツ、半ズボンをゼロに手渡す。

「サイズ、大丈夫かしら？」

「・・・大丈夫だと思う」

ゼロは、おもむろに上着を脱いだ。

『あ！』

ジョンとルーシュが、声を揃えて驚く。

「その傷・・・」

ルーシュが、ゼロの体に刻まれた無数の傷跡を指差す。

「・・・これ？この傷なら心配ないよ。もうとつくの昔に塞がってるし」

「そうじゃなくて、一体何があつたの？」

そう聞かれて、ゼロは少し悲しそうな顔をした。

「・・・おばちゃん達も知ってると思うけど、俺は研究所を抜け出したとき、沢山の人間を殺した・・・その時、つけられた傷だよ・・・この傷の数だけの人間を、俺は・・・殺してしまった・・・」

3人を沈黙が襲う。

「・・・でも・・・」

ゼロが口を開く。

「・・・この傷を見ると、安心する・・・多分、この傷跡を見る度に、嫌なことも沢山思い出す・・・それでも・・・痛い思いもしたけど、俺は確かにここにいる・・・この傷跡は、その証・・・」
へへっ・・・と、照れくさそうに笑い、ルーシュに手渡されたシャツを着る。

そのままズボンもはいて、ゼロは嬉しそうに笑った。

「大きさぴつたりだ！ありがと！」

ルーシュは何も言わずに、ゼロの顔を見つめた。

・・・なんて真っ直ぐな子。

とても素直な、優しい子・・・

この子は、この年で自分の罪から目を背けず、しっかりと向き合っている。

この年で、すでにいろんな物を背負っている。

なんて、強い子だろう。

それに比べ、自分達大人は何をしているのか・・・

こんな子供に罪を押し付けて、自分達は見ないふり・・・

自分達では何も背負わない・・・背負えない・・・

背負えないから押しつける・・・

たとえ、それが子供であっても・・・

情けない人ばかり・・・自分を含めて・・・

「どうした、おばちゃん？」

その声で、我にかえる。

見れば、ゼロが心配そうにこちらを見つめていた。

「なんでもないわ・・・服、似合ってるわよ、ゼロちゃん」
「本当か!？」

嬉しそうに、ゼロは瞳を輝かせる。

「ええ、本当よ・・・さあ、そろそろご飯にしましょう」

そう言つて、ルーシュはゼロとジョンの手を握り、食堂へと歩き出した。

・・・

・・・

・

「到着了。ここが食堂よ」

案内されたのは、長いテーブルのおかれた大きな部屋。

こんなに広いスペースをどうやって使うんだろう？

果てしなく大家族なのだろうか？

ゼロがそんなことを考えていると、1人の使用人が近付いてきた。

そのまま、ルーシュに軽く頭を下げる。

「奥さま、如何なされ・・・」

頭を上げようとした時、視界にゼロが入り、言葉を無くす。

そして、視線がゼロに固定される。

「奥さま・・・まさか、この子は・・・？」

「ええ、ゼロちゃんよ」

悪びれる様子もなく、平然とルーシュは答える。

「いけません!このような者を屋敷にいれては!」

使用人が声を上げると同時に、どこからかいかついスーツ姿のガー

ドマンが2人、姿を現す。

そして、ゼロを捕まえる。

「え?ちょ?ああゝ・・・」

ズルズルと、ゼロは2人のガードマンに引きずられる。

・・・その時

「やめなさい!!」

突然、怒りのこもった声が響き渡った。

声の主はルーシュ。

使用人やガードマンはもちろん、ゼロとジョンまでもが驚いた表情でルーシュを見る。

ルーシュは、さっきまでの優しい表情が、まるでなくなっていた。心底怒っているといった目で、ガードマンを睨みつける。

「・・・もう一度言います・・・その手をはなしなさい・・・」

「し、しかし・・・!」

「あなたの言い分を聞く余地はありません!!」

ガードマンの言葉を遮り、ルーシュは声を上げる。

「聞こえませんか？その手をはなせと言ってるのです。・・・次はありませんよ?」

じろりと、ガードマンを睨む。

「し、失礼しました・・・」

ガードマンはゆっくりとゼロから手をはなした。

次にルーシュは、使用人を睨みつける。

「・・・何故この子がここにいてはいけないの？何がそんなに不満なの?」

「いえ、そのようなことは・・・」

使用人は頭を下げたまま、どうしていいか分からないという感じだ。

「じゃあ何がいけないというの?」

ルーシュは、厳しい視線で使用人を問いただす。

「そ、その子は危険なので、決して屋敷に近付けぬよう、旦那さまから命じられています・・・」

「この子が危険だなんて・・・そんなの大人の勝手な都合よ。自分達の罪を認めず、ただ一方的に悪いと決めつける。・・・人として恥ずかしいことだと思わない?」

「しかし、命令ですので・・・」

「責任なら私がとります。・・・それなら構わないでしょう?」

「それでは、奥さまが旦那さまに何を言われるか・・・」

使用人がそう言った所で、ルーシュはしびれを切らした。

「ああ、もう！あなた達使用人やガードマンとしては優秀だけど、人としては最低よ！？大体あなた達・・・」

言おうとして、止めた。

ゼロがルーシュの袖を指でつまみ、クイクイ引っ張っているから・・・。

「もう、いいよ・・・」

顔を伏せて、そう言った。

「俺が帰ればいいんでしょ？・・・なら、帰るよ、俺・・・俺のせいで人を困らせたくないよ・・・そんなのは、もう沢山だ・・・俺はもう帰るから、もう二度と来ないから、その人達を許してあげて・・・」

「駄目よ、ゼロちゃん・・・」

「でも、俺が悪いんだよ？・・・俺がこんな所に来ちゃったから・・・俺が身分をわきまえないから・・・俺が化け物だから・・・俺が・・・俺が・・・」

「駄目だって言ったでしょう、ゼロちゃん？」

そう言っつて、ルーシュはゼロの肩にてを添える。

「なんでもっと自分を大切にしていあげないの？・・・何故そんなに自分を犠牲にするの？」

ゼロは何も言わない。

ただ、悔しそうにうつむいている。

・・・心が痛んだ。

今日の前にいる子は、いろんな物を背負っている。

けれど、その小さい体は、“罪”という荷物に今にも潰されてしまいうそう。

とても強く、故に脆く、儂く、愛おしい存在・・・

・・・ルーシュは、いつもの優しい表情に戻った。

「・・・そんなに自分を責めては駄目・・・もっと、自分を大切にしなければ駄目よ・・・確かに、あなたは罪を犯したかもしれない・・・でも、それとこれとは話が別よ・・・だからあなたは、もっと

胸をはって、堂々とここにいなさい・・・“もついい”なんて、寂しいことは言わないで・・・」

「・・・」

ゼロは何も言わずに頷いた。

そんなゼロを、ルーシュはまたもや抱きしめる。

そしてゼロも、気が付けば涙を流していた。

・・・自分では泣くつもりはないのに、この人に抱きしめられると涙が止まらなくなる。

言葉の1つ1つが、自分を癒やして行くのが分かる。
涙が止まらない。

「・・・今は、泣きたいだけ泣けばいいわ・・・でも、男の子があんまりメソメソしてたら駄目よ？」

「・・・うん・・・うん・・・」

ゼロは何度も頷いた。

・・・しばらくはそうしていたが、やがてゼロは泣き止む。

「・・・もう、大丈夫・・・」

そう言って、ゆっくりとルーシュから離れた。

「・・・ありがとう」

「いえいえ・・・お安いご用よ」

ルーシュは、嬉しそうに微笑む。

「・・・さてさて・・・遅くなってしまったけど、お昼ご飯にしましょう・・・料理、お願い出来るかしら？」

使用人に尋ねると、少し気まずそうに口を開く。

「それが・・・ケルビの肉が切れてしまい、何をお作りしていいか・・・」

それを聞いたゼロは

「だったら俺がとってくるよ！ちょっと待ってて！」

そう言って駆け出した。

「待って！僕も行く！」

ジョンも、ゼロにつられて駆け出す。

「あ！ゼロちゃん！？ジョンまで・・・行っちゃったわ・・・」

ハア・・・と、ルーシュはため息をつく。

「・・・あなた達？」

ルーシュは、使用人とガードマンに目を向ける。

「今回はゼロちゃんに免じて許してあげるけど、次、同じようなことがあれば許さないわよ？」

『かしこまりました』

声をそろえて、深々と頭を下げた。

・・・

・・・

・

ゼロとジョンは、屋敷の裏にある山に来ていた。

手には片手用の剣が握られている。

・・・と、言っても、ハンターが使う場合の片手用なので、ゼロとジョンには大きすぎるほどだった。

この剣は、路地裏にハンターが捨てていったものを、ゼロが護身用にコッソリ拾っていたものである。

「本当にここにケルビがいるの、ゼロ？」

ジョンが首を傾げる。

「間違いないよ・・・俺、この前見つけたもん」

「なら、信じるよ」

・・・2人は、さらに奥まで進んで行った。

そして、ケルビを見つける。

「あ、本当にいた・・・ようし、だったら早く・・・」

「ちょっと待て」

ガシッと、走りだそうとしたジョンの襟を掴む。

「・・・何？」

「あれ見ろよ」

ゼロはケルビを指差す。

ジョンは、言われたとおり、ケルビを見つめた。

すると、ケルビの足元でもそもそ動く小さなケルビが視界に入る。

「あれは子供がいるから駄目・・・他のにしよう・・・」

「え？なんで？」

ジヨンは首を傾げる。

「なんでって・・・かわいそうだろ？」

「どうして？親に逃げられても、子供は確実にとれるじゃない。一番効率的だと思うけど・・・」

そう言われて、ゼロは唸りながら頭を抱える。

「・・・やっぱり駄目・・・上手く言えないけど、とにかく駄目・・・」

「・・・わかったあ・・・」

ジヨンは、渋々納得する。

・・・2人は、別の獲物を探して歩きまわったが、全て子連れで、ゼロが決まって駄目だしをしたので、結局獲物は捕れなかった。

「・・・獲物、捕れなかったね・・・」

ジヨンは、ガクリと肩を落とす。

「・・・このままじゃおばちゃんに悪いから、食べられる山菜を採って帰ろう！」

そう言って、嬉しそうにゼロは山菜を摘みだした。

・・・ジヨンは、ゼロが何故子連れのケルビを狙わなかったのか、解らないでいた。

この時は、まだ・・・

第33話 その3 (前書き)

更新が遅れて誠に申し訳ありません！

なんと

なく書き始めた外伝が、これでようやく終わります！

ですが、今回はやや長いです f ^ | ^ ;

．．．まあ、何はともあれ外伝はこれで終わります

！ 次回からは本編に戻

りますので、これからもよろしく願います！ 長文失礼

しました

第33話 その3

ゼロがジョンの家に通うようになって、一週間が過ぎた。
今、ゼロが屋敷を出入りする事に反対する者はいない。

ゼロは、今日も大きな門をくぐり、扉の前の呼び鈴を鳴らす。

「あ、やっと来た」

扉の中から、ジョンが出てきた。

「ジョン様、お客様のお出迎えは私がいたします」

言葉と同時に、後ろからいつもの使用人が顔をだす。

「あら、ゼロ様。いらつしやいませ」

「いや、“様”はいらないって・・・なんかくすぐったいよ、ナラさん」

ナラと呼ばれた使用人は、ナラ・アンジェリー、16歳。

幼い頃からジョンの屋敷の使用人として務めていて、16歳という若さでありながら立派に使用人の仕事をこなす。

ナラは表情ひとつ変えずに、

「ですが、ゼロ様はお客様ですので失礼な言動は慎まなければなりません」

「それがイヤだって言ってるの！」

「それをおっしゃるのでしたら、ゼロ様も私をさん付けで呼ぶ必要はありません。私のことは呼び捨てになされてください」

「むっ・・・」

ゼロは、眉間にしわを寄せてナラを見る。

「分かった・・・俺も呼び捨てにするから、ナラもそうしてよ・・・」

ゼロがそう言うと、ナラはゼロに一礼し

「かしこまりました、ゼロ様」

「いや・・・うん。なんか見事に人の話聞いてないね」

ゼロが呆れていると、ジョンが2人にわって入る。

「まあまあ・・・で、今日も“あの”練習するんでしょ？」

ジョンが聞くと

「もちろん！」

と、ゼロがこたえて、2人は屋敷の中へと入った。

・・・

・・・

・

屋敷に入って、ゼロはすぐにルーシュの姿を見つける。

「あ、おばちゃん発見。おゝい」

ゼロが声をかけると、ルーシュはゆっくりと振り向く。

「あら、ゼロちゃん・・・いらっしやい・・・」

弱々しくそう言つと、ふらふらとおぼつかない足取りで階段を登ろうとする。

普段の元気な面影はどこにもなかった。

ゼロは心配になり、ルーシュに駆け寄り、前に回り込む。

そして・・・

「・・・!？」

ゼロが目にしたもの・・・それは、土気色のルーシュの顔だった。顔色が悪いどころではない。

ルーシュからは、僅かな生気すら感じられない。

はあはあと、苦しそうな息を吐き、指で押すだけで簡単に倒れてしまいそうだった。

「おばちゃん!すごい顔色してるぞ!・・・はやくよこにならないと・・・!」

「大丈夫よ・・・このくらい・・・」

「大丈夫なわけないだろ!・・・とにかく部屋に・・・!」

そう言つて、ゼロはルーシュに手をさしのべ、その手を・・・握れなかった。

「え・・・?」

驚きのあまり、そんな間の抜けた声しかでない。

・・・瞬前にそこにあつたルーシュの手がなくなっていた。
ルーシュは、糸が切れた人形のように崩れ、派手に階段から落下した。

「おばちゃん!？」

ゼロが慌ててルーシュに駆け寄ろうとしたその時・・・
ガタン!

盛大な音をたてて、家の扉が開かれた。

それと同時に、白いヒゲをはやした男が入ってくる。

「今帰ったぞ」

・・・ジョンの父親、マルシアが帰ってきたのである。

「!?!?・・・ルーシュ!」

マルシアは倒れ込んでいるルーシュを目にし、急いで駆け寄り抱きかかえる。

「大丈夫か!? 一体なにが・・・」

マルシアは、階段の上に佇むゼロを目にして、一瞬動きが止まる。

「何故こいつがここにいるのだ!?!?・・・ナラ! 私はこいつを屋敷に近付けるなと命じたはずだ!」

そう叫んで、ナラを睨みつける。

「そ、それは・・・」

「・・・私が・・・許可しました・・・」

ナラが言うより早く、ルーシュが口にする。

「・・・この子は、ただの子供です・・・あなたが言うような・・・
恐ろしい者では、ありません・・・」

「だから屋敷に入れたと言っのか!？」

「・・・その・・・通りで、す・・・」

力なく呟き、ルーシュの意識は途切れた。

「おい、ルーシュ?・・・誰かルーシュを部屋まで運べ!」

マルシアが叫ぶと、そばにいた男がルーシュを抱えて廊下へと歩き出す。

マルシアはそれを見送ると、今度はゼロに視線を向ける。

ありつただけの憎しみを込めて・・・

「・・・何をしている！？早くこやつをつまみ出せ！！・・・こやつは人殺しだぞー！」

「しかし旦那様・・・」

「私の命令が聞けんと言うのか！？・・・はやくつまみ出さんか！」
ナラの声を無視して、マルシアは声を荒げる。

「・・・かしこまりました・・・」

ナラは渋々頷いて、残り2人の男に目を向けた。

それに頷き、2人の男はゼロの脇に手を回し持ち上げる。

「・・・スミマセン・・・旦那様は今何を言っても聞き入れてはくれぬでしょう・・・今日のところはお引き取りを・・・」

小声で呟くように謝罪し、ゼロを屋敷の外に連れ出していった。

・・・

・・・

・

3日後・・・

ゼロは、ジョンの屋敷を訪れていた。

「こんにちは・・・」

ゼロが門前に立つガードマンに挨拶をする。

しかし、ガードマンは挨拶を返さずに

「お引き取りください・・・」

とだけ言った。

「いや、遊びに来た訳じゃないんだ。・・・ただ、おばちゃんに渡したい物があるんだけど・・・」

「あなたからは何もお預かりできません・・・旦那様の命令ですの
で・・・」

「うん、まあそうだろうと思った」

「申し訳ございません・・・」

本当に申し訳なさそうに謝るガードマン。

「いや、別に謝ることじゃないよ。仕事なら仕方ないから・・・」

あはは・・・と少し寂しそうに笑って、ゼロは門を後にした。

・・・

・・・

ルーシユは容態が落ち着き、ベッドの上で暇な時間を過ごしていた。

「はあ・・・暇ねえ、ナラ」

そばに立つナラに話しかけると、ナラは表情を変えずに

「奥さまの容態がもう少し良くなるまで我慢するしかありません」

「それは分かってるわよ・・・でも暇なのよ・・・」

ルーシユが子供がいじけたような表情を見せるが

「我慢するしかありません」

ナラは変わらずそう答えた。

そこへ・・・

・・・コツンコツン・・・

「あら？何かしら？」

窓から音がして、ルーシユは首を傾げる。

「見てみます」

起き上がろうとしたルーシユを制止して、ナラが窓に歩み寄る。

ガタリ・・・と窓を開けるが、そこには誰もいなかった。

「・・・？」

不思議に思いつつも、ナラは窓を閉めようと窓に手をかける。

・・・その時

「あら？これは・・・？」

窓の枠に、一枚の紙が折り畳んで挟まれていた。

「・・・」

ナラは慎重にその紙を開き、そこに書かれていた文字を見て、慌てて窓から身を乗り出した。

そして、窓の外を見渡すと、あるものを見つける。

・・・小さい体で、一生懸命に屋敷の塀を超えようとしている小さな背中・・・

そう、間違いなくゼロだった。

・・・ナラはしばらくその姿を眺め、窓を閉めた。

「何があつたの？」

ルーシュが聞くと、ナラは紙を差し出し

「ゼロ様からです」

とだけ伝えた。

ルーシュは紙を受け取り、文字に目を向ける。

・・・そこには、ミミズが張り付いたような文字が記されていた。正直、とても読めるような文字ではない。

けれどその文字は、書いた者がいかに真剣なのか物語っているようだった。

・・・ルーシュは、その短い文をゆっくりと解読していく。

・・・そこに記されていた文。

“はやくげんきになつて”

・・・たつた、それだけだった。

たつたそれだけなのに、ルーシュの頬に一筋の涙が流れた。

「・・・これをゼロちゃんが私に・・・？」

「はい。・・・ゼロ様は文字の読み書きが出来なかったため、ジョン様に習って1から練習をなされていました。・・・読みづらいかもしれませんが、これでもかなり上達した方です。・・・恐らく、お一人でも練習をされていたでしょう・・・」

それを聞いたルーシュは、その紙を大事そうに閉まった。

「そう・・・それなら、私も頑張つて体を治さなくちゃね・・・」

嬉しそうにルーシュがそう言うのと、ナラも少し嬉しそうに頷いた。

・・・それから毎日、窓に手紙が挟まれるようになった。

ルーシュは、その手紙が届くのを、毎日心待ちにしていた。

マルシアには内緒で、ジョンやナラと一緒にその手紙を見ながら、次はどんな物が届くのか、次は上手に書けるのかと、話し合った。

ジョンはルーシュの笑顔を見て、安堵感を覚えていた。

これならすぐに立ち直るだろうと。

・・・けれど、そんな日常は続かなかった。

・・・

・・・

一週間後

外は、激しい雨が降り、時折雨の音に紛れて雷鳴が聞こえてくる。

その日、ルーシュは体調が良いと言って、屋敷の中を歩き回っていた。

「お母さん。そんなに動いて大丈夫？」

ジョンが心配そうに尋ねる。

「大丈夫よ。・・・でも、やっぱり少ししんどいわね。・・・後少ししたら部屋に戻るわ」

そう言つて、ルーシュは書斎に入って行った。

「そう、分かった」

ジョンも、ルーシュとは反対の方向に歩き出す。

・・・これが、ジョンが見る、母親の最後の元気な姿だった。

・・・やがて夜になる。

急に屋敷が騒がしくなり、ジョンは妙な胸騒ぎを覚え、部屋の外にでた。

・・・人がバタバタ走り回る中、ジョンはナラをつかまえる。

「ナラ。一体何があったの？」

ジョンがそう聞くと、ナラは少しためらい、やがて意を決したように口を開く。

「・・・落ち着いてお聞きください・・・奥様が書斎の入り口で倒れているのを見つけました」

「・・・お、お母さんが・・・？」

「はい。・・・大量に吐血されており、容態は深刻です。・・・今、お医者様が来られて、診察されています」

「・・・な・・・どう、して・・・？」

書斎・・・それは、自分が母親を最後に見た場所・・・入り口で倒

れていた・・・なら、あの後すぐ倒れて、今まで放置されていた・・・？

なぜ自分はそれに気付けなかった？

そもそも、何故母親を1人にした？

「わからない・・・わからないよ・・・なんで・・・どうして・・・あんなに元気だったのに・・・なんで？・・・なんでなんでなんで！？」

ジヨンは現状を理解しきれずに、軽いパニックに陥る。

・・・その時、屋敷に乾いた音が響き渡った。

ナラがジヨンをぶつ音が・・・

「・・・ナラ？」

その一発で正気に戻ったジヨンは、驚きの表情でナラを見つめる。

「申し訳ありません・・・しかし、ここで嘆いていても何も分かりません・・・奥様の部屋に行きましょう、ジヨン様・・・」

「あ・・・うん・・・」

ジヨンが頷き、ナラはジヨンの手を引いて、急ぎ足でルーシユの部屋へと向かった。

・・・

・・・

勢いよく部屋の扉を開き、中へ入る。

ちようど、医者が診察を終えたところだった。

「お母さんは！？お母さんはどうなの！？」

ジヨンが医者にしがみついて尋ねる。

・・・医者はゆっくりと、だけどしっかりと、首を横に振った。

「うそ・・・だ・・・」

帰ってきた返事は、残酷なものだった。

「うそだよ・・・そんなの・・・ちゃんと治るんだよね・・・？僕をからかっただけなんですよ・・・？」

ジヨンは必死に問いかけるが、医者は首を横に振るばかりだった。

・・・ガシヤァン！と、唐突に窓が割れる。

「何事だ！？」

マルシアが叫び、部屋にいる全員が音の方に目を向ける。

見事に砕け散ったガラス・・・

その上を、ゼロが転がっていた。

窓の外から様子を見ていたらしく、かなり慌てた様子である。

「おばちゃん！」

ゼロは、体中切り傷だらけなのも無視してルーシュに駆け寄る。

「大丈夫かおばちゃん！？しっかりしてよ！」

ゼロが必死に呼びかけると、ルーシュは優しく微笑み

「・・・私は、もう・・・だめみたい・・・」

「そんなこと言わないでよ！なんとかなるよ！」

そう言つて、ゼロは医者に飛びかかる。

「お前医者だろ！？なんとかしろよ！・・・たのむから・・・たのむから、なんとかしてくれよ！！」

・・・こんなことをしても、いくら叫んでも、何も変わらないことは頭のどこかで理解していた。

だけど、理性が言うことを聞かない。

おばちゃんはこのまま・・・

そう考えると、いくら駄目だって分かっても叫ばずにはいられなかった。

目が熱くなつて、景色が歪む。

また、自分は泣いている。

情けなくつて、カッコ悪い・・・

メソメソするなど言われたのに、また自分は泣いている・・・

「おい！なにをばやばやしている！？早くこいつをつまみ出せ！」

マルシアがナラに命令するが

「・・・お断りします」

ナラは、まっすぐな瞳でそう答えた。

「な！？」

まさかナラが断るとは考えられなかったマルシアは驚きを隠せない。

「お前・・・今なんと言った・・・？」

「ですから、お断りしますと申し上げました」

「貴様・・・クビになりたいのか！？」

「構いません。ただ、今の旦那様の命令には従えません」

「貴様！」

「まって！」

ルーシュが2人に割って入る。

「2人共・・・言い争いはやめて・・・子供の前で、みつともないわ・・・」

そう言つと、ゼロを手招きして呼ぶ。

ゼロは、医者から手を離し、ルーシュに駆け寄る。

「ゼロちゃん・・・私は、本当に駄目みたい・・・あなたとお話するの、これが最後・・・」

「おばちゃん・・・！」

「ほら、泣かないで・・・」

そう言つて、弱々しくゼロの涙を拭う。

「よく聞いて・・・あなたには、とても沢山の敵がいる・・・それは、他でもなく、私達人間・・・私達は、とても許されないような罪を犯してる・・・あなた1人にすべてを押し付けてる・・・」
「はあ・・・と、苦しそうに呼吸を整える。」

「だから・・・許してとは言わない・・・憎んでくれても構わない・・・だけど・・・だけど、あなたにはあなたを憎まないでほしい・・・そして、あなたの世界を憎まないでほしい・・・あなたと、あなたの世界は、あなただけのものだから・・・私からの、お願いよ・・・」

「うん・・・うん・・・」

ゼロは、ただ頷いた。

それをみたルーシュはそばにいた男に目を向けて

「・・・ゼロちゃんを、外に連れて行って頂戴・・・」

そう言われて、男共は戸惑う

「しかし・・・！」

「伝えたいことは伝えたわ・・・後は、家族の問題よ・・・ゼロちゃんには悪いけど、出ていってもらうわ・・・」

「・・・かしこまりました・・・」

そう言つて、ゼロの手を握り、歩き出す。

ゼロはなんの抵抗もせずに、外へと連れ出された。

・・・外は雨が降っている。

門の前まで連れ出されたゼロは、ただ立ち尽くす。

男達は傘を差し出すが、受け取らない。

・・・なにも言わず、悲しそうに顔をふせて、ただ雨に打たれていた・・・

・
・

ルーシュの部屋では、今まさにルーシュが息を引き取ろうとしていた。

「・・・あなた・・・」

「なんだ？ルーシュ・・・」

ルーシュが弱々しく呼んで、マルシアはそれに答える。

「・・・私は、あなたの妻になれて、幸せでした・・・いえ、幸せです・・・こんなに素敵な子も、授かることが出来ました・・・」
そう言つて、ジョンの頭を軽くなでる。

「私も同じ気持ちだ・・・私も、お前の夫となれて、この上なく幸せだ・・・」

マルシアが言くと、ルーシュは目を細めて微笑む。

・・・しかし、その表情はすぐになくなり、少し悲しそうな顔をする。

「・・・ただ、1つだけお願いがあります・・・」

「・・・ゼロの、ことか・・・？」

ルーシュは、何も言わずに頷く。

「・・・しかし、私はヤツへの憎しみと恐怖を、簡単には拭えない・・・」

「・・・あせる必要はありません・・・ゆっくりで、いいんです・・・ただ、いつかあの子を、心から祝福できるようになってほしい・・・」

「・・・分かった・・・努力しよう・・・」

ルーシュは、ありがとと呟いて、今度はジョンに視線を向ける。

ジョンの顔は、涙でくしゃくしゃになっていた。

「あらあら・・・ジョンまでそんなに泣いて・・・」

ルーシュはクスリと笑う。

「・・・いい？ジョン・・・あなたは、あなたの生きたいように生きて・・・生きていれば、必ず大きな壁にぶつかる時が来る・・・そんな時は、沢山悩みなさい・・・悩んで、悩んで、悩み抜いて・・・あなたが自信の答えを出してほしい・・・他の人は関係ない・・・あなたの出した答えを、あなたが信じているかぎり、その答えを貫いてほしい・・・それも、1つの強さ・・・あなたは、あなたなりの強さを身につけて・・・」

「・・・分か・・・た」

喉をしゃくりあげながら、ジョンは答えた。

それを聞いたルーシュは、最後にもう一度ありがとと呟いて、安らかに眠りについた。

体中の力が抜けて、体温が急速に失われて行く。

「・・・お母、さん・・・？」

呼びかけても、返事はない。・・・あるはずがない。

ルーシュは、安らかに眠るだけ。

・・・永遠に・・・

・・・それを理解したとき、ジョンの中で何かがはじけた。こらえていたものが、一気にふき出る。

声をあげ、がむしゃらに泣いた。

・・・そのとき、ジョンは以前ゼロが言っていた言葉の意味を、ようやく理解した。

それは、ゼロとケルビを狩りに行ったとき、ゼロが口に使っていた台詞

“ あれは子供がいるからだめ・・・ ”

“ 上手く言えないけど、とにかくだめ・・・ ”

その言葉の真意によりやく気付く・・・

子が親を失う気持ち・・・

ただ単に悲しいだけじゃない・・・

上手く表現できない。

様々な感情がドロドロに混ざり合って、胸の内で渦を巻く。

その感情に、母を失って初めて気付いた。

そして、ジョンは思う。

自分は、なんて愚かなのだろう、と・・・

・・・

・・・

・

あれから7年。

時々、母さんの墓がやたらと綺麗に掃除されていたり、供え物が新しくなっていたりした。

犯人は間違いなくゼロだ。

恐らく、親父に気を使って、コッソリやってたんだろう。

「・・・なあ、ジョン・・・」

呼ばれて、我にかえる。

辺りに、焚き火の音以外に音はない。

「お前さつき、なんであんなに笑ってたんだよ？そろそろ教えてくれてもいいだろ？」

・・・まだ悩んでいたのか。

あの時、確かに悲しいことがあったけど、それにいつまでもこだわってはいられない。

・・・それよりも、ゼロが昔と変わらずにいたことが、やけに嬉し

くて、笑ってしまった。

・・・そろそろ教えてやろう・・・

「・・・ゼロ・・・こうしていると、昔を思い出さないか？」

第34話

ゼロとジヨンはそれを目の前にして、情けなく口を半開きにした。

目の前にそびえ立つ、巨大な生物。

・・・しかし、凶悪な感じはしない。

その巨大な瞳には、どこか優しさを秘めていた。

“ほう・・・代行者が言っていたのはお主らのことか・・・”

代行者・・・キリンのことだ・・・

ならばコイツは・・・と思い、ゼロは口を開く。

「お前が・・・賢者か？」

ゼロが聞くと、僅かに目を細める。

“賢者とは大袈裟な・・・ワシは他の者より長生きなだけ、知識を多く有しておるだけだ・・・”

それに・・・と、視線をジヨンに向ける。

“その者は、ワシが何者なのかしっておるようだな・・・”

言われて、ゼロもジヨンに視線を向けた。

「ジヨン・・・お前コイツのこと知ってるのか？」

ゼロが尋ねると、ジヨンは信じられないといった表情で巨大な竜を見つめたまま、口を開く。

「・・・文献でしか見たことはなかった・・・1000年も昔にその姿を現したのを最後に、二度と人前に姿を現さなかったと言い伝えられる・・・古竜、ラオシャンロン」

“ふむ・・・その名を呼ばれるのは、実に久方振りよの・・・”
少し嬉しそうにそう言って、もう一度視線をゼロに戻した。

“ワシに会いにきたということは、何か知りたいことがあるのであるろう？竜の子よ・・・”

その言葉を聞いて、ゼロははやる気持ちを抑えるように、一度深呼吸をする。

「ああ・・・聞きたい事は山ほどある・・・まず、この剣は何だ？」
そう言つて、見せつけるように剣を前に突き出す。

“ 代行者より聞かなかつたか？それは・・・ ”

「生と死を司る剣だ（剣）って言いたいんだろ？・・・それは分かつてる。
俺が聞きたいのは、この剣の不思議な力についてだ」

“ なるほど・・・そのことか・・・その剣が天地創造の際に神々が
作つたと言ふことは知っておるか？ ”

ラオシャンロン（以下ラオ）が尋ね、ゼロは無言で頷く。

“ そうか・・・その剣の当初の目的は、物を切るためではない・・・
その剣は、中継点としての役割を担っていた ”

「中継点？・・・一体何の？」

ゼロが首を傾げる。

“・・・命の中継点だ・・・ ”

「・・・？」

ゼロは訳が分からず、顔をしかめる。

“ 分かつておらぬな？ ”

「悪いがサツパリだ」

疑問符を浮かべるゼロに言い聞かせるように、ラオは説明し始めた。
“ 万物の命・・・人、竜、虫、植物・・・今我々が生活するこの星
でさえ、死ねばその命はその剣に宿る ”

「そりやまたすげえスケールな話だな・・・」

呆れるゼロを無視して、ラオは話を続ける。

“ ありとあらゆる命は、その剣を通じてあの世へと死に逝く・・・
逆もまた然り・・・全ての命は、その剣を通じてこの世へ生まれ来
る・・・ ”

「なんでそんな面倒くさいことを？」

“・・・浄化のためだ・・・命とは、年を重ねる度に汚れていくも
の・・・あの世に逝くとき、また、この世に来るとき・・・その汚
れを持ち込む事は許されない・・・故にその剣は、浄化の役割を果
たしていた・・・ ”

・・・果たして“いた”？

おかしい・・・

「なんで過去形なんだよ？」

ゼロが尋ねると、ふむ・・・と小さく呟いて

“今より500年程前、その剣は役割を変えた・・・今度は、物を切るために・・・”

・・・また500年前か・・・

そう思いながらも、黙って耳を傾ける。

“・・・その剣に、生を終えた命を運んでいた、タナトスの手によつてな・・・”

「タナトス・・・って、俺の事が!？」

思わず口を開く。

“・・・そうとも言えるが・・・そうとは言い切れぬ・・・”

帰ってきた返事は、曖昧なものだった。

「・・・なんか矛盾してるぞ?・・・そもそも、タナトスってどういう意味なんだよ?」

“タナトスとは・・・神の名だ・・・全ての命が必ず迎える運命、すなわち死を司っている・・・”

「世に言う死神ってやつか?・・・なんか不吉だな」
ゼロがそう言うと、ラオは少し悲しそうな目をする。

“・・・死とは、個人的に見れば悲しいだけかもしれぬ・・・しかし全体的にみれば、死とは必要不可欠なもの・・・死が無ければ、あらゆる命は死なくなる。・・・この星には生き物が充満し、食物が無くなり、飢えに苦しもうと、決して死なない・・・年老いて動けなくなり、呼吸すらままならなくても、死ぬことは許されない・・・他者より危害を加えられて、いかに苦しくても死なない・・・それがどういうことが、分かるであろう?”

「・・・」

・・・分かるようで、分らない。

ただ、それがとても大変な事は、なんとなく分かった。

“・・・それに・・・タナトスとて、殺したくて殺していた訳ではない。・・・むしろ、殺すことを嫌っていた・・・しかし、死する物を殺さねば、世界は乱れる。故にタナトスは殺し続けた・・・物を殺すことを何よりも嫌う死神・・・なんとも皮肉で、悲しい話だ・・・”

言つて、ラオは軽く目を閉じる。

「・・・確かに、悲しい話だ・・・」

“・・・だが、この話は予想だにせぬ展開を迎える・・・”

目を開き、ラオが語ろうとしたとき

“続きは我が教えよう・・・”

ラオの体の後ろから、キリンが姿を現した。

それを見たラオは

“・・・確かに、お主が教えた方が早いな・・・”

と頷く。

キリンはゼロのもとに駆け寄り、軽く頭を垂れる。

“我が角に触れる・・・続きを見せてやる・・・”

「続きを・・・見せる？」

“うむ・・・その剣の記憶を見たように、な・・・”

そう言われて、ゼロは少し躊躇しながらキリンの角に触れた。

途端、ゼロの目の前で光が爆ぜる。

あの時と同じように・・・

・・・

・・・

・

目を開くと、そこは見知らぬ所だった。

自分は壊れかけのボロボロな家の中にいて、その横には、今にも息を引き取りそうな老人が1人寝込んでいる。

・・・そして、その上に・・・

「あれは・・・俺じゃねえか・・・」

そう、ゼロがいた。

似てる似てないの次元ではない。

誰がどうみても同一人物だ。

「なんで、俺がここにいる・・・？」

ゼロは不思議に思いながらも、目の前の2人を眺めた。

すると、上に浮かんでいるゼロらしき者が、いきなり手に持っていた巨大な鎌で老人に向かって斬りつける。

「あいつ何を・・・！？」

驚くゼロをよそに、その鎌は老人に突き立てられた。

「・・・・・・・・」

少年は悲しそうな表情で、その鎌を引き抜く。

驚いたことに、老人に外傷はなかった。

血も出なければ、傷跡すらない。

・・・ただ静かに、ゆっくりと生命活動を停止した。

少年は、悲しそうに目をふせて、その場から消え去った。

・・・

・・・

・

「ここは・・・？」

気が付けば、景色が変わっていた。

今度は、どこか山奥である。

そして目の前には、あの少年がいた。

少年は、またも悲しい瞳で前を見つめる。

その視線の先。

そこには、ハンターにやられたのか、体中から血を流し、うずくまるリオレイアの姿があった。

少年は、先程と何ら変わらない動きで、その鎌をリオレイアへと突き立てる。

そして、鎌を引き抜くと同時に、リオレイアはピクリとも動かない。

「そうか・・・あいつが・・・」

どこか納得がいったような表情で、ゼロは少年を見つめる。

・・・今、ゼロが見ている少年が、キリンやラオが言っていたタナトスだった。

そして、今行っている行為は、生を終えた命に死を与えるものだった。

・・・

・・・

・

また景色が変わった。

「今度はどこだよ・・・？」

ゼロは辺りを見渡す。

そこは、小さな集落だった。

そこでもタナトスは、命に死を与えている。

その悲しそうな表情が晴れることはない。

「・・・お前も、辛いんだな・・・」

届かないと分かりながらも、ゼロは小さく呟いた。

そこへ・・・

「キミは・・・誰・・・？」

驚いて、声のする方を向く。

・・・そこには、小さな男の子が立っていた。

驚いた様子で、しかし怯えている様子はなく、タナトスを見上げていた。

一番驚いていたのはタナトスである。

とても慌てた様子で、その場を去ろうと目を閉じる。

「・・・どこかに行っちゃうの？なら、ちょっとまってよ」

呼び止められて、目を開く。

「僕とお友達になつてよ」

そう言つて、少年は微笑んだ。

しかし、タナトスは顔をしかめる。

・・・オトモダチとはなんだ？

そもそも、何故この者は我が見えている？

口では言わずとも、その考えがゼロには手にとるように理解できた。

「・・・あれ？聞こえなかったかな・・・ならもう一度いっよ？・・・

・僕と、友達になつて下さい」

そう言われて、タナトスはようやく口を開いた。

「トモダチとは・・・何だ？」

タナトスが尋ねると、子供はうーん・・・と頭を抱える。

そして、急に顔をあげると、タナトス歩み寄る。

「多分、こういうことだよ」

そう言つて、タナトスに抱きついた。

「仲良くなるうってことだよ」

嬉しそうに抱きつく子供を見て、タナトスも徐々に表情が穏やかになる。

・・・タナトスが、初めて人に興味をもった瞬間だった・・・

・・・

・・・

・

今度は、草原の上にいた。

視界には、タナトスと子供が楽しそうに話している姿があった。

さつきみた映像より、数日経った後らしく、タナトスと子供はかなり親しげだった。

「今日は、祈りの儀には出ないのか？」

タナトスが尋ねる。

・・・この子供のいる集落は、信仰深い集落である。

この子供は、その中でも特異な力をもっていて、その力によって、タナトスを感じることができた。

祈りの儀とは、集落の民が定時になると全員集合して、神に祈りを捧げる儀式の事である。

「だって・・・今はせつかくキミがいるんだもん。時間がもつたい

ないよ・・・」

「だが、我もいつ居なくなるか分からぬぞ？」
「また仕事？」

子供がそう聞くと、少し後ろめたそうに頷いた。
どうやら、この子供には自分の事を詳しく教えていないらしい。
おそらく、特殊な存在とだけ伝えたのだろう。

『・・・・・・・・』

2人を沈黙が包む。

「あ・・・」

子供が何かを見つけ、急に立ち上がる。

何かを拾った子供は振り返り、その手には一輪の花が握られていた。
「みてみて！この花綺麗でしょ？珍しい花なんだよ？」
ほら、と自慢気に見せる。

「キミにあげるね！」

そう言つて、花を差し出す。

「・・・・・・・・」

タナトスは、何も言わずに受け取った。

悲しそうな顔で・・・

「・・・僕はもう行かなきゃ・・・それじゃあね」

子供は走り去る。

その後ろ姿を見送った後、タナトスは受け取った花に手をかざす。
すると、ほんの少しだけその花がしおれた。

・・・タナトスは、花の命に死を与えた。

後は、徐々に枯れていくだけ。

「・・・・・・・・」

タナトスは何も言わず、その場から消える。

また、命に死を与えるために・・・

・・・

・・・

・

一瞬、視界が光に包まれて、目を開けたらまた同じ草原にいた。草原にはタナトスが1人、何かを心待ちにしているかのように立っている。

その手には、小さな宝石が握られていた。

さつき、子供が綺麗だと言った花に似た形をしている。

タナトスは石が好きだった。

なぜなら、基本的に“死なない”から。

砕かれて、形を変えようが、死なない。

長い年月を経て、朽ち果てるまで、そこにあり続ける物言わぬ存在。タナトスは、その存在が、好きだった。

・・・タナトスはあるものを目にし、嬉しそうな表情をする。

その視界の先、先程の子供と思われる人がいた。

あれから何年か経過したらしく、子供の体は成長していた。

どうやら久しぶりに再会したらしく、タナトスは本当に嬉しそうだった。

・・・しかし、その表情は一瞬で消えてしまった。

子供が、軽蔑の目でタナトスを見つめていたから・・・

そして、警戒しながら近寄ると

「何の用？・・・死神」

・・・意外な言葉だった。

・・・この子供は、信仰深い集落の子供。

神について学ぶ内に、タナトスの事を知ってしまっていた。

「・・・久しぶりだと、思ってた・・・」

タナトスは悲しそうに、それでも頑張って笑顔で話しかける。

・・・しかし

「・・・用はそれだけ・・・？」

子供は、冷たく言い放つ。

「・・・いや、これをお前に渡そうと思ってな・・・以前、綺麗だと言った花似ているだろう？だから・・・」

タナトスが全ていい終わる前に

「いない。呪われるから・・・」

・・・あまりにも、残酷な言葉をはいた。

・・・それでもタナトスは

「・・・そう、か・・・」

と、笑った。

とても、悲しく笑った。

「・・・じゃあ、僕は行くから。・・・それと、二度と僕に関わらないで・・・サヨナラ・・・」

そう言っ、子供は歩き去って行く。

タナトスにとって、悲しすぎる“サヨナラ”。

タナトスは、ただ悲しそうにその後ろ姿を見送った・・・

第35話

気が付けば、意識はもとの世界に戻ってきていた。

“戻ったようだな・・・”

「・・・」

ラオが声をかけるが、ゼロは黙っている。

“どうした？”

キリンが尋ねると、ゼロはようやく口を開いた。

「もう一度聞くけど・・・タナトスってのは・・・俺なのか？」

キリンは、軽く首を傾げた。

“？・・・確かに、汝の本当の名はタナトスだが？”

「そうじゃなくて・・・」

ゼロは頭をポリポリかく。

「その・・・死を司ってる方のタナトスだよ」

“・・・何故、そう思うのだ・・・？”

突然、キリンとラオは険しい目をするが、ゼロは無視する。

「・・・お前が見せた記憶の中に、俺がいた・・・そこで、そいつは命に死を与えてたんだ・・・」

ゼロがそう言っていると、キリンとラオは同時に目を見開き、顔を見合わせる。

“・・・確定、だな・・・”

ラオが言って、キリンは無言で頷いた。

「なにが確定なんだ・・・？」

ゼロが聞くと、キリンは少し考えて

“以前・・・我らの意思疎通の仕組みを教えたはずだが・・・覚えているか？”

「ああ・・・確か、お前らの意思を俺の脳が理解できるように読み取ってるってやつだろ？・・・それがどうした？」

“そこが問題なのだ・・・先程、我が見せた映像の仕組みは、我ら

の意思疎通のそれとなんら変わらない・・・”

「だから、なんだよ？」

“・・・まだ、分らんか？”

そう言つて、キリンは目をふせる。

“・・・先に見せた映像の中の汝・・・それは間違いなくタナトスだ・・・だが、それが汝と同じ姿だった・・・それは、タナトスは汝自身だと汝の脳が理解した、という事に他ならない・・・”

「・・・じゃあ、やつぱり俺はタナトスだってことか？」

“そうであつて、そうでないのだ・・・”

と、ラオ

“・・・命は、お主が生まれてなお、死を迎え続けている・・・お前がタナトスであるならば、今ワシらとこうしている時間すらないだろう・・・”

「つまり・・・タナトスはいまだに死を与えてるつてか？」

キリンとラオは黙つて頷く。

「じゃあ俺は何なんだよ？」

ゼロがそう聞くと、ラオは少しためらいがちに語る。

“・・・お主には・・・タナトスの意識のみが植え込まれている”

「タナトスの・・・意識？」

とりあえず復唱するが、さっぱり訳がわからない・・・

そんなゼロをみて、ラオが語り始める

“・・・タナトスは、あの子供に出会い、そして捨てられた・・・しかし、それでもタナトスは人に対する興味を失わなかった・・・興味は憧れとなり、嫉妬となり、やがて憎悪へと形を変えた・・・そしていつしか、タナトスは世界の全てを憎むようになった・・・しかし、やつが神である以上、世界への過干渉は許されない・・・”

“やつは、その剣に物理的な力を与え、その意識を2つに分けた・・・神とは肉体をもたぬ意識体、精神体だ・・・義務的に死を与える、という意識を切り離し、その他の意識を全てお主に植え付けた・・・”

・半信半疑であつたが、お主がタナトスを自分自身と理解したのならば、もう疑う余地はない・・・すなわち、タナトスは人間に復讐する術^{すべ}を手に入れたのだ”

・・・これが、ラオの態度が曖昧な理由だった。

タナトスは、世界から居なくなつた訳ではない。

けれどももう一人のタナトスは確実にゼロの中にいる。

・・・ここで、ゼロの頭に1つの疑問が浮かび上がった。

「じゃあ、俺の力が異常なのもタナトスのせいなのか？」

ゼロが尋ねると、ラオは首を横に振る

”それは違う・・・お主の能力は、あくまでお主の生まれ持った能力・・・むしろ、タナトスはその能力に惹かれてお主をえらんだ・

・タナトスの意識を内包できる肉体、精神力を併せ持つ者など、この星が始まってからこれまで、お主だけだろう・・・しかし、お主は能力を出しきつてはおらん・・・恐らく、お主の優しさと、タナトスの存在がそれを妨げるのだろう・・・”

「じゃあこの剣は・・・？」

“その剣には、意思がある・・・自ら持ち主を選び、持つ者の意思に呼応して、能力を変える・・・お主が生まれる前、ドラゴノイドの中でも屈指の戦士になら、持ち上げる程度の事はできた・・・しかし、お主が生まれてからは、近づくことすらできなくなつた”

その話を聞いていたのかいなかったのか、ゼロは何か複雑な表情をしていた。

“どうした？”

見かねて、キリンが語りかける。

「いや・・・タナトスは、本当に人間を憎んで俺に意識を植え付けたのか？つて、疑問に思つてな・・・」

“・・・他に理由がある？”

キリンが尋ねると、ゼロは頭を抱え

「それがよくわからねんだ・・・ただ、憎いだけでこんなことをするようなやつじゃないと思うんだよな・・・」

“ならば・・・確かめるか？”

その言葉を聞いて、ゼロは顔をあげる。

「できるのか!？」

“出来なくは無いが・・・下手をすれば戻ってこれぬぞ?・・・それでもいいのか・・・?”

「戻ってこれない?’

“・・・先も言った通り、タナトスは確実に人間を憎んでいる。タナトスと出会えば、戦闘になるのはまず間違いないだろう・・・もし負けてしまえば、お前の意識は消え、その肉体はタナトスの物となる・・・”

そう言われて、ゼロは少し考える

「・・・よく分からねえが・・・ま、なんとかかなんだろ」

そう言くと、キリンは小さく笑った。

“無鉄砲な奴だ・・・だが、そういうのは嫌いではない・・・よろう、目を閉じる”

軽く頷いて、言われた通り目を閉じた。

・・・途端、奇妙な感覚がゼロを襲った。

引っ張られるようで、押されているよう・・・

吸い込まれているようで、吐き出されているような、奇妙な感覚・・・

・

・・・

・

・

目を開けたら、古の塔の頂上にいた。

ただ、何故かそこは違う場所に思えた。

・・・音が・・・そして風がない。

それどころか、鳥のさえずりも聞こえない。

不思議に思い、空を見上げる。

・・・空は、雲一つない快晴だった。

けれど、いつもなら心地よいはずの快晴は、今はとても不気味に思

えた。

「・・・まるで、世界には自分しかないようだった。

・・・視線を戻すと、やや離れた位置に、いつの間にか自分が立っていた。

「・・・でもこいつは自分じゃない・・・

「・・・よう・・・」

軽く声をかける

「・・・こいつは・・・

「・・・タナトス」

「・・・タナトスは、ニヤリと笑って

「・・・何しに来やがった？」

「お前に会いにきたんだよ」

そう言うと、タナトスはクスクス笑う。

「俺に体を譲る気にもなったか？」

「それはゴメンだな・・・つつーかお前、随分口が悪いんだな」

「お前のが移ったんだよ」

ふう・・・と、タナトスは軽くため息をついて

「で？体を譲らねえなら何しに来たんだよ？」

「お前が俺に意識を宿した理由を聞きてえんだよ」

タナトスは苦笑したまま口を開く

「代行者やら賢者から聞かなかったか？・・・ただ世界が憎いからだ・・・だからお前の体を頂いて復讐してやるんだよ・・・お前は甘すぎる・・・せつかくの能力をいかしきれない。せつかく俺が内側から囁いてやったのに、お前は抵抗するばかりだ・・・」

「・・・本当にそれだけか？」

ゼロの目に殺気がこもる。

けれど、タナトスはひるまずに

「ああ・・・だったらどうする？」

楽しそうに、邪悪な笑みを浮かべる。

「もし本当にそうなら・・・俺が、この場で消してやる・・・！」

「はっ！・・・おもしれえ」

短く笑って、タナトスは片手を上に掲げる。
すると、何も無い空間から、生と死を司る剣が出現し、地面にささる。

「・・・この剣なら、意識体である俺を殺す事ができるぜ・・・だが、剣は1つ。そして、コイツは持ち主を選ぶ。しかし、今主人は2人いて、コイツは迷ってる。・・・つまり、コイツに選ばれた方が・・・」

「生き残る・・・って訳だな？」

「その通りだ・・・」

ゼロとタナトスは、同時に身を低く構える。

「お前が相手なら・・・俺は手加減なんて出来ねえからな・・・」
ゼロがそう言う

「それは俺も同じだぜ・・・」

と、タナトスも緊張の混じった笑みを浮かべた。

「・・・行けえ！！」

叫んで、剣に向かって同時に走り出す。

・・・速さは全くの互角。

しかし、剣はややタナトスに近い位置にあり、一瞬早くタナトスが剣を握る。

「おらよっ！」

ヒュッ・・・と、タナトスは剣を横に振る。

それをゼロはバック転でよけた。

「まだだ！！」

体制を立て直した所に、間髪入れず二撃目がとんでくる。

ゼロは真上から襲い来る刃を紙一重でかわすと、タナトスの腕を掴み「うおらあ！」

思いっきり上に投げ上げた。

タナトスの体はグングンと高度を上げる。

そのまま、タナトスは下を見るが、そこにゼロの姿はなかった。

「あいつ、どこに・・・!?」

キヨロキヨロと首を振る

「こつちだ!」

頭上から声がしたと思うと、衝撃がタナトスを襲った。

「くらいやがれ!」

ゼロは、タナトスの体を蹴り落とす。

その衝撃で、タナトスの手から剣が離れた。

バコンツ!と、派手な音とホコリを巻き上げて、地面に衝突する。

「チイ・・・!」

タナトスは慌てて上を見上げる。

そして、ゼロが剣を構えて落下してくるのが見えた。

それを、横に転がり回避する。

顔の真横に剣が突き刺さり、軽く頬を切られたが気にせず立ち上がる。

「そこだあ!」

立ち上がった所に、ゼロは剣を突き出す。

・・・が、剣はむなしく宙を貫く。

ゼロの一撃をかわしたタナトスは、ゼロの頭を鷲掴みにし、地面に叩きつけた。

「ぐが・・・あ・・・!」

何度も何度も叩きつけ、最終的には後ろに投げ捨てた。

2人の間に距離ができ、その中央にゼロの手をはなれた剣は刺さった。

「・・・ッ!」

2人は、剣に向かって駆け出す。

「うおおああああ!」

一瞬・・・

まさに一瞬の世界

相手より一瞬でも早く剣を握ろうと、必死に駆ける。

・・・しかし、ゼロは僅かに出遅れた。

一秒に満たないほどだったが、致命的だ。

タナトスは剣に手をのばす。

――取った――

タナトスの頭に勝利がよぎった。

・・・その時である。

ピシヤア！

「な！？」

タナトスは目を丸くして驚く。

・・・あるうことか、タナトスは剣に弾かれてしまったのである。そのまま後ろに吹き飛び、二転三転してようやく止まる。

「くそが・・・！」

立ち上がろうと腕に力を込める。

そこに・・・

「俺の勝ちだ！」

タナトスの喉元に剣を当てて、ゼロが勝利を告げる。

・・・そう、ここで試合・・・いや、死合終了である。

剣は、タナトスではなくゼロを選んだ。

「・・・」

ゼロは、何も言わずに、タナトスを見下ろす。

「・・・お前の勝ちだ・・・殺せ・・・」

小さく呟いて、目を閉じる。

「・・・」

ゼロは、しばらく動かずに停止していた。

「どうした？はやくしろよ・・・」

「・・・」

・・・ゼロは、大きく振りかぶり、ためらいなく振り下ろした。

・・・ギイン・・・と、硬質な音をたて、剣は地面に突き刺さった。

・・・目の前には、驚きと苛立ちを含んだ2つの瞳がゼロを見つめていた。

・・・ゼロは、タナトスにトドメをささなかった。

「・・・テメエ・・・なんで殺さねえんだよ!？」

タナトスは、苛んだ声で叫ぶ。

「情けでもかけたつもりか!？そんなのいらねえんだよ!さっさと殺せ!」

「・・・俺は最初に言っただよな・・・お前が、憎しみだけで俺に意識を宿したのなら消すと・・・」

「だから、その通りだって言ってるじゃねえか!」

「違う・・・お前が剣に弾かれたのを見て、違うと思った。・・・

お前は、剣と同じで何かに迷っている、だから、剣に弾かれた・・・
そうだろうか?」

「そんなこと・・・!」

口では否定するが、タナトスは顔を背け、態度で肯定してしまう。

「・・・お前が俺に意識を宿した理由・・・お前は、人を憎むと同時に、信じてたんだろ?・・・俺に最後の希望を託し、人を信じていたかっただけなんだろ?・・・お前と戦ってる内に、なんとなく分かってしまった・・・」

・・・確かに、その通りだった。

最後に、もう一度だけチャンスがあるならば、自分は人を信じたかった・・・

「・・・だったら何だっただよ!？」

・・・見事に見透かされて、なんだかバツが悪い・・・
そんなタナトスが叫ぶと、ゼロは優しく微笑む。

「別に・・・ただ、お前を消す理由が無くなっただけだ。・・・
そうゆうことなら、俺の体に居させてやる」
そう言っつて、手を差し伸べる。

「今からダチだ」

“お友達になつてよ”

「・・・」

・・・こいつの姿が、あの子供とかぶる。

だからこそ、コワイ。

また捨てられそうな気がしてならない。

「・・・誰がお前なんかと！」

バシッと、ゼロの手をはねのけた。

「・・・つねねえなあ・・・」

ゼロは弾かれた手をさすりながら

「・・・まあ、ゆっくりでいいぜ。・・・そのトラウマを克服したら、呼んでくれ」

そう言つて、ゼロは手を引つ込めた。

そして、今度は申し訳なさそうに

「なあ・・・戻るにはどうしたらいいんだ？教えてくれ」

タナトスは、少し照れた様子で顔をふせる。

「・・・目を閉じて、お前が元いた場所をイメージしろ・・・そんなだけだ・・・」

「そうか。ありがとよ・・・じゃ、またな」

またな、か・・・また、こいつと会う日があるのだろうか・・・

その時自分は、どうするのだろうか・・・

そんなことを考えながら、消えていくゼロを見送った・・・

第36話

目を開こうとすると、光が飛び込んできた。
眩しくて、目を細める。

やがて光になれ、目を開くと、ラオとキリンがこちらを見つめていた。

“・・・”

何も言わずに、ただ心配そうにゼロを見つめる。

ゼロなのか、

タナトスなのか、

判断しかねているようだった。

「あゝ・・・俺だ、ゼロだ」

ゼロがそう言うのと、

キリンとラオは驚いたように顔を見合わせた。

“・・・まさかこれほどとはな・・・タナトスを倒しよった・・・

ふ・・・ふははは”

ラオは、愉快そうに笑う。

「何がそんなに面白いんだよ？」

頭に疑問符を浮かべるゼロに

“・・・それで、タナトスはどうした？”

と、キリンが問いかける。

「どうもしてない。

・・・まだ、俺の中にいるぜ？」

“何！？

タナトスを消さなかったのか！？”

“ふはははは”

驚くキリンをよそに、ラオは声高らかに笑う。

“面白い・・・実に面白いぞ、ゼロよ！

・・・して、何故に消さなかったのだ？”

「・・・やつぱりタナトスは、憎しみだけで俺に意識を植え付けた訳じゃないみたいだからな。

確かに、憎しみもあるだろうけど・・・それは、まあ仕方ないことだ」

“ならば、またお主の肉体を奪おうとしたらどうする？”

「させねえよ。

俺の体は俺の物だ・・・

今までも、これからも」

ゼロの表情に、決意の色が浮かぶ。

それを見たラオは、再び笑い出した。

「おい、笑いすぎだぞ」。

こっちにやまだ聞きたい事があんだぞ？」

“おお、すまぬな・・・

で、他に何を知りたいのだ？”

ラオは笑うのを止め、ゼロを見つめる。

「・・・俺が、本当はタナトスって名前で、人間じゃねえってのは認めるよ・・・

でもよ、そしたら俺が今ここにいる事に説明がつかねえだろ？

・・・500年前、一体なにがあつたんだ？」

そう尋ねると、ラオの表情が真剣になる。

“・・・剣の記憶には触れなかったのか？”

「いや、触れてはみたけど・・・

あれじゃあ何もわかんねえよ。

それに、言葉が抜け落ちたみたいなのもあつたしよ」

ラオは、不思議そうに剣を見つめた。

・・・しばらく考えている様子だったが、何か思いつたように顔を上げる。

“ゼロよ・・・

剣を頭上に掲げよ”

「あ？なんで？」

“なんでもだ。早くしろ”

「？」

訳もわからず、言われた通りに剣を掲げる。

すると、ラオは首を伸ばして、剣に軽く鼻を押し当てた。

“・・・”

何も言わずに目を閉じて、動かなくなる。

・・・と、思いきや、

ラオはすぐに目をあけて、首をもとに戻した。

“ふむ・・・なる程の・・・”

1人納得し、満足げな顔をする。

「おい。」

俺はいつまでこうしてりゃいいんだあ？」

“おお、手間をかけたな。”

もうよいぞ”

「で、結局なんだったんだ？」

剣をしまいつつ、ゼロが尋ねる。

“その剣の記憶は、随分と薄れているようだな・・・”

記憶とは、時と共に薄れ行くもの。剣とて、例外ではない”

ラオは軽く目を閉じて、遠い昔を思い出すように黙り込んだ。

やがて、ゆっくりと目を開く。

“・・・500年前に何があったのか・・・それが知りたいのだな？”

ゼロが黙って頷くと、ラオは語り始める。

“・・・500年前、ドラゴノイドが滅んだのは、竜の暴走によるもの・・・”

・・・そのきっかけとなったのは・・・”

言いかけて、とても言いづらそうな様子でゼロを見つめる。

それに気付いたゼロは

「今さら何を聞いても疑わねえから、言えよ」

言って、軽いため息をついた。

“そうか・・・”

竜の暴走の間接的なきっかけとなったのは、お主がこの世に生まれたことだ・・・

お主が生まれる際、お主から発せられた力の波が・・・”

「ちよい待て」

ラオの言葉を遮るように、片手をあげるゼロ。

“どうした？”

「それも聞こうと思ってたんだが・・・力の波って何だ？」

そう言い放ったゼロを見て、ラオはキョトンとする。

“・・・知らぬのか？”

「悪かったな、知らなくて」

“まあよい・・・”

力の波とは、ドラゴノイドが持つ特殊な攻撃意識のことだ。

お主は、ワシらの意志を受け取ることができる。

それと同じで、もともとは送りつけることもできたのだ。

・・・しかし、その能力は徐々に退化し、感情が高ぶった時のみ、

強制的にその攻撃意識を送りつけるものとなった。

・・・理解したか？”

ゼロは、腕をくんで首を傾げる。

「・・・んゝ。何となく分かった。

で、その力の波がどうしたんだ？」

“人の赤子は、この世に生まれるとき、純粋な防衛本能を持つ。

ドラゴノイドも、それは同じだ。

・・・しかし、お主は違った。

お主は防衛本能と共に、巨大な攻撃意識を持ち合わせて生まれてきたのだ。

- - - 死にたくなければ戦うしかない - - -

・・・恐らく、お主は生まれる以前よりこのことを知っていたのだろうな・・・”

「・・・」

ゼロは黙って耳をかたむける。

“力の波とは、脆弱な意志を呑み込む・・・

ワシらのように強固たる意志を持ち合わせない竜は、その巨大な意志に逆らえずに暴走してしまう”

「・・・それで俺が生まれた後、集落に竜が押しかけた訳か・・・」

“いや、そうではない”

ラオはあっさり否定する。

“言っただであらう？”

お主は間接的なキツカケだと。

・・・お主の発した力の波を受けた別の者が、更に強い力の波を發して、竜達を暴走させたのだ・・・”

- - 別の者 - -

ゼロは、剣の記憶を思い返す。

あのとき、会話の中に抜け落ちた部分があった。けれど周りの者は、確実にその名を叫んでいた。まさかと思い顔をあげると、ラオが頷く。

“そう・・・”

その空白に埋まる者だ・・・

その名は、ミラボレアス・・・”

「・・・ミラボレアス・・・？」

全く聞き覚えのない単語を耳にして、ゼロは顔をしかめる。

“その様子だと、知らぬようだな”

ゼロは、ウンウンと頷いた。

“・・・ミラボレアスとは、ドラゴノイドと祖を同じとするもの。だが、進化の段階において、捨てるものが違ったのだ”

「捨てるもの？」

ラオは黙って頷き

“ドラゴノイドは力を求め、竜の姿をすてた。だが、ミラボレアスは竜の姿を捨てなかった”

「じゃあ、なにを捨てたんだ？」

“・・・意識だ”

「意識？・・・どういう事だよ？」

“・・・やつには知識や自我といった概念すら存在しない。

あるのは本能、それだけだ・・・

故に、お主の力の波に簡単に呑まれた。

逆らうことなどできず、ただ流されるように身をゆだね、巨大な殺意と共に動きだした”

「その時、ミラボレアスの発した力の波に感化されて、竜達も動きだしたって訳か・・・」

“その通りだ・・・

そして、今お主がここに存在する理由・・・

それは、時制止術によるものだな”

またも聞き慣れない単語にゼロは頭を抱える。

「何だよ、その・・・

じせいしじゅつつてのは？」

“聞いての通り、時を制止する・・・つまり、時を止める術だ。

時という概念をより深く理解すれば、さほど難しいものではない。

お主の母はお主の時を止め、今の時代に至るまで封印したのだろう。それを人間の研究者が発見し、連れ帰った”

ラオの説明を聞いて、ゼロの頭に疑問が浮かぶ。

「時を止めたって言っても・・・塔は竜に襲われたんだぜ？

俺の安全で居られる訳がないじゃねえか」

言い放ったゼロを見て、隣で話を聞いていたキリンが小さく笑った。

「なんだよ？」

ムツとした様子でキリンを睨むゼロ。

“いや・・・汝は母には似ず、時に関する概念に乏しいようだな・・・

とことん父親似だ・・・”

「知るかつつの・・・」

“まあ聞け、ゼロよ・・・”

ラオに呼ばれ、視線をラオに戻す。

“ 時を止めるということは、対象となるものをあらゆる干渉から遮断するということだ。

・・・つまり、外部からいかに危害を加えられようととも意味をなさないのだ。

人間の研究者がお主を連れ帰ることが出来たのは、術の効果が切れたから・・・

理解したか？”

「ま、大体な」

” そうか・・・

それはよかつ・・・！？”

言葉を全て発する前に、ラオは急にその長い首を高く持ち上げた。どこか遠くを、真剣な表情で眺める。

「おい！！

どうしたんだ〜！？」

ラオに聞こえるよう、大声で叫ぶ。

ラオは、視線をそらさず

”・・・奴が・・・動き出した・・・！！”

と答えた。

「奴って・・・ミラボレアスか！？」ラオは黙って頷く。

「どこだ！どこに向かつてる！？」

“ 汝らの住処^{すみか}だ”

ラオの代わりに麒麟が答えた。

そのことに、ラオは目を丸くして驚く。

「街に向かつてんのか！？

くそ！ジョーン！」

ジョーンに視線を向けると、ジョーンは岩山に背を預け、寝息をたてていた。

することがないので寝てしまったようだ。

「今すぐ起きろこのボケが！！」

ゲシッ！

「ぐわあ！？」

ゼロはジョンに跳び蹴りをかます。

「・・・っ！」

ジョンはガバツと身を起こし、ゼロを睨みつける。

「なにしゃがんだ！？」

「うるせえ！」

今すぐ街に戻るぞ！走れ！」

そう言つて、ゼロは走り出した。

「は！？いや、ちよつと待て！！」

説明しろコラ！！」

文句を漏らしつつ、ジョンは慌ててゼロの後を追う。

あーだこーだ叫びながら、ゼロとジョンは走り去った。

ラオは上げていた首を下ろし、キリンに目を向ける。

“ 代行者よ・・・ ”

神に仕えるお主が、あのような発言・・・

明らかに過干渉だぞ？ ”

ラオが尋ねるが、キリンはゼロ達の後ろ姿から視線をそらさない

“・・・賢者よ・・・ ”

我々も老いたな・・・

古竜たる我々が、人の身を案ずるなどと・・・ ”

そう言つて、自虐的に小さく笑った。

それにつられるよう、ラオも笑う。

“・・・確かに・・・ ”

“・・・なあ、代行者よ・・・ ”

“ 何だ？ ”

“ ゼロは・・・昔、神によって語られた英雄の詩に出てくる英雄に似ているとは思わんか？ ”

“・・・確かに・・・ ”

キリンは少し顔をふせる。

そして、少しずつ思い出すように、詩を読み始めた

“・・・その男は、時の迷い子・・・手には、一本の剣。
遠くで、子の泣く声。”

聞けば子は、土に埋もれた親を救い出したいと泣く。

男は剣で土を掘り起こして親を救い出し、剣は折れてしまう。
さらに遠くで、子の泣く声。

子は、竜に襲われ助けを請う。

男は迷うことなく、素手で竜に立ち向かう。

拳が潰れ、どれほど血をながそうと気にも止めずに・・・
さらに遠くで、子の泣き声・・・”

キリンがそこまで口にした所で、続きをラオが読み始める。

“・・・幾度も幾度も人を救い、ついに男は力尽きる。

自分を助ける者などいない。

孤独の死の淵に立たされた男は、最後に神に問う。

自分は一体、何を得たのか？と・・・”

2人を沈黙が襲う。”・・・代行者よ・・・

このままゼロが英雄の詩をなぞるように生きれば・・・”

”ああ・・・間違いなくゼロは死ぬだろうな・・・

恐らくこの詩は、英雄などではなく、神がゼロに当てはめた詩。

こうなることを、既に予知していたのだろう・・・”

そう言って、キリンは歩きだす。

”どこへ行く？”

ラオが尋ねる。

”さてな・・・我も、こんな感情は初めてだ・・・

何をしてくすのか、我自信にも検討がつかぬ・・・”

“そうか・・・

・・・1つワシの頼みを聞いてはくれぬか？”

“よかるう・・・

して、頼みとは？”

キリンは振り返って尋ねる。

・ ・ ・ キリンは、ラオの放った一言に、黙って頷いた。 ・ ・ ・

第37話（前書き）

えゝ．．．どんどんモンハンらしさが無くなってきました。f^|
^ ; 今回も“有り得ない要素”が満載です．．．

最後まで読んで頂けると嬉しいです。

第37話

「何なの・・・コレ・・・」

ゼロ達が街を出て2日目。

ここは、街が古竜の襲来に備えて設立した砦の外壁の上。

街中のハンター達に召集命令が下され、アルとミリア、その他多数のハンター達は少し遅れてここにやって来た訳だが・・・

・・・見渡す限り、死体の山。

ガブラスと呼ばれる蛇のような竜の死体と、人の死体が大量に寝そべっている。

ただし、原型を留めているものは極めて少ない。

ガブラスは首が取れていたり、羽がもげていたり、焼け焦げて真っ黒になっていたりする。

人も同様である。

そんな中、

夕日と血液で紅く染め上げられた大地の上で蠢く巨大な影。

漆黒の体色、力強い翼に長い尻尾。

血が垂れる口の上では、巨大な邪眼が次の獲物を探してさまよっている。

そこに、一匹のガブラスが近寄る。

ガブラスは、異形の竜に敵意を示さない様子で、ただ、上空から降下して来ただけ。

そのまま、異形の竜と対峙しているハンター達に襲いかかろうとする。

そんなガブラスを、巨大な邪眼がギョロリとらえた。

――刹那

鋭い牙がガブラスへと伸びる。

一瞬の出来事に、アルとミリアは目を疑った。

竜が竜を喰らったのである。

異形の竜に襲われたガブラスは、バキバキと骨を砕かれ、元は何なのか判別がつかないような肉塊と化す。

「う……!」

アルはこみ上げる吐き気を、口に手をあててこらえ、その場にしゃがみこむ。

「アルちゃん、大丈夫?」

「……」

ミリアの問いに、アルは無言で首を縦にふる。

「……やがて、やっと吐き気が収まったアルは、ゆっくりと立ち上がった。」

「コイツ……普通じゃない……!」

「そんな事が見れば分かるわ……」

「ここは作戦を立て直して……」

ミリアが言いかけたとき、外壁の下から声があがった。

「ここを突破されたら街は終わりだ!

なんとしてもここでくい止めるぞ!」

叫んで、先に来ていたハンター達は全員で異形の竜に突っ込む。

ミリアは自分の耳を疑った。

「ちょ!?

待ちなさいあんた達!!」

ミリアが叫ぶが、制止の声は届かない。

異形の竜は、自らに刃向かう者を睨み付け、雄叫びをあげる。

竜は、ハンター達を噛みちぎり、叩き潰し、焼き払った。

……結局、ハンター達も一瞬で殺られた。

その場にいた全員が、言葉をなくす。

……圧倒的で、絶望的な戦力差。

“それ”が、ここに存在する事自体が恐ろしい。

そんな感情におそわれた。

その時、邪眼がアル達を見つめた。

……悪寒

その眼を見るだけで、強烈な寒気がはしる。体は、何かに縛られたように動かなくなる。

竜の口元に炎がちらつき始めた。

その炎は、確実にアル達のもとへ放たれようとしている。

・・・なのに、

頭では理解しているのに、体は全く動かない。

悲鳴すらあげられない。

・・・炎がより一層大きくなり始める。

全員が死を覚悟した・・・

――その時

轟音と共に、竜は手前に転ぶように倒れる。

それと同時に、アル達は正気に戻った。

「一体、なにが・・・？」

アルは何が起きたのか確認すると、目を丸くして驚いた。

・・・そこには、あの竜の何倍もの大きさの竜がいた。

・・・ラオである。

竜は、ラオの体当たりによりはじき飛ばされたのである。

竜はむくりと体を起こすと、ラオを睨み付ける。

すると、今度はラオの後ろから白い何かが飛び出した。

アル達が確認するより早く、竜を雷が襲う。

ギユオオ！と、苦しそうに叫んで、もう一度その場に崩れ落ちる。

雷を放った正体に目を向けると、今度は見覚えのある姿がそこにあった。

『キ・・・キリン・・・！？』

アルとミリアは驚くが、キリンは無視して二撃目を放つ。

雷が竜を襲うが、今度はそれをこらえて竜は起き上がる。

“もう耐性をつけたか・・・！化け物め・・・！”

ミラボレアス・・・やはりその名は伊達では無い・・・！”

古竜をもつてして化け物と言わせる竜・・・ミラボレアスは、ラオとキリンに目をむける。

“ 代行者よ、来るぞ！”

ラオが叫ぶと同時に、ミラボレアスの牙が麒麟に襲いかかる。

“ く……！”

麒麟は後ろに跳び、その牙を避けようとする。

・・・が、次の瞬間、それは無意味になった。

ミラボレアスの首が斜め上に跳ね上がったのだ。

“ ！？”

その場にいた全員が、何が起こったのか理解出来なかった。

「麒麟とラオ！？」

何故ここに！？」

聞き覚えのある声。

・・・ミラボレアスの首を跳ね上げた正体はゼロだった。

ゼロは、ミラボレアスの顎の下に潜り込み、思いっきり斬り上げていた。

『ゼロ！！』

アルとミリアが同時に叫ぶ。

「よう！

大変な事になってんな！」

「ってゼロ、ジョンは！どうしたの？」

アルが尋ねると、ゼロはアル達の後ろを指さす。

目を向けると、そこにはジョンが立っていた。

「ジョン、いつからここにいたの？」

「今来たばかりだ。

途中でゼロと別れて、俺だけこっちにまわった」

「そーいう事だ！

お前らはそこで、ジョンと一緒に援護にまわれ！」

下でゼロが叫ぶ。

「・・・ところで、質問に答えろよ」

言って、ラオと麒麟に目を向ける。

「お前らなんでここにいるんだよ？」

ゼロが聞くと、ラオとキリンは困ったような表情を見せる。

“・・・お主にこの概念は理解出来ん。”

ワシらには、代行者が神の力を行使した、としか言えんな”

「神の力を・・・？」

それって・・・」

“ああ。許されざる行為だ。

故に、我の代行者としての立場は剥奪されてしまった。”

そう言つて、キリンは小さく笑う。

・・・ゼロ達が走り去った後、ラオは自らをここに移動させるよう頼み、キリンはそれを了承した。

代行者としての立場を剥奪されると分かりながら。

「どうしてそこまでするんだよ？」

キリンはどこか悲しげな目で、うずくまるミラボレアスを見る。

“・・・我は、汝の父とは交流があつた。

友、と呼ぶにふさわしい程の仲だった。

我にとつて、初めての友だ。

・・・だが、我はその友に何をしたと思う？」

「・・・何したんだ？」

ゼロが首を傾げると、キリンは悲しげな目をゼロに向ける。

“ 汝もみたであらう。”

・・・見捨てたのだよ・・・

この者が集落を襲つた時、我は汝の父を、友を見捨てて逃げたのだ”

「あれは俺の親父が逃がしたんじゃないやねえか」

“ そんな事は問題ではない。

問題なのは、我が逃げ出したという事実”

そう言つて、キリンは少し顔をふせる。

“・・・あれから今まで、我は罪悪感を拭えずにいた・・・

そうして、我は汝に出会つた。

・・・汝は我の事をどう思っているか知らんが、我は汝を、友と呼ぶにふさわしい存在だと思つている。

・・・その友が、今まさに以前と同じ形で失われようとしている。
我はそれが我慢ならぬ”

それを聞いて、ゼロは笑いをこぼす。

「馬鹿だなあ。」

俺は死なねえよ」

そう言つて、ミラボレアスに目を向ける。

「・・・確かに、生き物としてはお前らの方が優れてる。

けどな、殺し合つて勝つのは俺だ。

・・・心配すんな。

親父に出来なかったことを、俺が成し遂げてみせる・・・！」

そう言い放つたゼロを見て、キリンはますます表情が暗くなる。

“・・・それでは駄目なのだ、ゼロよ・・・”

そのままでは、詩の流れをなぞり、最後に汝は命を落とす。

・・・ここで流れを変えなければ、誰かが汝の助太刀をせねば・・・

・・・故に我々は、その誰かを担う・・・”

「詩つてなんだよ？」

“ 2人とも、語るのはそこまでだ！

来るぞ！”

ラオが叫ぶと同時に、ゼロとキリンは左右に跳ぶ。

・・・凄まじい爆音と共に、ゼロとキリンのいた場所がはじけ飛ぶ。

ミラボレアスは三度も自分の攻撃を邪魔され、怒りの絶頂だ。

「ちっ！

もう少し寝とけよな！」

文句を言いながらも、ゼロはミラボレアスに向かって行く。

その姿を確認したミラボレアスは、口に炎をためる。

「やべ・・・！」

それを見たゼロは、慌てて進路を変更しようとする。

“ 逃げる必要はない！

そのまま走れ！”

「！！！」

キリンが叫び、ゼロはそのまま突っ込む。

・・・何故かは分からないが、ゼロはキリンをすんなりと信じられた。

轟音が響き渡り、ミラボレアスの口から火球が吐き出される。

その瞬間、キリンの角が光を放ち、雷がミラボレアスの火球を打ち消した。

「ナイスアシストだぜ！」

叫んで、ゼロは跳び上がる。

「ハアア！」

勢いよく剣を振り下ろし、剣はミラボレアスの頭部を直撃する。

ミラボレアスの頭部はゼロの剣に襲われ、地面に叩きつけられる。

・・・叩きつけた・・・

つまり、斬るに至らなかった。

「どーいう硬さしてんだよコイツ!？」

痺れた手を抑えつつゼロが叫ぶ。

斬るには至らなかったが、失神させるには十分だった。

ミラボレアスは首をうなだれて目をまわす。

そこに、大砲の玉が飛来する。

見れば、ジョンの指揮の下、大量の玉が運ばれていた。

大砲を打つ係、玉を運ぶ係の者がせっせと働いている。

“なかなか心強いではないか・・・”

あの者達に、あの槍のような兵器を起動させるように伝えてくれ”

ラオはそう言つて、ミラボレアスの後ろから体当たりし、ミラボレ

アスの体を前に前にと押す。

ゼロは、視線を外壁の上に向ける。

「ジョン！ラオに合わせて竜撃槍を起動しろ！」

ジョンは無言で頷く。

「ミリア！」

竜撃槍を起動してくれ！

他の奴は攻撃を続ける！」

指示をだし、皆がその通り動く。

ミリアは、外壁に設置されてあるスイッチのような物の前に立ち、ハンマーを構える。

「こっちは準備OKよ！」

合図してくればいつでも起動できるわ！」

「よし！そのまま待つてろ！」

ゼロはラオに目を向ける。

ミラボレアスと竜撃槍の距離はあと僅か。

「ラオ！次は思いつきり体当たりしろ！」

“よし、分かった”

ラオは頷き、少し後ろに下がる。

すると、ミラボレアスは気を取り戻し、ゆっくりと体を起こした。

・・・が、すでに手遅れだ。

次の瞬間には、ラオの体当たりにより吹き飛ばされた。

――直後

「今だあ――！」

ゼロが叫び、ミリアはスイッチを思いつきり叩く。

竜撃槍は、ミラボレアスが丁度とんでくるタイミングで射出される。

・・・竜撃槍は、ミラボレアスの翼を貫き、片目を抉った。

・・・しかし、それだけだった。

ミラボレアスの甲殻を直撃した槍は、全て明後日の方向へとねじ曲がる。

その場にいた全員が、言葉を無くした。

古竜迎撃のために造られた兵器が、古竜に通じない。

もはや皮肉を通り越して滑稽である。

・・・ミラボレアスは、辺りに凶悪な殺気を撒き散らして立ち上がる。

その凄まじさに、ミラボレアスのまわりが歪んで見えそうなくらいだ。

その目に、怒りはない。

そんな優しいものではすまされない。

――殺意

それしか該当する言葉が見つからない。

その殺意の矛先は、ラオに向けられていた。

ミラボレアスは雄叫びをあげながら、四つ足でズルズルとラオに駆け寄る。

その姿は、あまりにもおぞましい。

「ラオ！！逃げろ！！」

ゼロが叫ぶが、それは無理だった。

ここは、巨大なラオが動くには狭すぎるのだ。

身を翻すだけでも、かなりの時間を要する。

もちろん、今のラオにそんな時間はない。

何も出来ぬまま、ミラボレアスの牙がラオの首へと食い込んだ。

グオオオオ・・・！と、ラオの悲痛な叫び声が響き渡る。

「やめろおー！！」

弾かれたように走り出し、ゼロは何度もミラボレアスを斬りつける。・・・しかし、ゼロの剣は僅かな傷をつけるのがせいぜいだった。

竜撃槍の有り様を見れば驚くべき事だが、それではラオを助けられない。

キリンも雷で攻撃するが、大して効いていない。

ギリギリと、牙はより一層深く食い込む。

「はなせって言っただろーが！！」

それでも、ゼロは諦めない。

そこへ

“もういいのだ、ゼロよ・・・”

ラオが声をかける。

“わしは・・・もう、十分生きた・・・だから・・・もういいのだよ・・・”

「うるせえ！！」

もういいと言っな！！

最後まで諦めんじゃねえよ!!」

ゼロは攻撃を止めない。

そんなゼロを見て、ラオは心底うれしそうな顔をする。
なんとか首をゼロの所まで伸ばし、鼻でゼロを軽くつつく。
それを拍子に、ゼロは攻撃の手を止める。

「お主は・・・そこ抜けに・・・優しいのだな・・・
こんな老いばれの命すら・・・気にしてくれるとは・・・
こんな感情は・・・初めてだ・・・

今なら・・・代行者の気持ちがいほど理解できる・・・」

ラオは、嬉しいそうに目を細める。

「・・・だが・・・だからこそ、お主に伝えねばならぬ事がある」
「一体何を!？」

ゼロは焦った様子で聞き返す。

「・・・あの人間達を・・・遠くに避難させる・・・
わしが殺された後・・・恐ろしい事が起こる・・・」

「だから死なせねえって言ってたんだろ!!」

俺が・・・」

「ゼロ・・・」

ラオはゼロの言葉を遮る。

「・・・わしの遺言を聞き入れてはくれぬのか・・・？」

少し悲しそうな瞳でゼロを見る。

「・・・そんな目して・・・

反則だろ・・・!」

言って、悔しそうにラオに背を向ける。

「・・・ありがとう・・・」

ラオは、小さく呟いた。

ゼロは、外壁の下まで走る。

「ゼロ、どうした!？」

上からジョンが声をかける。

ゼロは、拳を握りしめ

「ラオの遺言だ！

お前らは逃げろ！」

叫んだ。

「な！？

そんなこと出来る訳・・・」

ジョンが言いかけたとき、ベキン！と、嫌な音が響いた。

・・・ラオの首が折れる音。

ラオの永きに渡る生に終止符を打つ音が・・・

「な・・・！？」

ゼロ以外の人間は、何が起きたのか理解出来なかった。

けれど、奥でラオの首が地面に崩れ落ちるのを見て、ようやく理解する。

ゼロは振り向く事はせずに叫ぶ。

「逃げろって言うてるのが聞こえねえのかよ！！

あいつが命をかけて遣した言葉だぞ！？

逃げろつつたら逃げろ！！」

「・・・」

ジョンは無言でゼロを見る。

「モタモタするんじゃないよー！！」

ゼロは必死に叫び続ける。

ジョンは少し迷って、ようやく口を開いた。

「・・・全員逃げろ！

出来るだけ遠くへだ！！」

「でも・・・！！」

アルも口を開くが、ジョンに睨まれて怯む。

「文句ぬかすな！！

命令だ！！」

「わ・・・分かった・・・」

アル達はバタバタと立ち去る。

ジョンも少し遅れて、その場を後にした。

ジョン達を見送り、後ろを振り向くと、凄まじい光景がそこにあった。

・・・ミラボレアスがラオを喰らっている。

バキバキと甲殻を砕き、ブチブチと肉を引きちぎる。

「何・・・やってんだ・・・？」

体の奥底から、どす黒い何かが湧き上がる。

タナトスに支配される時とは違う。

・・・アルを自衛団から救い出した時と同じ衝動。

理性が失われ、代わりに野生がこみ上げる。

「・・・何してんだテメエ！！」

完全に狂う前に、キリンが目の前に飛び出してきた。

“ 怒りを鎮める！

これ以上力の波を発すれば、他の竜達を巻き込むぞ！”

「くっ・・・！」

キリンに怒鳴られ、ゼロはなんとか我を取り戻す。

キリンはゼロが落ち着いたのを確認すると、ラオを喰らっているミ

ラボレアスに目を向ける。

そして

“・・・始まるぞ・・・！”

暗い表情でそう告げる。

同時に、ゴキゴキと、聞き慣れない音が辺りに響き始めた・・・

第38話

辺りには、奇妙な音が響き渡っている。

音は、ミラボレアスから発せられているようだ。

「・・・一体、何が起ころうとしてんだ・・・？」

ゼロは冷や汗を流しながらキリンに尋ねる。

・・・今から何が起ころかは分からない。

けれど、確実によくない事が起ころことは分かる。

その証拠に、さっきから嫌な汗がとまらない。

キリンは何も言わない。

言う必要などないから。

言おうが言つまいが、その瞬間はやってくる。

回避する術などない。

キリンは、緊張の混じった表情でミラボレアスを見つめた。

・・・やがて、ミラボレアスの体が小刻みに震えだす。

それと同時に、奇妙な音は大きさをます。

“ついに・・・始まった・・・！”

キリンがそう言つと、ミラボレアスは雄叫びをあげる。

今までとは比べものにならないほどの力強さ。

ビリビリと、大気が振動する。

――次の瞬間

「な、んだ・・・あれ・・・」

ゼロは驚きを隠せない。

・・・ミラボレアスの体が、赤く変色し始めた。

それどころか、先程つけた傷が、みるみるうちに治癒していく。

挟られたはずの眼球も再生した。

先程から聞こえていた音は、ミラボレアスの変化が終わると同時に聞こえなくなる。

・・・ミラボレアスはラオを吸収する事で、体を造り変えてしまっ

た。

今日の前にいるミラボレアスは、先程とは違う生き物だ。

「・・・おい、一応聞きたいんだけどよ・・・」

“なんだ？”

ゼロは視線をそらさずに口を開く。

「今の時点で、俺らに勝算はあるか？」

そう尋ねたゼロに返ってきた答えは、分かりきっていた。

“ない”

キリンはきっぱりと告げる。

それを聞いたゼロは、短く笑う。

「うそでも勝てるって言えよ」

“それは構わんが・・・”

そう告げて、それが嘘だと最も痛感するのは汝だぞ？”

「はは・・・」

そうみたいだな」

笑ってみせても、強がっているのがバレバレだ。

ラオが死ぬ間際、他の人達を逃がしたのが今なら分かる。

・・・今から、ミラボレアスとの想像を絶する戦争が起こる。

そこに人間などいれば、巻き込まれて命を落とすだけ。

――ラオの言うとおりにしてよかった――

ゼロは、緊張と安堵が混じった表情をする。

そんなゼロを見てキリンは

“・・・すまん・・・”

一言謝罪した。

「いきなりなんだよ？」

“・・・結局、我々ではなんの助けにもならなかった・・・

汝のためにとしたことが、裏目にでてしまった・・・”

暗い表情で言ったキリンの頭を、ゼロはポスポス叩く。

「気にすんなよ。」

今は落ち込んでる場合じゃねえぞ」

ゼロが言い終わると同時に、ミラボレアスが動きだす。

「さあて・・・お前らの行動が無駄になるかならねえかは・・・これからだぜ！」

叫んで、ゼロは一直線に走り出す。

キリンも後に続く。

それを見たミラボレアスは、ゼロ達に向かって火球を吐き出す。それをゼロ達は左右に避けた。

標的を失った火球は着弾し、爆発する。

しかし、その拍子に飛び散ったのは地面のかげらではなかった。

・・・足下に飛んできたそれは、ベチャリと地面に張り付く。

後ろを見れば、抉られた地面は赤く溶けていた。

「うそだろ・・・？」

絶望しきった声をもらす。

地面がこうも容易く溶けるなど、並大抵の温度では有り得ない。

今、ミラボレアスが吐き出した火球は、最低でも1000 以上だ。直撃すれば、まず生きてはいないだろう。

「・・・当たらなきゃいいだけだ！」

そう自分にいい聞かせて、再び走り出した。

ミラボレアスは何度も火球を吐き出し、そのたびに寿命が縮まったような感覚に陥る。

近くを通るだけで、皮膚が焼けるように熱い。

しかし、ミラボレアスとの距離は確実に詰まっていく。

「あとちよつと・・・！」

目にうつるミラボレアスが徐々に大きくなる。

もう少しで攻撃が届くという位置まできて、突如ミラボレアスの姿が消えた。

「な！？」

ゼロは急停止し、上空を仰ぎ見る。

そこには、殺意のこもった目でゼロを見下ろすミラボレアスがいる。「その目で俺を見るんじゃないやねえよ！」

ゼロは外壁の側面に跳び移り、それを利用してミラボレアスまで跳び上がる。

「今度こそ・・・!!」

ブォン・・・

「ん？」

何か重たい物が空気を裂く音がする。

ゼロは音の方に目を向けた。

「やべ・・・!!」

気づけば、すでにミラボレアスの尾が目前に迫っていた。

ガギイン！と、硬質な音が響いたと思うと、その後すぐに地面が割れる音がする。

あまりの早さに2つの音はほぼ同時に聞こえてきた。

「がはっ！」

ミラボレアスの尾を剣で防ぐが、ゼロは地面に叩きつけられ背中を強打する。

「~~~~・・・!!」

息が出来ず、声がでない。

何とか空気を肺に入れようとするが、体が受け入れようとしない。地面で悶えるゼロを見下ろし、ミラボレアスは空中で叫びをあげる。途端、ゼロの目に信じられないものがうつる。

・・・虚空から、巨大な岩が灼熱の炎を帯びて落下してくる。つまり隕石だ。

その隕石が、寸分の狂いなくゼロへと向かって来る。

「や・・・べ・・・」

息を整える時間はなく、力なく立ち上がると後ろへ跳んだ。轟音と共に落下してきたそれは、一瞬前までゼロがいた場所に着弾し、爆発する。

「~~~~!!」

声にならない叫びをあげながら、何度も落下してくる隕石を必死に避ける。

・・・何発か避けている内に、隕石は降り止んだ。

ゼロは外壁に背を預け、そのままズルズルと座りこむ。

「は・・・あ・・・はあ」

なんとか呼吸が落ち着いてきた。

呼吸が落ち着くことで、失った思考力も回復してきた。

「・・・はあ・・・」

長く、溜め息を吐くように空気を吐き出す。

すっ・・・と立ち上がり、キョロキョロと辺りを見渡す。

「・・・麒麟のやつ、どこ行きやがった・・・？」

いつの間にか見えなくなった麒麟の姿を探して視線をめぐらす。

しかし、見つからない。

ゼロが首を傾げていると、上空からミラボレアスの叫びが聞こえてきた。

今までと違って、苦しみに耐えるように聞こえる。

「・・・？」

ゼロが不思議に思いながら視線を上に向けると、ミラボレアスは苦しそうに身をよじりながら飛び回っていた。

「なに、やってんだ・・・？」

しばらく見ていると、突然ミラボレアスの体を雷が襲った。

そして、また苦しそうな叫びが響きわたる。

そのミラボレアスの背中に、ちらりと麒麟の姿が見て取れた。

目を凝らして見つめると、麒麟が何をしているのが理解出来た。

・・・ミラボレアスの背中に乗っかり、首のあたりに角を突き刺している。

そして、雷は麒麟の体に直撃し、そのたびにミラボレアスが悲鳴をあげる。

・・・つまり、麒麟は自分の体を使って、ミラボレアスの内部に直接攻撃をしかけていた。

やられたほうは、たまったものではない。

その証拠に、雷が落ちるたびに悲痛な叫びが耳を打つ。

しかし麒麟も、かなり疲労していた。

そして、ミラボレアスが何度目かの急旋回をした時、麒麟の体は振り落とされた。

麒麟に空を飛ぶ事は出来ない。

落下に抵抗できず、麒麟は地面に叩きつけられた。

「おい、大丈夫か!？」

ゼロが慌てて駆け寄ると、麒麟はよろよろと体を起こす。

“・・・なんとか、な・・・”

弱々しくそう言つと、その場に座り込んだ。

“・・・駄目だ・・・立てぬ・・・”

「・・・」

ゼロは麒麟の前足と後ろ足をつかむと、重たそうに肩に乗せる。

“な・・・なにをする?”

麒麟が問いかけるが、ゼロは無視して走り出した。

そして、出来るだけミラボレアスから遠ざかると、麒麟をおろす。

「お疲れさん」

一言そう言つて、また走り出す。

“お・・・おい・・・?”

背後から投げかけられた声を無視して、ゼロは走り去った。

・・・そして、戻ってきたゼロはミラボレアスと対峙する。

ミラボレアスは、麒麟の攻撃で大分消耗していて、地面に降りてきていた。

「・・・はあ・・・勝てる気しねえなあ」

ぼそりと呟いて、剣を構える。

「・・・けど勝つ!」

自分に言い聞かせるように叫んで、ミラボレアスを睨みつける。

・・・しかし、ミラボレアスはゼロを見ていなかった。

視線は、ゼロの背後に向けられている。

「あ?何見てんだ?」

ゆっくりと後ろを振り向くと、そこには麒麟がいた。

よろよるとふらつきながらも、なんとか歩いている。

「・・・まさか・・・？」

視線を戻すと同時に、ミラボレアスはキリンを目掛けて動き出した。
「な！？俺が見えてねえのかよコイツ！？」

ゼロの言った通り、ミラボレアスにはキリンしか見えてなかった。
たとえば自分の前に敵意をむき出しにした者がいても、ミラボレアスには関係のない事だった。

・・・先程まで、自分を苦しめた存在。

それに憎悪の塊をぶつけるだけ。

「俺を無視するんじゃないやねえよ！」

ゼロはミラボレアスの前に立ちふさがり、剣を前に構えて正面から衝突する。

「ぐ・・・う・・・」

テオ・テスカトルのときとは違って、ゼロはズルズルと押される。
力比べでは勝負にすらならない。

「なんで戻ってきたんだよ、お前は！？」

ミラボレアスに押されながらゼロが叫ぶ。

「歩けるなら早く逃げろ！」

“逃げる・・・？”

それは、我には聞けぬ頼みだな”

フツ・・・と笑って、キリンは駆け出した。

「お前、何を・・・！？」

ゼロが言い終える前に、キリンの角がミラボレアスの首に刺さる。

そして自分の体に雷を打ちつけて、そのたびにミラボレアスが苦しむ。

「馬鹿やろう！」

それじゃあさつきと変わらないだろ！

お前の体がもたねえぞ！」

ゼロが叫ぶが、キリンは無視して雷を打ち続けた。

一発打つことに、キリンが衰弱していくのがわかる。

「止めろって言っただけが・・・」

バキィ！と、ゼロの言葉を遮るようにミラボレアスがゼロの体をはじき飛ばした。

地面と水平に飛ばされ、轟音と共に外壁にめり込む。

「このっ・・・」

ガラガラと、体にのつかる瓦礫を払いのけ、フラフラと立ち上がる。

「くそっ・・・視界が、霞む・・・」

それでも目を凝らし、ミラボレアスを凝視する。

視力が徐々に回復し、ミラボレアスの姿がはっきりと見えてくる。

そこには、ミラボレアスと、その餌食となったキリンの姿があった。

「あの野郎！」

ゼロは立ち上がり、走り出す。

“来るな！”

今の内に体を休めておけ！”

「馬鹿言ってるじゃねえ！」

今俺が休んだら、誰がお前を助けるんだよ！？」

“我を助ける必要はない！”

むしろ放っておけ！”

言い争っている間にも、キリンの体は飲み込まれていく。

“これで、いいのだ・・・”

こうすることで、ようやく汝の助太刀が・・・”

キリンが全て言い終える前に、キリンは飲み込まれてしまった。

「あ・・・」

――あまりにも、呆気ない最期。

その最期に、ゼロは愕然とする。

それに追い討ちをかけるように、辺りに奇妙な音が響き始めた。

・・・ミラボレアスは、キリンを吸収し始めていた。

しかし、ゼロにはもう聞こえていない。

「お前だけは・・・」

ゼロの体から、ミラボレアスと同じように殺意がこぼれ始め――
「お前だけは許さねえぞ――!!」

叫ぶと同時にじけた。

――先程、これ以上怒れば他の竜を巻き込むとキリンが言っていた。

けれど……

「それがどうしたああ!？」

もう関係ない。

どのみち、目の前のコイツを殺らなければ、結果は同じだ……

……この日、この瞬間、ゼロの怒りと共に多くの竜が狂い始めた。
・
・

第39話（前書き）

久々の更新です！

遅れてしまつてすみませんでしたm（
—
—
）m

第39話

辺りの空気は張り詰めていた。

風船に空気が詰まるように、この空間には殺意が満ちている。

ミラボレアスは、すでに別の生き物と化していた。

・・・その姿は、ミラボレアスに麒麟の皮を貼り付けたようだった。

しかし、麒麟のような神々しい光を放ちながら、その姿は狂気に満ちていた。

一方ゼロは、何も言わずにただ立ち尽くしていた。

視線を落とし剣に目をやると、ブオン・・・と、怪しい光を放つ。すると黒い刀身に、ドロリとした白が浮かび上がった。

透き通った黒い光と、全てを塗り潰す白い闇が、決して溶け合うことなく剣の中に混在する。

「・・・さあ・・・」

剣を手に、獣のような前傾姿勢をとる。

「・・・始めるぜえ！」

言葉と同時に地面を蹴り、その衝撃に耐えきれずゼロ足場が吹き飛ぶ。

前方に向かって跳び、地面に足をつけることなく高速で移動する。

それを確認したミラボレアスは、ゼロに向かって火球を吐き出した。

「くるところだぜ！」

叫んで、ゼロは剣を前に構えて地面に突き刺す。

腕に力をこめて、体を浮かす。

その真下を、ミラボレアスの火球が通過する。

その熱気で皮膚がチリチリと音をたてるが、気にはしない。

ゼロはクルクルと回転し、弧を描きながら飛ぶ。

そして、ミラボレアスが直前に迫った。

「くらええ！」

ゼロは回転の勢いを活かして、ミラボレアスの頭にかかと落としを浴びせた。

ガツン！と、派手な音と共に、ミラボレアスの頭は地面に叩きつけられ高くバウンドする。

着地したゼロは、間髪入れずに上に跳び上がる。

「うおおお！」

完全に頭が上がりきった所に、ゼロはもう一発ミラボレアスの顎に蹴りを放った。

ミラボレアスの体はのけぞり、そのまま後ろに倒れそうになる。

・・・が、ミラボレアスは翼を広げて後方に飛び上がり、それと同時に雄叫びをあげる。

――瞬間

パツと、空が光り、爆音と同時に地面が抉れた。

雷が、ゼロを襲ったのである。

しかし、その場所にゼロはいなかった。

ゼロは後方へ跳ぶことで雷を回避し、地面に突き刺した剣を引き抜く。

すると、また空が光り、それと同時に爆音が響きわたる。

ゼロは幾度も襲い来る雷を、右に左に跳躍しながら回避する。

何度目かの雷を避けたゼロは、空中に跳び上がる。

それを見たミラボレアスは、ゼロに雷を放つ。

ゼロは自分の頭上に剣を構え、雷は剣に帯電された。

「そらよ！」

剣を思い切り投げつけ、剣はミラボレアスの胸に突き刺さる。

グオオオ！と、悲鳴をあげるが、まだ致命傷ではない。

しかし、ミラボレアスの体は傾き、そのまま落下する。

――その時

ミラボレアスの邪眼がギラリと光り、雷がゼロに直撃した。

「ぐああああ――！」

ゼロも、体に煙を纏いながら落下する。

ゼロとミラボレアスが地面に叩きつけられたのは同時だった。

「ぐ……」

体を起こそうと力を入れるが、体はいうことをきかない。

……そんなゼロに、巨大な影が被さる。

いち早く起き上がったミラボレアスが、ゼロに迫っていた。

ハッと、慌てて顔をあげる。

――――刹那

ドン！！という音と共に、ゼロの体は後ろに弾け飛ぶ。

ミラボレアスが前足にありったけの力を込めて、ゼロを殴りつけた。

ゼロは、水面を跳ねる石のように4回ほど地面を跳ねて、5回目でようやく体は跳ねなくなる。

それでも勢いは殺しきれず、そのままガリガリと地面の上を滑る。

「……ゲホ……」

咳き込むように吐血して、ゼロは仰向けに寝転がる。

そして、夕日に染まる空を眺めた。

……アカイ空……

血のようにアカイ……

下手をしたら、のみこまれちゃうとさえ思えてくる。

そのイロはひとつじやなく、サマザマな“アカ”が折り重なって出来ている。

何よりモ広く、どこまでも深い……

……アカイソラ……

「……は、はハは……」

自然と、笑いが込み上げてきた。

「アはハ！」

どんな笑いなのか、自分でも検討がつかない声をあげて、ゼロはのそりと起きあがる。

「……もう、後戻りハ出来ナイ……」

ダラリと下げられた手を地面に当て、四つ足になる。

その姿は、まさに獣そのもの。

「・・・渴くぜ・・・」

オレを殺ルには、まだ足りナイ・・・」

ゼロはゆっくりと顔をあげる。

・・・ゼロの顔は、先程とは違っていた。

右目の下から、一本の赤い線のような模様が浮き出ている。

それはまるで、血の涙。

だが、一番の変化はそんな事ではない。

・・・ゼロの纏う雰囲気、激しくかわった。

顔自体は、いつものゼロである。

しかしその表情は、ミラボレアスのそれに酷く近いものを思わせる。

「モット・・・モツとダ・・・」

ビキビキと音をたて、ゼロの爪が研ぎすまされていく。

「・・・さア・・・」

オマエの狂気ヲ・・・オレに見せろ！」

ググッ・・・と身を屈めて、ゼロは高く跳躍し、その拍子に地面は盛大に砕ける。

それを視認したミラボレアスは、ゼロに向かって火球を放つ。

「芸のナイ奴だナ」

そう呟いて、ゼロは自らの爪でその火球を切り裂いた。

裂かれた火球は二つに分裂し、ゼロの後方で爆発する。

着地したゼロは、ミラボレアスに向かって猛スピードで直進する。

ミラボレアスは、ゼロを近付けまいと雷を放った。

「フン・・・」

つまらなそうに吐き捨て、ゼロは横に跳ねる。

その直後、雷が地面を焦がした。

しかし、ゼロには当たらない。

ゼロは外壁に張り付き、雷が迫ると、今度は対面の外壁に跳ぶ。

その距離は10メートル以上はある。

けれど、ゼロは悠々と跳んで移動する。

雷は、ほんの一瞬の差でゼロには当たらない。

ミラボレアスとの距離が縮まり、ゼロは横から襲いかかった。

「ハアアアア！！」

手を突き出し、その爪はミラボレアスの眼球に深々と突き刺さる。ギョオオオ！！と、悲鳴を漏らし、ゼロを振り払おうと頭を激しく振るがゼロは離れない。

「ソラソラア！！」

そんなハンパじゃア殺されちマウゼエ！！」

ゼロは、心底愉快そうに笑みを浮かべる。

それが頭にきたのか、ミラボレアスは首を曲げて力をためる。

そして・・・

ギョオアアアア！！と、形容しがたい叫びをあげて、思い切り首を振る。

ブチブチ！という音と共に、ゼロは地面に叩きつけられる。

その手には、串に刺さった団子のようにミラボレアスの目玉が刺さっていた。

ブチブチという音は、ミラボレアスの眼球が根元から引きちぎれる音だった。

地面に叩きつけられ、高くバウンドしたゼロの体を、ミラボレアスは頭で叩き飛ばす。

トゴン！と、派手な音と共にゼロは外壁に深くめり込む。

しかし、ミラボレアスの猛攻はまだ続く。

ミラボレアスは外壁にめり込んだゼロの体に体当たりし、さらに火球をぶつけた。

そこまでの所で、ミラボレアスは後ろに下がった。

そして、赤く焼けた壁を凝視する。

・・・ゆらりと、何かが動く。

赤い海の中から、ゼロが姿を現した。

体にまとわりつく溶けた土を、邪魔そうに取り除く。

その熱で焼けただれた皮膚は、みるみるうちに修復されていく。フラフラ揺れながら歩いてゼロ。

「・・・ぐ・・・!？」

急に、咳き込むように口元に手を当てる。

「ゲフ・・・!ゲホ・・・!」

・・・ガハ・・・」

ベシヤリと、大量の血液が地に落ちる。

「ハア・・・」

落ち着いたゼロは、口元についた血を拭った。

「・・・どうやら・・・」

内臓なかみノ方は直ぐニは治らネーみたいだな・・・」

フウ・・・と、軽いため息をついて、ミラボレアスに目を向けた。

・・・そこには、先程とは比べものにならないほど狂気に満ちたミラボレアスがいた。

それを見たゼロは、クク・・・と笑みを浮かべる。

「それダ・・・」

そのくらいじゃナいと、オレは殺れないぜ・・・」

そう口にして、ゼロの体から更に殺意がこぼれはじめる。

・・・もはやこの空間では、ゼロとミラボレアス以外はまともに生きてはいけなйдらう。

辺りは静寂に包まれている。

虫一匹ならず、鳥は一羽とてさえずらない。

地面には、鳥が数羽地に落ちていた。

死んではいないが、動くことは許されず、ピクピクと小刻みに痙攣している。

それ程までに、この空間には殺意が溢れている。

そんな中、ゼロはミラボレアスに襲いかかった。

「まだ終わっテネえよ!!」

叫んで、ミラボレアスを殴りつける。

ミラボレアスも負けじと、ゼロに攻撃を仕掛けた。

互いに、近付いては離れ、離れては近付く。

そんな戦いを、一時間程繰り返した。

・
・
・

一時間後、ゼロとミラボレアスは睨み合っていた。
もう互いに、力は残っていない。

ハア、ハア・・・と、息をするのも苦しそうである。

そんな中、ゼロがミラボレアスに向かってゆっくりと歩きだす。

「・・・もう、時間があまりない・・・」

・・・名残惜しいが、そろそろ終わらせようか・・・」
一歩、また一歩と、ゼロは歩を進める。

警戒したミラボレアスは、空高く舞い上がった。

それを見たゼロは、近くにあった巨大な瓦礫をミラボレアスに向かって投げつけた。

ヒュゴウ！！と空を切り、凄まじいスピードで飛来する瓦礫。

そのスピードに対応しきれなかったミラボレアスの顔に、瓦礫は直撃した。

ミラボレアスは一瞬のけぞり、直ぐに視線を戻す。

・・・しかし、既にゼロはそこにいない。

ゼロは、ミラボレアスの胸に深々と突き刺さった剣に手をかけていた。

「・・・オマエの敗因、教えてやろうか・・・？」

ぼそりと、ゼロが呟く。

ミラボレアスは振り払おうとするが、体は動かなかった。

何かに縛られたように、体は動かない。

・・・原因は、キリンだった。

よく分らないが、それはキリンが内側から抑えつけているのだと、ゼロは確信した。

「・・・お前ノ敗因ハただ一つ・・・」

それハ・・・」

ぐっ・・・と、剣を握る手に力を込める。

「・・・オレを・・・」

敵にまわした事だ！！！」

ザシユン・・・！と、ゼロは剣を振り、地面に着地する。

ミラボレアスは、その場に制止したままである。

「・・・残念だったな」

そう呟いて、剣を背中におさめた。

――途端

ミラボレアスの首が、ズルズルとズレる。

首だけではなく、体中が細切れにされている。

・・・さつき、聞こえた斬撃音は一回。

しかしそれは、一回しか“聞こえなかった”だけ。

ゼロはその一瞬で、ミラボレアスの体を切り刻んでいた。

ミラボレアスは大量の血液と臓物と共に、バラバラになった体を地に撒き散らした。

グチャリと響きわたるその音が、ミラボレアスとの戦争の終わりを告げる音だった。

・・・しかし

「俺の戦いはまだ・・・」

終わってねえ・・・」

いつの間にかゼロは、普段のゼロに戻っていた。

「・・・行かなきゃな・・・」

次の戦場へ・・・！」

そう呟いて、ゼロは街に向かって歩きだした・・・

第40話（前書き）

更新遅れてスミマセン！

最近小説を書く暇がなくて、やっと第40話が出来上がりました。
今までの自分の小説からみたら、今回は少し短めです。
楽しんで頂けたら嬉しいです。

第40話

街に戻ってきたゼロは、何も言わずにただ歩いていた。
「ゼロ！」

後ろから、聞き覚えのある声が耳に飛び込んできた。
ゼロは、ゆっくりと後ろをふりかえる。

そこには、アルが駆け寄ってきていた。

その後ろから、ジョンとミリアもついてきている。

「よかった！」

無事だったんだね！」

駆け寄ってきたアルは、安心しきった声でそう言った。

「ああ・・・おかげさまでな・・・」

しかし、返事をするゼロの声にいつもの元気はなかった。

「どうしたの？」

どこか傷めちゃった？」

心配そうに、アルがゼロの顔を覗きこむ。

「あ・・・いや・・・」

何でもねえよ」

「ウソ。」

”何でもねえ”って顔じゃないよ」

じつと、アルの瞳が心配そうにゼロを見つめる。

「心配かけて悪い・・・」

けど、本当に何でもねえからよ」

そう言つて、ぎこちない笑みを浮かべた。

それでも、アルはゼロを見つめたままである。

「まあいいじゃないか。」

コイツも疲れてるんだろ」

アルの頭をポンポン叩きながら、ジョンが口を開く。

「今回はちゃんと”無事”だったし、よしとしよう」

「ははっ・・・すまねえな」

「それで・・・」

あのおかしな奴はどうしたの？」

そうミリアが尋ねると

「安心しろ・・・ちゃんと仕留めたからよ」

ゼロは、暗い表情のままそう言った。

「そう・・・まあ、そうじゃなきゃ、今アンタはここにいないわね」
ミリアは、すこし嬉しそうにクスクス笑う。

その後ろから、小さな影が飛び出し、ゼロの足に張り付いてきた。
それを見たゼロは、目を丸くして驚く。

「リリス！？」

お前、なんでここに・・・？」

ゼロの足に張り付いたのはリリスだった。

リリスは何も言わずに、ただゼロの足にしがみついている。

その体は、僅かに震えていた。

「リリス・・・」

ゼロは、震えるリリスの体をゆっくりと抱き上げる。

するとリリスは、ゼロの首に手を回してしがみついてきた。

「一体、何があっただんだ？」

ゼロは、優しい口調で問いかける。

「・・・怖い・・・」

「怖い？」

何がそんなに怖いんだ？」

そう尋ねると、リリスは首を横にふる。

「・・・わからない・・・」

でも・・・凄く、怖いの・・・」

そう言つて、一層強くゼロにしがみつく。

「おいおい。」

そんなに締め付けたら苦しいぞ」

ゼロはリリスを引き剥がそうとするが、リリスは離れようとしない。

「・・・いや・・・」

手を離したら・・・お兄ちゃんがなくなっちゃう・・・」

「・・・？」

ゼロが疑問符を浮かべていると、ミリアが口を開く。

「リリスちゃんね・・・私達が街に戻ってきた時に、街の中をずっと走り回ってたわ。」

不思議に思って声をかけたら、いきなり“お兄ちゃんは！？”って尋ねられたの」

そこまで口にして、ミリアは少し呆れたような表情になる。

「普段おとなしいリリスちゃんが、あんなに血相かえて走り回ってるの？」

もうびっくりしたわよ・・・

で、私達が保護して、アンタをずっと待ってたって訳」

それを聞いて、ゼロは少し笑う。

「待ってた・・・って、帰ってくる保証もねえのか？」

「当ったり前でしょ！？」

前にも言ったけど、帰ってこなかったらぶっ飛ばしに行ってるわよ

！」

「ははは・・・それは勘弁してくれ・・・」

そう言っつて、ゼロはリリスに目を向ける。

「・・・リリス、もう一回聞くぞ？」

「・・・どうして街に来たんだ？」

「・・・お昼寝してたら、夢をみたの・・・」

「夢？」

ゼロがきくと、リリスはコクリと頷く。

「・・・お兄ちゃんが、いなくなっちゃった夢・・・」

「・・・お兄ちゃんが、手の届かない所に行っちゃったの・・・」

リリスの体が、よけい震えだした。

声はかすれている。

「・・・凄く、怖くて・・・目が覚めても、ずっと怖くて・・・」

「・・・だから・・・」

リリスはそれ以上なにも言わず、ギュッとゼロに抱きつく。
そんなリリスの頭を、ゼロはそっと撫でた。

「ばっかだなあ。」

兄ちゃんのリリスを置いて、いなくなったりしないから・・・」

「・・・本当・・・？」

リリスの、涙に濡れた瞳がゼロを見つめる。

ゼロは、視線をそらさずに

「ああ、本当だ」

と言った。

それを聞いて安心したのか、リリスの震えは止まった。

「・・・よかった・・・」

リリスの体から力が抜けて、動かなくなる。

「・・・リリス？」

「・・・スー・・・」

リリスは寝息をたてて、眠っている。

「・・・寝ちまったか・・・」

ここまで来るのに、相当疲れたんだろうな・・・」

ゼロは、嬉しさと悲しさが混ざったような表情でリリスの寝顔を見つめた。

「・・・さてと。」

おい、アル」

ゼロは、手招きしてアルを呼ぶ。

「なに？」

「リリスを頼む」

そう言つて、アルにリリスを抱かせた。

「頼むって言われても・・・」

ゼロはどうするの？」

リリスを受け取りながらアルが尋ねる。

「俺はまだする事がある。」

今日は宿にでも泊まろう」

ゼロは、アルに宿代を渡す。

「俺の部屋もとっておいてくれ」

「・・・わかった。」

じゃあ、先に行くね」

アルは、リリスを抱えて宿屋に向かった。

「・・・俺達も、今日はもう帰るぜ。」

じゃあな・・・」

「・・・あんたもすぐに休みなさいよ」

ジョンとミリアも、それぞれの帰路につく。

ゼロは、ジョン達を見送った後、アル達の後ろ姿をどこか遠い目で見つめていた。

「俺は・・・史上最低の兄貴だな・・・」

ハア・・・と、深いため息をついて、ゼロはその場を立ち去った・・・

第41話

ここは、街の東門の外。

そこにゼロはいた。

地面に剣を刺し、柄を握って、何かを待ちかまえるように仁王立ちしていた。

時折やわらかな風が吹き抜け、髪を揺らす。

ゼロは1人浮かない顔をして、なにか考えこんでいた。

――怖い

これほどの恐怖はいつ以来だろうか・・・

ミラボレアスと戦ったあの時、自分は全てを知った。

――ミラボレアスに吹き飛ばされたあの時、頭の中で不思議な声が聞こえた。

タナトスとは違う声。

その声は、自分に現実を叩きつけた。

そして空を仰ぎ見れば、血のように赤い空。

空はこれから起こることを指し示すように、どこまでも深く、赤い空だった。

もはや笑うことしかできなかった。

・・・自分は、知らないはずの事を、鮮明に思い出した。

それは多分、体に刻み込まれた血の記憶・・・

だからこそ、これから起こること、その果てにある結末・・・

それを考えると、体が震えてきた・・・

ギリッ・・・と、悔しそうに歯を噛む。

「・・・しっかりしろ、俺・・・」

視線を落とし、自分に言い聞かせるように呟くと、もう一度視線を上げて前を見つめた。

日はとつくに沈み、夜が訪れている。

ゼロはひたすら耐えるように、立ち尽くしていた。

そこへ・・・

「ドロオップキック！」
ズドン！

「♂ ♀ & !?」

体がくの字に折れ、訳の分からない叫びをあげながらゴロゴロと地面を転がる。

「・・・っだ、誰だ!？」

てか何すんだよ!？」

バツと体を起こし、ゼロが叫ぶ。

「・・・って、お前ら・・・

何でこんな所に・・・？」

ゼロは指を差して驚く。

ゼロの指の差す方向・・・

そこには、アルとミリアとジョンがいた。

おまけに全員フル装備。

ちなみに、ゼロにドロップキックを浴びせたのはジョンである。

「そういうアンタこそ、“こんな所”で何してんのよ？」

ミリアはジト目でゼロを睨む。

「・・・別に、何もしてねえよ」

「ウソね。」

「・・・まったく、どれだけ探したと思ってるのよ」

ハア・・・と、呆れきったようにため息をついた。

「探したって・・・俺をか？」

「・・・何で？」

「・・・ゼロって、肝心な時に隠し事がヘタクソなんだから」

苦笑混じりにアルがそう口にする。

「お前が考えてる事なんてお見通しってことだよ」

そう言って、ジョンはケラケラ笑う。

「俺は、別に何も・・・」

「隠してないってか？」

それがウソだって、みんなもうわかってるんだよ、バーカ」
言って、ジヨンはゼロの額にデコピンをくらわす。

ふう・・・と息をはいて、ジヨンの顔から笑みが消えた。

そして、まっすぐな目でゼロを見つめる。

「・・・で、今から何が起ころうとしてるんだ？」

ジヨンのその一言で、場の空気が張り詰めた。

・・・一体ゼロから、どのような言葉がでるのか・・・

それを聞き逃すまいと、3人はゼロに視線を向けた。

・・・ゼロはしばらく黙っていたが、やがて観念したように口を開く。

「・・・わかったよ・・・」

話せばいいんだろ、話せば・・・」

一度ガクリとうなだれて、今度は真剣な顔で視線を上げた。

「・・・今からここに、何百・・・いや、何千という数の竜達が襲ってくる」

「！？」

アル達は、目を丸くして驚く。

「な！？」

それ、本気でいつてるの！？」

「ああ・・・残念ながら本気だ・・・」

間違いなく、ここに来る・・・」

「・・・」

沈黙。

ゼロは嘘をついていない。

それが分かるからこそ、言葉が見つからない。

「・・・一体、どうして？」

アルが絞り出したような声をだすと、ゼロは辛そうに視線を落とす。

「・・・俺の、せいなんだ・・・全部、俺が・・・」

軽いため息をついて、空を仰ぎ見る。

「以前、クシャルダオラが来たときの事、覚えてるか？」

ゼロの言葉に、3人は黙って頷く。

「・・・クシャルダオラを倒したあの時、俺は破壊衝動に支配されていた。」

アルには、俺の言ってる意味が分かるな？」

ゼロが視線を向けると、アルは一瞬戸惑って、そして弱々しく頷いた。

「・・・そう、俺はあの時発狂し、クシャルダオラを倒した。」

・・・けど、話はここで終わらない・・・

その後、アルが捕まって、俺達は救出に向かった。

そして、俺はそこで2度目の発狂をした」

軽く目を閉じて、ゼロは3人に視線を向ける。

「・・・賢者に・・・さっきの馬鹿でかい奴に聞いた話だが、俺は感情が高ぶると力の波ってやつを発するらしい。

意思の弱い竜達は、その波に簡単に吞まれちまうんだとさ・・・

そして、それは二度目の時点で相当危なかった。
・・・キリンが雪山に現れたのは、波の発信源を確認するためだったらしい」

「そうか・・・だからクシャルダオラが倒された後、すぐにキリンが現れたのか・・・」

ジヨンは、どこか納得のいった表情でうんうんと頷いた。

「そして、その波に真っ先に感化されたのはミラボレアスだった・・・」

『ミラボレアス？』

3人は同時に首を傾げる。

「ああ、そうか。」

お前らは知らなかったんだよな。

ミラボレアスってのは、さっき皆を襲撃したアイツの事だ。

・・・で、感化されたミラボレアスは波の発信源である街に向かってきたんだ」

「そして、お前がそれを倒した」

ジョンが確認するように言うと、ゼロは頷く。

「ああ、そうだ。」

けど、ただで倒せたわけじゃない」

ゼロがそう言くと、3人は息をのむようにゼロを見つめた。

「・・・そう。」

3度目の発狂をした・・・

何ならミラボレアスの死体を見てこいよ。

俺が発狂したんだって、バラバラ死体が語ってくれるぜ？」

「――まともな人間にあんな真似が出来るわけがない。」

ミラボレアスの死に様を思い出しながら、ゼロはそう思った。

「・・・でも・・・！」

沈黙を破って、アルが口を開く。

「でも、本当に竜達が暴走したのかどうか分からないでしょ！？

・・・もしかしたら、まだ大丈夫かもしれないじゃない！」

必死に言葉を吐き出すアルを見て、ゼロは自嘲したような笑みを浮かべる。

「・・・ああ。」

それはいい考えだな。」

「なら・・・！」

「けど、残念ながらそれはない。

わかるんだ、俺には。」

・・・ズレっていうか、大きな歪みみたいなのが、ここに向かって来てる」

「・・・っ！」

アルは、悔しそうに口を閉ざした。

それを見たゼロは、先程と同じように剣の柄を握り、遠くを見つめる。

・・・4人を静寂が襲った。

ゼロ以外の3人は俯いて、チラチラと視線を交わす。

そして、同時にため息をついた。

「しょーがないわねえ・・・」

まさかここまで重い話だとは思わなかったわ・・・」

「そうだな。」

まさに予想外」

「・・・でも、最後まで一緒にいるからね」

それぞれ自分の気持ちを口にして、ゼロの横に並んだ。

「まさか、ここで帰れなんて言わないよね？」

アルは、ニコニコしながらゼロの顔を覗き込む。

「ああ、言わねえ」

そう言い放ったゼロを見て、ミリアは目を丸くした。

「ちよつと、今回はやけに素直じゃない。」

「・・・拾い食いでもした？」

「まさか、お前じゃあるまいし」

「私はそんなはしたない真似しないわよ!!」

「へえ。」

人は見かけによらないんだな」

「・・・殺す・・・」

ゼロとミリアのやりとりを見て、アルはクスクス笑い出した。

「アルちゃん・・・？」

なにがそんなにおかしいのかしらあ・・・？」

フラフラと、ゾンビのようにアルに詰め寄る。

「あ、いや！」

な、なんでもないですよ・・・？」

「じゃあ何で笑ってたの・・・？」

私は拾い食いするように見えるかしら・・・？」

「そ、そんなんじゃないくてえ・・・」

「問答無用よ！覚悟！」

叫んで、アルに飛びかかった。

「うわわわ」

そのまま倒れこんで、ミリアが馬乗りになる形になる。

「笑ったのはこの口か！」

くぬ、くぬ」

ミリアはアルの頬を引っ張り、こねくり回した。

「いひやいれふ〜。(いたいです〜)

ごえんなは〜い。(ごめんなさ〜い)」

ドタバタとじゃれあうアル達を、ゼロはキョトンと見つめる。

「・・・ぷっ！」

いきなり、ゼロが吹き出す。

「はっ・・・あはははは！！」

ついには、腹を抱えて笑い出した。

今度はゼロ以外の3人がゼロを見つめる番になる。

「お前・・・大丈夫か？」

ジョンがそう言つと、ゼロは無理やりに笑いをこらえて顔をあげた。

「だ、大丈夫だ。」

た、ただな・・・くくっ」

「ただ？」

3人は同時に首を傾げる。

「ただ可笑しくなっただけだ・・・

・・・ちょ、ちよつと待て・・・」

そう言つて3人に背を向けると、ゼロはまた笑い出す。

・・・しばらくして、落ち着きを取り戻したゼロがゆっくり振り向いた。

よほどおかしかったのか、その目には笑いすぎでつつすら涙すら浮かんでいる。

「あゝ、おかしかった・・・」

ふう・・・と、軽く息をはいて、空を仰ぎ見る

「・・・なんかさ。」

お前ら見てたら、いろんなこと考えてた自分が馬鹿らしく思えてきた・・・

「・・・そうだよな・・・何も迷う事はない・・・」

「なにに迷ってたのよ？」

「ああ、いやいや。」

「こつちの話だ・・・」

ゼロはどこか納得のいったような表情をする。

・・・が

「・・・けど、何よりもおかしかったのは、お前らの緊張感の無さだな」

そう言つて、ゼロはまた笑い出した。

「こ、これから大変な事が起こるっていうのに、い、いきなりドタバタし始めやがってよ・・・くくっ・・・」

・・・ほんつと馬鹿だな」

「馬鹿つて何よ!？」

馬鹿はアンタの方でしょ!」

「ああ・・・そうかもしれない・・・」

ははは・・・と、ゼロは笑った。

・・・少し控えめな、けど、ぎこちなさはない、本当の笑み。

それを見たミリアは、呆れたようにため息をつく。

「・・・まあいいわ。」

・・・で、ゼロ？」

「なんだ？」

「これから大量の竜達が襲ってくるんでしょ？」

作戦はあるんでしょうね？」

そう尋ねるミリアの目の前に、ゼロはVサインを突き出した。

「我に秘策あり!」

笑いながらそう言つと、ゼロはジョンに視線を向ける。

「ジョンとミリアはここに並べ」

『は?』

ジョンとミリアは同時に首を傾げる。

「立ち位置が関係するのか?」

「ああ、するする。

むしろ重要だぜ？

いいから早くしろよ」

ゼロに急かされ、ジョンとミリアは横に並び、その後ろにゼロは回り込む。

「・・・おい。

一体何・・・」

トス！トス！

「・・・を・・・？」

軽い音が2回聞こえて、同時にジョン達の視界が揺らぐ。

「お前・・・何・・・しやが・・・」

ジョンが言葉を言い終わる前に2人の意識は途絶え、地面に倒れ込んだ。

・・・ゼロは、2人の首の辺りに手刀を叩き込み、気絶させてしまった。

「・・・悪いな。

もともと、お前らを戦わせる気はねえんだよ」

ゼロは、倒れた2人を見下ろしてそう言うと、今度はアルに視線を向けた。

その拍子に、アルの体がビクリと硬直する。

「ちょ・・・ゼロ、何を・・・？」

何が起きたのか理解出来ずに戸惑うアルに、ゼロはゆっくりと近づき始めた。

アルは、見えない何かに押されるように後ずさるが、やがて街を囲んでいる外壁に突き当たり、後がなくなる。

そして、ゼロが目前に迫った。

・・・ゼロは、しばらく黙ったままアルを見つめていた。

「・・・ゼロ・・・？」

不思議に思ったアルは、ゼロの顔を覗き込む。

「・・・お前も、こんな気持ちだったか・・・？」

「え？」

突然尋ねられ、何のことか分からずにアルは首を傾げる。

「……あの夜、あの森で俺を追い詰めた時、こんな気持ちだったのか……？」

ハッと、アルは目を見開いた。

そして、もう一度ゼロの顔を見つめ

「……うん……」

多分、同じ気持ち……」

そう答えた。

言わずとも、ゼロの気持ちが手に取るように分かる。

あの時の自分と同じ。

表情は変わらないのに、凄くつらそうに見えたから。

「……そうか……」

ゼロは短くため息をついて、アルの肩に片手をのせる。

「……俺、いつかの返事をまだしてなかったな……」

「返事……？」

アルが聞き返すと、ゼロは肩にのせた手をアルの頬へとすべらせた。

「……こんな時に言うなんて、凄く自分勝手なのは分かってる……」

・

でも、どうしても言っておきたい……」

一度視線を落とし、やがて決心したかのように視線を上げる。

「……前に、俺の事が好きだって言ってくれたよな……」

「……俺も……お前が好きだ。」

突然の告白。

「小難しいことは言えないから凄くありきたりだけど……」

世界中の誰よりも、お前を愛してる」

ゼロは、上手く言葉に出来ない分、言葉にありつただけの気持ちを込めた。

「え……ちょ……」

い、いきなり言われても……」

アルは、顔を真っ赤にして俯く。

ゼロはそれを見て、クスクスと笑った。

「わ、笑わなくなつていいでしょ!？」

アルは、ふてくされたように頬を膨らます。

「はは・・・悪い。」

お前に言いたいことはそれだけだ。

・・・あとは、お前からリリスに謝つといてくれ。

“嘘ついてゴメン” ってな・・・」

「え・・・？」

それって・・・」

トス・・・

「・・・あ・・・」

ジョン達と同じく、軽い音と共にアルの視界が揺らぐ。

そのまま、ゼロにもたれかかるように気絶した。

「・・・あとは頼んだぜ・・・」

そう呟いて、ゼロはアルの体を担ぎ、ジョン達の所に戻る。

そして、ジョンとミリアの体も抱えて、門に向かった。

・・・ゴゴゴゴと、重い音をたてながら鋼鉄の分厚い門をこじ開け、街の領域内にアル達の体を寝かせる。

「じゃあ、元気でな」

届かないと分かりながら、ゼロは別れの言葉を残す。

そして扉は、まるで明暗を分けるように閉ざされたのだった・・・

第42話

門を閉じ、元の位置に戻って来たゼロは、地面に突き刺していた剣を引き抜いた。

その表情に曇りは無く、ただ前だけを見つめている。

その視線の先には、異種混合の無数の竜達が巨大な砂煙をあげながらこちらに向かって来ていた。

”そろそろだぜ。”

覚悟はできたのか？”

頭の中にタナトスの声が響いた。

「……言われるまでもない

「……おい、タナトス」

視線はそのまま、タナトスに呼びかける。

「俺の力、抑制するのをやめろ」

”……”

返事はない。

「おい、聞こえてんのか？」

ゼロが尋ねると

“……いいのか……？”

控えめな声が返ってきた。

「当たり前だ。」

お前が聞いただろ？

覚悟ならもうできてる」

“……もう、あいつらとは居られなくなるぞ？”

一瞬、アル達が頭の中をよぎった。

ゼロはフツ……と、短く笑う。

「いいんだよ。」

……あいつらの輝きは、俺には眩しすぎる。

でも、あの眩しさは嫌いじゃねえからな。

それを守るためなら、何だってしてみせる」

”・・・そうか”

「そついうお前こそいいのかよ？」

・・・人間、嫌いなんだろ？」

ゼロがそう言つと、タナトスのため息が聞こえてきた。

”ああ、嫌いだ。

・・・なのに、なんでだろうな・・・

お前を見てたら、それも悪くねえなつて思える・・・

死神であるはずの俺が、嫌いな人間の味方をするなんて・・・

お前の馬鹿さが移つたか？」

「失礼な野郎だな。

・・・まあいい。

協力するならさつさとしてくれ」

“言われなくてもしてやるよ”

そう言い残して、タナトスの気配が消える。

しかしそれは一瞬で、すぐにタナトスの気配は蘇つた。

“言われた通りにしたぞ。

もう、お前を抑えるものは何もない

・・・お前が領域までたどり着けるかどうかだが・・・

まあ、俺としてはどうでもいいことだがな”

「言つてろ。

方法はあの化け物と殺りあつた時に全部思い出してんだ」

そう言つて、ゼロは目を閉じた。

「・・・今この時より、我は生を放棄する・・・」

ゼロがそう唱えた途端に、風が止んだ。

「・・・それを対価とし、我は求む・・・我が眼前に立ちふさが

りし愚者共を、等しく葬り去る力を・・・！」

大気が震え、大地が揺らぐ。

・・・竜達は目前に迫っていた。

しかし、ゼロは止まること無く呪を紡ぐ。

「我は奉ず・・・」

我が血、我が肉、我が命・・・

我は誓いを結びて、ここに我が身の昇華を成す!!」

目を見開くと、瞳が蛇のように細長く引き絞られ、それと同時に風がゼロを中心に吹き荒れ始めた。

・・・それは、ゼロから漏れた力の波。

その力の波が、物理的な力を持つまでに高められている。

波は地表をめぐりあげながら真つ直ぐ竜達に向かって行き、目前に迫った竜達の突進を妨げ、停止させた。

「ぐ・・・うう・・・」

波の中心でゼロが蠢く。

「ううおあああああああー!!」

獣の雄叫びとも、痛みに耐える叫びともとれる声をあげると、ゼロの両目の下に赤い線が刻まれたした。

ミラボレアスを倒した時は一本だったが、今現れた線は2本。・・・

それは、力の現れ。

自らの力を示す紋であり、敵を倒すまで倒れないという誓いのタトゥー。

これが刻まれたからには、もう倒れることは許されない。

「まだ、まだああ!」

苦しそうに叫ぶと、鎧の背部がボコリと隆起する。

バコン!と鎧を突き破り、ズルリと姿を現したのは、漆黒の翼。

竜のそれによく似ていて、大の大人が5人分ほどの、大きな翼だった。

バサリと、風を打ち払うように翼をはためかせると、風が止んだ。

・・・その姿は、神々しくもあり、禍々しくもある。

それは、禁じられた誓いの姿、ドラゴノイドの最終戦闘形態。

・・・しかし、この領域にたどり着くものはドラゴノイドの歴史上、ゼロが初めてだった。

何故なら、まず他の者はこのこと知り得なかった。

仮に知ったとしても、変化に対応しきれず肉体が滅んでしまうのだから。

” 本当に、この領域にたどり着くとはな・・・”

タナトスの驚きの声が頭に響いた。・・・ゼロは、落ち着いたように軽く息を吐く。

「・・・もつと、狂ってしまふと思ったんだがな・・・」

ゼロがそう言う

” 狂う訳がない”

と、タナトスが答える。

“ 今までのほただの暴走。

そして今は覚醒、つまり目覚めだ。

そこにお前が狂う道理はない”

「そうか・・・」

呟いて、ゼロはギロリと竜達を睨みつける

・・・竜達は、停止したままだった。

それはまさに、蛇に睨まれた蛙。

今の竜達に、自由はなかった。

「・・・お前らに、この剣の真の姿を見せてやる・・・」

ゼロはそう言つて空を仰ぎ見ると、おもむろに剣を投げ上げる。

剣は何もない空間に吸い込まれ、消えた。

それを見たゼロは、片手を前に突き出す。

「・・・生とは、多くの試練に身を置き、それに立ち向かうこと・・・

・

・・・剣が示すは白き闇・・・

アライブ！」

ゼロが叫ぶと、空が水面のように揺れ、一本の白い剣が姿を現した。アライブと呼ばれたその白濁色の剣は、ドスンという重い音と共に、ゼロの目の前に突き刺さる。

ゼロは、次いで呪を口ずさむ。

「・・・死とは、虚無に抱かれ、次の生へと霊磨くこと・・・

・・・剣が示すは黒き光・・・

デッド！」

ゼロが叫び、先程と同じように剣が現れ、黒い半透明な剣が地面に突き刺さった。

ゼロは、剣を引き抜くことなく言葉を続ける

「剣よ・・・舞え！」

突き出した手を横に振ると、2本の剣は地面をガリガリ削りながら左右に走りだす。

そして、両手を横に広げると、その手に吸い込まれるように、2本の剣が舞い戻ってきた。

2本の大剣を手にしたゼロは、翼をはためかせ宙に浮かび上がると、剣の走った跡に視線を向ける。

跡は、街を取り囲むように残されていた。

「・・・この線の向こうは、俺にとってのサンクチュアリ（聖域）だ・・・

貴様ら愚者共が、この線を超える事はない・・・俺が許さない・・・

」

ゼロがそう言った途端、爆音と共に火球がゼロに襲いかかった。

それは、竜達の中にいたりオレイアから放たれたものだった。

ゼロは面倒くさそうに手を振って、その火球を横へ弾き返す。

「無駄だ・・・貴様らに俺を傷つけることは出来ない。

貴様らが“命”である以上な・・・

・・・俺は、もう既に個ではない。

いうなれば、現象。

俺はお前らにとって、”死”そのものだ」

・・・ゼロの口から放たれた呪に含まれていた言葉。

“我は生を放棄する”

・・・つまりはこういう事だった。

“生”を放棄し、自ら“死”となることで、敵を残らず滅ぼす力を得たのだ。

「俺の前に、力の大小や数は問題じゃない。

俺の前では、強き者、弱き者、全てが等しく死に絶える。

・・・今の俺がこうして存在する以上、貴様らの死は確約されている」

そう言つて、空を仰ぎ見る。

・・・空では、綺麗な満月がゼロ達を見下ろしていた。

「綺麗な月だ・・・

大量の命を殺すには、もったいない程に・・・」

一度軽く目を閉じて、竜達に視線を向けた。

「・・・花は、自らが散ると知りつつも、命の限り咲き誇り、生を謳歌する。

だからこそ、美しい・・・

貴様ら命もまた然り・・・」

ゼロの体から、殺気が漏れはじめる。

「・・・この真円を描く月の下で、命尽きるまで足掻き、輝いてみせる。

・・・そして嘆き、叫び、奏でるがいい・・・」

バサリと、力強く翼を広げ

「・・・貴様ら自身へのレクイエムをなあああ!!」

叫んだ。

大気が割れてしまいそう・・・そんなイメージを持たせる叫び。

その叫びを合図に、ゼロと竜達の両者は同時に動き動きだした。

火球や熱線、水鉄砲などがゼロ目掛けて飛来する。

しかしゼロには当たらない。

全て紙一重でかわしながら、ゼロは直進する。

竜達が目前に迫ると、ゼロはぐるりと体を回転させ、直進の勢いを殺さずに数匹の竜の首を落とした。

そのまま、ゼロは群れのと真ん中に着地する。

ギシアア!と、フルフルがゼロに噛みつこうとゼロ背後から首をのばしてきた。

ゼロはそれをヒラリとかわし、真横に剣を振りぬく。

その一太刀で、フルフルは顔面の上半分を永久に失った。

しかし、今度は2匹のガブラスが上空からゼロに襲いかかる。

「無駄だ!!」

ゼロは、手にしていた剣を上投げて、その剣はガブラスを死に至らしめた。

次の瞬間には、ゼロは飛び上がっていた。

ほんの一瞬遅れて、地面からディアブロスが飛び出す。

ゼロは、飛び出してきたディアブロスの双角をわし掴みにすると

「ハアアアア!!」

叫んで、ディアブロスを縦に振る。

そして、その向かいにいたイャンクックの頭部にディアブロスの尾がめり込み、イャンクックは脳漿を撒き散らして絶命した。

打撃に適した尾を持つディアブロスを、その巨大ごと振り回し、周りにいたランポスを一掃する。

「くたばれ!!」

グラビモスを殴りつけたのを最後に、ディアブロスの角は根元から折れてしまった。

ゼロはディアブロスを竜の群れに投げつけ、手を横に広げる。

「戻れ!!」

ゼロが叫ぶと、先程と同じように2本の剣がゼロの下に戻って来た。ゼロは剣を手にとると、クルクルと回転しながら弧を描くように飛び下がる。

門の前まで下がったゼロは、地面スレスレの所でバサリと翼を広げた。

「ウオオオオオオ!!」

雄叫びを上げながら地を這うように飛行し、また竜達に向かって行く。

そして、雄々しく舞うように剣を振り回し、そのたびに命を刈り取っていた。

・
・
・

数時間後、既に竜達の数 は 3 分の 1 ほどに減少していた。

辺りには血の臭いが充満し、目の前には紅い海が広がっている。

「・・・そろそろ幕引きか・・・」

そう呟くと同時に、水鉄砲がゼロの顔面を直撃した。

一瞬のけぞり、放たれた方向をギラリと睨むと、そこにはガノトトス ^{ゼロ} がいた。

「・・・フン・・・」

つまらなそうな息を吐いて、プフ！と先程口に含んだ水を吹き出す。それを見たガノトトスも水鉄砲を吐き出すが、意味は無かった。

ゼロの吹き出した水弾はガノトトスの吐き出した水鉄砲を突き破りながら直進し、やがてガノトトスの顔面まで到達する。

「爆ぜろ！」

ゼロが叫ぶと同時に、パン！とガノトトスの顔面は砕け散った。それを見たゼロは

「汚ねえ野郎だな」

と呟いて、竜達全てが視界に収まる位置まで後退する。

「・・・こんだけ減らせば充分だろ・・・」

言って、剣を持つ手をダラリと下げる。

「・・・悪いな。」

後は一気に行かせてもらうぜ」

スウ・・・と、ゼロはゆっくり目を閉じた。

「・・・誇るがいい。」

貴様らは十二分に足掻き、輝いた。

・・・後は、虚無に抱かれて眠れ・・・」

言って、またゆっくりと目を開く。

「・・・究極剣技・・・」スラリと剣を構え、竜達を見据える。

「^{ゼロ}虚無」

・・・それは、全てに終わりを告げる言葉。

一瞬、ゼロの体がブレて、次の瞬間には竜達をまたいで正反対の位置に力無く立っていた。

「・・・終わった」

ズシン！と、2本の剣を地面に突き刺すのと同時に、ゼロの背後で紅い噴水が噴き上がる。

ブシャアア！！と、豪快に鳴り響くそれはゼロの背後を紅く染め上げ、それが止むことによってこの殺戮に終止符が打たれたことを告げた。

「・・・へっ・・・」

・・・少し、疲れたな・・・」

ゼロは剣に背を預け、その場に座り込む。

そして、目の前にある街を見つめた後、空を仰ぎ見る。

「・・・おいタナトス・・・」

お前の嫌いな人間を守りきったぜ・・・

ざまあみろ」

少し意地悪そうに笑って、ゼロは目を閉じた・・・

第43話 最終話

「・・・ちゃん・・・ルちゃん・・・」

何だろう？

体がすごく揺れている。

「起きなさいアルちゃん！」

「う・・・ん・・・？」

ミリアに揺さぶられ、アルはようやく目を覚ました。

「はぁ・・・やつと起きた・・・」

「ミリアさん・・・？」

慌てた様子のミリアを見て、アルはキョトンとする。

辺りはまだ薄暗い。

体を起こして辺りを見渡すと、此所が門の前であることに気付いた。

「私・・・なんでこんな所に・・・」

全て言い終える前に、アルは少し前の出来事を思い出す。

眠気が覚めるのは一瞬だった。

「ゼロ・・・？」

ゼロ！？」

「待ちなさい！」

慌てて立ち上がり走り出そうとするアルを、ミリアが止める。

「今ジョンが街の奴らと一緒に門を開けるわ。」

だから少し落ち着きなさい」

「でもゼロが・・・！」

「だから落ち着けて言ってるでしょ！」

軽くパニクるアルに言い聞かせるようにミリアが大声をあげる。

「いい！？

あの門は人間一人じゃ開けられないの！

あなたが今慌てても何も出来ないし、何も変わらないわ！
分かる！？」

ミリアに圧倒され、落ち着きを取り戻したアルは無言で頷いた。
「・・・はあ・・・」

ならいいわ。

・・・怒鳴ったりして悪かったわね」

ミリアはバツが悪そうに謝る。

・・・落ち着けと言ったミリア自信、相当に慌てていた。
少しイライラした様子で、落ち着きが無い。

そこへ

「またせたな」

と、ジョンが駆け寄って来た。

「今から街の奴らが門を開くぞ」

ジョンがそう言うのと、門が重厚な音を出して動き始める。
門の隙間から朝日が差し込み、アル達は一瞬目を閉じた。
やがて光に慣れ、ゆっくりと目を開く。

――紅

最初に飛び込んできた光景がそれだった。

視界をうめ尽くすほどの竜達が、一匹残らず紅に彩られている。

「な・・・なによ、コレ・・・？」

こんな事って・・・」

目の前の現実をにわかには信じられず、3人は啞然とする。

・・・たちこめる血の匂い。

竜達を染め上げているものが血であると認識するのは、一瞬で十分だった。

・・・その血の海の真ん前に、異形な物が座り込んでいる。

朝日を背に受け、力強い翼を広げたそれは、よく見れば人の形をしていた。

・・・それは紛れも無く

『ゼロ！！』

3人はその名を叫び、同時に駆け出した。

・・・近寄れば近寄る程、絶望が込み上げて来る。

やがてゼロのもとへたどり着いた3人は、言葉を無くした。
・・・体に外傷は無く、まだ生死を確認したわけでは無い。
しかし、3人は一目で確信した。

「――死んでいる、と・・・」

傷一つ無く、なんの異常も無い、純粋な死だった。

念のためと、ジョンがゼロの生死を確かめるが、ジョンは無言で首を横に振った。

・・・それは、至極当然の事。

ゼロは生を放棄し、自ら死となった。

”死”なる者が、生き長らえる・・・

そんな矛盾、有り得はしないのだから・・・

「・・・この馬鹿野郎があー!!」

悔しそうに叫んで、ジョンは地面を殴り付ける。

「なんでコイツなんだよ!？」

なんでコイツばかりがこんな目に遭わなきゃいけないんだよ!？

なんで・・・なんでここまでするんだよお前はあ!？」

叫んで、何度も地面を叩く。

ミリアは何も言わず、ただ俯いていた。

そんなミリアの後ろから、アルがフラフラとゼロに歩み寄る。

ペタリと、力無くゼロの前に座り込み、虚ろな瞳でゼロを見つめる。

「・・・こんなの嫌だよ・・・」

消え入りそうな声で呟く。

「・・・ズルいよ・・・」

自分の言いたい事だけ言つて、勝手に死ぬなんて・・・」

当然、呟くアルにゼロは返事などしない。

「・・・何か言つてよ・・・」

私1人で馬鹿みたいじゃない・・・」

必死に語りかけるアルの姿は、痛々しかった。

「・・・アルちゃん・・・」

見かねたミリアが声をかける。

「・・・気持ちは分かるけど・・・ゼロはもう・・・」
「そんな事わかってるわよ!!」

突然、火がついたような激しさで叫んだ。
が、すぐに落ち着きを取り戻す。

「・・・スミマセン・・・」

けど、後少し・・・後少しだけ、こうさせて下さい・・・!」

そう言ったアルの頬を、一筋の涙が流れた。

アルの普段みせない態度に、ミリアは戸惑いを隠しきれない。

それを見たジヨンは、スクリと立ち上がり、ミリアの肩に手を乗せる。

「・・・今は、放っておいてやろうぜ・・・」

そう言くと、ジヨンは目に涙を溜めながらその場を後にする。

ミリアも続き、名残惜しそうにその場を立ち去った・・・

・・・アルは、ゼロの翼にそつと手を差し伸べる。

「・・・もう翼をたたんでいいんだよ・・・」

・・・ゆつくり休んでいいんだよ・・・」

そう言つてゼロの翼をたたむと、ゼロの体を寝かせ、膝枕をした。

「・・・あれ、見える?」

アルは街へと視線を向ける。

「あの夢くて脆い街を、ゼロが守ったんだよ。

・・・そして、私達の命も・・・」

そつ口にして、今度はゼロに視線を向けた。

・・・その顔は安らぎに満ちた、とても穏やかなものだつた。

「・・・そう・・・」

色々なものと闘つて、今ようやく、その闘いが終わったんだね・・・
・・・それはそれでよかったのかもしれない・・・」

――それなのに

「・・・どうして・・・」

――その顔を見terると

「・・・こんなにも、胸が苦しい・・・!」

・

・

・

不思議な感覚に包まれ、ゼロは目を開けた。

「ここは・・・？」

そこは、辺り一面を暗い闇に覆われた世界。

闇以外は、何も無い世界だった。

「ようこそ、生と死の狭間へ」

突然、闇の中から声が聞こえ、タナトスが姿を現した。

「お前・・・タナトス・・・」

「・・・そうか・・・俺は死んだのか・・・」

ゼロは自分の死を悟り、どこか落ち着いたような表情をする。

「あゝあ。」

結局、お前は神の予知通りに死んじまったか」

つまらなそうに言ったタナトスをみて、ゼロは首を傾げる。

「なんだよ？」

その神の予知ってのは」

「あ？」

お前英雄の詩って知らねえのか？」

そう言われて、ゼロはキリンやラオが同じようなことを言っていた

ことを思い出した。

「あゝ・・・」

まあ、知らないこともないけど・・・詩の中身は知らねえな」

「知らねえんじやん。」

しょうがねえ、教えてやるよ」

タナトスは英雄の詩を1から詠い、ゼロに教え始めた。

・

・

・

「・・・んで、男は最期にこう尋ねるわけだ。」

自分は一体何を得たのか、ってな。

・・・理解したか？」

一通り詩を聞かされたゼロは、顔をしかめていた。

「・・・それ、本当に俺に当てはめた詩か？」

ゼロがそう尋ねると、タナトスは不思議そうな顔で肯いた。

「ああ、そうだ。」

・・・何かおかしいところでもあったか？」

「最後だよ、最後。」

えくと、“自分は一体何を得たのか？”だったよな？

・・・俺がその英雄なら、そんな馬鹿な質問しねえぞ」

そう言つて、笑みを浮かべる。

「何を得たのなんて、俺以外の誰にも分かりはしない。

そして、俺は色々なものを得ている。

だからそんな質問はしない」

キツパリと言い放つたゼロを見て、タナトスはニヤリと笑う。

「じゃあ、お前ならどんな質問するんだよ？」

「俺か？」

そつだなあ・・・俺なら・・・」

うん、と首を傾げ、しばらく思考していたが、何か思い付いたゼロ

口はパツと顔を上げた。

「俺が尋ねることはズバリ、“俺の逝き先は天国と地獄のどっちだ

！？”だな！」

自信満々で答えたゼロを、タナトスはポカンとした表情で見つめる。

「ぷっ・・・！」

あははははは！

いい！いい！その質問！採用だ！」

タナトスは腹を抱えて笑い出した。

・・・しばらくそうしていたが、やがて落ち着いたタナトスは顔を

上げる。

「よし！」

その質問には俺が答えてやるよ！」

そう言つて、愉快そうにゼロの背中をバシバシ叩く。

「ぶっちゃけてしまうと、お前の逝く所は天国でも地獄でもないんだよな、これが」

「ハア？」

なんだそりゃ？」

首を傾げるゼロを尻目に、タナトスはある物を取り出し、ゼロに手渡した。

紐状のそれは、どこかで見た事のある物だった。

「・・・感謝するんだな。」

そいつが、お前とあつちの世界を繋いでくれてる」

そう言つて、タナトスはスツとゼロの背後を指差す。

振り向くと、そこには眩い光が差し込んでいた。

「よかつたな。」

お前はまだ死ねないみたいだぜ？」

「ハア！？」

さっきお前は俺が死んだつて言つたじゃねえか。

死人が蘇るなんてことがあるわけないだろ？」

ゼロはすかさず尋ねるが、タナトスはクスクスと笑う。

「ああ、そうだな。」

「・・・けど、それは人間の話だろ？」

お前の肉体は死から蘇る程の蘇生力をもつてた。

何より、お前は最後の最後で神の予知を超えた。

「・・・その内容が“天国か地獄か？”つてのは笑えたけどな」

言つて、またクスクスと笑い出す。

ゼロはそれでも、納得がいけない様子だった。

「・・・まあ、とにかく。」

お前は神の予知を覆す事で、死を凌駕したんだよ。

もつと喜べ」

そこまで言われても、ゼロは納得しない。

そんなゼロを見て、タナトスは呆れ顔でため息をついた。

「・・・まったく・・・」

わからねえ野郎だな・・・

誰がなんと言おうとお前は生き残り、またあいつらとすごせる。

それでいいじゃねえか」

言われて、アル達の姿が頭をよぎる。

途端に、ゼロの表情が和らぐ。

「・・・ああ・・・」

そりゃいいな」

そう言ったゼロを見て、タナトスはハア・・・と2度目のため息を吐き、ゼロに背を向けた。

「じゃあな・・・」

俺はもう行くぜ」

「もう行くって・・・」

どこ行く気だよ？」

ゼロが尋ねると、タナトスは振り返らずに手をヒラヒラと振る。

「俺は本来の責務に戻る。

・・・お前の中に居たんじゃ人間への復讐なんてできっこねえし、何よりそんな事どうでもよくなっちゃった」

「じゃあ、ここでお別れってやつか？」

「・・・ああ、その通りだ」

言って、タナトスはゆっくりと振り返った。

・・・その表情は、死神にはあるまじき優しさに溢れていた。

「・・・お前の中で過ごした時間は、割と悪くなかったぜ・・・」

じゃあ、お前が本当の意味で死にやがったら、会いに来るからよ」
すう・・・と、息を吸い込んで、タナトスは最後の言葉を紡いだ。

「・・・またな」、と・・・

そう言い残して、タナトスの姿は闇に溶けた。

それと同時に、差し込んでいた光がその大きさを急激に増やし始める。

「・・・俺も進まなきゃな・・・」

上を仰いで、アル達を思い浮かべる。

「――お前達と――」

・・・

・・・

・

「・・・もつと先へ・・・」

そう呟いて、ゼロは目を開けた。

・・・そこには、涙をボロボロと流すアルの顔があった。

アルは、目の前で起きた奇跡を受け止めきれずに、目を丸くする。

「よう、泣き虫」

意地悪く笑って言うと、ゼロはゆっくりと立ち上がった。

「え・・・ちょ・・・」

ゼロ・・・ゼロ・・・？」

パチパチと何度もまばたきをしたり、目をこすってみたりするが、ゼロの姿は視界から消えない。

「な・・・だ、だって・・・た、確かに死んで・・・」

「足ならあるぞ？」

ホレホレ」

ゼロはわざとらしく足をぶらぶらさせてみせる。

アルはしばらく呆然とゼロの姿を眺めていたが、現状を理解するやいなや、いきなり立ち上がる。

「・・・こ・・・」

「こ？」

「・・・このバカア！！」

突然走り出し、ドン！と、ぶつかるようにゼロに抱きついた。

「大バカ！バカの王様！犯罪的バカ！とにかくバカ！」

「そ、そんなにバカバカ言わないでもいいだろ！？」

「・・・」

バカと、物凄い勢いで連発したと思うと、今度は急に大人しくなる。

「アル・・・？」

「う・・・くっ・・・」

次に聞こえてきたのは、嗚咽だった。

喉をしゃくりあげて、まるで子供のように泣きじゃくる。

ゼロは、なにも言わずにアルの頭を撫でた。

「・・・すまねえな・・・」

悲しい思いさせちまってよ」

「本当、よ・・・私の涙、返して・・・」

「いやあ、それは俺に言われても・・・」

・・・あ、そうだ。

俺、お前に返さないといけないものがある」

そう言つて鎧の内側に手をつ込み、ゴソゴソと何かを探る。

「お、あつた・・・」

ゼロはそれを掴み、アルの前に差し出した。

・・・それは、タナトスに手渡されたもの。

ゼロと世界を繋いでいたもの。

・・・その正体は、ほんの些細な約束だった。

「返すつて約束だったからな。」

返すよ、この”リボン”」

そう、リボン。

アルがゼロを襲った夜、ゼロの傷口に巻かれた物だった。

確かにあの時、ゼロは返すと約束していた。

・・・どこにでもある、とても小さな約束。

その小さな約束が、ゼロの命を繋ぎ止めたのだ。

「・・・こいつが、俺とこの世界を繋いでくれた。

そのおかげで、俺は今ここにいます。

・・・助かったぜ」

差し出されたリボンを受け取って、アルはゼロの顔を見つめる。

「・・・大バカ・・・」

そう呟いて、まるでそうするのが当然のようにゼロの唇に自分の唇

を重ねた。

ゼロは驚いて一瞬固まるが、その固まりはすぐに解け、両の腕でアルを抱き締める。

さらにその上から、翼でアルの体を包み込んだ。

「・・・」

・・・名残惜しそうに離れる2人の唇。

それと同時に、ゼロの翼が光りだした。

ポツリ、ポツリと、ゼロの翼から青白い光りの粒が舞い上がり、その度にゼロの翼は薄れるように消えて行く。

・・・やがて光りの粒が辺りを満たす。

その光景はあまりにも幻想的で、美しかった。

・・・2人は何も言わず、ただその光景を見つめていた。

最後の一粒が消える、その瞬間まで・・・

三か月後・・・

「うわぁぁ！」

寝坊したぁ！」

ゼロの家は賑やかな朝を迎えていた。

「何回も起こしたのに・・・」

もう少し早起きの習慣つけたら？」

玄関から溜め息混じりにアルがそう言うが、ゼロには聞こえていない。

ゼロは騒がしい音をたてて家中を走り回り、あれこれと準備を進める。

「えーと、後は・・・」

あれ？

俺のポーチどこだぁ！？」

慌てるゼロの横から、スツとポーチが差し出される。

「・・・お兄ちゃん、コレ・・・」

「おお！」

グッジョブだリリス！」

ゼロはリリスからポーチを受け取ると、玄関まで駆け出した。
その後を、リリスがトテトテついていく。

「よう！」

「お待たせ！」

「本当よ。」

あんまり遅れるとミリアさん達怒っちゃうよ?。」

「わかってるって！」

・・・それじゃあ行つて来る！」

ちゃんと留守番してるんだぞ?。」

そう言つて振り返ると、リリスが心配そうにゼロ達を見つめていた。

「・・・気をつけてね・・・」

呟くように言つたリリスを見て、ゼロは微笑む。

「任せとけて！」

クシャクシャつとリリスの頭を撫でて、ゼロ達は家を出る。

リリスは、乱れた髪を指で撫でながらゼロ達を見送つた・・・

・・・

・・・

・

ゼロとアルは街に向かって走っていた。

「やばいやばい！」

これ以上遅れたら何を言われるか分かつたもんじゃない!。」

「も〜！」

だつたらもつと早く起きればいいのに〜！」

「わ〜っはっは！」

それは無理だ!。」

キッパリ断定するゼロを見て、アルは深い溜め息をはく。

そうこうしてる内に、ゼロ達は街にたどり着いた。

・・・街に入ると、すぐさまジョンとミリアに遭遇する。

「ゼロ！」

「アンタ遅いわよ！」

第一声がそれだった。

「俺だけかよ!？」

すぐに突っ込むが、ミリアは、フン、と鼻で笑う。

「どーせ、原因はアンタの寝坊でしょ？」

「アルちゃんは被害者よ」

「う、うるせー」。

狩りに行くなんざ三か月ぶりなんだ。

「しよーがねーだろ」

ゼロがそう言っていると、アルは思い出したようにジョンに視線を向け、あーだこーだと言い合うゼロ達を尻目に口を開く。

「そう言えばまだ聞いてなかった。」

今回は何の問題が起こったの？

「・・・ここら辺の竜達はゼロがやつつけちゃったのに・・・」

アルがそう尋ねると、ジョンは軽く首を傾げた。

「問題に関しては、行方不明の奴が急に増えたからその調査に行くんだが・・・俺もいまいちよく分からないんだよな。」

ただ、ここ最近の竜の目撃情報もちらほら増えてるらしいし・・・他の所からやって来てるって噂もある。

多分、そいつらの犯行だと思う」

「分かった。」

なら、早く集会所に行こう」

「ああ、そうだな。」

おい、お前らもさっさとしろ」

ジョンは、まだ言い合いを続けていたゼロとミリアにそう言っていると、集会所に向かって歩きだした。

他の三人も、ジョンに続いて歩きだす。

・・・そのとき、ゼロの頭上を1羽の鳥が通り過ぎていった。

ゼロは、何となく空を見上げた。

「いい天気だ」

素直に、思ったことを漏らす。

・・・空は高く、雲一つない。

「へ・・・悪くねえな」

「-----この暖かい世界に自分は居る。

そして、これからもここで生きていく。

「・・・あいつらと一緒に・・・」

「-----“モンスター・ハンター”として-----」

END

第43話 最終話 (後書き)

つ、つ、ついに完結しました~~~~~！ 自分もうなきそうです！ この小説が完結できた

のは、読者の皆様が居てくれたからこそです！

今まで読んでいただいて、本当にありがとうございました

ございました！！ また、これからもスローニンをよろしくお

願いします！m (_ _) m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2176b/>

モンスターハンター！

2010年10月17日02時35分発行